

特集 自分のことを話す

ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO

東北の風景をきく

FIELD RECORDING vol.05



東北の風景をさく
FIELD RECORDING vol.05

特集 自分のことを話す

コロナ禍で迎える、東日本大震災から10年目

東日本大震災から10年目は、新型コロナウイルス感染拡大の渦中で迎えることになりました。人と人が面と向かって会うことや長距離の移動が困難となり、わたしたちの生活は大きな変化のなかにあります。

「10年」という節目は、日々のなかに流れる時間の区切りとは、必ずしも結びつくものではありません。それでも、コロナにまつわる世界中のニュースが飛び交い、10年目を掲げる催しが鳴りを潜めるなか、あの出来事を風化させないためには節目を「使う」必要があります。いま、わたしたちのなかに震災の経験はどう息づいているのだろうか？

特集は「自分のことを話す」

時が経ったことで、被災の度合いによって「当事者」として語りえなかった人たちが、自分の経験を語り出すタイミングが訪れているように思います。その語りは日常のなかでふと現れ、コロナ禍によって当時のことが呼び覚まされることもあるでしょう。

そこで、これまで東北にこころを寄せてきた人たちに問いかけてみたいと思います。東日本大震災から10年目、いま何を考えていますか？ いまどこにいて、今日はどんな一日でしたか？

東北の風景をきく

2016年はインタビュー集『6年目の風景をきく』でともに歩みを進めてきた方々の声を手がかりに、震災以降をふりかえりました。2017年に創刊したジャーナル『FIELD RECORDING』は変わりゆく震災後の東北のいまと、その先にふれたいと思います。

人に出会い、声と向き合い、土地の風景と出会い直す。そこから出来事を分かちもつ技術について考えたい。なぜなら、東北で起きていることは、震災の経験に限らない「わたしたち」の「平時」と地続きだから。まずは、その声に耳を傾け、記録することからはじめます。

*『6年目の風景をきく』と『FIELD RECORDING』のバックナンバーは、ASTTのウェブサイト (asttr.jp) にてPDFダウンロードが可能です。

東日本大震災から10年目、 いま何を考えていますか？

東北の地を訪れ、迷いのなかで手がかりにした言葉たち。
その言葉の語り手に、いま考えていることや感じていることをわけていただきました。

宮地尚子

精神科医師

榎木野衣

美術批評家

畠山直哉

写真家

関口涼子

著述家／翻訳家

10年、そして。

宮地尚子

精神科医師

宮地尚子さんの『環状島＝トラウマの地政学』や『震災トラウマと復興ストレス』は、出来事と向き合う際の位置と距離について考え抜かれた著作です。災禍のあとに、見えないものやきこえないものに囲まれて、立ち尽くしてしまいそうになるなかで、それでも全体像に触れるための手がかりが示されています。宮地さんは、いま何を考えているのでしょうか？

東日本大震災から10年を迎える。

東日本大震災について直接書くことを、この文章ではあえて避けてみたい。それは、書けないことが多すぎるからであり、また直接書かないことによって、ひょっとすると、東日本大震災の犠牲者や被災者に、より近づくことができるかもしれない、と思うからである。

そのかわりに、3つ（正確に言えば4つ）のテキストを紹介することにする。1つ目は、2004年のスマトラ沖地震の津波に巻き込まれ、両親、夫、幼い息子2人を亡くし、自分だけ生き残った女性、ソナーリ・デラニヤガラの手記である。2つ目は、1944年の東南海地震でやはり津波に巻き込まれ、生き延びた海女、梅谷みきの体験談である。そして3つ目は、1995年の阪神・淡路大震災で被災した女性「Jさん」／結城理恵についてのテキストである。

10年、そして。

その3つをつなげて何が見えてくるのか、私自身ははっきりとはまだわからないでいる。教訓めいたことを言いたいわけではない。オチが何かあるわけでもない。私が言いたいこと以上の何かがあらわれてしまって、誰かを傷つけてしまい、そんな不安がないわけでもない。

ソナーリ・デラニヤガラの場合

でも、聞いて。彼はあなたの様子が、いままで見たことのない奇妙な光景だったと言ったの。あなたは黒い泥で覆われていた。ちょっと聞いて、もっと奇妙な話になるから。彼はあなたが回転していたと言うの。くるくる、くるくる。そう、回転よ。子供が目を回して倒れたいときにやるみたいに。彼のオフィスで話していたんだけど、彼、椅子から立ち上がってあなたがやっていたことをやって見せてくれた。あの泥の中で回転していたのよ。彼はとてもショックを受けたと言っていた。あなたが止まらないから。

(ソナーリ・デラニヤガラ著、佐藤澄子訳『波』新潮社、2019年、P.124)

ソナーリ・デラニヤガラは、イギリスから故郷のスリランカに夫と幼い息子2人とともに帰省し、両親を連れて、海岸のリゾート地でクリスマス休暇を過ごしていた。そこに津波が襲った。ホテルから逃げ出そうとしたけれど、津波は簡単に追いつき、家族をバラバラにして飲み込んでいった。彼女は、ホテルからそんなに遠くない潟の近くで、地元の人たちによって見つけられた。津波は何キロメートルも内陸に入り、向きを変えて、潟を越えて、海に戻ったという。だから

彼女はずっと内陸まで流され、それからまた外に向かって、運ばれたことになる。そして大海原に流されてしまうほんの数秒前に、木に掴まり、奇跡的に生き延びた。

彼女を助けてくれた地元の人から直接話を聞いた彼女の友人は言う。

「その人、あなたが回転していたことをずっと考えているの。トランス状態に見えたらしいの。もしかしたら水の中で回転していて、それが止まらなくなったのかしら？ 彼にそれは確かかと聞いたの。そうだ、そうだ、と彼は言い続けた。キャラキ、キャラキ、ヒティヤ(くるくる、くるくる、まわっていた)。想像してみてよ」(P.125)

『波』は、ソナーリが家族を喪ってから8年後に書きあげられた手記である。津波の様子、直後のこと、そしてそれからの長い苦しみの日々。「死別の悲しみ」と一言でいうには、あまりにも痛々しい。彼女は繰り返し命を絶とうとし、常に親族のだれかが見張っていなければならなかった。彼女にあるのは生き延びたことの罪悪感ではない。それもなくはないが、自分だけ生の方に置き去りにされたことの怒り、悲しみ、寂しさの方が強い。手記には、単にきれいごとだけではなく、もがき苦しみ、他者に怒りをぶついたりする様子などが、率直に記されている。

私は『波』を読んでから、彼女を助けた人と同じように、ソナーリが回転していたことをずっと考えている。頭の中で、泥海の真っ只中を彼女が回転し続けているのが見える。それは実際の状況とは恐ろしくかけ離れているに違いないが、彼女がくるくる、くるくる、まわり続けている。

津波に流されている間、彼女の体は水流とともに回転し続け、平衡感覚をつ

かさどる三半規管の中の水も回転し続けたのだろう。津波から解き放たれても、三半規管の中の水は回転し続け、それに引きずられて体も回転し続けたのだろう。船酔いをする、陸に上がってもしばらく地面が揺れているような感じがするが、そんな時も周りからはその人がゆらゆらしているように見えるかもしれない。医学的にいえば、おそらくそういうことなのだろうと思うが、きちんと調べたわけではない。同じような経験をした人がいるのかも知らない。科学的なジャーナルを読み漁れば見つかるのかもしれないが、それをする気力が私にはない。いや気力なのか。むしろ、したくないと思っているのではないか。医学的に解明してスッキリしたいのではなく、ただ、くるくる、くるくる、まわる、そういうことがあるのだ、という事実衝撃を受けたまま、その状態にとどまっていたのではないか。

彼女の失くしたものは戻ってこない。住む国を変え、交友関係を変え、セラピーを受け、文章にして自分の経験をなんとか消化し（できるはずがないが）、専門的な仕事も続けてきた彼女。それでも、彼女自身、今も、くるくる、くるくる、まわっているのではないか。それが、自分だけ生の方に置き去りにされるということではないか。まるで遺棄された子どものように。彼女の「喪失」とはそういうことではないか。そんなふうに思うのだ。

梅谷みきの場合

地震からしばらくして、津波のため避難しようと家の窓を閉めていると、夫の父から「(津波で流されにくいように) 窓は全部開けておけ」と言われた。閉めかけ

ていた窓をあけようとしたその時、ゴーッというものすごい音とともに水が流れ込んできた。そして流されるたたみや長持ちに背中を押されるように窓からとなりの中へへと押し流されてしまった。あっという間に水が天井まで流れこみ、部屋の中に閉じ込められてしまった。もう息もできない。目や鼻や耳、そして口の中には泥塩水がつまりとにかく苦しかった。

それでも「志摩の海女さんがこんなところで死んでたまるか」と、かべや柱を手でさぐりながら必死で脱出しようとした。もがきながら苦しかった家のなかからやっと脱出した瞬間、息とともに泥塩水をゴクツと飲み込んで気を失ってしまった。次に気がついたのは、近くで助かり浮いていた父親にさおで叩かれた時だった。周りを見ると一面が泥沼のようだった。「どこでもいいからつかまれっ」と言う父親の声が聞こえた。つかまったのは自分の家の屋根だった。どろどろですべる屋根がわらの上に必死で登った。

(南島町教育振興会資料センター部編『忘れない! あの日の大津波 東南海地震体験記』2000年、木村玲欧『戦争に隠された「震度7」1944東南海地震・1945三河地震』吉川弘文館、2014年、P.15より転載)

私たちは、30年以内に70～80%の確率で大地震にみまわれるという予言／予測の中で日々を生きている¹。それを確率と言っているのか、予測と言っているのかさわからないまま。けれども確実に私たちの意識の深いところに、その予言は鳴り響いている。

今もっともおそれられているのは南海トラフ地震だろう（もしくは首都直下地震か）。多くの市町村において、南海トラフ地震がおきた想定で防災対策が練ら

れ、防潮堤の建設や避難場所の確保などがおこなわれている。

その南海トラフ地震にきわめて近い地震が1944年(12月7日東南海地震)と1945年(1月13日三河地震)に起きていたということを、私は最近初めて知った。私自身の無知の故ではあるが、地震の実態そのものが戦時下の日本で隠されていたということも大きいだろう。たまたまつけばなしになっていたテレビで、「歴史秘話ヒストリア『隠された震災 昭和東南海地震』」(2020年3月11日放送)を見た。そこで知った内容は、私にとっては衝撃的だった。地震の被害が甚大だったこと、戦意の低下を防ぐため、報道が妨げられ、記録の多くも軍部によって消滅させられたこと。強い地震が起きたことは欧米でも計測され、報道もされていたこと。軍事工場があったため、震災の直後に空襲にやられたこと。戦争中だからしかたがないのかもしれないが、災害で弱ったところに攻撃をするというのは、あまりにむごい。大規模な災害が起きたときに国際的な支援がおこなわれる現在の状況が、夢物語のようにさえ思える。

ただ、その番組は、3月11日とはいえゴールデンタイムに放映されたわけではなく、また特に話題になったわけでもなかった。周囲の人たちに聞いてみたが、地震そのものについて知っている人も非常に少なかった。私が無知だっただけではなようだ。

どうしても気になって、文献を探してみた。探してみると資料はたくさんある。その中に、『戦争に隠された「震度7」』があった。そこには、海女をしていた梅谷みき(当時22歳/度会郡古津村神前浦)の体験談が引用されていた。それを読んだ時、感じたのは、体験談がもつ伝達力の強さだった。地震や津波の記録はたくさん残されている。詳細な数値やグラフや地図も、もちろん有用では

ある(それらの震度や被災者数、犠牲者数などの数字がどこまで信頼できるものなのかは、戦時下であったため、留保が必要であるが)。けれども、そこに残されている証言は肉声に近い、鮮烈なものだった。

ところで、著者の木村玲欧は、東南海地震の津波体験談を、「津波からの距離」と「生命への危険度」の2つの要素で整理し、1)津波との近接・接触なし、2)津波に追われる、3)津波に浸る、4)津波に流される、5)津波にのみこまれる、の5つのパターンに分類している。そして、5)の例のひとつとして、梅谷みきの体験談を紹介している。分類は、時に無味乾燥であり、時にあまりに残酷である。もちろん、防災に向けての貴重な教訓を得るためには、確かにこのような分類は重要だが、津波体験さえ、その中で差異化され、ある意味、序列化されてしまうわけだ。そして、5)の向こうには、津波にのみこまれて命を奪われてしまう、という「パターン」がある。体験談は生き延びた人しか語れないから、分類6)にはならないが、1)、2)、3)、4)、5)、の続きにもっと深刻な事態があることに、私たちはいやがおうでも気づかされてしまう。

言うまでもないことだが、前述のソナリー・デラニヤガラもまた、5)に分類される。そして、ソナリーの家族は、5)を超えて、向こう側に逝ってしまった。5)のこちら側に遺されてしまう苦しみについては、ソナリーがあまりにも生々しく証言している。

梅谷みきについては、その後の詳細を私は知らない。調べてみたいが、コロナ禍でもあり、制限がある。22歳の若い女性。海女だったというから、健康で活発で、機転もきき、生命力も強かったことだろう。夫の父親は津波を一緒に生き延びているが、他のご家族は無事だったのだろうか。夫と一緒に住んで

いたのか、それとも戦場にいたのだろうか²。死に別れなどしていないだろうか。津波の恐怖など乗り越えて、戦争や戦後の混乱も乗り越えて、豊かな人生を歩んでこられたのだろうか。今も生きておられるなら、98歳である。

「Jさん」／結城理恵の場合

だが、その後少しずつJさんは笑顔を取り戻していったのである。きっかけは小さなことだった。あるとき、Jさんは夫とともに家からかなり離れた海岸に行ってみた。大海原と浜風と波の音。人は少なく、空は広がった。

「砂浜にしていると安心できるんです。ここで地震にあっても、倒れてくるものはなんにもないでしょう」。Jさんはそう言った。そして久しぶりにすがすがしい気分を味わった。

(安 克昌『心の傷を癒すということ』新增補版、作品社、2019年、P.101-102)

災厄にはローカリティがある。神戸出身の私にとって、震災といえば、まずは阪神・淡路大震災である。1995年1月17日未明。直下型地震が神戸を中心に襲い、6,434名が犠牲になった。

冒頭の引用は、震災後のレポートからの引用である。当時、神戸大学医学部精神医学教室の医局長をしており、被災地の心のケアの先駆者となった安あ克昌かつまさ医師によるものである。Jさんの住んでいた地域は地震直後、大規模な火災に巻き込まれ、焼け野原になった。火は彼女が住んでいたマンションのすぐ近くまで迫ってきた。地震の衝撃でドアがなかなか開かず、夫とともに、苦勞し

てなんとか脱出した。だが外はもっと「地獄」だった。火の中を逃げまどっているとき、「助けて!」と叫ぶ人たちがいたが、助けてあげられなかった。避難所にいたJさんに、安医師は出会う。最初は表情が硬く、心を閉ざしていたJさんも、だんだんうちとけて、安医師に心の内面を語るようになった。「今も耳元で“助けて、助けて”という声がするんです。……私も死んでしまえばよかった」。

Jさんの耳から、この声がいつまでたっても離れなかった。Jさんはサバイバーギルトに苦しんでいた。避難所の用事の手伝いをしているときや、夫と話しているときは気が紛れるが、一人になると「助けて」という声が耳について、苦しくなった。夜も、うとうとすると恐怖の光景がよみがえり、また、余震の心配もあって眠りづらい日が続いた(同じ経験をしたはずの夫は、平気なように見えた)。そのJさんが回復のきっかけになったのが、引用に示すように、夫とともに海に行ったことだった。

2020年1月で、阪神・淡路大震災から25年がたった。四半世紀である。その25年の節目として、安医師をモデルにしたテレビドラマがNHK大阪拠点放送局によって制作された。タイトルは、著作と同じ『心の傷を癒すということ』である。2020年1月から2月にかけて4週連続で放映され、その後、DVD化もされた。残念ながら、安医師は2000年に肝臓癌のため、39歳という若さで亡くなっている(私も安医師の友人の一人だった)。在日韓国人でもあった安医師の生育過程や、震災を経て精神科医として成長していく過程、家族への愛情、病におかされ亡くなっていく過程を、丁寧に描いたのが、この番組だった。

ドラマ化にあたって、スタッフの間で議論が分かれたのが海の間場面だった³。Jさんをモデルにした結城理恵という人物が登場し、安医師との関わりがドラマ

においても詳しく描かれている。その理恵が回復していくきっかけとなった重要な場面である。事実や原作に忠実でありたいという思いや、当時の関西の人間にとっての海がもつ意味を考えると、そのまま海で撮影をしたいというスタッフの思いは強かった。一方、全国放映される番組で、海を安全なものだと思えない視聴者はたくさんいる。東日本大震災で津波に巻き込まれた人たちが津波で大切な家族を喪った人たちにとっては、とても共感できないせりふに違いない。被災地から遠く離れた人たちの目にも、リアルタイムでテレビに流された津波の映像は、強く焼き付いている。地震が起きた時に海岸に逃げればいいと、番組を見た子どもたちが思い込んでしまうのもよくない。激しい議論が交わされた結果、ロケ地は海から山に変わった。放映されたバージョンは、以下のようなものである。

晴れた空の下、山道を理恵が息を切らし、歩いている。

理恵が「どこまで行くん？」と聞くと、先を歩いていた夫が立ち止まり、理恵の方を見て笑いながら言う。「ここまでおいで」。

疲れた表情の理恵がようやく夫に追いつき、夫の隣に立ち、一面の野原が広がっているのを見て、息を呑む。

「ここにおったら地震来ても平気や。何も倒れて来^{なん}おへんよ」

そう言われた理恵は、おもむろに、野原に座り、そのまま後ろに大の字で倒れ、気持ちよさそうに目を閉じ、「ほんまや」とつぶやく。

(NHK 土曜ドラマ『心の傷を癒すということ』脚本・桑原亮子、2020 年)

宮地尚子「精神科医倫」

理恵は(というか、Jさんは)、津波にあったわけではない。けれども火の海に巻き込まれたという意味では、火の津波にあったと言えなくもない。何も倒れてこない海、そして野原。延焼が起きることのない海、そして野原。

生き延びた人にしか、手記は書けない。体験を話すことはできない。話を聞いてもらうことはできない。けれども、亡くなった人の分まで、私たちは遣された言葉を読み返したり、そこから新たな作品を生み出したりすることはできる。

私たちは、震災から10年という時にいる。同時に、震災から17年という時にいる。震災から76年という時にもいる。また、震災から26年という時にもいる。そして私たちは、永遠の3月10日に留め置かれている。

私は以前、「当事者からいちばん遠い人を想像することが、逆説的に〈内海〉にいちばん近く深く寄り添うことになるかもしれない」と、『環状島＝トラウマの地政学』の結びに書いた⁴。〈内海〉は、震源地や爆心地を中心とした、犠牲者の沈む海、声の出せない人たちの佇む海である。内海はあちこちにある。震源地や爆心地はあちこちにある。

私(たち)はまだ、テキストを消化／昇華しきれずにいる。消化／昇華しきれないまま、テキストが流れ着き、折り重なっていく。

10年、そして。

宮地尚子〔精神科医師〕
兵庫県生まれ。1986年京都府立医科大学卒業。1989
から1992年ハーバード大学に客員研究員として留学。
1993年より近畿大学医学部衛生学教室勤務、2001年よ
り一橋大学大学院社会学研究科地球社会研究専攻・助
教授、2006年より教授。専攻は、文化精神医学、医療人
類学、トラウマとジェンダー。
主著に、『トラウマにふれる』（金剛出版、2020年）、『はは
がうまれる』（福音館書店、2016年）、『トラウマ』（岩波書店、
2013年）、『震災トラウマと復興ストレス』（岩波ブックレット、
2011年）、『傷を愛せるか』（大月書店、2010年）、『環状島＝
トラウマの地政学』（みすず書房、2007年）、『トラウマの医
療人類学』（みすず書房、2005年）、『異文化を生きる』（星
和書店、2002年）など。

1 | 例えば地震調査研究推進本部事務局(文部科学
省研究開発局地震・防災研究課)のウェブサイト内の、「東
京都（伊豆諸島及び小笠原諸島を除く）の地震活動の特
徴」では、30年以内の南海トラフでの発生確率が70～
80%、首都直下地震の対策区域のうちの一つ、茨城県沖
での地震の発生確率が80%などとされている。
[https://www.jishin.go.jp/regional_seismicity/rs_
kanto/p13_1_tokyo](https://www.jishin.go.jp/regional_seismicity/rs_kanto/p13_1_tokyo)（2021年2月25日閲覧）

2 | 本文の脱稿後、原資料を閲覧する機会があり、梅
谷みきさんは津波にあう前年に結婚したが、夫は結婚式
の1週間後に出兵したことがわかった。原資料閲覧の機
会を提供してくださった木村玲欧氏に感謝する。

3 | 第19回日本トラウマティック・ストレス学会（WEB開
催）でも、この話題について議論している。安達もじり、京
田光広、宮地尚子「精神科医・安克昌からのメッセージ～
NHKドラマ『心の傷を癒すということ』を読み解く」（『トラ
ウマティック・ストレス Vol.18 No.2』2021年、P.133～140）

4 | 宮地尚子『環状島＝トラウマの地政学』みすず書房、
2007年、P.215

宮地尚子〔精神科医師〕

心の底に降りてあるもの

榎木野衣

美術批評家

榎木野衣さんの『震美術論』は、自然災害による破壊と復興、そして反復と忘却を繰り返してきた日本列島の美術に向き合った著作です。地質学的条件から東日本大震災を捉え直す、広い視座を与えてくれました。榎木さんは、いま何を考えているのでしょうか？

今回、「東日本大震災から10年目、いま何を考えていますか？」という問いかけをいただいた。

そんなふうに主題をいただいて、僕があらためて気づいたのは、そのような問いかけにもとづいて文章を書こうとしている自分がいなかった、ということだ。

ふつうに考えれば、僕はあの東の大震災（大津波）と原発事故に大変な衝撃を受けて、それを自分なりに受け止めて、その後の美術批評家としての仕事を組み立て直してきたのだから、そして、そのことで被災地と呼ばれる場所に住む、あるいは住んでいた方々と、決して結ぶことのなかった縁と機会をいただいたのだから、10年という大きな区切りを前に、自分がいま何を考えているのかについて、いったんまとめて考えてみるのは、しごくあたりまえのことに思う。

そのようなあたりまえのことを、なぜ、自分はしようとしていなかったのだろう。にわかに世界中を覆った新型コロナウイルスによるパンデミックという惨禍のせ

榎木野衣「美術批評家」

いだろうか。いや、違う気がする。ウイルスの蔓延はたしかに東日本大震災を上まわる世界的な衝撃と大きな犠牲をもたらしている。けれども、だからと言って東の大震災の余波と原発事故の処理が終わったわけではまったくない。

なので、ここでは、東日本大震災から10年目、いま何を考えていますか？という問いかけをきっかけに、僕は、なぜ、そのような機会に特別に何かを考えようとしていなかったのかについて、考えてみたい。

と言っても、答えはかんたんではない。言うまでもなく、僕は何か明確な理由があって、そのことについて考えようとしていなかったわけではないからだ。

だから、その理由を知るために、僕は僕の心の底に降りていかなければならない。そして、そのことで得られるのは、たぶん、はっきりした原因のようなものではない。それでも、その答えを探るためには、そうしなければならない。そういう気がしている。

心の底、それがどれくらい深いものかわからないけれども、たしかに、そこには深さのようなものがある気がする。誰かが掘った井戸のようなものではないから、その深さについて測ってみることは、むろんできない。しかしそれでも、ずんずんと、その先へと降りていくことができるような、そういう実感がともなう思索があることは、たしかだ。

そういう場所には、善悪というようなわかりやすいたぐいのものがない。そういう明暗がはっきりしてくるのは、もっとずっと浅い、意識の表層に近い場所だ。僕がこれから書こうとしていることは、そういう場所から汲み出されたものではない。だから、これから僕が書くことが、迂遠で、少しばかり不遜な響きを帯びているとしても、それについてはどうか許してほしい。こういう書き方をするか

心の底に降りてあるもの

らには、僕もそれ相応にふつうではないやり方をとることになるのだ。でも、そのことで誰かがいやな気持ちになるとしたら、それについては決して本意ではない。こういうことについては、そういう書き方しかできないのだ。

「悪い場所」の上で

まず、東日本大震災で僕は、結果として予想していなかったような利を得た。利を得た、というのは、突拍子もないようだから補足するけれども、損得の得だ。先に不遜に響くかもしれないと書いたのは、こういうことを言わなければならないからだ。でも、少し俯瞰的に距離を置いて自分を（幽体離脱的に？ 離人症的に？）眺めてみれば、これはある程度まで客観的な事実なのではないかと思う。そして僕は、そのことをこの場で決して否定しない。

僕は、批評家としては一度倒れていて、それは1995年に阪神・淡路大震災と地下鉄サリン事件が起きたからだ。そのとき僕は、もうこれまでのような書き方はできないな、とひとりごとのように声を発した。それまでの僕は、世界中どこでも、同じように多発的に進行している潮流のようなものがあって、それを「シミュレーションイズム」と呼んだのだけれども、大きな地震と化学兵器によるテロがあって、日本で都市とか首都とか呼ばれているものが、本当に地下から崩れ落ちていく様を目の当たりにして、世界を繋ぐ潮流であるどころか、批評には動かせない固有の場所というものがあることを痛切に気付かされた。

しかもそれは、歴史というものが成り立ちそうになると、そのそばからいくども流産してしまい、そのことを忘れた頃に、また同じことがほとんど同じよう

に繰り返されるといふ、無限地獄のような「悪い場所」だった。何がそれに似ているかという、鏡合わせになって目が覚めない、目が覚めたと思ったら、それも悪夢の場面の一部だったというような、幾重にも折り畳まれた、悪夢といっても入れ子のようなものがそれに近いのだが、そこまではいちいち説明せず、僕はそれを端的に悪い場所と呼んだのだった。

そしてそれからほぼ10年以上は、そのことをさまざまな角度から眺め直し、たとえば戦争画（作戦記録画）に置き換えたり、1970年の大阪万博に照らし返したりしながら、悪い場所での批評を継続してきた。しかし、そもそもの悪い場所がそうであるように、それはいつのまにか主題の無識的な変奏のようなものになりかけていて、僕は批評家として「息詰まって」いた。いや、当時はそう思っていなかったかもしれない。周囲もそんなふうには感じていなかったはずだ。けれども、いま思えばそれはあきらかだった。

というのも、東の大震災と原発事故が起こり、僕の批評は一気に活性化し、批評家として生き返ったような気持ちになったからだ。もちろん他方では、見えない放射能の恐怖から逃げ、家族のために食材の産地を調べたり、ガイガーカウンターで周囲に汚染がないか測ったり、そういうこれまで体験したことがない不安にさいなまれながらも、それでも僕は、あきらかに批評家としては、もはや変奏ではないやり方で書く動機を新たに得ていた。巨大な地震と過酷な核災害は、あきらかに日本列島という地質学的な条件がもたらした、なるべくしてなった結果であり、1995年の西の大震災と地下鉄サリン事件と、規模の違いはあっても、目に見えない地下という悪い場所の構造的な基盤を通じて、きわめて密接に繋がるものだったからだ。

こうして「悪い場所」は、たんに観念的な批評の用語としてではなく、ほとんど地質学的な次元で遠い過去と接続され、僕のなかで戦後に留まらない領野として拡張された。そして、僕はそのことに基づいて、苦しんで数年はゆうに費やしながら、ようやく2冊の本を書いて世に出した。1冊目は『後美術論』といい、2015年に出て、その年のうちに吉田秀和賞を受賞した。『震美術論』と名付けたもう1冊のほうは、2017年に出て、その年度の芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した。僕自身、それは嬉しいことだったし、周囲の知人や友人も、力を貸してくれた版元の方々も、そして田舎の両親も、まるで自分のことのように喜んでくれた。しかし僕は、嬉しいと同時に、どこか他人の不幸で僥倖^{ぎょうこう}を得たような違和感が、多少なりとも心に残った。

「見に行くことができない展覧会」

批評家としてのこうした執筆を続けるのに並行して、僕は生まれて初めて戯曲を書いた。1986年の日航機墜落事故と、東の大震災と原発事故が瓦礫(デブリ)のように凝集したもので、実は僕は戯曲を書くつもりはなかったのだけれども、それを掲載してくれた文芸誌の編集長によれば、結果的にはそう呼ばれるものになるのだということだった。2014年のことだった。そして、それを美術家でも演出家でもある鮎屋法水に演出してもらおう機会を得た。そして、そのことで演劇となった公演は、数日にわたって真夏の横浜で披露された。

タイトルは「グランギニョル未来」といい、そのときに主演を務めてもらった歌手でもあり美術家でもある山川冬樹と、震災後にSNSを通じて知り合いに

榎木野衣「美術批評家」

心の底に隠りてあるもの

なった福島市の高校教員でもあり写真家でもある(かつては画家でもあった)赤城修司と4人で、同じ名前のユニットを組み、その年の暮れから、今度は繰り返して、福島県内の帰還困難区域に入ることになった。

このユニットは、帰還困難区域のなかで「見に行くことができない展覧会」を開くことを思い立ったアーティスト集団のChim↑Pomに誘われて、帰還困難区域が解除され、所定の場所に入域することが誰にもできるようになって初めて開く展覧会、「Don't Follow the Wind」というプロジェクトを構成する12のアーティストのひとつとして活動することになった。展示は2015年3月11日から始まり、現在もその会期中にあたる。おそらく、世界でもっとも長期にわたる国際現代美術展となるのではないか。もっとも、展示の「開催」はされていない。いつから開くかは、依然として未定のままである。

その展示が行われている場所は、帰還困難区域に所在する施設を管理する、ある避難者の方の厚意で使わせていただいているので、位置や場所は公開していない。それでも僕らは、多ければ1年に数度はそこに向かい、防護服を着てなかに入り、記録をとったり、展示を付け足したりしてきた。もともとが演劇のためのユニットだったこともあり、「グランギニョル未来」の一部をその場所で再演したりもした。横浜のときと違って、観客は誰もいない。新型コロナで遠隔配信があたりまえになったいまなら、無観客公演と呼ばれるかもしれない(ただし記録だけで配信はない。そしてその記録の半分は、データのクラッシュによって永遠に失われた)。

いつかは、その様子のいったんが広く公開されるときがやってくるかもしれない。もしかしたら、それは東京でオリンピックやパラリンピックが開かれる2020

年の夏かもしれないね、それは大震災と原発事故から復興した日本を世界にアピールする絶好の機会になるだろうから、その時分には帰還困難区域も一部が解除されて、そこに自分たちの展示があれば、見に来る人もいるかもしれないね、いまは時間が凍りついたように、2011年当時と変わりように何も変わるものがなく、人っ子一人いないこの場所も、それでも少しは慌ただしくなるかもしれないね、などと話していた。

けれども、2020年になっても、けっきょくそのときは訪れなかった。オリンピック／パラリンピックはおろか、付近を通るはずだった聖火リレーも中止になったからだ。たしかに常磐線は全線開通したけれども、そこから僕らの展示のある「会場」までは道が繋がっていない。僕らがそこに行くときには、いつも常磐道を使ってインターを降り、あるところからは許可証を提示して身分証明書と照合し、封鎖されたゲートを開けてもらって、ようやくなかに入ることができる。入域時間は上限が決められているし、出るときにはきちんと放射能汚染がないか、スクリーニングを受けなければならない。

こうして、僕たちはたしかに活動を続けているけれども、そのことを知る人はいない。一度、帰還困難区域のなかで行った無観客の公演の合間に、その場を少しだけ離れ、座ると汚染された土がついてしまうので、立ったまま休憩した。そこは屋内だったけれども、窓が割れて外から風が吹き込み、それをしのごうとして足元がふらついた。僕はタイベックで踏ん張ってからだを支えたけれども、周囲からは風の音のほかは何も耳に届かず、そもそも防護服のせいで体内の音のほうが大きくて、すぐにあたりはしんと静まり返った。いったい自分はいま、ここで何をしているのだろう。いま、ここはいったい何年の何時で、何があってこ

榎木野衣【美術批評家】

心の底に隠れてあるもの

こはこんなふうになっているのか、すっかりわからなくなった。記憶喪失というのは、きっとあんな状態が続くのだろう。

そんなとき、はたしてこれは、世で言うところのアートなのか、何がしかの表現なのか、それはわからないけれども、とにかく誰かに対して発信する、そういうたぐいのものなのかどうか、すっかり疑わしくなった。ここは美術館でもなければ劇場でもないし、そもそも何のために自分はこういうことをしているのか。いつかは、これが活動の履歴とか、業績と呼ばれるようなものになるのだろうか。誰かに称賛されるのだろうか、非難されるのだろうか、それとも無視されるのだろうか。褒められるのなら、そのほうがいいな、と一瞬思ったけれども、それ自体が不穏な思いつきのような気がして、すぐに打ち消した。

しかし、だとしたら、何のためにこんなことを5年にもわたって継続しているのか、それがよくわからない。はっきりしているのは、自分は自分のために、誰かの力を借りてでも、こういうことをやりたいと思っている、ということくらいだ。こんなふうに、打ち消したり、肯定したりを繰り返しながらも、そんな意味不明の逡巡自体が、まったくの無駄なような気もするが、それでも、続けている。自分のなかに、それ以外の選択肢はないからだ。

こういう心境というのは、あれほどまでに大きな出来事が起きても、かんたんに清算できるものではない。5年が経とうと、10年が経とうと、20年が経とうと、質的に変化するものではないと思う。違和感を解消できるようなバランスの取れた心の着地点が、見つからない。ないなら、動機など忘れるしかない。しかし行っているという事実だけは、ひとときも忘れることができない。何にせよ、会期中なのだ。そしてそれは同時に、批評家としての僕の活力源でもあるのだ。

だから、これもきっと、何がしかの僥倖ではあるのだろう。

二つの重石

こうしておそらく僕は、東の大震災と原発事故が起きて10年経っても、そのことの決着がうまくつかず、だから、切りよくそのことについて書こうという気持ちになれずにいたのだと思う。10年はたしかにひとつの区切りではあるけれども、そういう心に刻まれた痕跡のようなもの（それは、「トラウマ」というようなものでもない）にとって、10年というのは、同じ状態が、少し前の9年目と同じように、そのあとの11年目も、12年目も続くことの予告でしかないからだ。

そうして僕は、さらに心の底へと降りていく。そして、二つの重石のようなものが、かなり深いところに落ちていることに、気づくのだ。その重石の重みのようなものは、それだけ深いところに落ちていても、どういう反響の仕組みなのかわからないけれども、意識のかなり浅い部分、つまり日常の端々に突然、浮上することがあって、僕の気持ちを少し歪ませる。

東の大震災と原発事故は、たしかに僕に複雑な僥倖をもたらした。それについて、すでに記したとおりだ。しかしそれは、どの程度複雑であったとしても、僥倖であることに違いはないのだ。けれども、そのふたつの重石は、僕に、もう一度やり直そうとしても、絶対にやり直すことができない後悔に似た感情を、やはり同じ数の二つだけでもたらしている。しかしそれは、何か自分を責めれば済むようなものではなくて、放射能の影響が事後の自分のからだに何か災いをもたらしたかどうか、その因果関係を誰も証明ができないのに似ていて、ほんとう

榎木野衣「美術批評家」

にそうすればよかったのかどうか、しなければどうにかなったようなものなのかどうか、僕自身にもわからないことなのだ。

はっきりしているのは、東の大震災と原発事故がなければ、僕はそういう選択をする場面そのものを、決して持たなかっただろう、ということだ。そしてそれは、僥倖などとは何の関係もない。その内容について僕は、震災から10年目に何を思うのかについて考えようとして、何も考えようとしていなかったことであらためて気がつき、その理由について考えようとしているうちにこの二つの重石につまづいて、そのことについて、この場で書くことができるかどうか、考えてみたのである。

けれども、それをこの場で書くことは、どうしてもできなかった。いつか、時間が経てば、そのことについておおよけの場で書くことができるようになるのだろうか。それについては何とも言えない。そういうことについて書くには、10年というのは、あまりにも短い。

僕はいま、文字としては書かないまま、心の底から重石のように浮上しないこの二つの出来事に思いを馳せて、そのことをゆっくりと反芻するように思い返している。それはとても個人的なことで、仮に言葉にしてみたところで、何の反響などないようなものだと思う。けれども、僕にとっては、東の大震災と原発事故がもたらしたさまざまな出来事のうちでも、最大級に大きな意味を持っている。

そうしておそらく、そういうことが、誰の身にも程度の違いはあっても、それが震災の年に起きたのか、それから2、3年が経ってから起きたのか、もっと最近になって起きたのかはわからないけれども、きっと起きたと思う。でも、そういうことは、なかなか語れるものではないし、文章に残せるようなものでもない。

心の底に降りてあるもの

飯に残したとしても、それは日記のようなものとなり、机やパソコンの奥のほうにしまわれて、当分のあいだ誰の前にも姿を見せないか、もしくは永遠に遠くのほうへと消え去ってしまうか、あるいはその人が死んでから、不意に見つかってようやく伝えられるようなものなのかもしれない。でも、それは告白というほど重いものではないから、あ、そんなことがあったのね、というひと言で済んでしまうような気もする。たとえ、そのことが起きて何十年が経っていたとしても。そういうところでも、時間というのは絶対的なようでいて、あまり意味を持たないことがある。

そして僕は、そういうものこそが、東日本大震災と呼ばれる出来事が、ほんとうの意味で一人ひとりの身に、ひそかに引き起こしたものなのではないか、といま思っているのだ。

榎木野衣 [美術批評家]

心の底に降りてあるもの

榎木野衣 [美術批評家]
山間の秩父に生まれ、京都の同志社大学で哲学を専攻。のち東京に移り、1991年に最初の評論集『シミュレーションイズム』（1991年、増補版＝ちくま学芸文庫）を刊行、批評活動を始める。主な著作に『日本・現代・美術』（新潮社、1998年）、『戦争と万博』（2005年）、『後美術論』（2015年、第25回吉田秀和賞）、『震美術論』（2017年、平成29年度芸術選奨文部科学大臣賞、いずれも美術出版社）ほか多数。責任編集に『日本美術全集 19 拡張する戦後美術』（小学館、2015年）などがある。
キュレーションした展覧会に「アノーマリー」（レントゲン芸術研究所、1991年）、「日本ゼロ年」（水戸芸術館、1999－2000年）ほか、2021年1月より「平成美術 うたかたと瓦礫（デブリ）1989－2019」展を企画・監修（京都市京セラ美術館）。1985年の日航機123便御巣鷹の尾根墜落事故を主題とする戯曲に「グランギニョル未来」（2014年）、福島の前避難区域で開催中の“見に行くことができない展覧会”「Don't Follow the Wind」では実行委員を務め、アートユニット「グランギニョル未来」（赤城修司、鮎屋法水、山川冬樹）を結成、展示にも参加している。

津波の木

畠山直哉

写真家

2013年のフォーラム「なんのためのアート」で、畠山さんは“アートにおける「私たち」とは、「私」と「あなた」ではなく、「私」と「誰か」が合わさった「私たち」である”と語り、言葉にしがたいあの出来事とアートについて考え続けるための問いをいくつも投げかけてくれました（P.46～65）。畠山さんは、いま何を考えているのでしょうか？

靴をつっかけたまま、玄関のドアを押し開ける。きょうはあいにくの雨だ。道に出て、傘を開きながら地面に目を落とすと、そこには空が映っていて、少しのあいだ見とれてしまう。濡れたアスファルトが、頭上にある電柱やマンションを黒い影として、区切られた天空を明るい白として、少し向こうの樹木の緑すら、にぶく反射させている。歩き出せば自分の脚は、なんだか宙をゆくようだ。

不思議なのは、このような雨の日の記憶が、晴れている日には綺麗さっぱり、どこかにいってしまっているということだ。空が青く、眩しい陽光が濃い影をつくるような、そんな日に出かける時のことを考えてみればいい。その明るい眺めに、雨が降っている時の情景が重なったことなど、ただの一度でもあっただろうか。確かに同じこの道路、この家並みこの街路樹を、あの雨の日、少し湿っ

ぼいズボンに気をしながら、同じこの僕は眺めていたというのに。

忘れていた訳ではない。思い出すことがなかっただけだ。思い出そうとしさえすれば、あれこれの光景はたちどころに、脳裏に浮かんでくるのだから。では、もし「思い出そうとする」ことが、一度も行われなかったらどうだろう。それと「忘れていた」こととは、どこが異なるというのだろうか。

誰かに言われて「ああ、そういえば……」という風に、忘れていた状態から何かを思い出すようなこと（想起）がよくあるが、これはたぶん、意識と記憶の中間部に扉のようなものがあって、それが開いたり閉じたりしている、というようなことではないだろうか。扉が閉まっていれば記憶は現れず、扉が開けば記憶は現れる。扉が開いても何も現れなければ、それは忘却と呼ばれるだろうし、開いた扉が閉まらない状態になると、それはトラウマと呼ばれるだろう。モンダイは、その扉を開けたり閉めたりする責任者が、この自分ではないということだ。「忘れるな」という呼びかけにどう返事をしたらよいのか。「忘れない」の約束をどう守ってゆけばよいのか。「……絶対に」とつぶやいてはみるものの、どこかにいつも自信のなさが残る。意識と記憶の間にある扉を、自分で自由に開閉する方法を、誰か教えてくれないものか。

奇跡の一本松

遠くからバスでやって来た小学生たちが、海の方を指さして「奇跡の一本松、はっけーん!」と、興奮した声を上げている。最近なされた緑地化工事によって、背景にある巨大コンクリ防潮堤のブルータルさが抑えられたせい、松の

傍の折れ曲がったユースホステルが痛々しいとはいえ、景色の全体は、以前よりも穏やかなものになったように感じられる。

あんな大津波によく耐えて残ったものだと、誰もが感心するが、実は2013年からこの松は、エジプトのミイラのような剥製である。腐った根は慎重に掘り出されて別の場所に保管され、地中にはコンクリートの土台。そこから延びるカーボンの心棒が、分割されプラスティネーションされた幹を貫き、上空に広がる枝の芯はステンレス、表面はエフ・アール・ピー、松葉はすべてプラスチックで、幹への取り付け前には風洞実験までおこなわれたとのことだ。一番てっぺんには避雷針まで付いている（申し訳ないが個人的には、あの一回溶けて少ない数にまつまってしまったような松葉の部分が、どうしても直視できない。針葉樹の葉は、やはり針のようにチクチク尖ってフサフサしていて欲しい）。

もはや幹の一部組織を除いて、全てが人工素材に置き換えられてしまったため、市の広報すらこの松を「レプリカ（模造／複製）」と呼ぶことがある。正確にはこの松は、加工を施した現物であるのだから、これを「レプリカ」と呼ぶのは難しいかもしれないが、「もう現物とは呼べないのです」というニュアンスを市が伝えようとしているところには、誠実さを感じざるを得ない。確かに松はもう「現物」ではなくなってしまった。では、ここに立っているのは、何なのか？

ここに立っているのはもう植物の松ではないし、生まれたり死んだりする生命としての樹木でもない。人工的で、彫刻や建築にも似た何か。「現物そっくり」という意味では、写真にも似ている気がする。「奇跡の一本松」の写真が立体化し、原寸で立ち上がったら、こんな感じになるだろう。

別に「奇跡の一本松」を茶化している訳ではない。子供の頃から高田松原

を遊び場としていた自分に、そんなことをする気は毛頭ない。何もなくなってしまった陸前高田の地面に、ポツンと立っていたこの松が、当時どれだけの人々に感動を与えていたのかは、すぐに思い出すことができるし、これから多くの人に2011年の大津波災害について考えてもらうためには、「奇跡の一本松」は、あった方が良くに決まっている。レスキューの努力にも拘わらず、この松が2011年の秋に枯れてしまった時、市がそれを処分せずに残すことを決めたのは、英断だったと思う。ただ「奇跡の」という、ドラマチックな形容詞がいまでもセッ
トになっていることの理由を考えると、何かモヤモヤしたものが胸に湧いてきて、このような意地悪にも似た言葉が出てきてしまう。

ここに立っているのは、もう一本の松の木ではなくて、「像」とか「言葉」とか呼んだ方が正しく思えてくるような、観念的な何かだ。ほかの7万本の仲間が根こそぎにされても、あの大津波によく耐えて残った「奇跡」という観念だろうか。もし立っているのが観念であれば、それが「現物」だろうと「レプリカ」だろうと、その差は些細なもののような気がしてくる。どちらだっていいではないか、あの出来事の巨大さに較べたら……。

これが「メモリアル(memorial)」と呼ばれるものだろう。ここに立っているのは、僕たちの意識と記憶(memory)の間にある、あの扉を開けるための装置なのだ。

ただ、開いた扉から苦しみの記憶ばかりが溢れ出てくるようでは、辛すぎる。東北沿岸部各地で「震災の記憶を継承するため」と、遺構の保存に関する議論が活発におこなわれていたが、そのいずれもがかなり紛糾していたのは、このためだ。陸前高田市の場合には、この「一本松」の他に、気仙中学校、旧道の駅高田松原、陸前高田ユースホステル、下宿定住促進住宅1号棟と、四

つの廃墟を震災遺構として残すことが、比較的スムーズに決まった。市民体育館や市民会館など、解体されてしまったほかの建物とは異なり、この四つの建物ではたまたま、死者が出なかったからだ。

ジェレミー・ベンサムのみイラ

しかしながら、こと僕に関する限り、「奇跡の一本松」を眺めても、2011年の大津波災害が直ちに思い出されるわけではない(それは、陸前高田市のあらゆる場所で思い出されていることだから)。扉が開いて、僕の頭に浮かんでくるのは、おかしなことに、あの「最大多数の最大幸福」で知られる、英国の功利主義哲学者、ジェレミー・ベンサム(Jeremy Bentham / 1748-1832)の姿なのだ。

もう20年以上前のことになるが、ロンドン大学のどこかの校舎の入口で、キャビネットの中に鎮座したジェレミー・ベンサムを見たことがあった。いかにも19世紀前半の法哲学者らしい装いで、つばの広い帽子を被り、杖まで持っていたので、よくできた蠟人形だと感心していたら、友人が「服や手袋の中は正真正銘のボディよ。彼の遺言なの。首から上はつくりものだけど、以前は足元に現物が置いてあったって……」と教えてくれ、飛び上がるほど驚いたことがあった。

この奇怪な話を、陸前高田の「奇跡の一本松」に結びつけるのは、ひょっとしたら世の中で僕一人だけかもしれない。だが「レプリカ」などという言葉と共に、あの人工的な松の葉を見上げれば、その印象が、キャビネットに鎮座する哲学者のみイラに結びついていっても、それほど不自然なことではないはずだ。

ベンサムの場合、死期に臨んで「自分の死が生者の幸福に役立つためには？」

と、真剣に考えた結果が「自分のボディを大学に残すこと」だったという。当時入手が容易ではなかった解剖実習用の献体として自らを差し出し、その後は服を着て校内のしかるべき場所に居座る。彼は、生身を展示してしまえば絵画や彫刻にする手間が省けていいだろうし、快い回想も得易いだろう、と述べていたらしい。大学の運営会議のある時には、頭部が会議室に運ばれ「ペンサム先生、ご出席」ということになっていたらしく、まったく信じがたいことばかりだが、落ち着いて眺めれば、ここにも人の生と死、世の幸福を願うこと、記憶の大切さ、表象と現前といったことを巡る、人間的な工夫と努力の跡が、確かに見て取れるのではなからうか。そしてそれは、「奇跡の一本松」を保存したいと願う人々の気持ちと、あまり大きくは異ならないのではなからうか？

さらに加えれば、「奇跡の一本松」からペンサムへの連想に拍車が掛かるのは、彼の唱えた「功利主義」という一語のせいでもある。これほど震災後のアーティストたちを考え込ませた言葉もなかったのだから。

アーティストは、靈感や才能や努力によって、新しい作品を世に生み出そうとする。芸術史上の偉大な作家たちを尊敬すればこそ、かれらが成し遂げた仕事のさらに先まで進もうとする。だからできれば独自の、少なくともほかの作家とはカブらないようなスタイルを築くことが大事になる。仕事に真剣になるあまり、周囲から浮いてしまうこともあるが、それはむしろアーティストの伝統なのだから、気にせず自分の道を進めなどと、先達は忠告してくれる……。

多くの人が馴染んでいるだろう、このようなロマンチックな思考様式。その中からは「結局アートは、分かる人にしか分からないものだ」とか「アートは役に立たないものだ。役に立ったらそれはアートではなくて、デザインだ」とかいっ

た、カッコイイことを言う人も出てくる。そんな人たちも、2011年3月11日の地震、大津波、それに続く原発事故の様子と、膨大な数の被災者たちの姿を見た。中には自ら被災した人たちもいた。そして、ほかのすべての人々と同じように絶句し戦慄し、また咄嗟に「自分には、アートには、何ができるのか？」と考えたのだ。

「功利主義」は英語で「ユーティリタリアニズム (utilitarianism)」。「utility」つまり「有用性」を重んずる主義である。「役に立つ」ことが人類の幸福の総和を増やすという、誰にも反論ができない程のシャープな思想である。そしてこれこそが、震災後にアートに求められていた性質のうちで、一番大きなものではなかっただろうか。被災地のために、被災者のために、これからの世の中のために、アートに何ができるのか？ いつにも増して「最大多数の最大幸福」が切実なテーマとなっている中、「分かる人にしか分からないアート」「役に立たないアート」を信じていた人たちの苦悩は、どれほど大きかったことだろう。いくつかの「役に立つ」かに見えるアートの実践例も、かれらにとっては何の模範にもならなかったはずだ。アートにおける近代主義の根の深さを、多くのアーティストが歯ざりししながら確認していたことと思う。僕も、その中の一人だった。

「奇跡の一本松」は、多くのアーティストのインスピレーションとなり、唄が生まれ、物語が綴られ、絵が描かれ、写真や映像が撮られた（陸前高田では「たまごせんべい」も生まれた）。はたしてそれらは「役に立って」いたのだろうか。それとも、アーティストの叫びにも似た、一方的な感情の表出だったのだろうか。ペンサムだったらこんな時、アートの有用性に関して、どのような意見を述べるだろうか。

一本のオニグルミの木

高田松原は気仙川の河口から、東に2キロメートルにわたって延びている。いや、延びていた。松原の砂は、川が少しずつ運んできた。何百年かかったのかは分からない。何千年かもしれない。それがすべて大津波によってえぐり取られ、7万本の松林はすっかり消えた。一つの風景がまるごと消えてしまうなんてことがあるわけないと、いまでも信じられないが、これは本当に起きたことのようだ。対岸にある気仙町の長部^{おきべ}からはいつも、青い海の上に逞しい緑のラインが遠くまで続いているのが見えて、嬉しかったものだが、いまはそうではなく、コンクリートの白い壁が遠くまで続いているのだから。

あの津波が気仙川を、河口から8キロメートルもさかのぼったことに、驚かない者はいなかった。水は平らになろうとするから、水位が15メートル上がればそれに応じて、低いところを目指して動いてゆく。海から8キロメートル付近が、その水位に対応する地点だったということか。海などまるで関係ない、山の中と言ってもいいようなところなのに。

その山のあたりから、僕の母は出てきて、初夏になると海の匂いがして、カモメもたくさん飛んでくるような、川下の家に暮らしていた僕の父の、妻になった。行ったり来たりする道は、川に沿ってできているから、その道をさかのぼれば、母の子供の頃の思い出にたどり着くことができた。下ればもちろん、僕らの家族の思い出があった。

僕が現在撮っている写真の連作は、その道の途中にいまでも立っている一本のオニグルミの木との出会いから始まっている。オニグルミとは、都会のスーパー

晶山直哉 [写真家]



2018年6月4日 陸前高田市矢作町島部 写真：晶山直哉



2020年7月19日 陸前高田ユースホテルと奇跡の一本松
(私家版写真集《陸前高田市東日本大震災遺構Ⅱ》より) 写真：畠山直哉

で売っているようなクルミとは違い、殻が固くてハンマーでなければ割ることができないような、東北では馴染みのクルミだ。

この木は、種子を撒くためによく川を用いる。だから果実は、流れの淀みに集まって浮いていることが多く、タモを使って採取したりもする。周囲の果肉状の部分が腐ってしまうまで放置し、洗って乾かしてから殻を割りにかかるが、苦労して割っても、中身がすりと出てくることはなく、尖ったものでほじくって、粉々にして出すことが多い。これをすり鉢で、水を少しずつ加えながら滑らかにし、砂糖と醤油を加えて、正月の餅に搦め、ニコニコと家族みんなでいただく……。扉が開くと、このような記憶が後から後から現れてきて、きりが無い。

この木は、震災から数年は目立たなかった。いや、こちらが気付かなかった。周囲に少しの木がまだ残っていたせいかもしれない。やがてそれらは枯れて倒れ、この木だけが残った。オニグルミは葉を開く時期が他の広葉樹よりも遅いせいかな、はっきり気が付いたのは3年ほど前の、真夏のことだった。

幹を中心にして、海側の半分は梢の先まですっかり枯れているが、山側の半分は青々とした葉を茂らせている。驚いてそばに寄り、幹を確かめると、海側の樹皮には大きな傷跡があった。そう。大津波が川を遡上した時に運んできたさまざまな物体、中には物体以外のものもあっただろうが、それが激しくぶつかってできた傷の跡だった。

ここから先のことを語り始めると、話が長くなりすぎるから止めておく。ただ、あのオニグルミの木が、僕の意識と記憶の間にある扉を開けてくれた時、一つの言葉が不意に現れたことだけは、言っておきたい。それは「ラ・ヴィ・コンティ

ニュ (La vie continue) =生きていることは続く」というものだ。フランス語だが、別にカッコつけてる訳ではない (生命と人生をいどきに表す「ラ・ヴィ=生きていること」に相応しい日常単語が、日本語の中に見つけられないということもある)。

2015年11月13日。一日のうちに、パリの競技場や劇場、レストランなど複数の箇所で、いわゆる同時多発テロが起こり、たくさんの死者 (130名以上) と負傷者 (352名) が出た。その惨状については日本でも連日報道されていたが、事件から数日経って、テレビでは日本のリポーターが、不穏な空気の残るパリの街頭で通行人にインタビューを試みていた。一人の若い女性が立ち止まると、マイクに向かって、事件の理不尽さに対する怒りと哀しみ、そして不安を語りながらも、平静と日常を保つことの重要性を強調し、最後に「La vie continue (生きてることは続くし)」と言い放ち、去って行ったのだ。

それは少しぶっきらぼうで、決して慰めの言葉などではなかった。でもその言葉に僕は、深く慰められた気がした。震災後に、世間から久しく聞こえてこなくて淋しいと思っていた言葉は、これではなかったのかと、僕は思った。

畠山直哉 [写真家]

畠山直哉 [写真家]
1958年岩手県陸前高田市生まれ。筑波大学にて大辻清司に師事。1984年に同大学院芸術研究科修士課程修了後、東京を拠点に活動を行い、自然・都市・写真のかかわり合いに主眼をおいた作品を制作している。1997年、第22回木村伊兵衛写真賞、2001年第42回毎日芸術賞、2012年芸術選奨文部科学大臣賞等を受賞。国内外で個展・グループ展に多数参加し、2001年にはヴェニス・ビエンナーレ日本代表の一人に選出されている。現在、東京藝術大学大学院映像研究科教授。

津波の木

「なんのためのアート」 基調報告

畠山直哉

2013年1月26日 会場|せんだいメディアテーク 主催|宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、
東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、えずこ芸術のまち創造実行委員会

みなさんこんにちは、私は写真家の畠山直哉と申します。東京に住んでおりますが、生まれて育ったのは岩手県の陸前高田市気仙町です。気仙町というのは、南の境を気仙沼市の唐桑町^{からくわ}に接しておりまして、まあ宮城県には歩いて行けると言ってもよく、じっさい明治の廃藩置県の以前には、陸前高田から大船渡の向こうあたりまでも、こちら仙台藩に属しておりました。ですから、県の内陸の方よりは、なんとなく仙台方面に親近感を覚えるという、そのような風土で育った者です。どうぞよろしくお願いいたします。

陸前高田の名前を出した以上、いっそ今申し上げておこうと思いますが、私は先だっての津波で、母親を亡くし、実家を流されました。私が今日ここに、発言者として呼ばれている理由も、そのような出来事に巻き込まれている人物だから、ということが、確かにあると思います。でも、こうして仙台にいて、たぶん周りは私みたいな人だらけ。あるいはもっとたいへんな人ばかり……。ですから、東京あたりで話をするのとは、少し緊張の質が違います。

しかし、私は被災者ではないんですね。陸前高田市役所に、証明書の申請をしに行った時に、そのことが分かりました。私の現住所が陸前高田ではないので、被災者証明書は発行できないというのです。だから東北自動車道は、無料で通行することができませんでした。私は、本籍のある気仙町の土地には、市の計画によって、今後住むことができなくなりましたが、それでも私は、被災者ではないのです。

それから、たぶん今日考えるべき課題のひとつとして、「アーティストが被災地に対してどう関わるか」などというのがあると思いますが、これがどうも……。たとえば、私が陸前高田に帰っているとしたら、私はほかのアーティストたちから、アートを「受けとる側」になるんでしょうか？ そんなバカなことはない。じゃあ、自分でやるのか？ たぶんそうなんですが、だとしたら「被災地に対して」って、どういうことか？ 土台だけが残った家の跡を眺めて、ポンやりしているような人間が「被災地に対して」って……と、少し頭が混乱するところがあります。

私はこのように、どうも曖昧な、はっきりしないポジションに置かれている人間だと思います。でも東京などと違って、ここ仙台には、私のような方々が、たくさんいらっしゃるはずです。私はこれから約40分間、今日のテーマ「なんのためのアート」に沿って、この「はっきりしない」ポジションから、お話ししようかな、と思っています。

—

とは言うものの、この「なんのためのアート」というのも、言ってみればずいぶん身も蓋もないテーマだと思うんですね。アートに関心のある方々がこうしてたくさんお集まりになって、「いったいアートはなんのためにあるんだろう」と、みんなで悩む、という趣旨ですから、これはちょっと、イベントとしても珍しい

ことなんじゃないでしょうか。

じつは私、先週の土曜日は、神戸で話をしていたんです。阪神・淡路大震災から18年目ということで、3331 Arts Chiyodaの中村政人さんが企画した「つくることが生きること 東日本大震災復興支援プロジェクト展」に呼ばれたものですから。で、その時に今日のイベントのチラシを何人かに見せたんです。そしたらあるアーティストがこの「なんのためのアート」という言葉を見て一言。「……アホな質問」と言ってましたね。「アホ」ですよ「アホ」。ま、確かに、「なんのため」と悩んでる姿よりは、それに対して一言「アホ」と。そう言い切る姿の方が、アーティストとしては、断然正しいと思います。見ていても気持ちがいいし、頼もしいですね。これはけっこう大事なことでしょね。

「なんのためのアート」。確かに、あまり人を元気にさせるようなテーマではない。でも今日は、この話題を真面目に考えてみたい気持ちです。私もこのテーマに「アホ」と言ってやりたい気持ちがありますが、その一方で、深く頷いてもいるのです。なぜか、というその理由は、ここに集っている私たちには、なんとなく共有されているんじゃないでしょうか。

—

世の中が不景気になると、文化や芸術の予算が削られる、なんてことが世

界中であります。(まあ、15年ほど前には、フランスという国では逆に不景気の時に、国家が文化予算を増やした、なんて珍しいこともありましたけど……) 人が生きてゆく上では、まず何よりも、ひもじくないこと、寒くないこと、そして家族と共によく休める空間があること。つまり衣食住の問題が最優先される。それから医療や福祉や教育の心配がそれに続く。それは当然です。私たちは、それぞれが、温かな体をもった、一個の生命体であるのですから。つまりまあ、一個の哺乳動物なのですから。その生命や共同体を健やかに維持することは、一番大事なことです。当然すぎるほど当然な話です。

それに比べて「動物」の暮らしとはあまり関係のないこと。たとえば外国からオペラを呼ぶとか、美術館の運営とか、芸術家の卵に奨学金を出すとか、中学校や高校で美術や音楽を教えたり学んだりするとか、あるいは本を出版するとか読むとか、新しい文化センターを建てるとか、そういうのはまあ、この際ちょっと我慢してくれるかな、我慢しようがないかな、ということになります。

ここでちょっと想像してみたいんですけど。「アート」にとってなかなか辛い、そのような時期が仮にあるとして、ではその時に、今日のような「なんのためのアート」といった疑問は、果たして私たちの頭に浮かぶでしょうか？ どうでしょう？ お金や政治の事情のせいで「アート」が実現できない。そのことに対して、人が不幸を感じたりすることは確かにあると思います。でも、たとえそんな時でも「アート」という言葉の意味そのものは、揺らいでいないような気が

がするんです。「アートが欲しい、アートがしたい。でもできない、残念だ」という気持ちの中には、アートに対する関心、あるいは愛といったものが、確かにありますね。アートの存在は、疑われていません。

そういう風に想像しますと、今日の私たちのテーマである「なんのためのアート」という疑問は、それよりも、うんとうんと深刻なものであるということが分かって参ります。アートが欲しい、アートがしたい、とかではなく「アートはなんのために？」と、疑っているのですから。これは「いったいアートに何ができるんだ？ (何もできない!)」といった、嘆きの混じったような、とても批判的な台詞にも聞こえます。この疑問は煎じ詰めれば、「アートはなぜ存在するか」といった、アートの根本を問うような、とても哲学的な疑問だということです。この哲学的な疑問が、およそ哲学なんて言葉の似合いそうもない現代日本において、いつ生じたのか？ それは今さら言うまでもありませんね。

私たちは2011年3月11日に、たいへんな災害に見舞われました。これは「不景気」なんて、生やさしいものではなかった。文化や芸術の予算が削られるぞ、なんて生やさしいものではなかった。じっさいに、美術館や芸術作品が破壊されたり、消滅したりしたんですから。私たちは「なんのためのアート」どころか「なんのための人生!」と嘆かざるを得ないほどの不幸と、重大な危機の中に突然投げ込まれました。いわゆる東日本大震災は、私たち現実存在としての人間が抱く、数々の疑問の頂点に立つような、あまりにも大きな疑問

を、私たちに突きつけた出来事でした。しかも、その疑問には、今まで感じたことがないほどの悲しみ、畏れ、怒り、といった強い感情が伴っていました。

見たこともない大きな波が突然海の方からやってきて、すべてを壊し水浸しにし、大きな火事まで起こし、大切な家族や友人は亡くなり、昔から住んでいた家や街は完膚無きまでに壊され、あっという間にこの世から消えてしまった。人は着の身着のまま、完全に己の肉体一つだけで、寒くて湿った大地に立ち、何日も震えていなければならなかった。

私の育った気仙町と同じような、哀しい町が、この東北の海岸線に直線距離300キロメートル以上にわたって、一つずつ延々と続いていると想像すると、このまま床に倒れそうになってしまいます。しかもそれに加えて、福島原発事故による放射能汚染の問題があり、それは東北だけではなく、日本全国の人々に常に緊張を強いるものとして、少なくとも今後数十年の間続くというのです。普通の神経の持ち主なら、倒れたまま二度と立ち上がれなくなるくらいのダメージを受けるような、それほどの出来事ではないでしょうか。

私は津波の後の数週間を、陸前高田の親戚宅できょうだいと過ごしましたが、不安や悲しみや怒りが、次から次へと押し寄せ、自分が急に何歳も年をとったように感じました。東京に戻ると、自分が以前にも増して気が短い、怒りっぽい男になっていると感じました。人混みの中で、他人のことなど意にか

けない、無礼な人々と出会う度に「どうしてあのような優しい人々がこの世からいなくなり、おまえのような人物が残っているのだ？」と、毒づきたくなる気持ちを、抑えることができませんでした。

—

「アート」に話を戻しますが、私自身はあの津波があってから、ほとんど陸前高田に関わることはおこなっていないせいもあって、自分が津波の前に、普段どんな「アート」をしていたのだったか、それが上手く思い出せないような時間を過ごしていました。まあ、そもそも「写真はアートなのか？」といった、昔ながらの議論もありますけれど、それとは少し違うことです。私なりに「アート」という言葉に、親しんでいたはずなのですが、それをなんだか忘れたまま、永く暮らしているような気がするのです。今日「なんのためのアート」というテーマで話すために、私はまず「アート」という言葉そのものを、意識的に思い出す必要を感じました。「ああそういえば、津波の以前、アートって言ってたけど、あれ、何だった？」なんて……。

今のは少しオーバーだったかもしれませんが、でもじっさい、津波があってからは、それまで普通に眺めていた「アート作品」のいくつか、急に生彩が欠いた、白々しい、どうでもよいもののように見え始めたということが、実感としてあります。アートの展覧会なども「どうしても」と思うもの以外は、あまり

行かなくなっていました。それからパワフルな作品、世間や評論家たちが「力がある」とか「強い」とかいて、褒めているようなタイプの作品、そのような作品を見ることが、とても苦手になりました。いちばん困ったのは、以前から私に関心を持てなかった、ある種の保守的でナイーヴなアートに対して、そのまま無視し続けることができなくなり、なぜか「怒り」に似た感情が湧き上がってきてしまう、ということでした。そういうものが目に入ると「なぜいまだに、このようなアートがのうのうと存在しているのだ!」と、無性に腹が立ってくるのです。この身勝手さは、我ながらひどいと思いますが、そういうことが、確かに私の身に起こっているのです。

誤解のないように言い添えておきますが、私は「アート」がすべて嫌になっているわけではありません。津波の後でも、いくつかの作品を見て「ああ、見ることができて良かった」と思われたことはあります。ただ「良かった」と感じるその頻度がずいぶん減りました。激減したと言ってもいいくらいです。これが私自身の人間性の変化によるのは確かなのですが、問題は、私が「アート」に鈍感になったのか、それとも敏感になったのか、ということでしょう。つまり津波の後、私の精神は「鈍く」「弱く」なって、大事なことを感じ取れなくなってしまったのか、それとも「厳しく」「鋭く」なって、「アート」に対する要求水準が高くなりすぎてしまったのか、あるいは両方なのか……。それは自分では、まだちょっと解りません。

「大丈夫か? ひょっとしてカウンセリングでも受けた方がいいんじゃないの

か?」と人から言われてしまいそうですが、このような不安定な精神状態のまま、「なんのためのアート」に関して、さらに話を続けてみようと思います。

—

さきほど「衣食住」と申し上げましたが、昔から西洋では「人はパンのみにて生きるにあらず」と言われます。確かに、衣食住以外にも、私たちの人生に必要なものがほかにある。生きる力は、食べたり、ぐっすり睡眠を取ることからだけではなく、見たり聞いたり感じたりしたことからも授けられることが、確かにあります。それはどんなものだったでしょうか。津波でめちゃくちゃになった陸前高田に戻ってからの、私のことを思い出してみることになります。

まず、悲しみや緊張や不安を共にする、人々の真剣な表情がありました。その真剣さは、お互いに生きることに向かっていました。それから、数々の儀式、主に弔いの儀式ですが、それがありました。そこでは、亡くなってしまった親しい人の姿を懸命に思い出し、その人が与えてくれた良き思い出を反芻する、誠実な人々の姿がありました。時には、心が洗われるような、他人からの思慮深く、優しい言葉や仕草がありました。反対に、単なる思いつきをそのまま口にしてしまったような、心ない発話もずいぶんありました。それから、津波が到達しなかった地域の、昔から変わらない、懐かしい風景がありました。建物すべてが消えてしまった気仙町の眺めは、嘆かわしいばかりでしたが、夏

祭りの時期には、いろんなことを忘れて思わず聞き入ってしまうような、美しい笛や太鼓の音色がありました。

あとは、至る所に花が置いてありました。市役所の玄関にも警察署にも、更地になった町のあちこちに花が途切れることなくありました。もと家のあった場所に、代わりに大きな花壇をつくり始めた人たちもいました。それから、とりあえずの材料でつくった、創意工夫に富む、掘っ立て小屋のような面白い建築もありました（たとえば、竹駒町では去年の春まで、観光バスの車体を利用したソバ屋さんが活躍していました）。気仙小学校の入り口には、いつかみんなが帰ってくるようにと、映画のワン・シーンを真似して、たくさんの黄色いハンカチがロープに吊され、風にはためいていました。

このようなもの。ほかにもいくつかあるでしょうが、ただ人の身一つから出てくるようなもの、たんなる言葉や小さな仕草、笛や太鼓の音、儀式、それから風景など……。それらは、確かに「パン」以外のもので、私が見たり聞いたり感じたりすることのできるものでした。そしてある場合には、私に励ましを与えてくれたものでした。

津波の後の陸前高田には、私がいま述べたような、わずかなものしかなかったのですが、それらを今日、私たちはどういう風に考えればいいのでしょうか？ ただ眼に映ったありさま、と言ってもいいようなそれらと、私たちが今日「なん

のためのアート」と問うときに心に浮かぶ、いわゆる「アート作品」との間には、どこかに共通点があるのでしょうか？ それとも全然ないのでしょうか？ それが解れば、今日の疑問の答えに、一歩近づけそうな気がするのですが……。

—

お腹のための「パン」ではなく、心のための「パン」。それを英語では「メンタル・フード」などという、うまい言葉で表現しているようです。「良い書物」とか「アート作品」とかが、そう呼ばれるようなのですが、いずれにしろ、陸前高田でそのようなものを見ることは、あまりありませんでした。でもよく考えれば、津波の前だって、そんなにたくさんあったわけじゃないんです。はっきり言いますが「アート」は、特に「モダン・アート」や「現代美術」は、もともと都市生活者や知識人たちが中心になって発展させてきたものですから、気仙町みたいな環境には、なかなか容易にフィットするものじゃありません。それは簡単にご想像いただけたと思います。だいいち「アート」なんて、カタカナですからね。

陸前高田のことにかかり切りになって、私がしばらく「アートを忘れていた」というのも、ご理解いただけたと思います。でも、「アート」らしきものがなくても、さっき述べたような、言葉とか仕草とか風景とか、それはただ「眼に映ったありさま」だったかもしれませんが、別の「メンタル・フード」的なもの

は確かにあった。数も少なく、加工のされていない生な、ただの素材のような「フード」ではありましたが、それでも、私には嬉しかった。私が受けとった、そのような美しいものがあることに対して、では、私自身は、何かをおこなっていたと言えるのでしょうか？ それを思い出してみます。

—

私は、写真を撮ったり見せたりすることを長く^{なりわい}生業としている者です。ですから、津波の一週間後に陸前高田に戻ってからも、出来るだけ撮影をしようと心がけていました。最初の滞在が長くなったため、フィルムがなくなっていくという心細さはありましたが、^{すりさわ}摺沢の写真屋さんから期限切れのフィルムを分けてもらったりして、なんとか撮っていました。それから月に一度、多いときは三度くらいの割合でむこうに行って、主に町の風景写真を撮っているわけです。でも、私が「なんのため」に写真を撮っているのか？ と聞かれたら、けっこう返事に困ります。今日の「なんのためのアート」ではありませんが、けっこう答えるのが難しい。

私は、津波の後の陸前高田を撮るようと、他人から頼まれていたわけではないのです。震災後に大活躍した報道写真家たちのように、メディアのために、読者のために、撮影をしなければ、という立場に置かれているわけではないのです。歩いている時に、知り合いにたまたま行き会って、その時に写し

た写真を後日、かれらに届けるということは何度かありましたが、多くの場合、私は自分の感情や記憶に促されるまま、極めて一人きりの心理状態で、津波の後の陸前高田を歩き、撮影をしていました。行き会った人に「写真、何に使うの？」と質問されても、使う予定がないんですから、うまく答えられません。「いや……」と、答えを濁すだけでした。

私が写真を撮るのは、誰のためでもなかった。しかしながら私は、この「誰のためでもなかった」という、いま自分で言った言葉を「いや、ちがう」と、急いで否定したくなります。自分に正直になって、よく考えてみれば、私はめちゃくちゃになった故郷を歩きながら、確かに「誰か」のことを思っていたような気がするからです。でも、よく考えても、その「誰か」は、はっきりしません。亡くなってしまった母なのか、同級生なのか、尊敬していた先生なのか、生きている家族や友人なのか、それとも、会ったことはないが、過去の偉大な芸術家たちなのか、あるいは、人間ではない何かなのか。

もちろんその「誰か」とは、断じて「私自身」ではありませんでした。仮に「自分のために撮っています」と口にすれば、それはたちまち嘘に感じられるどころか、論理的に不正確であるような気さえしてくるのです。「自分のために」という台詞は、たとえばアーティストの口から、よく聞かれる言葉です。「誰のためのアート」と聞かれれば、「自分がやりたいから」と答えるアーティストは多いような気がします。でも「自分のために」と表現されることの多くは、実は、心の中にいる「誰か」が誰なのか、よく考えても分からないから、そう答

えているだけなのかもしれない。

「誰か」が分からないのですから、その「誰か」が私の撮った写真を見る可能性など、ほとんどゼロに近いでしょう。でも私は、それでもかまわないような気がしました。「誰か」は私に「撮りなさい」と言っているようでした。その「誰か」がいる限り、私は動くことができると感じる。だから歩き、三脚を立て、ファインダーを覗き、シャッターを切ることができる。その「誰か」が私と共にいる限り、「私」は常に「私たち」だと感じました。

—

ちょっと突飛な意見に聞こえるかもしれませんが、いわゆる「アート」の主体とは、よく言われるような「私」などではなく、私が陸前高田でずっと感じていた、この「私たち」なのではないか、と……。津波の後、東京から陸前高田に頻繁に通う中で、私はいつからか、そう固く思うようになったのです。そういう風に思い始めたら、自分の写真が、それまでのアートっぽいルックスを持っていないことなど、あまり気にならなくなりました。誰かから「今までの作品と全然違うんですね」なんて言われても、「それがどうしたんですか?」という感じです。

強調しておきたいのは、この「私たち」とは、「私」と「あなた」が合わさっ

たような意味での、普通の「私たち」ではない、ということなのです。つまり、たとえば私が絵を描き、あなたがそれを見る、その空間に生まれるような「私とあなた＝私たち」ではない、ということなのです。あるいは、あなたが「アート作品」をつくり、被災地に届ける。送り手がいて、受け手がいる。そのような空間に生まれる「あなたとかれら＝私たち」ではないのです。もしアートにおける「私たち」をそのように理解するとしたら、それは「ふれあい」とか「コミュニケーション」とかいった、別にアートでなくとも可能な、どこにでもある挨拶のようなものになってしまうでしょう。アートをそんな「挨拶」のようなものだと思っている方がいるとしても、別に構いませんが、少なくともこの私は、「アート」からそのようなものを期待してはいません。私が今まで「見ることができて良かった」と心底思える「アート」とは、そんな挨拶のようなものではなかったのです。だいいち、私が「良かった」と思う、そのような「アート」は、私の方を見ていないことの方が多いんですから、挨拶なんてしてくれてるわけがない。どこを見てるかという、こちらではなく、もっと上の方とか下の方とかをじっと見ている。そこに、その「アート」にとっての「誰か」がいるから、そっちの方を見ているんです。

かつて、ある日本画家は、描いた絵が誰かから褒められると、地団駄を踏んで悔しがったそうです。あるピアニストは、コンサートの間中、聴衆のことなど一切頭にない、と言ったそうです。彼がピアノを弾くのは、ただ過去の偉大な作曲家たちのためなのだそうです。このような人たちを、世間的な意味では、

とても「いい人たち」とは呼べませんね。かれらの態度は反社会的で、反倫理的で、時として人からは、憤りをかうようなものかもしれません。でも、そのようなかれらのことを、なんと呼べばよかったのでしょうか。「アーティスト」とはじっさい、このような人間たちのことを指していた言葉ではなかったのでしょうか？ アーティストは、「あなた」ではなく「誰か」と、「私たち」の関係を築いているのですから、いっけん「あなた」に対しては、失礼な態度をとっているように見えるかもしれない。でも、私たちは、ほかに分類することが困難に思える、そのような精神や意思の、独特な伝達のありようを「アート」として、永く受け入れてきたのではなかったのでしょうか。今日「なんのためのアート」と問い始めたとき、私たちはそのことを完全に忘れて、話を始めようとしていたのではないか。私は、そのことを指摘しておきたかったのです。

アートにおける「私たち」とは、「私」と「あなた」ではなく、「私」と「誰か」が合わさった「私たち」である。その「誰か」が、誰なのか解らないまま、「私たち」は共に動くことができる。私は特に最近、そう思うようになりました。「あなた」と「私」は、その「誰か」を媒介にして、おのおのが、それぞれの「私たち」として、交流することができる。

いま、私の脳裏には、19世紀末、フランスのポール・ゴーギャン (Eugène Henri Paul Gauguin / 1848-1903) という画家が、タヒチで自殺を謀る前の年に、遺書代わりに描いたと言われる横長の絵画が浮かんでいます。その絵画

のタイトルは「私たちはどこから来たのか？ 私たちは何者か？ 私たちはどこへ行くのか？ (D'où venons-nous ? Que sommes-nous ? Où allons-nous ?)」というものでした。アメリカの美術館にあるという、その大きな絵画を見たことは、私にはありません。でも、そのような絵画が存在する、そのような絵画を制作した画家がいるというだけで、私は勇気づけられる思いがするのです。

—

そろそろ時間が迫って来ました。

去年の9月に、私は『気仙川』という本を出版しました。津波の前の平和な気仙町の様子と、津波の後の様子を両方、一冊の中に入れました。津波以前の数年間、何の気なしに撮っていた、スナップ写真のような、ほんとうになんでもない写真が、今では消えてしまった街の、数少ない記念写真になってしまいました。同じ町が、津波によってどのようにひどい様子になったのかが、後半のページをめくるとよく分かります。

気仙町のような運命をたどった町は、ほかに何十何百とあるでしょう。かつての建物や通りの姿も、同じ東北ですから、どこか似通ったところがあると思います。気仙町のような町を故郷に持つ「誰か」のことを想像しながら、私はこの本をまとめていたような気がします。

しかし、その作業は楽しいものではありませんでした。写真を撮ることも、本をまとめることも、いわゆる「楽しいアート」とか「ワークショップ」とか「癒される」とかの体験のような、ハッピーなものではなかった。わずかに、コンタクトプリントを見て次に伸ばしたいネガが見つかった時、それから暗室で写真を引き伸ばしながら、納得のゆく色や形が出来上がった時、そんな時には、確かにいつもの楽しさが少し甦ってきました。でもそれを壁に貼って眺めていると、たちまち気分は塞いでゆくのです。デザイナーと編集者と、みんなで頑張っつくりはしましたが、本が完成しても晴れがましさはなくて、よくある出版記念パーティーの話なんて、誰の頭の中にも浮かびませんでした。つまり、めでたくないのです。こんな本が生まれることは、めでたくないのです。こんな本が生まれないような世界が、あのまま続いていたら、私たちは今よりどんなに幸せだったか。

それ以前も、私はいくつか本とか写真集とかを出しておりました。それを読んだり見たりした人から良く聞いたのは「よかった」とか「おもしろかった」とか、あとは、あまり聞きたくはないですが「いまいち」とかいう言葉でした。しかし今回のこの『気仙川』では、新しい言葉をかけられました。本を手にとってくれた、何人かの読者、知り合いと直接会う機会があって、その時にかれらが言ってくれた、耳慣れない言葉というのは、「ありがとう」だったのです。私は、今まで20冊ほどの本や写真集をつくってきましたが、人から真剣な表情で「ありがとう」と言われたことは、なかったような気がします。

もし人から「ありがとう」といわれることが「アート」の目的であるなら、私の今までの仕事の中で、この本だけが唯一、その目的を達成したということになります。でもそれは、計画のできるようなものではありません。祝福されるものでもありません。すべては流れの中から、時には苦痛や涙と共に、生じたものです。あの「ありがとう」を、自らの喜びとすることが、「私」にはできないのです。

でも、こうも思います。あの人が「ありがとう」と言った時、たぶんあの人も、私ではない「誰か」のことを思っていた、そう考えたらどうでしょう。私自身も、あの「誰か」と共にある「私たち」としてなら、その言葉を、その「ありがとう」という言葉を、受け入れることができるような気がしてくるのです。

—

私はこれからどこへ行くのか、まるで今は迷路の中にいるような気がします。が、実際わずかですが思うところがあります。でも、それについて話すことは、別の機会に回したいと思います。時間が来しましたので、これで私の「なんのためのアート」に関する基調報告を終わります。ご静聴ありがとうございました。

『カストロフ前夜―パリで 3 .11を経験すること』は、破局的な出来事であるカストロフとの距離について書かれた著作です。離れた場所からでも出来事にかかわる態度と、当事者ではない（と思われている）からこそ見える視点をわたしたちに与えてくれました。関口さんは、いま何を考えているのでしょうか？

昨年3月、『カストロフ前夜―パリで 3 .11を経験すること』を刊行した時、わたしは、震災以前と以後では自分は全く別の作家になったと書いた。遠くからではあるがカストロフを生きたことで、はかないものや数えられないもの、記録に残されない声などを拾い、文字として残していくのが自分の使命だと、大仰な言葉を使うのを許してもらえらるならば、そう思うようになったのだ。日本から離れているからこそ、そのようなはかないものの持つかけがえのなさに気がつくことができたのかもしれない。

震災以降の10 年間

震災について書いた作家は少なくない。わたしたちは覚えている。震災直後、一部の作家たちが熱に浮かされたように震災をめぐる作品を発表し始めたこと

を。コロナの感染が世界的に広まり始めた2020年3月、フランスは厳しい外出制限（外出許可の書類を携帯した上での1時間以内、1キロメートル範囲内の外出以外は禁止、家族に会うためであっても長距離の移動は許されない）に踏み切り、今までにない事態を経験した作家たちの中には、軟禁日記や、パンデミアについて書く者が続出し、感染症関連の本が各国の書店に並んだ。その時にわたしは震災の時のことを思い出した。

自分たちの理解の範疇を超える事態が起きた時、わたしたちは理解しようとして、言葉にすがる。読むこと、書くことを考える支えにしようとする。その心の動き自体はごく自然なものだ。しかし同時にそこに書くべきテーマ、日常を超えるドラマを求める吸血鬼的な部分がないとはいえず（作家とはそういうものだ）、震災の際にそれを今書くべきか書くべきではないのかという倫理的な問題になったりもした。今回フランスでもパンデミアをいかに書くかについての議論が起きた。

わたし自身も、3.11の次の日から、起こったことをまとめるため、書き続けた。遠くにいるわたしが震災について書く意義、そして書く権利があるのか、と常に問いながら。緊急事態の思考であるそれは『これは偶然ではない』としてフランス語で2011年に出版されたわけだが、その後、世界が震災からほかの時事に目を移した後も、わたしはカタストロフについて書くことをやめなかった。

震災以降の10年間、わたしはそれまでとは別の人間になったように書き続けた。詩を創作することはその後一度もなくなったが、その代わり散文の創作に移り、休まず作品を発表し続けた。福島のアノハ柿について、もうこしらえられなく

なった料理について、録音されることのないまま消えた声について、死者を呼び戻す（または呼び戻せないを知る）方法について、ともに生きることと別れることの間、生と死の間をきっぱりと区切ることができるわけではなく、その間にはいつでも名残が存在することについて。翻訳も、ある文化を背負った者が死んだ時にその語りを残そうとする者たちの試み、折り重なったタブーを口に出す勇気、ある文明から葬り去られようとしている民族の抵抗、影の重要性、言語の忘却などの問題を扱った作品を好んで訳してきた。

わたしにとって、震災について考え続けるということは、震災がもたらしたテーマをめぐる書き続けることに他ならず、震災以降10年間に書いてきた、一見それぞれ関連のないように見える作品群は、その一つひとつが、震災により届けられた問いに対する返答であったのだと思う。ほかのイメージを借りるなら、今まで漠然とではあるが自分の関心の対象であった事柄が、急に一点に集約された、または、今まで見えなかったものが次々と目に見えるようになり、わたしに書けと要求するようになった、とでもいうべきか。

震災後、食べ物を中心テーマとして執筆を続けてきたのは、もちろんそれまでの自分の関心とも重なるからだ。具体的にも食物が震災に端を発する主題であったからだ。それは個人的記憶、はかないものを象徴するとともに、わたしたちと世界の間の関係をも本質的に表している。エマヌエーレ・コッチャが『植物の生の哲学—混合の形而上学』で記しているように、人間は呼吸によって外界と体の内部を絶えず交換することで生きているのであり、外界に起きた変化は、「健

「被害」のような限定的な用語を超え、わたしたちの体を、生を直ちに変容させる要素になるからだ。

「これは偶然ではない」

料理の持つ政治的、社会的な側面を中心に展開したのが、今年フランス語で出版される『ペイルート961時間（及びそれに伴う321皿）』だ。ペイルート国際作家協会の依頼により2018年レバノンで1ヶ月過ごし創作した作品だが、その後2年間にわたり、ペイルートという街を観察したことで、図らずもドラマに2回立ち会うことになってしまった。市民による反政府革命運動、そしてペイルートの港湾での大爆発とそれに伴っての歴史的地区大規模破壊という、3.11にも比較されるトラウマをペイルート市民に与えた悲劇だ。

この作品の中では、異なる歴史をたどってきたレバノンと日本という二つの国が、様々な歴史的要素と政治の問題により、同様にカタストロフを呼び込んでしまったことについて書いている。「これは偶然ではない（『カタストロフ前夜』所収）」の姉妹編に当たる本書は、そもそもが、ペイルート作家協会のメンバーが『これは偶然ではない』を日本とフランスの文化比較として読み、日本人作家として二つのオリエントと西欧という三つの柱を比較する本を書いて欲しいと依頼してきたことから始まった。その時には、自分たちがカタストロフ前夜にいたとは誰も思っていないのだが、その翌年革命が起き、ついで爆発事故と、二つのカタストロフをくぐり抜け、別の意味で「これは偶然ではない」ことを書き記す本となってしまった。

カタストロフが相次いで起こった時には、その偶然に呆然としたのだが、同時に、「これは偶然ではない」を読んで自分を招聘したレバノン作家たちは、そのようなカタストロフが起きるとは具体的にはわからなかったにせよ、自分たちの社会に起こりつつある危機を感じていたのかもしれないとも言える。それに今や、世界のどこに行っても、2年かけて定点観測した時に、なんらかのカタストロフが起きていない町や国の方が珍しい。もしカタストロフが書かれなかつたら、それはある街を見る時にそのような視点を持っていないというだけのことだ。

1年前からのパンデミアにより、皮肉な話ではあるが、初めて、世界中で同じカタストロフを経験しているという意識が共有されたのではないだろうか。同時に、そこで起こっている悲劇の内容は国や地域によって異なる。コロナについての各国のニュースが流れるたびに、わたしたちは、同じカタストロフがそれぞれの場所でどのようなインパクトを与えたのかを比較し、パンデミアに関する本を読むことで、偏在するカタストロフの意識を持てるようになった。

五感と言葉による抵抗運動

わたし自身この間、今回のコロナ禍について何か書かないのですかという問いを幾度も受けた。

今年フランス語で出版した作品『Sentir（〔何かを〕感じる、理解する）』は、一見最も震災とかけ離れていると思われるかもしれない。というのも、昨年引退したシャンパーニュのワインセラーの仕事を聞き書きすることから成り立っているからだ。

ワインセラーは、畑別、収穫日別に発酵させたワインを合わせて第二次発酵させ、自分たちの目指すシャンパーニュを作る。その際、テイスティングで重要となるのは味だけではなくなにより香りだ。言葉にすることの難しい香りのデータバンクを脳に所蔵し、そこから適宜自分が今まで嗅いだことのある香りと今テイスティングしているワインを頭の中で突き合わせ、さらにそれをスタッフ一同と共有するために言葉にする。そこには、ただ五感を研ぎ澄ますことにより達することのできる世界がある。

放射能が、わたしたち動物が外界に存在する化合物を認識する「化学感覚」（味覚や嗅覚）を超えたところで存在するがゆえに、わたしたちの生を亡霊的にしてしまうとするならば、コロナの症状である味覚・嗅覚障害は、外界との関係に障害をもたらし、外界との間にいわば壁を作ってしまうという意味では、わたしたちを生きながらに自らの囚人にしてしまう。いや、味や匂いがわからないという意味では、自らを自分自身からも阻害してしまうと言えるのかもしれない。

そんな中で、わたしたちはどうやって、世界からわたしたちを遠ざけようとするそういういったことがらに抗し、世界を感じることができるのだろうか。匂いを嗅ぐ、物を食べ、味を舌に感じることは、わたしたちの生の質がかかった抵抗運動だ。そして、五感を通じて外界を感じる、極めて主観的な行為と思われるそのような行為を複数の人間の間で共有可能にするのは、ただ言葉だけなのだ。

そういった意味では、この本はシャンパーニュや美食という比較的とっつきやすいテーマの裏に、五感を通じて人間性を獲得するための方法を考えようとしたのだと思う。

遠くにあるカタストロフについて書くということ

震災がなくても、いずれわたしははかないもの、歴史の記憶、人が人生の後に残すものについて書き始めていたかもしれない。生きていれば、個人的にか、集団的にかにかかわらず、何らかの形でカタストロフに出会うことがあるからだ。でも、東日本大震災がわたしたちに手渡したものはあまりにも大きく、考えるべきテーマはあまりにも多い。その一つについて書くとそこから新たな問いが生まれ、それについて考えていくとまた次が現れ……というように、途切れることのない問いの小道を辿り続け今に至っているのだと思う。

震災が今のわたしという作家を作った、と、わたしはいたるところで言い続けてきた。作家の中には、東日本大震災というテーマをずっと追いつける人もいるだろう。わたし自身は、『これは偶然ではない』以外はそれとわかる形では被災地を作品の舞台として扱ってはいない。もちろんそれは一部偶然の結果ではあるのだが、同時に、あえてそうすることにより、フランスの読者に対しては、わたしたちが3.11で背負った問題の数々が、単に日本、そして東北に特有のものではなく、いたる場所、あらゆる時代に偏在する問題ということを示したかった。また、日本人に対しては、たとえばベイルート港爆破事故が、カルロス・ゴーンと日本赤軍くらいにしか結びつけられていない遠くの国レバノンで起きた、自分たちに関係ない事柄ではなく、わたしたち日本人が生きた「カタストロフ前夜」と通じる部分があるということを語りたかった。

そこには当然リスクが含まれている。ペイルートの話を書く自分は当然レバノンの専門家ではなく、素手で未知の素材を掴みに行くようなところがある。間違いや思い違いもあるだろう。日本人の自分がフランス語で日本のことを書くときにも、わたしが書くことがすべて正しいとは限らないのに、フランス人には日本人が書いたことだからと鵜呑みにされる危険があるといつも感じてきた。遍在するカストロフやカストロフ前夜を指摘しようとすると、当事者でない問題についても書かざるをえない。

わたしは、唯一自分自身が経験した問題を扱った「声は現れる」を除けば、常に遠くにあるカストロフについて書いてきた。それが含むリスクを考慮した上で、なお、各地に存在するカストロフに共通する問題を共有する意義が勝ると感じたからこそ、あえて続けてきたのだと言えるだろう。最初に日本人として否応なしに巻き込まれてしまった東日本大震災が出発点になっていなければ、そのような認識には至らなかったかもしれない。

日本で震災を考えると、多くは東日本大震災自体の問題だけに終始してしまう。もちろん、そこに固有の問題を決して忘れてはいけませんが、そこに含まれた、多くのカストロフに共通する問題を拾い上げていかないと、どのカストロフも局地的な問題として忘れ去られてしまい、ともに声を上げることができなくなってしまう。

わたしたちはいつでも多くのことを忘れてしまう。書きつけていないと忘れてしまい、そして、考えるためには常に思い出し、あらゆるカストロフを喚起し、比較し、思考し、ともにたたかう必要があるのだ。同じ過ちを繰り返さないためには。

関口涼子〔著述家／翻訳家〕
パリ在住。詩の創作の後、東日本大震災以降散文創作に移行、フランス語で20数冊の著作。また日本文学や漫画の仏訳等を刊行。日本語での著作に『注解するもの、翻訳するもの』（岡井隆との共著）、『カストロフ前夜ーパリで3.11を経験すること』、訳書にダニエル・ヘラー＝ローゼン『エコリアス』、P・シャモワゾー『素晴らしきソリゴ』（日本翻訳大賞受賞）など。フランス語著作に『Nagori』、『Diner fantasma（亡霊ディナー）』など。文学と食、五感を結びつけるイベントの企画も行う。料理をテーマとした日本文学の叢書『Le Banquet 饗宴』の編集主幹。

2020年リレー日記

これまで東北にこころを寄せてきた41名が1週間ずつ綴る、2020年の日記。
 コロナ禍で迎えた東日本大震災から10年目。日常の断片を「日記」というかたちを通して
 記録します。いまどこにいて、今日はどんな1日でしたか？

是恒さくら

美術家

萩原雄太

演出家

岩根 愛

写真家

中崎 透

美術家

高橋瑞木

キュレーター

大吹哲也

NPO 法人
 いわて連携復興センター
 常務理事／事務局長

村上 慧

アーティスト

村上しほり

都市史・建築史研究者

遠藤一郎

カップ師匠

西村佳哲

リビングワールド 代表

清水裕貴

写真家／小説家

鈴木 拓

boxes Inc. 代表

谷山恭子

アーティスト

山本唯人

社会学者／キュレーター

岡村幸宣

原爆の図丸木美術館
 学芸員

きむらとしろう
 じんじん

美術家

榎本千賀子

写真家／フォトアーティスト

山内宏泰

リアス・アーク美術館
 副館長／学芸員

木村敦子

クリエイティブディレクター
 アートディレクター／編集者

矢部佳宏

西会津国際芸術村
 ディレクター

木田修作

テレビユー福島
 報道部 記者

北澤 潤

美術家

清水チナツ

インディペンデント・キュレーター
 PUMPQUAKES

三澤真也

ソコシコ 店主

モリテツヤ

汽水空港 店主

森 司

アーツカウンシル東京
 事業推進室
 事業調整課長

手塚夏子

ダンサー／振付家

西大立目祥子

ライター

安川雄基

合同会社アトリエカフェ
 代表社員

中村 茜

precog 代表取締役

竹久 侑

水戸芸術館 現代美術センター
 主任学芸員

相澤久美

建築家／編集者
 プロデューサー

本誌に掲載できなかった右記の8名の方の日記は
 『Art Support Tohoku-Tokyo 2011→2021』の
 ウェブサイトにご覧ください。

柳谷理紗

仙台市役所
 防災環境都市・震災復興室

岩名泰岳

画家／〈蜜ノ木〉

谷津智里

編集者／ライター

大小島真木

画家／アーティスト

田代光恵

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
 プログラムマネージャー

宮前良平

災害心理学者

坂本顕子

熊本市現代美術館
 学芸員

佐藤李青

アーツカウンシル東京
 プログラムオフィサー

新型コロナウイルス
新規感染者数
(2020年6月1日現在)

国内: 36人
東京都: 13人

- 1日 - 東京都、新型コロナウイルス対応における休業要請の解除行程を3段階で示したロードマップを「ステップ2」に移行
- 2日 - アメリカでジョージ・フロイド氏が白人警官によって命を奪われた事件を受けて、SNSで#BlackoutTuesdayという人種差別抗議運動が起こる
- 東京都、新型コロナウイルスの感染再拡大の兆候に対して、警戒情報「東京アラート」を初めて発動
- 12日 - 東京都、ロードマップを「ステップ3」に移行
- 宮城県沖地震（震度5強、M7.4）から42年
- 19日 - 政府は都道府県をまたぐ移動自粛を全面解除
- 23日 - 沖縄戦などの戦没者を追悼する「慰霊の日」
- 24日 - メキシコ・オアハカ州沿岸で M7.4 の地震が発生
- 30日 - 中国「香港国家安全維持法」可決、香港民主派団体の解散が相次ぐ

*厚生労働省「陽性者数」、
東京都「新型コロナウイルス感染症対策サイト 新規陽性者数」参照
(2021年2月25日閲覧)
<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/open-data.html>
<https://stopcovid19.metro.tokyo.lg.jp>

是恒さくら

美術家



6月1日[月]

天気 | 曇り

場所 | 自宅(宮城県仙台市)

今日から仙台市立の学校は再開したそう。私の勤務先の大学はオンライン授業継続中で、教職員の多くが在宅勤務を続ける。私もいつものように、朝起きてコーヒーを入れたらノートパソコンを開く。こうした生活が約2ヶ月続いていて、すっかり〈いつものように〉と繰り返している。今日は曇りでほんの少し気温が低いけれど窓を開け、体半分ベランダにはみ出すように窓際に腰掛けてキーボードを叩く。

お昼過ぎ、近くの公園で子どもたちの遊ぶ声が聞こえてきた。今日から始まった学校はもう終わったのかな？ とベランダから眺める。生活の細かな作法に気を使わなければならなくなって、行動範囲も狭くなると、身近なものの変化が目に残まるようになった。2週間と少し前に宮城県の緊急事態宣言が解除されてから、出歩く人も増えたとし近隣の駐車場の車も増えた。公園では小学生らしき男の子たちが団子のような塊になってはしゃいでいる。それを微笑ましく思うとともに、見

えないウイルスの存在を考えて心配にもなる。街や人の動きが一見元どおりになりつつあっても、失われたものは静かに消えて、その隙間にこれまで知らなかった感覚が入り込んでいく気がする。

一日仕事でパソコンを見つめていると疲れてしまうので、ここのところの楽しみはラジオや音楽。あるラジオ番組であるミュージシャンが、音楽業界の苦境について話していた。音楽フェスやライブができなくなって、ミュージシャンだけではなく、そうしたイベントに関わっていたさまざまな職種の人たちが苦しい状況にある。ライブにあった沸き立つ気持ちは、これから違う形で感じられるのだろうか。

音楽も、芸術も、作品と人が出会う方法は、しばらく試行錯誤が続くだろう。すべてのことにびったりはまる代替があるわけではないから、埋めるものがない空白は空白のまま、残しておきたいような気もする。喪失があったことを、忘れないように。

6月2日 [火]

天気 | 晴れのち雨

場所 | 自宅と国分町（宮城県仙台市）

よく晴れた空に浮かんでいた綿雲が、日暮れ前には水彩画のような巻雲に変わった。昨日までと同じようにデスクワークを続ける。午後は1コマ、Zoomで大学のゼミに参加した。オンライン授業もすっかり日常になった。

自粛生活が始まってすぐの頃、100円ショップでヒマワリ・バジル・ネギ・パクチーの種を買ってきて、ベランダに植木鉢でささやかな畑を作った。双葉から本葉に成長したバジルとパクチーはそれらしい姿になり、日々香りが強くなっている。先週あたりからバジルに小さな虫がつき始めたので防虫を考えなければ。これまで虫がほとんど来なかったマンション6階のベランダなのに、植物があれば虫が

是恒ちくら [美術家]

2020/6/1——6/7

集まってくることは小さな驚きだ。

19時を過ぎて空が暗くなる頃、仕事を終えて街を歩いてみる。仕事帰りらしい人通りは、よく知る仙台の風景。国分町の繁華街まで歩き、見知った居酒屋の様子を見てまわる。このところ東北各地で、よく知られた店や映画館の閉店・閉館がニュースになっていた。一見元どおりに再開している店は少しずつ賑わっている。今日は昼間、知人からブラジル製のホーローのミルクパン（やさしいソラマメ色）と、ミズクラゲのような青色のグラスボウルが届いた。蚤の市で売るはずだった品々がイベントの中止で在庫になってしまっているようだ。遠く旅をしてきた道具を使って、何を作ろうかと考えるのは楽しい。

遠くの街で誰かの命が一方的な暴力により奪われて、そのことへの抗議運動が起きて、いろんな感情が渦巻いている。知り合いのご夫妻に新しい家族が増えたと知って、おめでとうと心からのメッセージを送る。どちらも今は、画面越しのできごと。

6月3日 [水]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅（宮城県仙台市）

毎晩、寝る前に日記を書いている。今日も在宅勤務。用事が無くても一日一度は散歩だったりジョギングだったり、外に出るようにしているけど、今日はまったく外出しなかった。こんな日もたまにある。

ベランダ脇で仕事をしているので、近隣の建物の窓がたまに気になる。うちの周りは他のマンションやオフィスビル、ホテルが多い。いま誰か窓を開けたな、とか、今日あの部屋の人には布団を干してるな、とか、あのビルの人たちは仕事が終わって帰ったんだろうな、とか。四角い枠の向こうで過ぎていく誰かの時間。私

の部屋はどう見えているだろう？

一人暮らしなのでここ2ヶ月、人と話す時間がほんとうに少なくなって、たまに広島
島の両親と東京の兄のことを考える。先日は兄の誕生日だった。東京で「お父さん、
お誕生日おめでとう」とお祝いされただろう。私が15歳の頃まで一緒に生活していた「兄ちゃん」は「お父さん」になっていて、一緒に育った時間よりお互いを知らない時間の方が年々増していく。

最近、思っていることがある。家族の間でしか話さないことや、家族で示し合わせたように周囲に明かさないことって、多かれ少なかれこのうちにもあるものだろう。そういう感情は、最初の家族を巣立って新しい家族を持つと、どうなっていくんだろう。重かった秘密がどうしてもよくなったり、長年真剣に悩んでいたことがありふれたことだったと考え直したりできるのだろうか。

遠くから眺める窓からは、その部屋の内部を知ることではできなくて、漏れ出す明るさと暗さとカーテンの色なんかで、そこにあるかもしれない家庭や暮らしを想像する。今日は夕方、どこかから魚の焼けるいい匂いがした。

6月4日[木]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅(宮城県仙台市)

夜。この春、仙台から京都へ移った元同僚たちとのZoom飲み会に参加する。近況報告など。気にかけていた仙台の居酒屋が営業再開していた報告とか、石巻のおすすめ店の情報交換も。会話の中に共通の場所があるのは楽しい。今日は晴れてはいたけど、洗濯物が夜になっても乾かなかった。仙台は、湿度の高い時季になってきたのかもしれない。

6月5日[金]

天気 | 晴れ時々雨

場所 | 自宅・仙台駅周辺(宮城県仙台市)

山形から友人たちが訪ねてきてくれて、仙台駅で落ち合う。駅周辺は人通りも多く、飲食店も満席のところもあり、賑やかな金曜の夜の仙台が戻ってきたようだ。

なるべく空いているお店を探して入ると、開店祝いの花がいくつも飾られていた。4月中旬に開店したそうだけど「やっと営業を始められました」とお店の人が話していた。テーブルや壁の塗装も真新しい。ひと半月遅れて、今がやっと本当の開店なのだろう。

食事をした後、アーケード商店街を歩く。23時を過ぎるとほとんどのお店が閉まっている。商店街の一角で、不思議な楽器を演奏している人がいた。大きな中華鍋を逆さにしたようなドーム型の金属製で、いくつも凹みが並んでいる。「ハンドパン」というそう。投げ銭を入れて、楽器を奏でてもらう。鐘の音のようだけど瑞々しく、やわらかく響く音がした。少し触らせてもらった。指で弾くように触れると、小さな音が出た。聴いているといつの間にか周りに人が集まっていた。ハンドパン奏者は、最近予定されていたライブやイベントがすべて中止になってしまったと話した。曲が終わり、私たちがお礼を伝えて歩きはじめた後も、背後からハンドパンの音が響いていた。目の前で楽器の演奏を聴くのは久しぶり。深夜になっても街中ではたくさんの人が歩いていた。ひと月前は不気味なほど静かだったのに。

誰かと食事に出かけることも路上で楽器に触れることも、まだ避ける時期なのだろう。でも、開店したばかりのお店の店員さんたちの顔は生き生きとしていて、演奏に足を止める人たちは嬉しそうで、ずっと閉じこもっている間に失っていた何か、ふつふつと心を満たしていく。

是恒ちくら [美術家]

2020/6/1——6/7

深夜、自分の今日の行動はやはり間違っていたらどうかと考える。でも、あのお店にこれからも続いてほしいし、「東北にハンドパンを広めたい」と話した奏者の思いを応援したいと思った。

6月6日〔土〕

天気 | 晴れ

場所 | 自宅、東照宮（宮城県仙台市）

午後まで、いま書き進めているニューヨーク州ロングアイランドの先住民と鯨についての文章に集中した。昨年現地で取材した時の録音を書き起こして、旅の間つけていた日記を読み返すと、一日ごとに考えていたことや感じていたことが少しずつよみがえってくる。言葉にしておかないとたくさんのことを忘れてしまうし、うまくよみがえってくる言葉も、いまと「あの時」では違うものだ。書きためた言葉や物語を一冊の本に編集していくことは、ひとつの世界をつくるようだと思う。書きすすめる方向とこれから作りたい本のイメージがだんだん固まってきた。

ニューヨーク市は新型コロナウイルスの感染拡大が深刻だったけれど、郊外のロングアイランドの知人たちの生活はそこまで大きく影響されていないようだ。最近始めたという養蜂のミツバチや、浜辺から見えるイルカやクジラ、野生のワシやカメの様子を日々、SNSに投稿している。あいかわらずで良かった、と安心する。午後から仙台市青葉区の神社「東照宮」に出かけた。JR仙山線の列車に乗ると、二人がけの座席に乘客みんな一人だけで座っている。誰かの隣に座ることが憚られる。東照宮駅で降りて東照宮まで歩く。参道には大きな木々が立ち並び、見上げる高さまで深い緑に包まれている。

さまざまな場所で感染防止の対策が取られ始めてから、時間がある時に神社巡りをしている。大きな神社ほど手水や鈴の緒を使用禁止にしていることが多い。

是恒ちくら〔美術家〕

2020/6/1——6/7

参拝時に鳴らす鈴の緒を、神社によっては不思議な形に結わえていたり、単純に両脇の柱に縛っていたり、あるいは鈴ごと外して、触れられないようにしている。東照宮では五色ある5本の鈴の緒が左右にそれぞれ、2本と3本に分けられ柱に縛られていた。

帰りは歩いて帰宅した。途中、八百屋でナスと巨大なトマトを買って、スーパーでエビとイカを買って、家に帰ってカレーを作った。

6月7日〔日〕

天気 | 晴れ

場所 | 山形県鶴岡市

朝からレンタカーを借りて山形県に向かう。鶴岡市の致道博物館で、文化人類学研究者の山口吉彦さんが南米アマゾンで収集した先住民の道具や装飾品、野生生物の剥製や標本の展示が行われている。展覧会に関連して、先住民の楽器を奏でるワークショップの講師を私がつとめる予定だったのだけれど、感染拡大防止のため博物館はしばらく休館、ワークショップも中止となった。今日は山口さんのギャラリートークだった。山口さんは「マスクをしたままでは話づらいから」と、プラスチックのフェイスシールドを着けていた。

鶴岡郊外では、田植えをしたばかりの水田がきらきらと光る。車の窓を開けてマスクを外すと爽やかな風が車内を抜けていく。山々には緑の木々が茂り、川を流れる水も澄み、人のいない風景が続くと「コロナ禍」がとても遠い出来事のように思えてくる。宮城県外に出かけるのは2ヶ月ぶりだ。山形・宮城両県では感染拡大がおさまり、県境を越える行き来もしやすくなった。見えない不安は残っているし、生活や仕事を以前と同じようにはできない事情もひとりひとり違うから、自分の行動が間違っていないかと、日々考える。けれど、今日は出かけて良かった。

たと思う。

帰路、久しぶりに温泉に寄る。受付で検温を求められた。洗い場は隣同士にならないよう、一つ置きに使用禁止になっていた。夜、帰り着いた仙台中心部は建物とアスファルトばかりの無機質な街に見える。そういえば山形—仙台間を移動するたび、同じことを感じている。私の生活圏は居住地の仙台だけでなく、宮城県のあちこちと、山形県にも岩手県にも、たまに北海道や東京にも広がっていた。移動が制限されるとすぐ不自由で、自分らしい生活からいろんなものが抜け落ちていく気がする。久々に吸った山形の山の風で、そのことを思い出す。

是恒さくら [美術家]

1986年広島県生まれ、宮城県仙台市在住。高校卒業後、アラスカ先住民の狩猟生活やものづくりへの関心からアラスカに渡る。2010年、アラスカ大学フェアバンクス校卒業。2015年に山形県に移住。2017年、東北芸術工科大学大学院修士課程地域デザイン研究領域修了。2018年より東北大学東北アジア研究センター学術研究員。リトルプレス『ありふれたくじら』主宰 (Vol.1~6)。東北各地や北米の捕鯨、漁労、海の民俗文化についてフィールドワークと採話をし、リトルプレスや刺繍、造形作品として発表している。

是恒さくら [美術家]

2020 / 6 / 8 ————— 6 / 14

萩原雄太

演出家



6月8日 [月]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅 (東京都北区滝野川)

■『俺が代』という、日本国憲法をテキストとして使用したレパートリー作品を16日に下北沢の本多劇場で無観客公演として実施することが決まっていて、先週からその稽古を行っている。しかし今日は休み。無観客公演なのだけれども、ゲネプロ (本番と同様の最終リハーサル) についてはごく一部の関係者は見れるようにするので、そのお知らせを10人くらいに送る。

■先週から始めた稽古は、いくつかの変更点を加えて順調に進行している。けれども、根本的に「無観客」であることと「劇場」を使って行われることがまだ腑に落ちてない。今回、この公演は生配信こそしないものの、ビデオ収録はするので、例えば「収録」と言ってもいい。けれども、そうしなかったのはなぜだろう？ まだ自分でもよくわかっていない。

■「集まる」ということについて考えるようになったのは、確か5月に入ってから。なぜ「劇場を使うのか？」あるいは「劇場とは何か？」という問いは、「なぜ、観

2020/6/8 ————— 6/14

客は劇場に集まるのか？」という問いと切り離せない。集まらないことが前提となった中で、改めて「劇場の価値とは何か？」を考えたい。

■コロナ前は劇場に「集まっていた」のかと言えば、そうではなかったのかもしれない。「劇場の社会的役割」といったテーマで議論が行われることもしばしばだが、多くの人々にとって、劇場とは「ただのコンテンツの消費の場」であった側面のほうがはるかに大きいだろう。

■2〜3ヶ月ほど、ほとんど全世界で劇場が閉鎖された後、僕は、演劇を上演するというリアリティが全く感じられないでいる。コロナ禍を経て、例えば『ゴドーを待ちながら』を上演したら平時とは別の切実な意味を持つだろうし、今公演を計画しているチェーホフの『かもめ』だって、確かな強度を持っていることが実感できる。でも、それを劇場のような閉ざされた空間の客席に縛り付けられて見たいとは思わない。外部に広がっているコロナ禍という状況に対して、観客席と舞台とで分け隔たれた芸術の形式がうまく拮抗できるとは思えない。

6月9日 [火]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅 (東京都北区滝野川)

■今日も稽古は休み。公演についていろいろと考え事をしながら最近読んでいるジュディス・バトラーの『アセンブリー行為遂行性・複数性・政治ー』を読んでいたら昼寝をしていた。

■家にいると気分が鬱屈としてくるので、ノートと水筒を持って飛鳥山公園に行く。まだ腰が定まっていない『俺が代』無観客公演について考える。緊急事態宣言中よりも人が減っている。

■そもそも、公演をするにあたっては「対象」が必要になる。でも、それは、

萩原雄太 [演出家]

2020/6/8 — 6/14

マーケティングにおける「ターゲット」みたいなものとはちょっと違う。祭りが「神」に向かうように、あるいは、以前上演した『福島でゴドーを待ちながら』という公演が「10年後の人、あるいは外国人 (つまり距離が遠い人)」へ向けられたような意味で、今回の公演における「対象」とは何か？ 「態度」が向かう矛先とでも言い換えられるだろうか。「神」でもないし、「未来」でもない、「演劇史」でもないような気がする。「対象」は、抽象的なものではなく、打てば響くような手応えのあるものでなければならない。

■今回、「無観客公演」と言うからには、この公演形態でなければならない必然がほしい。それが、たまたま映像に収められている。

■もうひとつ、9月に上演予定のチェーホフの作品『かもめ』についても考える。

■コロナ禍を経て、「ソーシャルディスタンスを守って集客し、公演を行いました」では何もおもしろくないし、「コロナなんか関係ない！ 演劇をやるぞ」という蛮勇もない。今の状況だと9月には平穏になっているということも予想されるから「ああ、演劇をまた見れるようになってよかったね」ということになるかもしれないが、それならば、むしろ積極的に中止にしたい。今回の公演は、コロナ禍に対する応答であってほしいと思うし、だからこそ、9月にやる必然性があるものにしたい。

■つまりそれは、コロナ禍を受けた意味での「演劇とは何か？」とならなければならない。その中でも、「集まる」という要素をどのように解釈するかはとても重要となるだろう。例えば、『アセンブリ』に書かれてる「私たちがともに暮らすのは選択の余地がないから」という言葉は何かのヒントとなり得るのでは？ あるいは、チェーホフが書いているのは対話劇を装ったモノローグである。それをあえて複数人の登場人物が「集まって」対話を展開している。これもヒントになるかもしれない。

■『俺が代』の美術を担当する横さんと電話。この作品は舞台美術として鉄の木

を使って、今回はそれを新調する。別にエレベーション（立面図）があるわけでもなく、どのようになるのか持ってくるまでわからない。多分、本人もわからない。

6月10日 [水]

天気 | 晴れ・強風

場所 | 自宅（東京都北区滝野川）

■秋葉原に行って買い出し、後、稽古。

■出演者の清水から連絡が入る。劇場で使用する体温計が使えるかどうか確認するために計測したところ、37.2℃だったという。体温の他は普通。少し悩んだ末、今日は稽古を中止にしようということにする。

■本多劇場も加わっている小劇場協議会という団体の指針では、誰であっても「37.5以上の発熱が見られる方につきましては劇場内へのご入場をお断り致します」という文言がある。誰かが37.5℃以上の発熱となったら、きっと取りやめという判断を下さなきゃならない。演劇なんて、そもそもが本番当日にひとつの空間にいななければならないという脆弱な前提の上に成り立っているのに、その足場はさらに脆弱になっている。

■調べる。37.5℃はひとつの目安に過ぎない。37.2℃は平熱の範囲であるとも言えるようだ。そもそも、平熱が何度かなんて気にしたこともなかった。

■新型コロナウイルスに感染しているのでは？ という心配はあまりしなかったけれども、今後、どのようにすればいいのか、どのように考えればいいのか……と考えると、パニックのように取り乱すわけではないが、ただただ途方に暮れる。

■新宿まで出てきてしまったので紀伊國屋書店で本を買って帰る。時間が生まれ

たのに、何もする気になれない。気づいたら寝ていた。

6月11日 [木]

天気 | 雨

場所 | 自宅（東京都北区滝野川）～稽古場（西東京市）

■朝、清水の熱は下がっているという。人間は、夕方くらいに熱が上がるものらしい。

■今後、演劇をやる上で、しばらく自分の体温を把握するというのは前提条件となるかもしれない。僕が夕方の稽古前に体温を測ったら36.8℃。

■今日の稽古は、大事をとって僕と俳優、舞台監督という最低限のメンバーだけで実施。通し稽古（芝居を始めから終わりまで通して稽古をすること）1回目。なかなか悪くはないと思う。見ながら、それまで、あまり見えてこなかったこの公演の「対象」に、もしかしたら「憲法」を代入できるのではないかと思った。

■憲法を使った作品を、憲法を対象とするというのも変な話だけれども、憲法は、実に広い範囲の射程を含んでいると思っている。「人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果」であるのだ。その歴史の積み上がってきたものの先端・末端に、ここはある。その射程は、「対象」足り得るのではないか？ ……まだ、この理屈では自分自身が説得されきらない。もう一声ほしいところ。

■稽古が終わってから改めて話をする。どのようになったら稽古を中止するのか、あるいはどのようになったらこの公演を中止するのかの確認。

■当たり前のことだけど、演劇は、公演当日に出演者とスタッフがその場にいろことを基本とする。これまでなら、ちょっと重い風邪を引いても、動いて劇場に来ることができるならなんとか乗り切れていた（人間の集中力って本当にすごい）。でも、今は些細な体温の変化で、それが感染症でなくても公演はあっけなく取り

やめなければならない。本番という未来を見られない中で演劇を行うことは、とても難しい。

■では、スーザン・ソントグは、どのようにして戦争下のサラエボで『ゴドーを待ちながら』を上演できたのだろうか？

6月12日 [金]

天気 | 曇りのち雨

場所 | 自宅(東京都北区滝野川) ~ 稽古場(西東京市)

■今回、本番は無観客だけど、ゲネプロ(本番同様のリハーサル)には、ごく親しい関係者が見に来るといふ普通とは逆の形。送ったメールへの返信からは、「劇場に足を運べる時」を待っていたことも読み取れた。今ならば、きっと劇場で演劇を見る特別さに浸ることができるだろうし、「やっぱり人が集って演劇を見るのはいいな」と思うってしまうかもしれない。その素朴さは素晴らしいものである一方、そこに流されてもしょうがないとも思う。「前との接続」ではなく「前からの切断」を意図している。

■この無観客公演はビデオに収録されて、東京都がやっている「アートにエールを!」というアーティスト支援プログラムに提出することを前提としている。その採択通知の連絡が来た。とりあえずほっとする。

■このプログラムに対して、僕自身はかなり批判的な意見を持っている。『俺が代』という作品において、尾崎行雄の演説をテキストとして使用しているのだけれども、その中で、当時の国会議員たちに対して「抱負がない」と熱弁する。それを援用するならば、このプログラムに、あるいはこのプログラムに採択された個々のクリエイションに「抱負」はあるのだろうか？

■通し稽古2回目。昨日のバランスのほうがよかったけれども、まあ塩梅の範囲。

■今回のバージョンでは、主に3つの大きな変更を加えている。これまで、徹底的に抑制することを念頭においていた憲法の条文を読むシーンは、もっと憲法の条文にワクワクしたり、喜びを感じていいのではないかと思っている。玉音放送を使ったり、SEを追加したりしているのは、もっと外部からのいわゆる「演出」を追加していいのではないかと思ったから。これは、コロナ禍で、海外の公共劇場がつくったレパートリー作品を見まくった影響かもしれない。つまり、繊細な味付けみたいなものよりも、はっきりとした味付け(当社比)にしている。それと、クライマックスとなる部分において肝となるセリフを削除した。それがなくても大丈夫な作品に成長させたい。

■木が完成したと美術の横さんから連絡、写真を送ってもらう。これまでと全然印象が違う。さて、こいつをどう使ったらいいものかとは思いますが、実際に見ないとどういふものかわからない。明日明後日の稽古で、幾つかの選択肢を用意しておかなきゃいけない。

6月13日 [土]

天気 | 雨

場所 | 自宅(東京都北区滝野川) ~ 稽古場(西東京市)

■稽古場に行く中央線の中で、ふと、オンライン演劇という形式の問題(あるいは可能性)は演技者が「いない」 ことではなく、観客が「行かない」 ことなのではないかと思った。それに付随して『かもめ』の公演においてあるひとつの方法を思いつく。

■通し稽古3回目。なかなかいいと思う。どうしても、数回通して作品を見るまでは、ある部分が「できているかいなか」といった頭の中のチェックリストが抜けないのだけれども、だんだんとそれを外して全体を見れるようになってくる。

■帰路、24時台の山手線。もうすでに、電車で席を一つ空けて座る風習はなくなっている。あと、座席に突っ伏したり、ベッドみたいにして寝ている人が多くなった。人が増えてきたといってもまだ空いているからだろう。高校生の頃に、音楽のライブを見るために東京に行った帰りに幾度となく乗っていた深夜の常磐線でもよくそういう人がいた。山手線の常磐線化。

■まだ本番をやっていないから暫定的なことではあるが、『俺が代』という作品は2019年に東京、名古屋、沖縄のツアーをして、それでもう打ち止めかなあとなんとなく考えていたのだけれども、この先もできるのかもしれない。そう思った根拠は、この作品で使っている憲法の言葉や政治家の言葉がやっぱり魅力的であること、座組みの人々が、この作品を現在形で魅力に感じられていること、あとは勘。

6月14日〔日〕

天気 | 雨

場所 | 自宅（東京都北区滝野川）～稽古場（西東京市）

■外に出たけれども、マスクを忘れて家に戻る。実は昨日も忘れていたので2日連続。危機感が足りないのか？

■西ヶ原駅前のハンバーグ屋の行列が復活していた。

■稽古最終日。稽古は1日4時間×2週間しかしていない。この作品は何回も再演しているのだから、普段、非効率の極みのような我々といえども少ない稽古時間で済む。ただ、やっぱりもうちょっと時間がほしい。公演としての形はすぐに作れるけど、現在の問題意識などを丁寧に共有したいと思ったら再演作でも相応の時間がかかる。

■でも、通常の公演時のように、1日7～8時間の稽古を行うことはちょっと難

しい。ただでさえ演劇の現場は精神的に疲れるのに、その上肉体的にこれ以上疲れてしまったら、免疫力が低下して、感染のリスクも上がる。今は、例えば、空腹時にコーヒを飲んだ後に生まれる胃のささやかな不快感のような、極めて小さな体調の変化にも恐怖を感じる。コロナ後の演劇というと、集客の問題にフォーカスが当たりやすいが、クリエイションの現場における不安のマネジメントも考えなければ、まともに作品をつくることができない。

■劇場に持っていく荷物を積み込んだあと、俳優、舞台監督、制作の聡美さん、美術の横さん、そして横さんが召喚したカズオくと話、夜中まで。80%くらいバカみたいな他愛もない話。20%くらい真面目な話。「日常」だなあと感じる。それは、素朴に嬉しい。

■まだ、無観客であることについて、劇場で行うことについては、完全な決着がついていない。

■明日から小屋入り（劇場に入っの設営）。ゲネプロをして、明後日から無観客本番。

後日談：

『俺が代』無観客公演は無事上演された。この様子の一部は「かもめマシーン／尾崎行雄演説——『俺が代 無観客公演』より抜粋」としてYouTube (<https://www.youtube.com/watch?v=12qVQvw1vVA>) で公開。近日、全編も公開予定。また、『かもめ』は公演中止となった。

萩原雄太〔演出家〕

1983年生まれ。2007年よりかもめマシーンを設立し、東京都を中心に活動。個人の身体と社会との関わりに焦点を当て、2011年には、東京電力福島第一原子力発電所事故の避難区域から数百メートルの場所で『福島でゴドーを待ちながら』を上演。日本国憲法を扱った『俺が代』は、2017年ルーマニア国際演劇祭 Temps d'Images Festivalに日本の劇団として初めて招聘される。第13回 AAF 戯曲賞、利賀演劇人コンクール2016優秀賞受賞。2018年、シアター・コモンズ '18、TheatreTreffen International Forum（ベルリン）参加。

2020 / 6 / 15 ——— 6 / 21

岩根 愛

写真家



6月15日 [月]

天気 | 曇りのち雨

場所 | 自宅(東京都渋谷区)

朝からプリントし続けて、展示作品をどれにするか考える。このところずっと、7月28日から東京都写真美術館で始まるグループ展『あしたのひかり 日本の新進作家 vol.17』の準備をしている。2018年に発表した「KIPUKA」の展示を、という依頼だったのだけれど、この3ヶ月が1年以上の長さを感じる今、今さらKIPUKAを展示している場合じゃないと、今春に撮った新作を展示させてもらうことになった。

全体の構成は決まったのだけど、会期1ヶ月半前を切った今もどのカットにするのかまだ決めきれていない。

雨が降ってきて、網戸に空いていた穴から入ってきた蚊に全身食われた。雨が上がった深夜、蚊取り線香を買いに行く。

岩根 愛 [写真家]

6月16日 [火]

天気 | 曇り

場所 | 自宅(東京都渋谷区)

昨夜のコンビニでは売ってなかったキンカンを買いに薬局へ。マウイ島ラハイナのお寺で寝ていた夜を思い出す。ハワイでもキンカンをよく使っていた。

ラハイナ浄土院でお世話になる時は、衝立で仕切ったホールの奥がベッドルームになる。ラハイナにはそんなに蚊はいないけど、昨日みたいに、夜、急に雨が降って来ると、湿って重くなった空気に押し込まれるように、あちこちの隙間から蚊が入ってきて、一気に刺されて起こされる。

いつもならボンダンス(盆踊り)を控えた今頃のお寺には毎日、準備の物資が届いたり、屋根や水回りを直したり、忙しいはずだった。そんなことを思い出して、ラハイナの原住職夫妻に電話する。オフィスの電話に原先生が、キッチンの電話に節子さんが同時に出て、3人でお話する。

東京都写真美術館の展示のこと、映像作品に原先生の映像を使用する旨ご報告する。「おかげさまでコロナにもならず元気しております」と、お元気そうでよかった。ハワイ在住50年強、80代のご夫婦のボンダンスのない初めての夏、いつも忙しい夏に、少しゆっくりしていただけたら良いと思う。

電話を切ったら原先生からラハイナのビーチの写真が届く。モロカイとラナイ島の間に太陽が沈む。iPadでサンセットの写真を撮るのが原先生の日課で、たまに気まぐれにメールで送ってくださる。まさしく西方浄土というラハイナの光に包まれて、眠くなる夕方を思い出す。

2020/6/15 ——— 6/21

6月17日 [水]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅(東京都渋谷区)

『アサヒカメラ』最終号が届く。実質的にずっと誌面を作っていた外部スタッフの方たちの無念さと思う。創刊94年となる写真誌が、コロナのせいで急死。日本では、人生の儀式は葬式が一番大事なのだと思っていた。死に際は生き残った人たちに記憶される。

福島県三春町の新野徳秋さんからカボチャの苗の写真が届く。3月のはじめ、カリフォルニアを訪問中、毎年巨大カボチャコンテストに参加している同級生のイアンから、カボチャの種をもらったのだった。福島のカボチャにあげてほしい、と。種一つ持って帰ったところで、育つのだろうか？ と思いつつも、新野さんに持っていった。実家の畑を数年前に再開した妻の美希子さんの畑に植えてもらえないだろうか？ と渡したら、美希子さんは勤め先の保育園の隣にある畑に植えてくれたという。写真の葉は大きく、既に巨大カボチャの風格がある。子供たちと巨大カボチャの成長を見守れるかな？ イアンに写真を送ったらとても喜んでた。

メキシコシティの友人とメッセージで話す。メキシコはどの国に対しても国境は閉じていないという。しかし感染者は増え続けていて、外出制限が続いている。遠くの友人のことをより想うようになった。各地の友人たちと話して、どのような状況になったら旅をすることができるのかを考え続けている。旅をすることは相手に受け入れられるということだ。そこに訪問する側ができることが何かあるのだろうか？

岩根 愛 [写真家]

2020/6/15 — 6/21

6月18日 [木]

天気 | 曇り

場所 | 自宅(東京都渋谷区)

毎日 A4 サイズにプリントしては展示作品を絞ってきたけど、まだ決められない。撮影地1箇所につき1点ずつに絞り、表裏2面写真のパネルを吊るそうとしているので、表裏の組み合わせや吊り位置など、プリントを並べて平面で考えるだけではイメージがつかめない。

ふと、カメラ収納用、スーツケース大のスポンジがあったことを思い出し、スポンジにざくざくカッターで切れ込みを入れて、小さくプリントして裏表くっつけた写真をぶっさして、前から後ろから、歩いてどう見えるかを考える。

福島の高柴デコ屋敷、橋本広司民芸より連絡。広司さんは高柴に300年以上続く伝統、張子のデコ人形やお面作りとひょっとこ踊りの名手であり、私のミューズである。今春はデコ屋敷でもデコ祭り中止、毎年30万人が訪れる三春滝桜も閉鎖、デコ屋敷に4軒あるお店は全部閉まって、ひっそりとしていた。

デコ屋敷の丘の上に、天神夫婦桜という大きな2本の木が絡み合った桜がある。満開になるといつも、桜の一番近くに住む広司さんがライトアップして、その下で踊っていた。今年は外出自粛で誰も来なくても、変わらずライトアップして、一人で踊っていた。

私は広司さんのひょっとこ、おかめのお面と、プロジェクト FUKUSHIMA! の盆踊り手ぬぐいで作った、布マスクのセットを企画した。音楽家の大友良英さんに『厄除けマスクセット』と命名してもらい、橋本広司民芸初のネットショップを、広司さんの娘の明恵さんが立ち上げた。

5月中旬から販売を始め、今日、ネットショップに NADiff から問い合わせがあっ

たとのこと！ 水戸芸術館、東京都現代美術館、東京都写真美術館、渋谷PARCOのNADiffで販売されることに。この買い取り分を合わせてマスクセットも100個販売達成!! よかった。

6月19日 [金]
天気 | 雨
場所 | 自宅(東京都渋谷区)

一日中、スポンジに刺した写真をいじってようやく展示カットを決める。東京都写真美術館で展示する新作『あたらしい川』は、作品集『A NEW RIVER』としてbookshop Mから出版していただくことになった。やっと決まった展示カットを主宰の町口覚さんに送る。

写真を担当した鳥井一平さんの著作、『国家と移民 外国人労働者と日本の未来』（集英社新書）が届く。実質的に移民社会が既に始まっている日本でも、未だ単純労働の従事者とししか捉えない制度には多くの問題がある。コロナ禍で書き足されたのであろう序文には、ウイルスが国境をまたいだ人々の動きや経済活動を大きく制限している今こそ、移民政策について考える大きなチャンスとなるのではと鳥井さんは書いている。

6月20日 [土]
天気 | 曇り
場所 | 東京都中央区

角田純さんの個展「Presence」を見に新橋のCurator's Cubeへ。鉋物を使っ

た造形作品、以前から作っていることは聞いていたのだけど、すごい数が並んでいる。

手のひらサイズから大きなものまで、カラフルな結晶や尖った石、一つ一つの作品を見つめると、その色や形によって、私の内側に様々な反応を起こす、そのリアクションに素直に向き合ってみようと努力してみる。オーラソーマの造形版のような……カウンセリングを受けているような、今までにない鑑賞体験だった。自分に合う一つがあるはずと思い、買いたいと思って見直すと、それはそれで物欲と向き合うこととなり、さっきの体験が失われる。ということを繰り返したらぐったり。石にあたったのかな。磁力に疲れた。一緒に行った友人は、彼にぴったりと言えるものを買っていた。いつかオーダーメイドしたい。

6月21日 [日]
天気 | 晴れ
場所 | 自宅(東京都渋谷区)

展示のテストプリント、作品集『A NEW RIVER』の印刷テスト用に入稿用写真データと、見本プリント5点分を終日制作。

岩根 愛 [写真家]
1975年東京都中野区出身、渋谷区在住。1991年単身渡米、ベトロリアハイスクールに留学。帰国後、アシスタントを経て1996年に独立。2018年、初の作品集『KIPUKA』（青幻舎）を上梓。第44回木村伊兵衛写真賞受賞。著作『キブカへの旅』（太田出版）、『ハワイ島のボンダンス』（福音館）。新刊『A NEW RIVER』（bookshop M）。

2020 / 6 / 22 ——— 6 / 28

中崎 透

美術家



6月22日〔月〕

天気 | 雨

場所 | 茨城県水戸市・ひたちなか市

今日から1週間ほど日記を書く依頼が来たので書き始めてみる。初日なので少し前提というか、このところの生活の状況のようなものを前書き的につけておく。僕は茨城県水戸市を拠点にして、現代美術の分野で活動している作家である。現在は実家で70代の両親と一緒に3人で住んでいる。水戸の市街地にある『キワマリ荘』というシェアスペースの一角を借りていて、『遊戯室』という名前でオルタナティブスペースの運営をしている。と、言いながらここ数年はなかなか展覧会をする機会もなく、すっかり荷物置き場兼事務所のようなかんじになっている（日記の中で、キワマリ荘、遊戯室と出てきたらこのことである）。

それと、長年の作品やら荷物が溜まり過ぎてどうにもなくなってきたので、1年半くらい前に競売物件というやつで近所に廃墟気味な農家物件を買った。その物件もこれまたどうにも手がつけられず1年近く草むしりしかできていなかったのを、昨年末くらいから作品置き場と作業場を作るためのリノベーションをようや

中崎 透〔美術家〕

2020/6/22 ——— 6/28

くコツコツと始めていて、今もそんな渦中である。この物件はひたちなか市枝川という場所にあり、ここはちょうど市の境目辺りにあってほぼ水戸市のようなところで、キワマリ荘からも車で5分くらいのところにある。そうそう、その場所にはまだ特に名前は付けていない（このことは日記の中で、枝川の物件、作業場と書くことにしよう）。

ここ2ヶ月くらいキワマリ荘で自炊をしていて、簡単なものだけど珍しくちゃんと毎日料理をしている。それと、枝川の物件にはぼちぼち敷地があり、油断すると雑草がジャングル化するのでちょくちょく草むしりや除草剤を撒いたりすることが習慣になっている。そんな日常が合わさるとこれまで全然興味がなかった家庭菜園なるものがやりたくなってきて、数日前にホームセンターで野菜の苗を衝動的にいくつか買ってきた。今日は小雨の中、少し掘り起こした小さな畑予定地の土を弄りつつ、苗を地面に植えようかと思っていたけど、風が強めだったから断念することにした。

6月23日〔火〕

天気 | 曇り時々雨

場所 | 茨城県水戸市・ひたちなか市

昼前に起きる。昨日は帰り際、苗を室内に置いていたので一度枝川の物件に寄って外に出して水をやる。

キワマリ荘に行き食事。この3ヶ月、自然と1日2食の生活になってきた。40代ののんびりな日常生活には案外これくらいが身体にちょうどいいのかもしれない。普段は移動が多く、外食やコンビニ飯が大半で、出張先では居酒屋での夕食も多い。水戸にいるときは車生活なこともあってもともと飲む機会はそんなに多くなくて、今回はたまにオンラインでの飲み会に参加したりもするけど、たぶん劇的

に酒量も減っている。15年くらいゆっくりペースで増え続けてきた体重が、ここにきて特に無理をすることもなく減ってきている。中年の体重が著しく減るときは重大な身体の不具合のサインといったことをよく耳にするけど、自分に関しては健康的な減量であることを信じたい。

だいが脱線してしまった。食事後、ホームセンターで少し買い出しをして枝川へ。地面に苗を植える。なんだかドキドキする。いろいろ日常に戻って出張過多な生活になったら、この子たちの世話はどうするんだろう、と頭をよぎるが今は考えないでおこう。ナス、トマト、きゅうり、ししとう、バジルの苗を植えた、ベタな顔ぶれである。あと大葉、オクラの種をパラパラと撒いてみた。物置にあった棒で一応支柱を立ててみたりして、いいインスタレーションだなあなんて眺めてみたり。肥料なんかも全然入れてないし、そんなに手をかけるつもりもないし、運よく育てあわよくばいくつか収穫できたらラッキーみたいな気分で始めてみたけど、すでに速攻枯れたらめっちゃくちゃ凹むのが想像できるほどには愛着が出てきている。どうなるんだろうか。

ちょっと前から椅子のリペアをしていて、その作業の続きを夜まで。途中近所で外食。去年、水戸芸術館での椅子をリペアするワークショップに参加したのがなかなか面白くて、機会を探っていたら最近手頃な椅子のフレームをいくつかもらったので、試行錯誤しながら座面を制作している。もう少しで完成する、楽しみ。

6月24日 [水]

天気 | 曇り

場所 | 茨城県水戸市・ひたちなか市

そうそう、今回のコロナの影響というか、個人的な大まかな流れのようなことに少し触れておく。2月の中旬、札幌でのイベントが中止になる、翌週愛知県豊田

市でのイベントも中止。その辺りから具体的な影響が仕事でも出始める。3月に入ってすぐ千葉県市原市での芸術祭への参加のため滞在制作スタート。その時点で延期は確定していたが、日程は未定であり、作家はももとのスケジュールで作品を完成させ納品、ということになっていた。そんな事情で締め切りが緩めだったので少し滞在を延長しつつ3月25日に水戸に帰ってくる。ちょうどその翌日くらいに1年後に会期を延期することになったと連絡が来た。それからは茨城から出ていない。地方だけに車生活なのもあり、家とキワマリ荘と枝川の物件をほぼ毎日行き来しつつ、コンビニ、ホームセンター、スーパーなんかにはちょこちょこ行ったりする生活をしている。

幸いにも4、5月はそもそも倉庫と作業場の改修を主に取り組む予定でいてそんなに仕事を入れていないタイミングでもあったので、春先は案外そこまで激しくは予定が狂わずに過ごした。オンラインでのミーティングなんかはちょこちょこ入りつつ、秋くらいまでの企画はいくつか来年度への延期が決まっていた。プロジェクト型作品の新作、移動や人との交流が前提の企画はまだしばらくはなかなか厳しいだろうな。そんなかんじで半引きこもりな3ヶ月である。

ということで日記に戻る。食材などの買い出しをしてからキワマリ荘へ。食事をしてからわりとすぐに作業場に移動、畑に水をやる。草刈りをしばらくする、最近はおむしよりも柄の長いハサミで背の高めの草をバサバサ切っていくのがブーム。椅子の制作の続きをしようと思ったら、道具を一部キワマリ荘に置いていたのでそっちでやることにする。仕上げ、3つの椅子が2時間くらいで完成。なかなか良い出来、愛用しよう。先週から手を出し始めた器の金継ぎの続きも少し進める。ちょうど1週間ほど漆を乾燥させていて、削り作業を深夜までやっつける。

6月25日 [木]

天気 | 雨

場所 | 茨城県水戸市

14時くらいに起きる。雨なので畑の水やりはしなくていいかなってことで、1日キワマリ荘で作業。随分と遅い時間の起床だけど、これも案外普段通りの生活の範囲で、いわゆる夜型生活というやつである。僕は昔から朝が弱い、遅刻や起きられなかったエピソードは山のようにあるがここでは割愛する。この3ヶ月はあまり目覚ましをかけずに、特に意識しないでいるとこんな生活リズムに落ち着くんだったってかんじで過ごしてる。だいたい昼くらいに起きるけど、たまに14、15時くらいの日もある。キワマリ荘に夜の0時とか2時くらいまでいて、家に帰って風呂に入ったり海外ドラマとか見たりしてだらだらして明るくなってきて5、6時くらいに寝る、みたいな習慣になってる。3月末までの制作現場では普通に朝8時くらいに毎日起きてたけど、3日も経たずにこんな生活に突入した。

今日は、金継ぎのクライマックス的な作業「金粉を塗る」に挑戦。かなり手こずる、けど工程的には結構好きな作業、これはハマるかもしれないなあ。短い乾き待ちの時間がちょこちょこ入ったので、その間はミシンで破れた服の繕い作業。これもこのところよくやっている。この10年近く、『プロジェクト FUKUSHIMA!』での大風呂敷作りのために膨大な量のミシンに触ってきたけど、制作に必要になり自分のミシンを購入したのはごく最近、今年に入ってからだったりして、せっかくだからとやり始めた繕い作業に案外ハマっている。

夜は、札幌で大風呂敷を一緒に作っていた人たちとオンラインで飲み会。毎週定期的に飲んでいて参加できるときに顔を出している。オンラインの飲み会って実はこれまでほぼやったことがなく、10年以上前から遠隔地に住むメンバーでユニットを組んでいるのでスカイプなどのやりとりは比較的以前から多かった方か

中嶋透 [美術家]

もしれないけど、わざわざ飲み会をする発想がなかったことが意外だったりした。離れた場所にいる人と、気軽に構えずくだらない話ができるのはいい。

6月26日 [金]

天気 | 曇り

場所 | 茨城県水戸市・ひたちなか市

家を出ようとしたら父親が草むしりをしていたので、庭の雑草のこと、裏手の家庭菜園の野菜のことをポツポツと聞いたりしてみた。父親は元教師で植物のことが専門だったので名前やらめっちゃ詳しいんだけど、今さら聞いたりするのもなんかめんどくさくて、そんな話題を避けていた。庭の草むしりや畑のことも一度手伝い始めると永遠に続いていく呪いのようなものだと思っていて、絶対に触れないように10年以上過ごしてきたけど、最近は少し足突っ込んでもいいかなと思いはじめている。金継ぎの本とかによく出てくる「とくさ」という、紙ヤスリのように磨きに使う植物があって、なんとなくどこか遠いところに生えてるようなイメージを持ってたんだけど、玄関からのすぐのところニョキニョキ生えてる棒みtainなやつがその「とくさ」だったらいい。身の回りの世界のことを自分はこんなにも知らないもんなんだなあって思ったりした。

キワマリ荘で食事をしてから、昨日の金継ぎの器の様子を眺める。つついっ少し弄ってしまう。昨晩は苦労しつつも7割方上手くいったかなって思ってたけど、改めて見ているともう2割引くらいの出来かも、なかなか難しい。夕方から水戸芸術館に打ち合わせに行く。今年はいぶが水戸にいそうだから「何かワークショップでもできたらいいね」って流れでとりあえず相談。今年度初のリアルな打ち合わせ。

例年、たしかにあまり地元にいることが少ない。滞在制作なんかが多くてだいた

2020/6/22 — 6/28

い移動している。こんなに落ち着いて地元にいるのは受験生の頃以来で、なんだか生活することについていろいろ改めて見直している。移動が前提の生活で、家はたまに帰ってくる止まり木のような感覚でいて、いろいろおざなりにして過ごしてたな、とか。とはいえ、仕事もしないとどうにもならず、県外への出張をどのタイミングから始めたらいいかを探り探りのこの1、2週間だったけど、思い切って、「今度の日曜日に下見に行きます！」って東京の仕事相手にメールをしてみた。

6月27日〔土〕

天気 | 曇り

場所 | 茨城県水戸市・ひたちなか市

キワマリ荘で食事してから枝川へ。畑に水をやる。きゅうりの葉が随分傷んでいる、根が土に馴染んでないのか、何か病気なのか。少々不安である。作業をしようと思ってたけど、なんか気が乗らず作業場を片付けたり。水戸でARTS ISOZAKIというギャラリーをやってる磯崎寛也さんが、仙台から作家が来てるからと、一緒に覗きに来る。よく知った作家仲間だった。時間がなくて駆け足で場所を見つつ世間話。磯崎さんのギャラリーで7月に個展の予定が延期になったままだったが、9月頭くらいからになりそう。昨今のスケジュールの空き具合から行くとは十分な準備期間かもしれない。

夜はオンラインの講座を受講。実は、作家／批評家の石川卓磨くんの主宰する『^{くも}蜘蛛と^{ほうき}箒』での批評をテーマにした有料講座を2週間に一度くらいのペースで受講している。石川くんは古い友人で後輩でもあり、申し込みをしたら「なんで今更（笑）！」みたいなコメントが来た、そりゃそうだろう。普通に『蜘蛛と箒』の活動に興味はあったけど東京に通うわけにもいかず、今期はオンラインな上に僕自身もずっと茨城にいたので都合がよかった。それと、ここ10年くらいイン

中嶋透〔美術家〕

2020/6/22 — 6/28

プットを後回しにしてきたというか、言葉を紡ぐ時なんかは現場経験とアバウトな歴史認識の組み合わせでなんとか帳尻を合わせてきたところがあるので、いい機会だなと。思考することの整理や方法、幅広い事例といったかんじのレクチャーは今の自分にとっては頭の体操のようなものとしていい刺激になっている。

夕食の時にビールを1本飲んだので仮眠をとっていたら、前からボヤッと考えてた作品のアイデアが少し具体的なイメージとして降りてきてメモをとる。影響関係のありそうな数人の作家の作品、解釈されそうな方向性、それといくつか展開の方法、見取り図のようなイメージ、あんまりこういうかんじのアイデアの絞られ方ってこれまでなかったもので、頭の体操が効いているのかもしれない。3時を過ぎてしまった、そろそろ帰ろう。

6月28日〔日〕

天気 | 雨のち晴れ

場所 | 茨城県水戸市・ひたちなか市、東京都豊島区

深夜から激しい雨、午後には落ち着きだんだん気持ち良い天気になる。キワマリ荘で食事をして、少し作業してから枝川で畑の様子を見る。

車で東京に向かう。3ヶ月ぶりの県外にそわそわである。豊島区上池袋にある『くすのき荘』と『山田荘』が目的地。「かみいけ木賃文化ネットワーク」と題して山本山田（山本さんと山田さんの夫婦ユニット）が中心に運営しているスペースであり、この2つのスペースのための看板制作を依頼してくれたので、その下見である。山田荘の立ち上げの時に一緒に関わらせてもらった縁で、それ以降も機会があると声がけてくれている、ありがたい。山田荘の一部屋を事務所として借りている編集者の影山裕樹くんも交えて、互いの近況なんかをちらほらと話す。泊まって1杯やりたい誘惑から目をそらしつつ、まだまだ引きこもり生活からのリハ

ビリ中なので水戸へ帰る。

日記の1週間もこれで終わりなので、このコロナ状況と自身の作品制作のことなんかについて。実際のところ2011年の震災の時のことを頭のどこかに浮かべ、照らし合わせながら生活をしている気がしている。もちろん土地や人それぞれの状況なんだけど。そんな中で制作のことというと、実は特段あまり考えてなかった。たまたま直近で制作発表する状況になかった、というのもあるけど先も読めなさすぎて、何かしら変化してくのも分かるから、夏くらいになってからまともに考えるのがちょうどいいかな、くらいな気分である。や、もう夏か。

ただ、地元で3ヶ月いて生活をする、ということ自体が気づけば個人的な大イベントになってて、いろんなことを思考するきっかけにはなっている。そういう意味での影響は地味に今後大きそうだなぁって思ってる。今一番の悩みは、まだしばらく時間がありそうなのであちこちに行って気心知れた友人なんかとのんびり話したいなぁって気分と、野菜を植えてしまったからあまりここを離れたくないなぁって気分の板挟みになっていることだったりしている。

中崎 透 [美術家]

1976年茨城生まれ。武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程満期単位取得退学。現在、茨城県水戸市を拠点に活動。看板をモチーフとした作品をはじめ、パフォーマンス、映像、インスタレーションなど、形式を特定せず制作を展開している。展覧会多数。2006年末より「Nadegata Instant Party」を結成し、ユニットとしても活動。2007年より「遊戯室（中崎透+遠藤水城）」を設立し、運営に携わる。2011年よりプロジェクト FUKUSHIMA! に参加、主に美術部門のディレクションを担当。

中崎 透 [美術家]

2020 / 6 / 29 ————— 7 / 5

高橋瑞木

キュレーター



6月29日 [月]

天気 | 晴れ

場所 | 香港の CHAT オフィス

東京はコロナウイルスの感染者がまた増加しているそうだが、香港は感染が確認された1,200人あまりのうち1,105名がすでに退院、新しい感染者も最近では海外からの渡航者以外は稀になってきた。仕事も5月半ばからはもう完全に通常のペースに戻っている。街中ではほぼ100%の確率でみんなマスクをつけている。マスクはもはや下着をつけるのと同じぐらいの「常識」になっているが、気温32度、湿度70%を超える環境でマスクを着用し続けるのは正直かなりしんどい。昨年の今頃、香港は逃亡犯条例改正をめぐるほぼ毎週末デモが開催されていたが、今年は新型コロナの感染拡大を防ぐため、集会やデモの許可が下りない。今日は、3年弱勤めたコミュニティプログラムのスタッフが異動の挨拶で、職場のみんなにマンゴーやパッションフルーツといった、トロピカルフルーツがトッピングされたエクレアをふるまった。彼女はロンドンの大学のマスターコースに受け入れが決まっていて、本来ならこの夏にロンドンに引っ越して入学準備をするはず

2020 / 6 / 29 ————— 7 / 5

だったが、このコロナ禍によって留学を1年延期することにしたらしい。もう一人のスタッフも今年イギリスに留学することになっていたが、「高い授業料を払ってオンラインの授業を受けるのは馬鹿馬鹿しいし、今イギリスではアジア系への人種差別も激しいらしいから今年は行くのをやめる」と言っていた。

6月30日 [火]

天気 | 晴れ

場所 | 香港のCHATオフィス

中国の全人代で香港国家安全法が可決された。この報道に前後して日本でも香港の民主化運動の先導として知られる周庭や黄之鋒が政治団体デモシストから離脱というニュースがかけめぐる。かれらのステイトメントを読んでも離脱の理由がいまいちわからないので、香港人の同僚に聞いて見たところ、香港国家安全法の可決にともない、香港の民主運動家（つまり反中央政府の活動家）として逮捕されるのを逃れるためだと教えてくれた。昨年の抗議活動では、ロシアで開発されたテレグラムというSNSがフル活用され、いつ、どこでどのような抗議活動が開催されるのかといった情報が香港人の間で共有されていたが、今年は抗議活動に関する投稿も激減したという。

夜は異動するスタッフの慰労会。CHAT (Center for Heritage, Arts and Textile) のチームは大多数の香港人、そして中国人、コロンビア人、そして日本人(私)から構成されている。ビールで乾杯をすると、香港人のスタッフが「今日はもう一つお祝いしなきゃ。香港はとうとう本当に中国の一部になった。僕たちは名実ともに本当に兄弟になったんだ」と皮肉まじりのジョークを中国人のスタッフに言い放った。

「ターレー」高橋謙太

2020/6/29 — 7/5

7月1日 [水]

天気 | 曇ったり晴れたり

場所 | 香港の自宅

今日は香港が中国に返還されて23周年。2年前までは、多くの香港人はこの「祝日」を複雑な気持ちで迎えているものの、花火がヴィクトリアハーバーに打ち上げられる賑やかな休日だった。抗議運動が激化した昨年からは中止。今年も花火はない。

昨年からは日本のメディアやアート関係者から香港の民主化運動のアート界への影響についての執筆やコメントに関する依頼が断続的に送られてくる。今日も朝イチで同様の依頼を受け取った。日本人が香港の状況について興味を持ってくれるのはとてもありがたいのだが、広東語も十分に解さず、また日常的に運動に関与してない自分には正確な最新の情報を伝える自信がないし、またこれまで継続的にこの問題にコミットしてきた香港人のアーティストたちのかわりに、中途半端で浅い知識しかない自分が発言するのに躊躇を覚える。香港在住の日本人アート関係者として声がかかるのはわかるのだが、上記の理由でこうした依頼はほとんど全断りしている。

7月2日 [木]

天気 | 晴れときどき雨

場所 | 香港の自宅

ウェブサイトでは香港国家安全法についての日本や海外での報道をひとしきりブラウジング。昨日、香港の街中で開催されたデモでは300人以上が逮捕されたという。急激な変化に正直気が滅入っている。

最近、民主主義国家でも、レイシズムや性差別が野放しになっている国と、民主主義国家ではないが、レイシズムや性差別が圧倒的に少ない国と、どちらがましなんでしょうかと考える。でも民主主義国家でないということは多様性を認めないということだから、そもそも人種や性差を議論することそのものが抑圧されているということか。でも多様性を標榜していても、社会制度の中で抑圧されることは民主主義国家でもよくある話だ。しかしこの二択それ自体かなり虚しい。

香港での表現の自由について日本からよく質問が来るけど、例えば、東京電力第一原子力発電所事故のあとに私が水戸芸術館時代に企画した「高嶺格のクールジャパン」のような展示は、あいちトリエンナーレ2019の「表現の不自由展・その後」をめぐるバッシングや脅迫を考えると、今の日本の公立美術館での開催は不可能にも思える。表現の自由は保証されているはずなのに。

7月3日 [金]

天気 | 雨ときどき晴れ
場所 | 香港の自宅

法律が変わるとはこういうことか、としみじみ実感した1日。加えて民意が反映されるシステムが国家で保証されていることのありがたさも（日本のこと）。けどシステムをきちんと使えなければ意味ないんだよなー。不思議なもので、日本に住んでないのに（だから?）よく日本のことを考える。

今日はスタッフと法律が施行されてからのアートセンターの今後について話した。忌憚のない意見を交わすことができる同僚がいて、違う意見もちゃんと聞いて、みんな納得するまで話し合う。少なくともそれができる職場なのは恵まれている。ちなみにうちのシニアスタッフはみんな女性。「瑞木は香港人じゃないのに、香港の歴史的瞬間を体験しているから貴重な思い出になるよ」というジョークがこ

「アートセンター」高嶺瑞木

いう時に香港人の同僚から出てくるのはありがたい。笑える時はまだ余裕がある証拠だろうか。しかし今週は気疲れした。

7月4日 [土]

天気 | 晴れ
場所 | 香港の自宅

暑い！ 日中に出かけるのは自殺行為。夕方から来年オープン予定の巨大美術館、M+のパヴィリオンで始まったヴェニスビエンナーレの凱旋展、シャーリー・ツェの個展をM+のデザイン・建築部門のキュレーター、横山いくこさんのガイドで見学。ヴェニスの香港パヴィリオンで女性作家が個展を開催したのは初めて。シャーリーは、木材や建築のパーツなどを組み合わせて立体作品を制作している、アメリカ西海岸在住の作家。

ヴェニスの香港パヴィリオンはアルセナーレの入り口正面にある既存の古い建物で、その中で彼女の展示を見た時は、ひなびた空間の中でバランスを保ちながら展開する繊細なインスタレーションが、ヴェニスビエンナーレという特殊な舞台でも変に気負ってなくて好きだった。香港の凱旋展示では、大きなガラス窓があるギャラリーの柱や天井に作品が寄生するように展示されていて、同じ作品なのに違った解釈を呼び起こすような感じで再び好印象。横山さんによれば、新型コロナウイルス感染症の影響でシャーリーも、ヨーロッパ在住のキュレーターも渡航できなかったのも、香港の現地スタッフが2人からオンラインで指示をもらいながら展示作業をしたそう。アメリカ、ヨーロッパ、香港の時差を考慮しながらの展示は大変だったに違いないが、その苦労も報われる出来。

2020/6/29 — 7/5

7月5日〔日〕

天気 | 晴れ

場所 | 香港の自宅

夜、M +の映像部門のキュレーター、ウランダのバースデーを近所にあるインド料理のレストランで横山さんとお祝い。お互いの近況を報告しつつ、話題は仕事からダイエットまで広がる。

今日は、日本では都知事選。私は東京出身なのでやはり気になる。ご飯を食べながら、ケータイのツイッターアプリで選挙結果をチェック。開票してすぐに現職の圧勝のニュース。新型コロナ対策や東京オリンピックといった課題が山積しているのもう少し投票率が上がると思ったけど、蓋をあけてみれば55%の投票率。これは誰がなっても同じ、と都民が考えているのか、それとも投票したい候補がないということなのか。選挙制度そのものを見直したほうがいいと思うけど、投票率が上がると団体票を持つ議員にとっては不利だろうから、現職の政治家は制度改革をしないだろうなあ。

この1週間を経て確信したのは、民主主義とは放っておけば権力にすぐに冒されるフラジャイルなものだということだ。そして、今の香港の株価が示しているように、機会の自由や表現の自由は、経済活動に関係ないから、それを邪魔するとみなされればあっという間に「なかったもの」になってしまう。日本の経済は確かに良くはない。だから政治家は日本の経済を立て直す、と勇ましいことを言うけれど、その引き換えに人々は何を差し出すことを期待されているのか、私たちは注視する必要がある。

偶然にも香港にとって歴史的な意味を持つことになってしまったこの1週間の記

録。当然ながら他人に見せるための日記には書けないことがある。日記なのに表現の自由がない!? この日記は自己検閲の記録になってしまったのか、それとも私の知人や同僚、CHATの将来を見据えた合理的な判断なのか。数年後にこの日記を見返したときに私は何を思うだろうか。

高橋瑞木 [キュレーター]

CHAT (Centre for Heritage, Arts and Textile) エグゼクティブディレクター兼チーフキュレーター。ロンドン大学東洋アフリカ学院 MAを修了後、森美術館開設準備室、水戸芸術館現代美術センターで学芸員を務め、2016年4月CHAT開設のため香港に移住。主な国内外の企画として「Beuys in Japan: ボイスがいた8日間」(2009年)「クワイエット・アテンションズ 彼女からの出発」(2011年)「高嶺格のクールジャパン」(2012年)、「拡張するファッション」(2013年)「Unfolding : Fabric of Our Life」(2019年)、「Unconstrained Textiles: Stitching Methods, Crossing Ideas」(2020年) など。

高橋瑞木 [キュレーター]

2020/6/29 — 7/5

- 1日 - 香港返還から23年
- 日本全国でレジ袋有料化が開始
- 3日 - 令和2年7月豪雨発生
- 5日 - 東京都知事選、小池百合子氏再選
- 14日 - 令和2年7月豪雨が「特定非常災害」に指定。
阪神・淡路大震災(1995年)、新潟県中越地震
(2004年)、東日本大震災(2011年)、熊本地震
(2016年)、西日本豪雨(2018年)、令和元年台風
第19号(2019年)に続く7例目
- 16日 - 政府は「Go To トラベル」キャンペーンの運用を
見直し、東京都を対象外に
- 23日 - 京都 ALS 女性囑託殺人事件、医師2名が逮捕
- 25日 - 国内の新型コロナウイルス感染者数が
累計3万人を超える。3週間で1万人増
- 29日 - 岩手県で初めて新型コロナウイルスの感染者。
全都道府県で感染が確認
- 30日 - NASAの火星探査機パーサヴィアランスが
打ち上げに成功、
人類初「火星サンプルリターン計画」が開始

大吹哲也

NPO 法人いわて連携復興センター 常務理事／事務局長



7月6日[月]

天気 | くもり

場所 | 自宅(岩手県紫波町) ⇄ 事務所(北上市)

2020/7/6 — 7/12

集中豪雨により熊本県を中心に九州や中部地方などで甚大な被害が発生した。この数年、全国各地で数10年に一度と言われる大雨特別警報を毎年耳にするようになった。この規模の大雨被害が毎年全国のどこかで必ず起きるのかと思うと、少し心が疲れる。自分も地球温暖化に加担しているところはないか。普段の生活を考える。

自宅から職場まではいつも車で移動。コロナ禍の前は少しでも歩くために意識的に電車も利用したが、今はほとんど車を使う。今日は radiko で「ナインティナインのオールナイトニッポン」を聴く。片道45分の現実逃避。残りは帰りに聴こう。職場に入り、ホームページにて令和2年7月豪雨支援関連の情報発信。新型コロナウイルス感染拡大の影響によって、被災地からの要請があるまで現地に行かないように全国社会福祉協議会からアナウンスされている。これも平時ではない。事務所のスタッフたちとSDGs(持続的な開発目標)の話をしている。自組織とし

て SDGs をどのように示してしていくか検討しているところだ。「13 気候変動に具体的な対策を」に目が行く。地球温暖化。熊本ともつながる。

今日はいつもより少し早く帰宅。テレビでは引き続き集中豪雨のニュースが流れている。

7月7日 [火]

天気 | くもり

場所 | 自宅(岩手県紫波町) ⇄ 事務所(北上市)

起きると、福岡・佐賀・長崎県の大雨特別警報がまだ出ている。被害が大きくなることを祈るばかり。

家族そろって朝ごはん。避難先は川を渡る小学校ではなく中学校にしようと確認する。大雨の場合、車は使えるのか。それとも歩いて行った方が良いのか。その時に慌てないようにしないと。

朝のニュースには、岩手県盛岡市でピアガーデン開始、コロナ禍の影響で就労支援事業所3割が工賃減少、福岡県の大雨特別警報が4年連続で発生しているなど。これまでの暮らしと新しい生活環境が重なる。どこまで適応できるだろうか。事務所に行き、オンラインで福祉分野のケースマネジメントのレクチャーを受ける。沿岸部の課題解決にもこの手法が生かすことができるかもしれない。ここで学んだ内容を、追って沿岸部の中間支援 NPO の皆さんと共有することになっている。

令和2年7月豪雨の対応について、岩手県内の災害支援のネットワークで協議された議事録が流れてくる。東北の地から NPO ができること、そしてこれからできそうなことが交わされている。コロナ禍でこちらから現地入りすることは難しいが、必要とされる時に動ける状態でありたい。

大吹哲也 [NPO 法人いわて連携復興センター 常務理事・事務局長]

2020/7/6 — 7/12

家の周りは、ここ数年で田んぼが宅地が変わっている。夏、当たり前にかえったカエルの鳴き声も小さくなってきた。田舎で考えさせられる「自然」と「開発」の均衡。地球温暖化の原因はすぐ近くにあるのかもしれない。

7月8日 [水]

天気 | くもり

場所 | 自宅(岩手県紫波町) ⇄ 盛岡市

夜中に目が覚める。なかなか寝付けずテレビをつける。画面には引き続き大雨情報。1時間ほど見た後に布団に入る。目が覚めると朝だった。少し眠れたようだ。

テレビをつけると岐阜と長野県に大雨特別警報が発令されている。東日本大震災後から釜石市の NPO 法人@リアス NPO サポートセンターさんやアーツカウンシル東京さん、そしてヒビノスペシャルさんなどに行っている、海に行灯を浮かべる「とうほくのこよみのよぶね」というプロジェクトのルーツは岐阜県長良川で、毎年冬至に行われている「こよみのよぶね」から。2年前に実際に拝見させていただいたが、その時もこの時期に豪雨災害があり、被害の爪痕が残っていた。今回は大丈夫だろうか。心配になる。

昼前、午後からの会議の前に非接触型体温計を探す。町内のホームセンター、ドラッグストア、ベビー用品店を探すけどこも売り切れ。あれほど無かったマスクや消毒液は在庫あり。体温計も一時的なものか。

午後の会議では、災害救助法をはじめとする大規模自然災害時の各種法律を考える。避難所はどうしていつも公共施設のホールや会議室なのか。その環境が長年変わらないのはどうしてなのか。その源流は、諸々の法律にあるようだ。東日本大震災の時も避難しない方が多数いらっやと聞く。避難先の環境が良ければ、積極的に避難する方も少し増えるかもしれない。

7月9日〔木〕

天気 | 晴れ

場所 | 自宅(岩手県紫波町) ⇄ 事務所(北上市)

今日は事務所へ出勤。長野・岐阜県の大雨特別情報で見えてこなかったが、福岡県大牟田市の被害が大きいらしい。連日の大雨により、被災情報が書き上げられてしまう。どこでどのようなことが起きているのか。俯瞰して見ていかないと、と改めて思う。

新しく入ったスタッフのメールアドレスの設定や名刺作成を行う。これまで担当していたスタッフが卒業したこともあり、不慣れながら手探りでやってみる。何とかできた。

お昼は、コンビニで地元の名店「柳家」の冷やしキムチ納豆ラーメン。あまりコンビニ飯を食べない方だが、今年は2度目。美味しくて、よくできていると心底感心する。

午後は、東日本大震災で被災した地域の課題解決を図る助成事業の外部評価シートの作成を中心に。これまでの資料を見ながらあれこれ思い出す。

帰りの空には久しぶりの夕焼け。豪雨災害のニュースが続く中、つかの間の穏やかさ。明日もこのまま晴れてほしい。

7月10日〔金〕

天気 | 雨

場所 | 自宅(岩手県紫波町) ⇄ 盛岡市

今日は、東日本大震災で被災した地域の市民活動支援センターとのオンライン会議から。コロナ禍でオンラインによる会議も増え、自宅からの参加も多くなっ

た。コップにホットコーヒー、水筒にアイスコーヒーを入れて臨む。リアル参加であれば堂々と席も外せるが、オンラインだとほかの人の発言を遮ってまで席を立つのも失礼だし、席を外した時に話を振られる可能性もある。リアル会議よりもオンライン会議の方が席を外すタイミングが難しい。

午後は盛岡市に移動し、岩手県沿岸部で起業を予定している事業者の審査会へ。コロナ禍でありながらも起業を決断した覚悟を感じる。

夕方は、県庁でNPO担当課と定例会議。NPO向けの研修や、行政を交えた協働推進フォーラムの内容や設えについて協議。7月末に行うNPO向けセミナーはリアルとオンラインの両方で行う予定だが、申し込みはオンラインが多い。セミナーの受け方も形が変わってきているような気がする。

夜のニュースには、プロ野球が観客を動員、政府が推進するGo Toキャンペーンの前倒し実施、全国で新たに新型コロナウイルスの感染者が429人の発表など。感染拡大防止と経済活動と余暇の過ごし方。均衡点はあるのか……。

7月11日〔土〕

天気 | 雨

場所 | 自宅(岩手県紫波町) ⇄ 盛岡市

午前中は歯医者へ。妹が歯科衛生士をやっているため、いつも妹に歯を見てもらう。親知らずの詰め物が取れていた。聞くと平成28(2016)年に詰めたものだろう。平成28年。震災から5年後。平成23(2011)年以降は、自然と「東日本大震災から〇年後」という思考になっている。しかし、それぞれの年に具体的に何をしていたのかがすぐに思い出せない。記憶が風化する前にまとめておかないと。

昼は地元の百貨店地下のじゃじゃ麺屋さんで。いつも行列ができるじゃじゃ麺屋

さんも椅子を間引き、ソーシャルディスタンスを行っている。席が少ないため並ぶ時間はいつもより長い、今は外でじゃじゃ麺を食べられるうれしさが勝る。並ぶ時間もこれがスタンダードになるのかもしれない。

夕飯を作る。今日は肉野菜炒めと、きゅうりとわかめの酢の物、そしてマカロニサラダ。きゅうりは家庭菜園から。畑は父が管理している。爺さんが生きていた時、父はノータッチだった。それが今は父がやっている。自分の番になったら管理ができるのだろうか。いや、やらないといけない。

7月12日〔日〕

天気 | 雨

場所 | 自宅（岩手県紫波町）⇄盛岡市

午前中は自分の車のオイル交換のため、盛岡市のカー用品店へ。この車は仕事でも使うのでメンテナンスは大切。月曜日も、車で1時間半ほど離れた釜石市に行く予定だ。今年予定している事業が少しずつ動き出し、これから沿岸部を回ることも多くなりそう。

午後は、母の車のオイル交換をするために午前と同じ場所へ。幸い父も母もまだ元気であるが、ちょっと億劫なことが年々増えている。家族みんな持ちつ持たれつ、お互い補いながら日々暮らしていく。それで良いと思う。

東日本大震災から10年を迎えようとしている。10年だからといって何か劇的に変わるわけでもない。引き続きやれることをやっていく、そしてこの地域で生きていくだけ。それだけで一日はあっという間に過ぎていく。

大吹哲也〔NPO 法人いわて連携復興センター 常務理事／事務局長〕

2020 / 7 / 6 — 7 / 12

大吹哲也〔NPO 法人いわて連携復興センター 常務理事／事務局長〕

1977年岩手県紫波郡紫波町生まれ。大学卒業後は盛岡・東京で映像関係の仕事に従事した後、帰郷。2010年、岩手県が設置する市民活動支援施設「NPO 活動交流センター」の運営に携わる。2011年、東日本大震災後の復興に向けた NPO 等の後方支援組織「NPO 法人いわて連携復興センター」を仲間と立ち上げ、現在は常務理事／事務局長として事業調整や組織マネジメントを行う。2017年、東北大学大学院経済学研究科博士課程前期へ社会人入学し、現在も在学中。

2020 / 7 / 13 ————— 7 / 19

村上 慧

アーティスト



7月13日 [月]

天気 | 梅雨の見本のようなしとしと降る雨。昨日は晴れて暑かったのだけど今日は涼しい。

最近買った、というか店員にレジで「あれも似合っていましたよ」と言われて買わされた

厚手のボーダーのシャツを初めて着られる気温

場所 | 東京都三鷹市中原のアトリエ

アトリエの庭で育てているじゃがいもが、昨日の高温のおかげでようやく枯れ始めた。次に晴れが3日続いたら収穫できそう。晴れの日が続いた後でないと、じゃがいもは良くないらしい。

9時前に目が覚め、家を出て、3日前と同じように駅の南口から入り、通勤の人々を目で流しながら売店でタバコを買い、北口から外に出て9時半にはアトリエにいた。それから1時間くらい小説の続きを書いた。中学生のときのことができた。ほうれん草炒めと目玉焼きと食パン半分のご飯。それから14時45分まで書く。2,200字。

その後、金沢21世紀美術館での展覧会のための作業を始める予定だった。一昨日、大変なミスに気がつき、300個も作ったファイルが使えないことがわかった。

村上 慧 [アーティスト]

一からやりなおし。と思っていたのに全くその作業に集中できず、1時間ほど昼寝をして、起きてから、ほうれん草と豚肉の炒め物を近所の石坂製麺で買った生ラーメンに入れて、夕食(昼食?)。そのあとでまた続きを書いてしまった。1,000字。なんか今日はずっと文字を書いている日になったな。

展覧会のための作業っていうのは、いままで発泡スチロールの家と共に歩いたルートをイラストレーターを使って Google Earth 上でひたすらなぞるという鬼のような作業なのだけど、どうもやる気になれず。最近 Radiotalk という、誰でもラジオができる音声配信サービスを知り、そこで今年就職したばかりの女の人が飲み会帰りに「今日の飲み会の、職場の先輩たちの話、本当にしょうもなかったわ。あんな人たちと働いてたのか。はあ」みたいな話を歩きながらしてる回がものすごく面白くて、飲み会とかやりたいなあ。

7月14日 [火]

天気 | 曇りなのか? 晴れ間も見えていたような気もするし、夜は湿度があまりなくて気持ちよかった

場所 | 新宿駅からつつじヶ丘駅に向かう電車の中

少なくともこの車両は全員マスクをしている。窓も開いていて、ゴロゴロという音が響いている。席はそれぞれが隣に1人分開けた状態で満席くらい。立っている人も2人。いま24時35分。すこし酒が入っている。と言っても缶ビール3、4本分くらい? 友人に誘われて「東雲」に行き、ゲームをやった帰り。ゲームと言っても液晶を使うものではない。

今日は9時半くらいに目が覚め、1週間くらい前に作ったままにしていた冷蔵庫の昆布出汁をつかって味噌汁を作って食べた。乾燥椎茸と玉ねぎとわかめ。それからアトリエに行き、昨日の続きを書く。途中、涼ちゃんがおにぎりを作って差し入れてくれる。めちゃうまい。

2020 / 7 / 13 ————— 7 / 19

12時過ぎくらいに出かけ、葛飾区役所に行って祖父の戸籍謄本を取った。家系を辿りたいという旨を窓口で伝えたら、「北海道の広尾町役場に郵送でお願いすれば曾祖父の戸籍が取れます」と、封筒やら役場の住所と電話番号やらをいろいろ準備して丁寧に教えてくれた。役場の戸籍住民課の人というのは、なぜこれほどまでに丁寧に対応してくれるのだろう。役場に勤めているという理由だけで、全ての人間に対して優しくするべきなのか？

自分の家系は、戸籍を請求すれば150年くらい前までは辿ることができる。僕はとりあえず父方の爺ちゃんの爺ちゃんまでは辿ることにする。ひい爺ちゃんとひいひい爺ちゃんが淡路島の生まれということはわかっているが、淡路島のどこなのか知りたい。爺ちゃんに聞いてもよくわからない。もしかしたら洲本かもしれないという期待がある。ひい爺ちゃんは若い時に淡路島から北海道の日高に行ったのだけど、そのころ稲田騒動という事件があり、洲本から北海道の静内に多くの人が開拓民として移住した。これは小説家の池澤夏樹さんの先祖が辿った道で、もしかしたら僕も同じルーツかもしれない。いずれにしてもいつか訪ねてみたい。そのためにまずは、広尾町役場に戸籍の照会を頼まなくてはいけない。

7月15日 [水]

天気 | しとしとと一日中降り続けている雨。ほとんど止まなかった
場所 | 東京都三鷹市中原のアトリエ

気がついたら24時半を過ぎている。最近、時間の進み方がすごく「まだら」だ。1時間半が一瞬で過ぎたかと思えば、電子レンジの10秒がめっちゃ長く感じたりする。絵を描いているときや、展示のプランを作っているときや、映像を編集しているとき、本を読んでいるときなどは、だいたい同じスピードで過ぎるのだけど、メールを含め「文」を書いているときに、自分としては数分前に時計を見たつもり

が、1時間経っていたというような奇跡（悪夢にもなる）が時々起こる。
いま出ている『群像』の初夏短篇特集がとても面白い。多くの作家が新型コロナウイルス後の状況を盛り込んでいて、小説家という人種が持つ手数の多さを感じ知った。特にいしいしんじさんの『息のかたち』という、ある日金属バットが頭に直撃したら、人が吐いた息の形と色が見えるようになってしまった女子高生の話が良かった。終わり方がとても良かった。
と、書いているうちにもう13時になってしまった。

7月16日 [木]

天気 | 夜まで曇りだという予報だったけれど、本当に24時まで曇りだった。それから雨
場所 | 東京都三鷹市中原のアトリエ

朝9時過ぎには起きて、10時過ぎにアトリエに着く。それから1時間ほど書く。文字数は見ていない。パンと目玉焼きの朝ごはんを食べて、また少し書き、昼からすこし金沢の作業をしようと思って色々出すが、先方に確認しないとわからないことが一つ判明し、手が止まる。
13時からインタビューを受ける。大学の友人の島田くんからの依頼。終わったら15時半になっていた。
「もうお金も仕事もなくなったとき、最悪どうするか？」という話題になる。インタビューアは、Uber Eatsをやればいいかなと言っていた。僕は、昔奈良で林業をやってるおじさんに「困ったら山谷か寿町に行け」と言われてから、山谷か寿町に行こうと思っているのだけど、一度山谷の仕事の仲介所に行ったときは入る勇気がなかった。本当に困ったら、あの建物に入ることができるのだろうか。
そのあと「餃子の満洲」に行って回鍋肉とご飯とビール。それからアトリエで少し寝てしまった。そのあと1通だけメールを送り、19時半ごろに涼ちゃんは自転車、

むはキックボードで吉祥寺へ。島田と3人で「おっちゃんの台所」という店で飲む。途中、亀ちゃんも合流。24時前には帰宅。

7月17日〔金〕

天気 | 最近ずっと肌寒いくらいの気温。しとしと雨。夕方までは降っていないかった
場所 | 東京都三鷹市中原のアトリエ

朝8時前に起きてすぐに出かける。駅のパン屋でベーコンエッグなんとかというパンと小さなパイを買い、8時半にはアトリエに来た。南瓜の雌花が二つ咲いていたので受粉させる。雨の日でも受粉していいのだろうか。アトリエに着いたはいいいけど眠かったので少し寝た。10時過ぎに起きて買ったパンを食べて書き始める。途中、冷蔵庫の食パンを焼いて、蜂蜜とクリームチーズをのせて食べる。パンばかり食べている。あと庭で取れたミニトマト二つも。それから15時半過ぎまで書く。21,300字。

そのあと電車で早稲田に行ってカレーを食べて帰ってきて、夜は島田くんととの交換日記をnote上で公開作業を行う。noteという文化があることを知る。この日記もそうだけど、最近日記をリレーしたり交換したりするのが流行っている気がする。mixiとか久々にやりたい。mixiの日記、消さなければよかった。いま読んだらさぞ面白いだろうに。

それにしても、最近電車の中でマスクをつけていない人をほとんど見なくなった。そのうちつけてないやつは人間ではないくらいの扱いになりかねない。「え！ちょっとあなた！ マスクは?」「おい！ こいつマスクをつけていないぞ!」「え！マスクをつけていない人がいるの?」「なんだって！ マスクをつけていない人がいるだって?」。

村上 龍〔アーティスト〕

2020/7/13 — 7/19

7月18日〔土〕

天気 | 夕方くらいまで降ったり止んだりしていた雨が夜には上がって、水気を少し含んだ空気の中を歩くのにはとても気持ちよい気候
場所 | 東京都三鷹市中原のアトリエ

夜アトリエのメンバー4人でバーベキューをして酒を飲み、心地よく家に帰り、歯を磨いてシャワーを浴びて寝た。

7月19日〔日〕

天気 | 晴れ、久々に晴れた。夜まで降らず
場所 | 東京都三鷹市中原のアトリエ

洗濯物を干してから、10時半くらいに家を出て、駅のパン屋でドーナツを買ってアトリエへ。野菜ジュースとドーナツと、昨日見つけた駄菓子屋で買ったきこ棒を食べたり、冷やし中華を挟んで、小説を24,600字まで書く。夜は金沢の展示プランを考える。沼にはまってしまった。200枚のサブロク板を配置するパターン。多すぎる。

庭の南瓜がなかなかうまくいかない。いくつか見込みのある奴もいるけど、長い梅雨でやられてしまっている。同じ理由で全国的に南瓜が不作らしい。全国の南瓜農家の苦勞が、うちの庭でも感じられる。すごいことだ。この南瓜は、普通にスーパーで買って食べた後の南瓜の種を植えたらでてきたものだ。発芽率は8割くらいあるんじゃないか？ 狩猟採集民族だった人たちが、種を植えて作物を増やす方法を発見したときの衝撃を追体験しているような気がする。

村上 慧 [アーティスト]

1988年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒。2011年友人と浅草にて「空鼠」を立ち上げ、「吉原芸術大サービス」などを企画。2014年から自作した発泡スチロール製の家で移動生活を行う「移住を生活する」を開始。2016年「瀬戸内国際芸術祭」「岡本太郎現代芸術賞展」、2017年「OpenArt Biennale」(Örebro)、「風を待たずに」村上慧、牛嶋均、坂口恭平の実践」(熊本市現代美術館)、2018年「집의 동사형 (家の動詞形) 展」(釜山現代美術館)、「変容する家」(東アジア文化都市金沢)、2019年「高松コンテンポラリーアート・アニエール vol.08 / 社会を解剖する」(高松市美術館)などに参加。著書に『家をせおって歩く』(福音館書店 / 2016年)、『家をせおって歩いた』(タ書房 / 2017年)がある。第67回産経児童出版文化賞産経新聞社賞受賞。

村上 慧 [アーティスト]

2020 / 7 / 20 ————— 7 / 26

村上しほり

都市史・建築史研究者



7月20日 [月]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅(兵庫県神戸市東灘区)から芦屋市山芦屋町へ

実家の猫が死んだ。コロナ禍の収束を待たずに、わずか2歳で逝ってしまった。先代(15歳没)、先々代(18歳没)のように長生きできなかった。家族に迎えた子猫の頃から元気いっぱいよく遊び育っていったが、突然食べられない状態になり、通院の日々が続くもひどく痩せていき、深夜に発作を起こして旅立った。活発さと身体の丈夫さは必ずしも直結しないと思い知らされた。生きていた間にもっと会いたかった。近くまで行っても家族へのコロナの影響を考えて、家には上がれずに数ヶ月経ってしまった。まさかこんなに早くお別れが来るなんて。元気に見えるのに健康に年をとれないなんて。原因がはっきりとしないままの若いうちの急逝は、こんなにも覚悟も整理もつかないものか。あとに残されて、これからの関わりをいつお別れしても悔いのないよう大切にすぐらいしかできないけれど、代わりがないのはわかっているつもり。どうか安らかに。そして、いつかまた。

2020 / 7 / 20 ————— 7 / 26

7月21日〔火〕

天気 | 晴れ

場所 | 自宅（兵庫県神戸市東灘区）

昨日大泣きして腫らした目が痛い。締めきり間近の校正に取り掛かるも目の調子が悪いと捗らない。少し歩いて気分を変えていこうと郵便局へ行く。外は暑すぎる。エアコンが消せない。コロナ感染者の数値を見て、梅雨は明けていないのだと聞いて、どことなく憂鬱な気持ちが戻らない。いま、ひたすらにバテている。

7月22日〔水〕

天気 | 晴れのち曇り

場所 | 神戸市文書館（兵庫県神戸市中央区）

この1年弱、「神戸市公文書アドバイザー」なる謎の肩書で働いている。先週の打ち合わせを踏まえて、デジタルアーカイブの構築に向けて条件整理を行う。図らずもコロナの影響で所蔵資料の非対面利用の必要性が相対的に上がったことで、数年後かと想定していたプロジェクトを先行して動かそうな状況になった。まだ何も決まっていないが、これが一過的な取り組みに終わらぬよう、今後も更新しながら用いられるよいもの・よいしくみを設えなければならない。とはいえ、資料管理の現場と方針を決める部署がイコールでないため、きっと一気には進まない。私にできることは、十分な多方面へのリサーチと提案、そして橋渡しだろうと思う。積極的に仕掛けていきたい。

外に出て仕事をすると気分転換になる。少し切り替えられた気持ちでいたが、帰宅すると頼まれた用事を一つ忘れたことに気づく。指摘されるまで思い出さなかったことからして、まだまだ週初のショックを引きずっているようだ。

7月23日〔木・祝〕

天気 | 曇り時々雨

場所 | 自宅（兵庫県神戸市東灘区）

世間は4連休の初日らしい。Go Toトラベルキャンペーンは昨日始まったというが、結局、このトラベルキャンペーンが何なのか、私にはよくわからないはまだ。そもそもこの状況で旅行をしようという人びとはキャンペーンなどなくても行くのでは、と他人事として思う。いまだれぐらい移動するのか、外食するのか、人と接触するのか、といった判断には個人差が大きすぎて、誰かの指図に従うのではなく自分で考えるのが妥当だろう。

私は、2日後に控えた転居に向けて書斎の箱詰めにも励んでいた。追加した段ボール30箱も部屋もあつという間に埋まっていく。時間が経って必要なくなった書類は処分するようにしているつもりだったが、普段手にとらないけれど思い入れのある嵩高いものが、意外と身の回りにあったことを知る。引っ越しのリミットは決まっているので、もう詰めることに励むほかない。作業に集中して、何も考えずに一日が終わる。

世間ではコロナ感染者の増加傾向が報じられている。今後どうなっていくのだろう。

7月24日〔金・祝〕

天気 | 雨

場所 | 自宅（兵庫県神戸市東灘区）

今日もとにかく自宅の梱包作業を続けた。私の担当は台所。暑い時期の引越しは初めてだ。冷蔵庫を限りなく空に近い状態にしなければいけないのは、長く続いた自粛生活の影響で食材を揃える習慣になっていたこともあって、かなりしんど

かった。台所の棚卸しをすると、物が多いという現状だけでなく、日頃から心がけているのに十分には管理できていないという残念な事実にも気づき、なんだか疲れてしまう。

外の様子がわからなくなるほどに作業に集中して、一日があっという間に過ぎて、何とか準備完了。今回の引っ越しは手分けして話しながら作業ができたことで、作業量は変わらない（むしろ一人暮らしよりは増えている）が、思いのほか気持ちが楽であった。誰かと話すことや、何気ないコミュニケーションをとることによる救いは大きい。

7月25日〔土〕

天気 | 雨
場所 | 自宅（兵庫県神戸市東灘区）

梅雨が明けず、朝から雨が降ったり止んだりする中での引っ越し開始。まごころパンダくんの仲間たちが手際よく捌いてくれて、2LDKの部屋からみるみるうちに荷物がなくなった。自分には持ち上げるのもやっとの大型家具や家電の重さにもまったく動じない、プロのお仕事を見た。

荷造りにも性格が出る。荷物の多さも全く違う。終盤に私の荷物が運ばれていたとき、本ばかりですね、と心の声を聞いた気がした。実際、何年も前から電子管理化を進めていても、なかなか書籍は捨てられない。本棚に収まっているのを見ているとそれほど多くない気がしていたけれど、箱に詰めるとそれなりの数量になった。

一日中立ったり座ったり、運ばれた荷物を開梱したりしていると、次第に効率よく身体を動かすことに集中して、頭が空っぽになっていく。^{ふくらはぎ}脹脛や前腕に疲れが溜まる。それを通り越して、作業が終了した20時頃には、足底がひどく痛んで立っ

村上市ほり【都市史・建築史研究者】

2020/7/20 — 7/26

ていられなかった。限界に気づかず最後に運んだPC入りの上を開けた箱を盛大に転がし、精神的なダメージを負うが、デスクトップは意外にも無事。思っているよりも頑丈なつくりで助かった。

7月26日〔日〕

天気 | 雨のち曇り
場所 | 自宅（兵庫県芦屋市翠ヶ丘町）

昨夜は、ここ数年で最も身体を痛めた状態で眠った。ここ最近の運動不足がたたっているし、翌日にも疲労が残っているだろうと想像したが、目覚めるとそれほど悪くない。回復している。静かで涼しく快眠できる環境を手に入れただけでも、もう引っ越した甲斐があるかもしれない。移った先は、周囲に迷惑をかけないように配慮しあっていることがすぐにわかるような大きな集合住宅で安心だ。

落ちついたニュータウンで育ったからか、周囲の音やにおいに敏感であることを自覚したのは、つい最近だった。暮らしてきた環境によって形成された感覚は、自助努力ではどうにも調整できないこともある。私の場合、たとえ室内が満足のいく部屋でも、便利な立地でも、窓を開けて電車の音が響くと心地よく感じられない。周囲の煙草の煙やにおいも気持ちのうえではまったく気にしていなかったけれど、ある時、急に肌や目鼻の不調として現れて、身体が耐えられなくなった。自分でも意味がわからないけれど、新幹線のおいや振動にもめっぽう弱い。それらは体調にも左右されるし、絶対的な診断があるわけではなく気づき難いが、大人になって親しい人たちと話すうちに、他者との差異として知っていったように思う。

今回の急な転居は、コロナ禍の在宅勤務による部屋数不足に起因しているが、家にいることが増えるとどうしても環境の細かなことに気づいてしまう。過敏にな

らず、気づきや感覚を上手に調整しながら、新しい場所での暮らしを楽しんでいきたい。

村上しほり [都市史・建築史研究者]

1987年生まれ、神戸育ち。2014年、神戸大学大学院人間発達環境学研究科人間表現専攻博士後期課程修了。博士(学術)。阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター、(株)スペースビジョン研究所などの勤務を経て、2019年より大阪市立大学大学院 客員研究員。戦後神戸の闇市をめぐる主体についての研究から、近年は占領期の地方都市の都市空間の解明に向けて調査・研究を行う。著書に『神戸 闇市からの復興—占領下にせめぎあう都市空間』(慶應義塾大学出版会、2018年)ほか。芸術分野と連携したプロジェクトに「"KOBE"を解す—せめぎあいにみる神戸の都市史」(2016年/KIITO)、「"KOBE"を語る—GHQと神戸のまち」(2018~2019年/KIITO)など。

村上しほり [都市史・建築史研究者]

2020 / 7 / 27 ————— 8 / 2

きむらとしろうじんじん

美術家



7月27日 [月]

天気 | 曇り時々雨、静岡では時に豪雨

場所 | 日中は静岡、夕方から京都自宅

静岡での野点開催に向けてのお散歩会・説明会・ミーティングを終えて、京都の自宅に帰る。ロクロでお茶碗の高台を削る作業。

さて、日記ということで始めるのですが、実は今まで日記というものを書いたことがない。でも、日々書き留めている言葉は沢山ある。それは「野点」に関して、「地域の子供と大人のあそび場・作業場作り」に関して、各開催地域の方々や主催者・スタッフ・現場を共にしてくれる人たちとメールで交わしている膨大な言葉。それが僕の日記であり、日常。

毎日、野点の現場のこと、開催地域、その風土、人々、風景のことを考えている。2011年の震災の時もそうだった。直後に考えたのは仙台の〇〇さんや〇〇さんのこと、青森の〇〇さんのこと、東京の〇〇さんや〇〇さんのこと……。か

2020 / 7 / 27 ————— 8 / 2

れらと連絡が取れて、初めて頭の中が少し具体的になって、ただただ観念的な理屈と漠然とした不安だけが膨れ上がっていく状態から脱出できた気がする。そして、震災後に野点でお邪魔するようになって、岩手の大槌や釜石のことを考えることもまた僕の日常になった。

その土地の具体的な人のこと風景のことを思い浮かべながら、話しながら、考えながら、ロクロをひいたり窯を焚いたり、作業する。

というわけで、最近の日常は「このコロナ禍における大槌や釜石や仙台や村田や金ヶ崎や静岡や山谷や谷中や西成や亀岡や鳥取や用瀬や豊中の人々のことや風景のことを考え、色んな方々とやりとりすること」。ず〜っと、そのことを考えている。

だから、それしか書くことないなあ、と思う。

静岡から帰って来たばかりなので京都に居るけど、考えてるのは静岡のこと。午前中、市の担当者・財団の担当者・プロジェクトの代表者・美術館の担当者の方々と秋の野点の現場を「この状況下」で開催するにあたって、現場のしつらえ、作業の段取り、スタッフや立ち寄ってくれる方々への相対し方など、それぞれに関して具体的にどのような対策をとるか？ どうすれば実施可能か？ などを細かく具体的に検討・擦り合わせをして帰ってきた。すごく重要な、ええミーティングだった。

出ました〜「この状況下」(笑)。

「この」って、どんな状況なんだろう？ コロナ禍を「的確に対象化して捉えるこ

と」なんてできるんだろうか？ 科学という意味でのウイルスの分析は進むんだろうけど、どうも、そういう話じゃない気がする。むしろ、分析して僕(ら)は何をしようとしているのか？ の話。

20年前に幼稚園や小学校の門に監視カメラが一斉に付き始めたときも、2011年の震災のときも、そしてこのコロナ禍でも感じること。

大転換期だ、みたいな話は、どうもしっくりこない。自分のおなかに落ちない。

でも、とにかく、今どんな話をしておくかが、この先の人間関係や街の懐の深さを作っていくのだろうという予感はある。それは多分ガイドラインの話や感染者の数の話や生命に関する紋切りスローガンの話とは違うんじゃないかしら？ (いや、なんか、それでは足りないと感じるのです)

自分は何をもって生としているのか？ 何を命としているのか？ という所まで掘らんとあかんのちゃうかなあ……。色んな人と話をしておきたいなあ、と思っている。

7月27日[火]

天気 | 曇り時々雨、時に豪雨

場所 | 終日京都の自宅

東京・山谷バラエティーロードの主催者・スタッフと Zoom ミーティング、それ以外は終日お茶碗の高台削り作業。

この3月14日に、ある野点開催地の友人宛に送ったメールを以下引用します(個人名は伏せて、長〜いので一部省略)。

きむらとしろうじんじん[美術家]

2020/7/27 — 8/2

新型コロナウイルスをめぐる今回の騒動（と呼んでいいのかな？）

僕にとっては HIV・AIDS の NGO 活動をしていた頃のことをフラッシュバックし続ける経験となっています。ウイルスの話が、どんどんイメージと道德観の話の方にスライドしていく。感染した人はウイルスとの闘い（あるいは共生）ではなくイメージとの闘いを強いられる。そして始まる「犯人」探し。きっと「絶対安全」と「撲滅や制圧」がスローガンになっていくのでしょう。

人間は大昔から（定住・農業・人口増以降という但し書きはつくとは思いますが）ずっと、無数のウイルスや細菌・微生物を交換し合いながら生きてきた……もちろんそれは手放しで喜ばしい関係なんてものではなく、最初から人間と共生するウイルスもあれば、人間を攻撃してしまうウイルス、広がりや時間の経過で人間が免疫を獲得して共生に移行したウイルス、様々であり、これからも恐らくそう……人が場を共にするということは、ミーティングしてるだけのことで、御飯を一緒に食べてることも、セックスも、ただ隣に座ってることだけでも、お互いの持ってるウイルスや細菌の交換とイコールです。僕と〇〇さんとの会話は、お互いの意見交換でもあり、ウイルスや微生物交換でもある。

それを全部やめちゃうのか？

どこまでやめるかの正解なんてあるのだろうか？

「絶対安全」なんてことを（それは人間の・生命の全否定にも等しいと僕は思うのですが）簡単に目的化しちゃっていいんでしょうか？

もちろん感染をできるだけ抑えることには意味があるし、医療崩壊が起こってはいかん。

でもね、と、どうしても思ってしまうのです。

ここから先は多分、人間観や生命観・死生観にも関わることだろうと思うので、安易に誰かに同意を求めてはいけない領域の話だと思いますが。

これ以上、（自分自身も含めた）人間が「直接出会い、場を共にすることを嫌う生き物」になっちゃったら…僕は嫌だなあ〜…です。どうやって生きていっていいのか（まあ、今でもわかってませんし、もうかなりの歳なんですけど・笑）わからん。

「無菌の人間（いないですけどね、そんな生き物）」による「絶対安全な行為」だけが「公共として許される」

目指すは絶対安全・完全無菌の、でも多様性のある社会…なんて…もう全然笑えない冗談。

（引用ここまで）

—

あれから5ヶ月経ちましたが、基本的にはこのメールを書いた時と気持ちは全く変わっていないなあ、と思う。

人間が「直接出会い、場を共にすることを嫌う生き物」になっちゃったら……僕

は嫌だなぁ〜……です。

この、なんとも個人的で、感情的で、身勝手で、のんきで（僕にとっては、ほんまに切実なんだけど……）、きっと公共心や危機感が足りない！ と怒られそうな、でも、身体の芯から感じてる「嫌だなぁ〜」を、おずおずと、でも大切な基準にしようと思っている。

7月29日 [水]

天気 | 曇り時々雨

場所 | 日中は京都市内に外出、その後自宅

日中、友人のお店（ごはん屋さん）にお邪魔して、沢山の世間話と野点のツアー前作業の手伝いスタッフ集めについての相談。その後お茶碗の高台削り作業。

昨日の「嫌だなぁ〜」の続き。

徹底的に「悔しがって」「惜しみ」たいと思う。失われるかもしれない（と僕が勝手に恐れている）状況にあるもの・こと・感覚を。
一つ一つ時間をかけて、とことん惜しんで、悔しがって、それが存在し続けられるよう手を尽くしたい。

道ばたで人がうっかり出会って機嫌良くなってしまうこと。思わず起こる越境と摩擦。見知らぬ人と世間話したり、場を、ときには作業を共にすること。論理に基づいた価値が担保されていなくても人やものごとが存在できる場所。意味に囲い込まれていない余白。つまり「路上」。偶然やなりゆき。本来計測解釈なんてで

きむらとしろうじんじん [美術家]

2020/7/27 — 8/2

きない、その場の光、風、匂い、肉感、質感、音、人々の様子も含めた風景全て。論旨やスローガンの共有ではなくノイズの分有。縁や運という素晴らしい言葉でしか言い表せないこと。勘違いや「まぬけ」なことも全部。その場を観念的にではなく「具体的に」共にしていないと起こりえない心身すべてを使った交歓・交感・交響……もちろんかすりもしない寂しい時間も含めてね。

新型コロナウイルスが登場する「前から」風前の灯だったものが、とどめを刺される気配。どんどん狭められていく余白がついに消滅して、かわりに広がる無限の液晶画面。自分の大好きな現場や風景や作業が消えそうでムキになってるおっさんの杞憂の可能性大。いや、そうだったらええなぁ。そんな簡単になくなるわけではないじゃん、って楽観する自分と、自分も含めた人間の感覚の変化によってあっという間に消えてしまいそうな予感に、マジで恐怖を感じる自分。

ウイルスによって失われるのではないですよ。それを僕（たち）がどう捉えるか、が起こす社会的な状況や空気、自分（たち）自身の感覚の変化によって失われていく、という言い方の方が正確だと思う。コロナが奪うわけじゃない。僕（ら）が勝手に失うのだろう。

このまま自分も含めた人間がどんどん人と直接出会うことを避けるようになって、人と人が直接出会うことによって起こりえるありとあらゆることを事前に予測・解析して、出会ってもいい安全な（とされる）人を、出会ってもいい安全な（とされる）場所を、どこまでも精密に選別できるようにしようすることは、何をもらし、何を失わせるのか……それをじっくり考えたい。

何を惜しむかっていうことでしか、現れてこないことがある。

「新しい○○」や「変わらなきゃ」なんてこと（脅迫）については、「失われそうな大事なことを十分惜しんで、実践できることはして、それから」ですわ。

大仰に考え過ぎかなあ〜。頭冷やした方がええよ、とも思う。

変わっちゃえばいいのに、無くなっちゃえばいいのになって思ってたことも沢山あるんだけど、そういうもの・ことに限って残りそうで、イライラしたりして（笑）……いや〜、ほんまに身勝手。

避けがたい根本的な変化は、きっと「僕にとっての大事なこと」には関係なく、じわじわ、もしくは突然、勝手に起こっちゃうんだろうね。そりゃ、もう、しょ〜がない。

惜しんで、ジタバタする。

7月30日 [木]

天気 | 朝方豪雨・そのち曇り時々雨
場所 | 終日京都の自宅

岩手・釜石での野点に関しての Zoom ミーティング、その後お茶碗の高台削り作業。リモートでのコミュニケーションには決定的に欠けているものがある。それはコロナウイルス。コロナウイルスが「無い」という安心感の下でしか関係を結べない・出会えない・コミュニケーションできないという感覚が、このままどんどん進行していったらどうなっちゃうんだろう？ 僕にはその方がずっと深刻なことのように思える。もち

きむらとしろうじんじん [美術家]

2020/7/27 — 8/2

ろん取り囲まれている環境や情報や町の状況によって、意見（いや、身体感覚？）は分かれるんだろうけど、今の僕はそう感じている。

現実存在するウイルスのことを「無いように振る舞えることが安心な正しい状態」だと感じることは、現実にいる人やあることを「無い」ことにして成立している世界と相似形のように思える。考え過ぎかしら？ なんちゅうか、根源的な生命を否定しながらヒューマニズムだけは表面的にスローガンにしているような……どうも気持ち悪い。

「遠い」っていうのは「遠い」ってことだし、「近い」っていうのは「近い」ってこと……ああ、とっても大事なことだ、と感じたのは2011年の震災のときでした。

マスクして、ビビりながら、相手がどう感じているのかを不安に思いながら、恐る恐る、人とできるだけ会って、場を共にしてやることを（誠に勝手ながら）これからも自分の杖にしていこうと、現時点では、思っている。

コロナウイルスの話はおもしろい。必ず重要なことにつながる話になるから。

先月、大阪・西成の現場再開のための滞在中、飛田という遊郭街の北隣の商店街のアーケードを歩いていると、向こうから3人組の女の子が歩いてきた。普段着なんだけど、なんか目立っていて、どうしても目が行ってしまう。どうやら（僕が勝手に見て取ったところでは）飛田で働いているらしい3人は、歩きながら身体を揺すって大笑いしながら話している。すれ違うときに聞こえた会話。「裸にマスクはやばいわ〜（笑）」「そりゃ、ヤバいわ!!（3人とも爆笑）」。
彼女がマスク着けてたのか？ 客が着けてたのか？ そもそも、彼女たちは飛田

で働いているのか？ 心から笑ってたのか？

わかりません。僕の見立てが間違ってたなら、ほんまごめんなさい。

でも、通り過ぎてから一人でめっちゃ嘔み締めて、その後一日中、なんか（誠に勝手ながら）じわ〜んと、よかった。

そのとき頭に浮かんだ「まぬけな風景」を（誠に勝手ながら）大切にしよう。

7月31日〔金〕

天気 | 晴れ・久しぶりの夏の暑さ

場所 | 終日京都の自宅

明日からの大阪・豊中でのお散歩会・説明会の準備。ロクロ作業、高台削り。

昨年度コロナ騒動が始まったとき、僕の場合は「直接コンタクト」がプロセスでもあり、結果・成果でもあり、最大の喜びでもあり、仕事でもあり、唯一の(?) 職能でもあるので、あっという間に「陸へ上がった河童」状態になった。さあ、現場の予定が全く立たない状況で準備作業なんて始められるのかしら? と思ったのですが……いざロクロをひいてお茶碗を作り始めると……作業はできちゃう。しかも、まあまあ機嫌良く(笑)。変えられないのか、変えたくないからなのか、多分両方なんだろうけど、とにかく変えようにも変えられない「具体的な」習慣や作業に自分の精神が支えられていることを強く感じている。「新しい生活様式」っていう言葉がほんまに腑に落ちない。

きむらとしろうじんじん〔美術家〕

2020/7/27 — 8/2

ソーシャルディスタンスって概念は、幼稚園の入り口の監視カメラや、公園のベンチにおっちゃんが寝ないようにくっつけられている不細工な金属ハンドルみたいなものと似ている。

そもそも、新しいか、古いか、という論理に自動的に織り込まれている「脅迫」が嫌いだから、ということもあるけれど、

それ以上に、もしほんまに変わらなあかんことあるとしたら、それは新しい○○なんてことではなく、人間が人間自身のあり方を対象化して解析・制御・改良できると思い込んできた(今も思い込んでいる)「遠大な勘違い」の方なんじゃないか……という思いが強いから。人間がウイルスや人間自身を含むこの世界? 自然? コスモス? 生態系?(何と言って表すのかわからないけど)を対象化して共有すべき価値観やグランドデザインを……という思考回路の方がいいよ糞詰まってるんちゃうか?……と。

その意味では、転換期という考え方やテクノロジーによる適応は、むしろ、今まで通りの考え方・やり方の延長線上という意味では何の変化も無いよなぁ?……と。

もちろん、その「遠大な勘違い」の積み重ねの上に僕は立ってるんだし、じゃあ、どうすんねん? と問われたら、そんなもんわからんわ、なのだけれど。

コロナウイルスの話は、最終的には「何をもって生命としているか」の話にたどり着いちゃう。だから、重要だし、おもしろいし、でも、しんどいのだと思う。自分が何を生と命と呼んでいるかを一気に問いつめられているように感じるから。

○○ちゃんや○○さんの身体のこととはとても心配だ。機嫌良く元気でいて欲しい。でもそれは、絶対コロナウイルスに感染しない状況にいて欲しい……ということとは、僕の場合は、はっきりと違う。ウイルスを軽視しようとは思わないし、実際にびびってるし、医療崩壊が起こったらほんまにいかんと思う。それでも（だからこそ）ウイルスや感染者をゼロにするためではなく、感染が起きたときにお互いどうふるまえるのか、どんな関係を作れるのか、そのために今のうちに色んなことを話しておきたいと思う。

「生命は大切」というスローガンの生命って何のことなんだろう？ 脳が動いて、心臓が動いて、息してる……そのこと？

人の命を大切に思ってるの？ 思っていないの？ という二者択一の質問は「ほんまの質問」なんだろう？

最終的にはウイルスも感染者もゼロにすることが正解、という前提での「問い」に包囲されちゃった感覚。

他人の生命を大切に思うことと、他人の生命を勝手に人質に取ってスローガンにすることは全く違うと思う。生命全般に対して責任を感じるというのは、なんか、すごく思い上がったことのように感じる時がある。いや、結局ただのエゴ丸出しの自己弁護かなあ？ でも、やはり、他人の生命を「勝手に理由に」しちゃいけないんじゃないかしら？

何を生とするか、何を命とするか、何を生の根幹とするか、何を命の根幹とするか「こそ」、ほんまにそれこそ、それだけは、「自分」のものなんじゃないかしら？ 「そんな、おまんまが不味くなるようなこと考えたくもないわ」であれ「そんなも

ん、なりゆきやで」であれ、何であれ。僕は（最終的には「そんなもん、なりゆきでしょ」って言いたいんだけど）せっかくなんで、もうしばらく粘って考えてみたい。もちろん一人では考えられない。でも「みんな」で一斉に結論出したり、「誰か」に結論出してもらうことじゃ～、ない。

8月1日〔土〕

天気 | 晴れ・猛暑日

場所 | 終日大阪・豊中

丸一日、豊中野点の説明会&お散歩会&妄想屋台の相談。マスクをして「暑いわ～」と言いながら、ビルに逃げ込んで冷房にあたりながら、公園の水路に足を浸しながら、豊中の街の魅力的な開催候補地を見て歩く。そして、じんじん・主催者・スタッフ希望者・妄想屋台での参加希望者、それぞれの現時点での疑問点も不安な事もできるだけテーブルの上に出しながら、コロナ禍での秋の野点&豊中プチ妄想屋台祭りをどんな場にするかを具体的に検討・相談。

先月の豊中でのお散歩会。十数人で豊中駅前（かなり大きな駅前です）を歩いている時に、お父ちゃんと一緒に参加していた3人きょうだい（毎年お散歩会にも野点の本番にも参加してくれてる）の一番下の4才の女の子が、急に歩道にしゃがみ込んで敷石の一角を人差し指でつんつん押して、嬉しそうに僕らの方を見上げて「これっ、押せるよ～!!」と言って笑った。「え、何？ 何が押せるの？」と近づくと、敷石と敷石の間の十字路に直径が十円玉ぐらいの透明な樹脂製の円柱が埋め込まれていて「下に電話線が埋まってますマーク(?)」が付いている。たしかに、なんか、透明のちょっと格好いいマーク付き押しボタンのように見える。「ねえねえ押せるよ～!!」……僕もしゃがんで押してみたが、堅い樹脂なのでほとんど

きむらとしろうじん「美術家」

2020/7/27 — 8/2

凹まない……けど確かにちょ〜っとだけ押せるような感触もある。彼女と僕だけでなく、小学生のお兄ちゃん・お姉ちゃんもしゃがみ込んで「ねえねえ、押せるよね〜(妹)」「うわっ、ほんまや、押せる〜!!(兄・姉、興奮)」「う〜ん、ちょっとだけ押せるかなあ(僕)」「ぜったい押せるよ〜(妹)」……だんだん路上に人が集まってきた。彼女は集まってきた見ず知らずのおばちゃんにも通りすがりのおっちゃんにも「ねえねえ、これ押せるよ〜!!」

いや〜、心の底からあの変な「ボタン」になりたいわ(笑)、で、押されたい。

やっぱ、恐る恐るであろうが、マスクをしながらであろうが、2m 離れようが10m 離れようが、いや〜不安だよね〜って言いながらも、会って、場を共にできた方が僕には「気持ちいい」。不安なまま会う練習しようよ。だめ?(誰に聞いてんだろう)

こんな状況だから、心配事の話の量が増えちゃうけれども、それでもちよつとつ具体的な話をする。ちゃんと時間をかけて。生命を十把一絡げにした話でなく、不安を持った個々人同士の話を。物理的条件についても精神的な条件についても話しながら具体的な場のしつらえを相談して、準備する。「コロナ禍に対する不安を持ったまま実現する、すんばらしい直接コンタクトの現場」を思い描く。

8月2日[日]

天気 | 晴れ・酷暑

場所 | 終日大阪・豊中

昨日に引き続き、豊中野点の説明会&お散歩会&妄想屋台の相談、全6回の最

終日。「熱中症注意!」を合い言葉に最後のお散歩。昨日の日記で書いた「押せるよ〜」の子供たちは今回お父ちゃんだけでなくお母ちゃん&おばあちゃまと一族で参加。

午前中は一番の候補地・豊中稲荷神社の下見をして横の公園で「けいどろ(警察泥棒おにごっこ)」。午後は、今までの散歩で僕も含めてみんなが一番惚れた場所である千里川の魅力的な土手と河原を下見して、橋の下で「メダカとり」。最後にもう一つの有力候補地、池や小川がある広〜い久保公園で「セミ取りとすべり台」。今日が初参加の小学生の男の子も、みんなと一緒に水浸しで遊んだ。帰ってきて最後の「開催場所絞り込みのミーティング」。これからの方向性を確認して「じゃあ、秋に現場でね!!」と解散。

「現役の」公園や河原や路上が多い町はほんまに気持ちいい。子供でも大人でも、そこに愛着を持っている人、その風景に対して感情が(喜怒哀楽、何でも)動いている人がいれば、それが現役。風景に対して感情が動いているから反応がある。ほめられたり怒られたり心配されたりできる。現役だから柵が低い。現役だから言い訳の論理で価値を担保しなくていい。現役だから意味や主旨を囲い込まなくていい。現役なら監視カメラはいらないと思う。風景は人に影響を与え育み、その人のありようもまた人に影響を与え育む風景だ。そうあれかしと願う。ノイズカットしちゃだめだと思う。

京都に来て35年ずっと風呂ナシなので、今も銭湯通い。コロナ禍になって銭湯の雰囲気も刻々と変化し続けている。僕自身の作法もきつと少しづつ変化してるんだろう。すっかり来なくなっちゃった人もいるけど、ずっと同じペースで来てる人も多い。緊急事態宣言が出ている間は、相変わらず普段通りの人もいれば、洗い場に入るギリギリまでマスクを着けて、出てきたらまた大急ぎでマスクを着け

きむらとしろうじんじん[美術家]

2020/7/27 — 8/2

てからちゃちゃっと身体を拭いて大急ぎで帰る人もいた。やっぱ、みんな無口だったよなあ〜。でも、宣言が解除になったら急にマスク外して来て、めちゃめちゃ脱衣所で話し込んでる人たちも。でもって、またテレビで深刻な報道が増えてくるとちょっと帰るのが早くなったりして……とはいえ、洗い場に入れば2mも距離なんて空けないし、おんなじ湯船につかって、挨拶もするし、世間話もして……湯船で手足をのばすと「まあまあ、しゃ〜ないわ」となってしまう。そうじゃない人も居ると思うけどな。

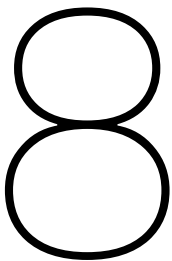
銭湯がなくなったら、もうあかんやろ（と誠に勝手ながら思う）。

「人間の根本的なまぬけさ」はめちゃめちゃ大事だなあ〜、と誠に勝手ながら思う。

きむらとしろうじんじん [美術家]

1967年新潟生まれ。現在京都在住。1995年より、その場で絵付けをして、楽焼きという方法で焼き上げられた自作のお茶碗で、その土地の、その日そのときの風景の中でお茶を楽しむことができる移動式陶芸お抹茶屋台「野点^{のちて}」をスタート。以来、様々な土地の路上・路肩、公園や河原、空き地や刈り入れ後の田んぼ、神社やお寺、個人宅前や駐車場などさまざまな場所で行っている。

きむらとしろうじんじん [美術家]



2020
AUGUST

新型コロナウイルス
新規感染者数
(2020年8月1日現在)

国内：1,535人
東京都：472人

- 4日 - レバノン・ベイルートにて爆発事故発生。
被害は人口240万の大都市の半分に及び、港は壊滅
- 6日 - 広島への原爆投下から75年
- 9日 - 長崎への原爆投下から75年
- 10日 - 香港警察、香港国家安全維持法に違反した疑いで、
民主活動家・周庭氏や『リンゴ日報』の創業者・
黎智英氏らを逮捕
- 12日 - 日航機墜落事故から35年
- 15日 - 75年目の終戦記念日
- 20日 - 広島土砂災害から6年
- 23日 - アメリカでジェイコブ・ブレイク氏が警官に
背後から複数回銃撃される事件が発生
- 28日 - 安倍晋三首相が辞意表明

2020 / 8 / 3 ————— 8 / 9

岡村幸宣

原爆の図丸木美術館 学芸員



8月3日 [月]

天気 | 晴れ

場所 | 原爆の図丸木美術館 (埼玉県東松山市)

数日前まで降り続いた雨の影響で、美術館の隣を流れる都幾川の水は、例年になく増えていた。

写真家・映像作家の新井卓さんの率いる撮影班が、朝いちばんに来館する。丸木美術館にとって、8月は年間でもっとも来館者の多い時期だ。しかし今年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、気軽に「来てください」と言えない。8月6日の「ひろしま忌」のイベントも中止となり、被爆した死者たちを追悼する「とうろう流し」だけを行うことになった。そのため、せめてオンライン動画でメッセージを発しようと考えている。

4月9日から6月9日にかけて、丸木美術館は臨時休館を余儀なくされた。その間に立ち上がった緊急支援の寄付は、6月末現在で国内外から5,800万円を超えるほど集まった。寄せられたコメントに目を通していくうちに、この美術館には、実際に訪れる方だけでなく、簡単には来られないけれども支えたいと思って

2020/8/3 — 8/9

いる方が大勢いるのだと痛感した。今まで見えなかった／見てこなかった人たちと、国や言葉の境界を超えて、「原爆の図」を支えていく手応えを共有できるのか。それは今後の美術館にとって、重要な課題となるだろう。

「原爆の図」の前でカメラがまわり、新井さんから投げかけられた質問に言葉を探す。「75年は草木も生えない」と言われた原爆投下から、75年の歳月が過ぎた。多くの人が紡いできた言葉の蓄積を糧にしつつ、今この瞬間でなければ発せない言葉を見つけない。それは決して簡単ではない試みだ。絵を前にして、何度も沈黙の時間が流れた。

午後の撮影では、丸木俊の姪で絵本作家の丸木ひさ子さんが、とうろうに絵を描き、川に浮かべた。たったひとつのとうろうの灯。下流で待ち受け、流れてきた灯をつかまえる。夕闇の近づく空を、オハグロトンボがすべるように飛んでいく。

8月4日 [火]

天気 | 曇り

場所 | 自宅 (埼玉県川越市)

家の前に植えた檸檬の樹のまわりを、アゲハチョウが飛んでいた。美しい光景だが、産みつけられた卵が孵化すると、幼虫は葉を食い荒らす。かわいそうだが、幼虫は見つけ次第取り除かなければならない。朝から命の選別をしている。

午前中、書斎にこもって、直近に迫った「原爆の図」の講演会の準備を進める。体験者の減少にともない、近年は、原爆の記憶の継承が重要な課題とされている。しかし、他者の記憶をどう「継承」すればよいのか。厳密に考えれば考えるほど、その困難を痛感する。それでも絵の前に立つことの意味を、どう考えたら良いのか。過去と現在、そして未来へと思考を往来させながら、「原爆の図」をはじめとする他者の記憶を、どのように生かしていくのか。簡単に答えが見つから

岡村幸堂「原爆の図丸木美術館 学芸員」

2020/8/3 — 8/9

ない問いを、聞き手の皆さんに投げかけたい。限られた時間のなかで、果たしてうまく話せるかどうか。

午後は丸木美術館へ。夏休みに入って、来館者は増加傾向にある。感染症対策も気になるが、都心の美術館・博物館に比べれば、まだ「密」というほどではない。館内をまわり、砂守勝巳写真展「黙示する風景」の会場で足をとめる。2月下旬からはじまった企画展は、臨時休館をはさんで会期を延長し、8月末まで開催することになった。11年前に死去した写真家のまなざしで捉えた釜ヶ崎、広島、雲仙、沖縄。美術批評家の榎木野衣さんが選んだ写真は無人の街が多く、期せずして現在の社会を想起させる。例外なのは釜ヶ崎で、路上で酒を飲み、倒れて眠り、あるいは座り込んで笑いかける人々の表情に心が安らぐ。高齢化の進んでいる釜ヶ崎は、この疫病の時代にどんな状況になっているのだろう。

8月5日 [水]

天気 | 晴れ

場所 | 都幾川 (埼玉県東松山市)

午前中、都幾川で、とうろう流しの準備を行う。地元のボランティアの皆さんが、川へ続く道の草をきれいに刈ってくださっている。

模擬のとうろうを浮かべて、川の流れをチェックする。川の表情は毎年変わる。例年であれば、下流の瀬でとうろうはゆっくりと動きを止めるが、今年は水量が多いので、勢いに乗って流れていく。とうろうを回収する若者たちには、十分注意するよう伝えなければならない。岸辺に石を集めて、とうろうの流し場所の足場を固める。草刈りボランティアのIさんは、とうろうが途中で岸辺の草に引っかからないように、竹を使って誘導路をつくってくれた。白く熱い日差しが、川面に反射してまぶしい。汗が噴き出て、首に巻いたタオルを濡らす。ようやく本格

的に夏が来た、と実感する。

午後はテレビ朝日のニュース番組の撮影班が来館し、臨時休館の経緯と緊急支援についての取材を受けた。閉館後にはNHKのラジオ番組「Nらじ」の電話インタビューを受ける。「原爆の図」の説明からはじまり、今の時代に「原爆の図」を見る意味、次の世代に伝えるための工夫、丸木美術館の「場」としての役割など、いくつかの質問に答えていくうちに、あっという間に15分の生放送が終わる。夜、新井卓さんから、3分程度にまとめた「ひろしま忌」配信用の動画が届いた。丸木ひさ子さんの温かい人柄が伝わってくるメッセージ。明日のネット配信の準備を整えて、早めに眠りにつく。

8月6日[木]

天気 | 晴れ

場所 | 原爆の図丸木美術館(埼玉県東松山市)

ひろしま忌。原爆が投下された時刻である8時15分は、毎年、美術館へ向かう電車の中で過ごす。スマートフォンで時刻を確認し、Twitterの「1945ひろしまタイムライン」を見る。もし75年前にTwitterがあったら、という設定で、実在する3人の日記をもとに、実際の時間とシンクロしながら投稿が行われるというNHK広島放送局の企画。仮想空間に、決して追体験のできない「そのとき」が訪れる。顔をあげると、車窓の外には穏やかな田園風景が広がっていた。例年であれば、朝から汗だくになって駆けまわり、イベントの準備や進行、片付け、来客の挨拶などに追われる。しかし今年は、午後からぼつりぼつりとボランティアが集まり、夕方のとうろう流しに向けて、ゆっくりと時間が流れていく。本当は、ひろしま忌は静かに過ごす方が良いかもしれないね。受付のM子さんと、そんな話をする。今年はできないことが多いので、何をいちばん大切にするのか、

岡村幸堂「原爆の図丸木美術館 学芸員」

2020/8/3 — 8/9

立ち止まって考える機会が多い。

夕方、原爆観音堂の前で黙祷。それぞれ自作のとうろうを持って、都幾川へ下りて行く。映像作家の藤井光さんや、砂守勝巳の娘の砂守かずらさんも、お子さんを連れて参加してくださった。子どもたちは嬉しそうに、川の中へ入っていく。追悼にしては賑やかな雰囲気だが、ろうそくに灯をとると、時間と距離を超えて75年前の広島に接続する気がする。とうろうを流し終えると、子どもたちは川に向かって小石を投げ、水切りをはじめた。腕に覚えのある「名人」のIさんが、コツを伝授している。下流の方では、水着に着替えたボランティアの若者たちが、ときおり泳ぎながら、流れてくるとうろうを次々と回収している。

カナカナカナカナ……ヒグラシの鳴き声が、木霊のように響く。

8月7日[金]

天気 | 晴れ

場所 | 原爆の図丸木美術館(埼玉県東松山市)

美術館の前のクヌギの大樹に、雄のカブトムシが一匹とまっていた。ひろしま忌が終わっても、丸木美術館の日常は続く。「原爆の図」はいつもと変わらず、天窓から差し込む自然光に照らされている。誰でも、ここに来れば「原爆の図」を観ることができるように、美術館の扉を開く。今年の春、臨時休館を決断するときは、その判断が正しいかどうか、最後まで悩んでいた。今は逆に、感染者数だけ見れば春先より状況が悪化しているので、このまま開館し続けて良いのかと迷いながら、日々を過ごしている。午前中、実習生やボランティアのHさんといっしょに、とうろう流しの後片付けをする。回収されたとうろうの残骸を解体し、紙は捨て、板やろうそくは翌年のた

めに残しておく。テントや看板を物置に運んで片づける。たまったゴミを可燃と不燃に分別して、事務職員のYさんがワゴン車で市のゴミ処理場まで運んでいく。午後は、毎日新聞の夕刊に連載中の原稿をまとめ、担当記者に送る。丸木美術館のコレクションを紹介する全6回の企画。最初の2回は「原爆の図」を取り上げたが、今回は丸木スマの《めし》を選んだ。

丸木スマは丸木位里の母親。70歳を過ぎてから、子どものように伸びやかな絵を描きはじめた。《めし》は、ネコのような小さな生きものたちが数匹集まって、画面中央に置かれた皿に頭を突っ込み、餌を食べている様子を描いた絵。この絵の光景は、今風に言ってしまうと「密」である。それでも、先の見えない時代に生きる力を皆でシェアしたいという思いを込めて、紹介することにした。

8月8日〔土〕
天気 | 曇り
場所 | 自宅（埼玉県川越市）

少しは休みをとるように、とM子さんに言われて、完全休養の一日。午前中、散髪に行き、駅前の書店に立ち寄る。帰宅後、明日の講演会に向けて、最後の準備。童心社の広報誌『母のひろば』のグラ校正。新井卓さんから、ながさき忌に配信するための5分ほどの動画メッセージのデータが届く。

夕方、画家の吉國元さんが家に訪ねてくる。吉國さんは親の仕事の関係で、1985年にジンバブウェに生まれた。10歳で日本に移り住み、今は、記憶の中のアフリカの人たちと、日本に来てから出会ったアフリカ出身の人たちの肖像を、油彩や色鉛筆で描いている。肖像はそれぞれ額装されているが、その小さな額入りの絵が連なり影響し合って、大きな連作になるという興味深い構造。今春、川越のスペース NANAWATA で開催した展覧会には「来者たち」というタイトルを

岡村幸堂「原爆の図丸木美術館 学芸員」

2020/8/3 — 8/9

つけた。

「来者」という言葉は、詩人の大江満雄がハンセン病者について「癩者は来者である」と書いたことに由来している。吉國さんは、来者＝境界を超えて来た人との出会いに希望を感じ、「ジンバブウェに始まり、そして今も生まれようとしている、ずっと先の未来へと連続する生の顕れ」と読み替えて、展覧会のタイトルに引用した。そんな話を聞いたのは今年のはじめだったか。その後、「境界」や「距離」という言葉は、いつの間にか異なる意味をもって、私たちの日常に迫るようになった。

吉國さんの話す近況と新作の構想に耳を傾ける。先の見えない時代はしばらく続きそうだが、人は生きる時代を選べない。むしろ混沌の時代にこそ、歩む道が定まることもあるのかもしれない。

8月9日〔日〕
天気 | 晴れ
場所 | OGU MAG（東京都荒川区）、成田市文化芸術センター（千葉県成田市）

ながさき忌。午前中、田端のギャラリー OGU MAG に立ち寄る。会期最終日を迎えた「Reimagining War」は、奥山美由紀、小原一真、木村肇、林典子という4人の写真家の、今も戦争と地続きにある物語を記録した展覧会。

旧知の木村さんから、林さんを紹介される。林さんは、1959年から25年ほど続いた朝鮮民主主義人民共和国への帰国事業で海を渡った「日本人妻」の、その後の人生の聞き取りと撮影を続けている。画廊の壁には、一見、無造作のようで計算しつくされた配置で、女性たちの人生の痕跡を示す写真がならんでいた。すぐに故郷へ帰れるようになると信じて越境し、そのまま帰れなくなった「日本人妻」たち。両親に会うこともできずに、異国で生涯を閉じることになった彼女た

ちの思いを、写真家は冷静に距離を置いて、つまり観る人の情感をかきたて過ぎないように気を配りながら、そっと差し出している。林さんの話を聞くうちに、長崎に原爆が投下された時刻——午前11時2分は、いつの間にか過ぎていた。午後は千葉県成田市のスカイタウンホールで、「原爆の図」についての講演会。成田市では戦後75年記念事業として、「原爆の図」の複製展を開催中である。300人収容の会場に80人限定、講演者と観客の間も透明シールドで分断する厳戒体制。辛うじて互いの存在を認識できるという意味では、オンラインより良いかもしれない。それでも距離の遠さを言葉で縮めようと力むほど、円滑に言葉が出なくなった。

顔を合わせて対話をするという「普通」の行為が、いかに私たちにとって重要であったか。身体感覚を分断されたまま、気が抜けたように帰宅する。

明日からも丸木美術館は忙しいだろう。夏はまだしばらく終わらない。

岡村幸宣「原爆の図丸木美術館 学芸員」

1974年東京都生まれ。丸木位里、丸木俊を中心に社会と芸術表現の関わりについての研究、展覧会企画などを行っている。著書に『非核芸術案内—核はどう描かれてきたか』（岩波書店、2013年）、『《原爆の図》全国巡回—占領下、100万人が観た!』（新宿書房、2015年）、『《原爆の図》のある美術館—丸木位里、丸木俊の世界を伝える』（岩波書店、2017年）、『未来へ—原爆の図丸木美術館学芸員日誌2011-2016』（新宿書房、2020年）。主な共著に『「はだしのゲン」を読む』（河出書房新社、2014年）、『3.11を心に刻んで 2014』（岩波書店、2014年）、『山本作兵衛と炭鉱の記録』（平凡社、2014年）、『《原爆》を読む文化事典』（青弓社、2017年）。

岡村幸宣「原爆の図丸木美術館 学芸員」

2020/8/10 — 8/16

2020 / 8 / 10 — 8 / 16

山本唯人

社会学者／キュレーター



8月10日 [月・祝]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅（東京都台東区）

猛暑。一日、前期期末レポートの採点、後期のシラバスを執筆する。

今年度から、職場が法政大学大原社会問題研究所（大原社研）に変わり、その一室「環境アーカイブズ」を担当している。4月1日の着任当日、アーカイブズの閲覧を停止した後、一週間で職場は閉鎖。それから3か月、一刻も早い閲覧再開を模索すると同時に、6人全員が非正規で成り立つ教職員の雇用環境の確保に努めた。

7月1日、無事に閲覧を再開。一般の閲覧機能を持つ大原社研は、新型コロナウイルスの流行により入構制限の続く巨大私学において、学生が専任教員から対面で教育を受けられる稀有な場所になっている。ただし、「授業」中心の大学秩序のなかで、多摩キャンパスの、そのまた一室にあたるアーカイブズのこれからについて、大学当局からの要請にあたるものはほとんどない。

「公開」を使命とするアーカイブズにとって、本来、閲覧の停止は最高の決定で

ある。その再開に見通しもなく、夕方退勤間際、事務局からのメールで、職場閉鎖の通知を受けることから、新職場での「仕事」が始まった。

コロナ流行後の「アーカイブズ」の静けさは、「授業」を維持するためにあらゆる資源が投入されたオンライン化の騒ぎと対照的で、この間の大学が何に震えたのかを正直に語るエピソードと言えるだろう。大学はオンライン化で何とか「授業」を維持しているが、オンラインで「実習」機能や「ゼミ」機能を代替するのは難しく、高額授業料のもとで学生に相当な緊張を強いている。「授業」だけが高等教育ではなく、学生に学びの場を提供する使命は、「大学」だけが負っているものでもない。研究、教育に携わる世の中の色々な個人、集団が、知恵と工夫をこらして、若者の学びをバックアップすべきときだろう。

大原社研に授業はない。前期は、外の2校でオンライン授業を経験した。

8月11日 [火]

天気 | 晴れ
場所 | 自宅 (東京都台東区)

今日も朝から暑い。とにかく暑い。環境アーカイブズは臨時休室。家庭の事情があり、出勤をリモートワークに切り替える。

8月12日 [水]

天気 | 晴れのち雷雨
場所 | 自宅 (東京都台東区) → 大原社研 (東京都町田市)

環境アーカイブズに出勤。体温 35.5℃。夏季一斉休暇前の最終日。

アーキビストの K さん、リサーチアシスタントの H さんと、部屋や書庫の確認な

どをする。落雷で一時、多摩キャンパス全体が停電。

昨年10月から制作を進めてきた本『演劇が語りなおすヒストリー—舞台『魚の目に水は映らず』と「静子」の空襲体験をめぐるアーカイブズ』が完成。データはPDFファイル1点にまとめ、Editor's Statementを書き下ろし、researchmapの研究ブログにアップする。

劇作家・放送作家のきたむらけんじさん、東京大空襲体験者の西尾静子さんとの共著。個人の体験記を、関連資料とともに収集し、インターネット上で公開する試み。アップがコロナの状況と重なったのは偶然だが、「集まる」ことが難しくなっていて、「博物館」のモデル自体を見なおそうとする議論を横目で興味深く見る。10年以上、民立の博物館に関わってきたが、物理的な「場所」へのこだわりが、クレジットへの過剰な執着を呼び起こし、結果的に利用の余地を閉ざしてしまう現象がずっと気になってきた。資料の「保管場所」や「常設の展示スペース」の必要がなくなることはないだろうが、今までのように伝承のすべての機能を、求心的に「物理的博物館」が担う必要はあるのか。

新著はクレジットをすべて処理した上で、オープンソース。資料自体は、誰でも無料で閲覧・ダウンロードできることにこだわった。西尾さんという「一人の体験」の資料群に過ぎないが、原資料を使って、「学びの場」を開くことが「ミュージアム」の役割だとすれば、これも最小単位の「ミュージアム」とは言えないか。ここからどれくらい、「学びの場」を創造できるか、試してみたい。

8月13日 [木]

天気 | 晴れのち雷雨
場所 | 自宅 (東京都台東区)

環境アーカイブズは、今日から一週間の夏季一斉休暇。大原社研は、授業はな

いが、学部のような夏休みもない。長かった前期が終わって、ほっと一息つく。

昨日、ブログ公開した本のリリース、手作りした印刷版の、協力者への発送作業で一日過ごす。

夜から鶯谷駅前、根岸の居酒屋「若」。江戸から6代目の女将が主人の店。先代のお寿司屋さんだった時代に訪れたのが縁で、ここ数年店通いが復活する。寿司屋は3代目が吉原で始めたもの。5代目にあたる父が子どものころ東京大空襲があり、言問橋で母親を亡くし、戦後、若くして家を出て根岸に店を開いたので、「すし若」が屋号になったという。芝居のこと、築地の買い出し、磯釣りの話……何気ない雑談のなかに、自分も共有する東京の思い出のカケラが登場する貴重な時間。

オリンピック景気で観光客は増えたはずだが、零細な飲食店の現場が良くなった体感はない。消費税が具体的な実害となることも、この店で知った。店はもう何年も、こういう状況を耐えてきた。そこにコロナが襲って、街は本当に疲弊している。この限界でも串の歯が抜けるように何軒も閉店した。一方では、小学校跡地の巨大再開発の話がくすぶって、細かな政治や広報媒体が動いているのが気にかかる。

ここに身を置くと、普通に生きているひとたちが、外から持ち込まれる話に一々翻弄されて、悩む姿がよく見える。これ以上、「おかしな街になってくれるなよ」と願うし、大切な場所を守るために、自分も何かしなければと思っている。

山本雅人「社会学者／キュレーター」

2020/8/10 — 8/16

8月14日 [金]

天気 | 晴れときどき夕立

場所 | 自宅(東京都台東区) → 大原社研(東京都町田市)

午前中、歯医者。

午後、8月12日にブログにアップした本『演劇が語りなおすヒストリー』を、TwitterとFacebookでリリースする。共著者のきたむらけんじさん、西尾静子さんもそれぞれ広げてくれて、19時現在、41件のダウンロードがあった。色々な回路で読者が広がるのが見えて面白い。どうやってより深い学びへとナビゲートできるか、考える。

夕方、下谷御隠殿坂から谷中墓地を抜けて上野公園へ。4月からの緊急事態宣言下の日々、毎日のように散歩で通った道。PARK SIDE CAFEのテラス席で、お茶とケーキセット。日が落ちると、風が吹いて意外と気持ちいい。

8月15日 [土]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅(東京都台東区)

誰もいない御隠殿坂の景色が撮りたくなくて、早朝外に出る。考えてみたら涼しいうちはかえってウォーキングするひとがたくさんいて、良かったのか悪かったのか。

午後、散髪。そのあと半日、本を読みながらぼーっと過ごす。

御隠殿坂は、上野から谷中墓地に沿って、寛永寺住職輪王寺宮法親王の別邸御隠殿に行くために作られた。上野の山一帯は、戊辰戦争で彰義隊の戦いの場所になった。御隠殿はこの時焼失し、そこへ続く道だけを残して今は跡形もない。いつ誰が切り殺されてもおかしくない内乱状態の中、戦争を回避するぎりぎりの交渉で江戸は大きな戦火を免れた。それを引き継ぐ新政府の国づくりは、70数年後、軍事大国を目指した果ての敗戦に帰結した。それから75年が経ち、今日を迎える。

すぐ隣の芋坂は彰義隊士が敗走した道として知られ、たもとの老舗「羽二重団子」

にはかれらの投げ捨てた刀槍が残る。その向かいで彰義隊の屯所となった善性寺には、戦死した隊士の墓がある。その場所に立って耳を澄ますと、サクサクと向こう側からこの坂を駆けおりるかれらの不思議な足音が聞こえるような気がする。

8月16日 [日]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅(東京都台東区)→東京大空襲・戦災資料センター(江東区)

オンラインイベント出演のため、戦災資料センターに出る。空襲体験者の二瓶治代さんを中心に10数年続けてきた夏休みの特別企画。体験者の西尾静子さん、白石哲三さんとも会う。ガイド役は全員女性の学生グループ「I Peace (アイピース)」。いまの時代の継承の縮図がここにある。

今年は新型コロナウイルスの流行で集まることができず、オンラインに切り替えた。カメラが回り台本が生まれると、想像以上に脱線の自由がきかなくなる。言葉で説明する必要が高まって、絵が映っていてもずっと「話」を聞いているような印象になるのは気のせいかな。言葉に直せないから「展示」しているという立場で見ると、これもオンライン発信の課題とを感じる。

山本唯人 [社会学者／キュレーター]

1972年、東京生まれ。法政大学大原社会問題研究所准教授、東京大空襲・戦災資料センター主任研究員。主なテーマは、東京大空襲、東日本大震災。2019年3月、岩手県大船渡市で津波をきっかけに解散した集落の記録『泊里記念誌』を刊行。2020年6月、東京大空襲・戦災資料センターのリニューアル展示「1945年3月10日の東京大空襲一夜の体験、昼の光景」(共作)、「名前と顔写真の壁」を発表。同年8月、劇作家・放送作家のきたむらけんじさん、東京大空襲体験者の西尾静子さんと『演劇が語りなおすヒストリー—舞台『魚の目に水は映らず』と「静子」の空襲体験をめぐるアーカイブズ』を公開 (researchmap 研究ブログ)。

山本唯人 [社会学者／キュレーター]

2020 / 8 / 17 ——— 8 / 23

谷山恭子

アーティスト



8月17日 [月]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅(ベルリン・ロイターシュトラッセ)

今朝の茹で卵はうまくいった。かなり幸せを感じた。最近毎朝、半熟茹で卵とヨーグルトにフルーツをピューレしたのをかけるのが朝ごはん。茹で卵がうまくできると、ヨシ◎。

ドイツでbioの卵を買うと、殻に少しドロや羽毛がついていたりする。日本みたいにキレイじゃないので、みんなアニサキス菌を避けて生では食べない。野菜もドロがついていたり、虫もいたりする。ある時、しばらく冷蔵庫に置いていた野菜を切ったら虫に食べられていて、中がスカスカだったことがある。

6月に参加しないかと誘われた「すみだ向島 EXPO」という体験型芸術祭で行われる、美術家・開発好明さんプレゼンツの「軒下プロジェクト」(2020年9月12日～10月11日)の作品制作の準備をする。「軒下プロジェクト」とは、まちに暮らす人たちの自宅やお店の軒下にアート空間をつくり出し、アート作品を鑑賞しながら、同時にまちを散策できるプロジェクト。わたしも、この墨田向島エリアには、

2020/8/17 ——— 8/23

「Lat/Long project」というインスタレーションをまちなか11箇所ことばに設置させていただいてお世話になっているので、参加することにした。わたしたちの平和な日常をことば寿ぐ「Lat/Long project」は東日本大震災をきっかけに始めて、2011年から国内外5箇所で展開した。いまもその作品の一部が東向島にある。その後夕食をとってから、公園での夜のピクニックへ。ベルリンのコロナ感染者数も増加傾向。

8月18日 [火]

天気 | 雨

場所 | スタジオ (ベルリン・ラングシュトラッセ)

朝、激しい雨。ずっと暑かったから雨が嬉しい。喜んだのも束の間、割とすぐに止んで昼には蒸し暑くなった。ロックダウンの間、自分のウェブサイトやアートプロジェクトのオンライン化に専念していたらすっかり家に根っこが生えてしまい、引きこもり状態になってしまった。それに終止符を打つつもりで、ものすごく久しぶりにスタジオへ。ベルリンには「BBK スタジオ」という、市がアーティスト支援として、安くスタジオを貸すシステムがある。倍率はとても高く、4回から10回ほど応募しないとチャンスは得られない。その小さなスタジオは、BBKのスタジオの応募が通らないため我慢できずに今年の2月に借りた。同月、展覧会準備のためにロサンゼルスにリサーチに行って、帰ってきたらコロナでロックダウン。もちろん4月にあるはずだったそのロサンゼルスでのグループ展は来年に延期、5月に予定していたベルリンでのパートナーとのプロジェクトの展示はキャンセル、10月のドイツ西部での展覧会も1年延期となった。3月にはその小さなスタジオの向いの部屋も、パートナーとのプロジェクトのため

谷山恭子 [アーティスト]

に借りるつもりだったが、ロックダウンとなり、支払いの当てもないのももちろん借りるのはやめた。スタジオは小さいながら、やっぱり行くと嬉しい。天井が高くて清潔な空間で気持ちいい。作品の収納棚をつくる前にロックダウンになったので、その棚の材料が床に並べられたままになっている。日曜日からベルリン郊外のアーティスト・イン・レジデンスに行くので、それまでにきちんと整備したい。10月までにドイツ西部にあるイダー＝オーバーシュタインのアートスペースに送りたい写真のネガスキャン作業や、2014年から続けている冊子型アートプロジェクト「街のはなし」の文章編集などをしていたらあっという間に一日が終わってしまった。いつものことだけど、なかなか進まないなあ。

8月19日 [水]

天気 | 晴れ

場所 | ベルリン水族館 (ベルリン・ブダベスターシュトラッセ 32)

9月12日からの軒下プロジェクトの作品づくりのために、ベルリン水族館にいる亀に会いに行く。自宅を出て、旧東と西の旧国境検問所のチェックポイント・チャーリー、ベルリンの壁が保存されているテロのトポグラフィーを通り抜け、ポツダム広場、ホロコースト記念碑、ブランデンブルグ門、ティーアガルテンを真っ直ぐ戦勝記念塔へ、そしてベルリン水族館というコースを自転車で走る。道すがら自転車のハンドルに取り付けたカメラで撮影をしながら向かった。ベルリンの道は石畳が多く、暑さを避けるために公園の中の獣道的なところを通ったから、カメラのジンバルが追いついていない揺れの激しい映像になっていた。展示期間中には、その映像がQRコードから見られるようになる。

2020/8/17 — 8/23

8月20日 [木]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅 (ベルリン・ロイターシュトラッセ)

ドイツの役所に、日本での国民年金の支払い記録などを提出する期限が迫っている。でもなかなか日本から郵便が届かないので、オンラインで「書類は後で送ります」というコメントをつけて申請書を提出した。ドイツ語が読めないから、こういう細かいことが本当に億劫だ。ドイツ語から日本語に訳しても意味がわからないことも多いので、英語と日本語両方で確認しながら項目を埋める。

午後は、「街のはなし」の文章修正など。毎年5歳から80代までの11名に、街の一番好きな場所と、そこでのエピソードを聞く。この7年を通して、70年代に新興住宅地だった街が今や3世代が暮らす、子供たちにとっての故郷となっていることを感じる。このプロジェクトは「Lat/Long project」をベースとして発展させたもので、一過性のインスタレーションではなく、街の資産として残るものがつくりたいと思い、冊子を年1回で発刊することにした。

試みとしては、語り手の名前のかわりに、その場所の緯度経度の座標を使って階層的な概念をなくし、すべての地点に宿る個人の想いが等しく尊く、この街の歴史をかたちづくっていることを表現しようとしている。

8月上旬に、インタビューさんの文章を仕上げて、いまはみなさんからの返答待ち。このプロジェクト、もっと広げていきたいなあ、と思案中。多言語でのインタビューも、いまやいろいろなアプリがあるから可能になってきている。

東日本大震災をはじめ世界中で起こっている自然災害など、これまでのカストロフというのは局地的なものだったが、このコロナのパンデミックは全世界が共有する経験となってしまった。地球のすべての地域が繋がっていることをわかりやすい形で目の当たりにしている。

谷山恭子 [アーティスト]

2020/8/17 — 8/23

8月21日 [金]

天気 | 晴れ

場所 | スタジオ、クンストラーハウス・ベタニエン (ベルリン・ラングシュトラッセ/コトブッサー・シュトラッセ)

作品を保管するためにスタジオに大きな棚をつくった。昨日きちんと準備しておいたので、5時間ほどで組み立てと塗装まで終わった。

15時以降、そのほぼ南向きの部屋は灼熱地獄になる。こちらはエアコンがなく断熱のために窓が小さいから、風通しも悪く、熱中症になってしまうくらいに室温が上がる。その暑さを逃れるため、スタジオの並びにある中国大使館の1階に入っている「Ming Dynastie」にランチへ。ベルリンの中でも数少ない、美味しい中華料理が食べられるレストラン。なんとランチは6.8ユーロだった。アジアンインビス (ファーストフード) に行っても似たような金額になるから、絶対にこっちのほうがいい。豆腐の野菜炒め定食を食べていると、日本人のふたり組みがやってきた。めちゃくちゃ関西弁で、「餃子ビールいくで〜」と盛り上がっていた。餃子ビール、それは言わずもがな、日本国民の食生活の重要な位置を占めているものだと思う。めっちゃ関西弁で盛り上がっている (そしてドイツ語もペラペラ)。その会話を聞き流しながら、次に来た時に何を頼もうか考え、ふたりが頼んだピータン豆腐をチラ見した。

至福のランチを終えてスタジオに戻って、再び灼熱の中、1時間ほどで棚を設置して、作品の木箱を収め、今日の目標は達成。

自宅に戻って水のシャワーを浴びて、少し休んでから、わたしも以前滞在していた、アーティスト・イン・レジデンス「クンストラーハウス・ベタニエン」の展覧会オープニングに出かける。着いたのは21時頃。いつもなら22時頃までごった返しているが、すでにギャラリーは真っ暗。日にちを間違えたかと思ったけど、iPhoneを忘れたから確認ができない。いつもオープニングの後にみんなが集ま

る並びのバーに行ってみたら、友だちがいた。聞くところによると、新型コロナウイルス感染症の拡大予防のために、オープニングは14時から19時、厳しい入場制限でギャラリー内はガラガラなのに全然入れず、並んだ方がいいが展覧会を見る前に閉館時間になってしまった人もいたようだ。

コロナの影響がこれまでの日常に大きく制限をかけていることをリアルに感じた。これからどうなっていくんだろう。作品の見せ方や鑑賞方法、アート自体のあり方も変わっていく予感しかない。

8月22日 [土]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅 (ベルリン・ロイターシュトラッセ)

午前中は、「街のはなし」のインタビューさんたちから修正が届いた文章を直して、メールを返信したりして、またもやあっという間に時間が過ぎた。軒下プロジェクトの編集になかなか手につけられない。もちろん編集に慣れてないというのもあるんだけど。いろいろ雑務をこなして、気付いたら友だちのイベントの時間に。

Heike Gallmeierという同い年のアーティストが、2ヶ月間の作品制作の旅に出る。大きなバンを思いっきり改装していて、車体の後部がホワイトキューブのようなギャラリースペースに。助手席と後部座席あたりは完全に取り払われ、ソーラーパネルで発電した電気のステーションとベッド、小さなキッチンスペースになっていた。ドイツの国境を走って、出会う人との会話を元に作品をつくって、写真に収めていくというプロジェクト。2ヶ月後、彼女が帰ってきた時に会うのが楽しみだ。

谷山恭子 [アーティスト]

2020/8/17 — 8/23

8月23日 [日]

天気 | 晴れ

場所 | ヴェステン＝ブッフホルツのアーティスト・イン・レジデンス (ベルリン・ブランデンブルグ)

ベルリン郊外にあるヴェステン＝ブッフホルツのアーティスト・イン・レジデンス「Field Kitchen Academy」へ。レジデンススタッフがベルリンに来る用事があって、わたしを車でピックアップしてくれるという。

ノイケルンの待ち合わせ場所に行くと、その用事とは、今週の「Field Kitchen Academy」のメンターである Hans Peter Kuhn 氏のサウンドインスタレーションのスピーカーやケーブルなどを、彼の倉庫からレジデンスに運ぶというものだった。荷物を車に詰めるのを手伝って出発。いろんな話をしながら到着。かなりお腹が空いてきたところだったので、丁度ランチ時間に到着したのはありがたかった。コロナのため、食事は外、屋内は様々なルールがあって、もちろんマスク着用。部屋のシェアメイトはフランス人のダンサーで、日々の習慣が似ていて、すぐ友だちになった。

Field Kitchen Academy はサウンドに関するレジデンス・プログラムなのだが、サウンドアーティストでなくても参加できる。ロックダウンで時間がある時にアプライして通ったので参加。今年のテーマは「Curious Loop」。このテーマで1週目を Hans Peter Kuhn 氏と、その次の週を Christina Kubish 氏と過ごして作品をつくり、週末ごとに作品を発表する。最後の数日は、Bill Fontana 氏、Hans Rosenström 氏と数名のメンターとのオンラインセッションやアーティストトーク。わたしのインスタレーションに取り入れたい「音」について考える良い機会になるだろう。

谷山恭子 [アーティスト]

1972年愛知県生まれ、ベルリン在住。場所特有の文化、歴史、日常風景からインスピレーションを得て、サイトスペシフィックなマルチメディア・インスタレーションで、わたしたちの生命や存在、いまある環境をたたえる作品をつくっている。2011年の東日本大震災の後、場所特有のアイデンティティや、人の属性について焦点を当てるようになった。近年の主な展覧会に、2019年「stone will flow, leaves will sink」(クンストラーハウス・ベタニエン/ベルリン)、2016年「なぜその風景がおもしろいのか」(府中市美術館公開制作68/東京)、「Tea Talks お茶と祖国」(Bradwolff Projects × ZBK Zuidooost / アムステルダム)、2010年・2013年「雨の路地」/「I'm here」(瀬戸内国際芸術祭/香川)、2009年「目を凝らし耳を澄ます」(大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2009/新潟)、2001年「Three rooms」(東京国立博物館表慶館/東京)ほか。

谷山恭子 [アーティスト]

2020 / 8 / 24 ——— 8 / 30

鈴木 拓

boxes Inc. 代表



8月24日 [月]

天気 | 晴天

場所 | 仙台市内の事務所

朝から不穏なメールが届く。調べたけど特に大事ではなさそうだ。もう随分と、こういう話題には敏感になってしまっている。神経が昂っていて、冷静さを保つことにエネルギーを使っている感じ。

お昼過ぎに思い立って、前から欲しかったちょっと良いカメラを注文。当たり前だが納期未定。5月の自粛期間中に注文しなかったことを後悔する。まあ、しょうがないけど。

翌日のマッサージの予約を入れる。ネットワークのメルマガのテキストを整える。勉強会のアーカイブ動画を編集し、YouTube にアップロード。楽しみにしていたオンデマンド配信のチケットを購入する。オープニングだけ再生、これは後でゆっくり観たい。

2011年から続いている「文化芸術による子供育成総合事業（芸術家の派遣事業）[東日本大震災復興支援対応]」の準備。よく10年も続いているなあ&最後の年にこの試練はないぜ、と心の中で叫びながらデスクワーク。変化が求められてい

2020/8/24 ——— 8/30

るが、やはりこの体制は身動きが重い。

前夜に知った、僕にとっては衝撃的な事実が一日中頭から離れない。「そんなことあるんだ!」と何度も頭の中を繰り返す。理解できないことが続くと、それはそれでハイになる。

ずーっと探していたある作品をたまたま発見する、これ以上ないタイミングで。何かを示されているような気持ちになる。良い気分ではない。

8月25日 [火]

天気 | 晴天

場所 | 仙台市内の事務所

朝から、ホームページの作業。

シャワーを浴びてマッサージへ。最近やっと相性のよいマッサージ屋さんに出会えた。コロナ禍でデスクワークが増えた分、定期的に通っているが、身体と折り合いをつけていく感覚が歳と共に強まっている。ただの老いかな。

お昼に、今日は本当はパラリンピックの開会式だったと知る。洗濯、コインランドリーへ。ネットワークのデスクミーティング。

夜は Zoom で文化芸術による子供の育成事業のチームミーティング。たった6人だけどコロナとの距離感がそれぞれ違って、すり合わせるのに時間がかかる。だが、必要な時間。ガイドラインって、ガイドラインへのガイドが必要なんじゃないかとふと思う。ひきつづき解消されない問題について、少しだけ前進。

8月26日 [水]

天気 | 晴れ

場所 | 仙台市内の事務所

知り合いの俳優さん & スタッフさんと、文化庁の「文化芸術活動の継続支援事業」の申請にチャレンジ。実施に申請画面に行ってみて分かること多し。これは申請類に慣れてないとやっぱり厳しい。試行錯誤しながら申請完了。

夜にネットワーク事務局会議。この会議もう5月から毎週2回欠かさずにやっている。すごい。スピードも密度も熱量も。みんな舞台芸術の未来を見据えている、憂いている。震災の時は、備えていなかったことを猛省し(そんな想像もできなかったから難しかったけど)、今が災害以前を生きていることを自覚したのだけど、この状態は想像してなかった(これもあたりまえだけど……)。そう思うとコロナ禍とか、コロナ後って、なにを意味するのだろうか? 学びが足りない気がして、焦る。間違いなくチャンスではある。想像したくないことほど、強く想像してしまう。

8月27日 [木]

天気 | 晴れと曇り

場所 | 仙台市内の事務所

継続支援事業の共同申請に向けた作戦ミーティング。同じ目線で戦える同志は心強い。あとは周囲を巻き込むロジックとエネルギー。

ひたすらホームページの構築。ホームページというか、なんちゃって SE みたいな作業。いくつかのサービスを組み合わせて、必要なソリューションを作る、みたいな。冷蔵庫のありものでご飯を作ったり、端材で小道具作ったり。そういうのは楽しい。どこまでいってもなんちゃってなので、人生苦労している気がするが。夕方、翌週ローンチする予定のシステムについてチームで話す。まずは始めてみる。良きチーム、作っていくのは楽しい。

依然問題加速中。知らないことに向き合うことは可能なのか? 震災の時の感覚に似ている。

8月28日〔金〕

天気 | 晴れと曇り

場所 | 仙台市内の事務所と福島県南相馬市小高

事務所の電気工事をするに。電気屋さんの内見。ほとんど事務所でのデスクワークになり、環境を整えたら電力不足になってしまったのである。60A契約なので配線の問題でもあるが、この部屋に電力が足りない。賃貸なのだが、分電板に書いてあった電気屋さんと話す。せっかち。

ネットワークのデスクミーティング。今後の展開のためにウェブ会議システム「Remo」を試す。楽しいけど、重い、登録しづらい、日本語にローカライズされていない。ちょっと保留。時間の流れが早すぎて、ToDoが置いてかれる。週末が近い。

夕方、南相馬市小高へ。撮影や諸々の準備。車中でZoom会議。夜、話し合い。解決は目的じゃないかもしれないけど、顔は上げたい。

8月29日〔土〕

天気 | 晴れ

場所 | 福島県南相馬市小高と仙台市内の事務所

ひきつづき話し合い。お昼ご飯を食べて、予定より早く帰仙。

夜、ネットワーク事務局会議。検討事項多数。

8月30日〔日〕

天気 | 晴れ

場所 | 仙台市内の事務所

鈴木 拓 [boxes Inc. 代表]

2020/8/24 — 8/30

継続支援事業の共同申請作戦会議。大体の戦略を共有。問題になりそうな事項を洗い出す。まだいくつかハードルあり。意思確認へ。

夕方、2日後に迫ったサポートの模擬テスト。やってみてわかること多数。こういう時に判断できる状況を預けられていると助かる。早速修正。

夜、小劇場のみなさんとミーティング、情報共有。全国各地で各々が戦っている。そりゃそうだ。今後のことで意見交換。

寝床の環境改善を試みる。資材が足りずに頓挫。気分を変えたかったのだが……。分かることと、分かり得ないことを知ることに差異はあるのか。結局、2011年に生じたさまざまな感情はそのまま成仏せずにいる。前に進むことも、後ろを振り返ることも許されないような。せめて顔を上げてはおきたい。

鈴木 拓 [boxes Inc. 代表]

宮城県仙台市出身。高校演劇を経て、舞台監督として活動。2000年に演劇企画集団「きらく企画」を立ち上げ。2004年東京国際演劇祭リージョナルシアターシリーズ参加。2006～2009年まで演劇専用空間 GalleryoneLIFEを仙台市のまちなかで運営。2008年杜の都の演劇祭プロジェクトに参加。2010年よりプロデューサーに就任。2011年の東日本大震災を機に設立した、文化による復興支援組織 ArtRevivalConnectionTOHOKU（震災で失われた文化・芸術に関する“ひと・まち・場の再生”を目的とし、避難所や学校のニーズを調査したり、公演やワークショップを実施）事務局長。仙台を中心に東北の舞台芸術の活性化を目的に、2012年より boxes Inc. を設立。舞台芸術制作者オープンネットワーク理事。震災後に生まれたさまざまなつながりを、より有機的かつ継続していくために活動中。

2020 / 8 / 31 ————— 9 / 6

清水裕貴

写真家／小説家



8月31日〔月〕

天気 | 晴れ時々曇り

場所 | 千葉県船橋市のアトリエから、自転車で千葉市稲毛区

今年の7月、千葉に巨大な火の玉が落ちた。

既に習志野と船橋で隕石のかけらが発見され、習志野隕石と名付けられているが、一キログラム級の「本尊」がまだ見つかっていないらしい。民家や道路に落ちているならとくに見つかるだろうから、森を中心に探してみる。

しかし駅前の繁華街と国道と畑以外はだいたい葦の原や雑木林で、油断すると草に隠れた水路や沼に突っ込んでしまう。なんとなく森の周りをうろうろして写真を撮る。

稲毛まで行って、来年展示する予定の神谷伝兵衛邸を眺める。

戦中の千葉市は鉄道連隊や歩兵学校など陸軍の施設を数多く誘致し、軍都として栄えていた。稲毛の海沿いは風光明媚な保養地で、神谷伝兵衛邸の隣には、満州国皇帝の弟・愛新覚羅溥傑の住まいもあった。

あいしんかくらふけつ

清水裕貴〔写真家／小説家〕

2020/8/31 ————— 9/6

溥傑と神谷家の交流は多少あっただろうし、伝兵衛邸が溥傑の妹一家の住居になった時期もあるのだが、記録はほとんどない（当時のお手伝いさんの日記が近年発見された）。

住人の中に日記が趣味のマメな人がいて、それを受け継ぐマメな人が何代にも渡って出現しないと、家の中の歴史というものはなかなか残らない。建物自体が、語り部のように喋ってくれたらいいのと思う。

戦中の千葉市を舞台にした小説のプロットを練りつつ帰る。

9月1日〔火〕

天気 | 曇り、久しぶりに涼しい

場所 | 六本木（東京都港区）

写真を撮ったり小説を書いたりしているほかに、六本木の会社に通ってデザイナーもしている。

4月以降は同業者も取引先も続々とリモート勤務になったが、私は業務上の都合で出勤を強いられている。緊急事態宣言中のガラガラの電車には、死地に向かうような緊張感が漂っていたが、今はだいぶ雰囲気が和らいでいる。咳の音がした方向を、ぎょろっと睨む人もいなくなった。

朝早くに六本木ヒルズに到着すると、辛子色の繫ぎの作業服を着た人たちが集まっていた。帰宅困難者受け入れ訓練をしているらしい。

六本木ヒルズの建物は公道の役割も果たしていて、深夜・早朝などテナントが閉まっている時も通路やトイレは自由に行き来できる。緊急事態宣言中も開いていて、観賞用の滝は絶えず流れ続け、ビルの管理者はこまごまと清掃や補修を続けていた。

通路やトイレにゴミが落ちているところを見たことがないし、池の水面は藻もボウフラも存在しない。複雑なデザインの建物は目隠しになる壁や柱が沢山ある。六本木ヒルズの廊下なら寝られるな、と思う。

通勤電車で岡本喜八の『肉弾』を見る。戦争の愚かしさを、ユーモアと詩、幻想、哲学的なセリフを交えて語っている。ここ最近岡本喜八を連続して見ているが、戦争末期を史実に基づいて克明に描いた『沖縄決戦』や『日本のいちばん長い日』とはかなり違う雰囲気。美大生時代に見ていたら強く影響されていただろうなあと思う。しかし一番好きなのは『血と砂』だ。戦場に響き渡るトランペット。

9月2日 [水]

天気 | 曇りのち晴れ

場所 | 六本木(東京都港区)から自転車で新宿区

けやき坂沿いにどどんと枕とシーツの店がオープンしていた。知らない店名なので検索すると、通販を中心とした寝具小売ベンチャーで、定期的にリネン交換をする月額制のベッドメイキングサービスもやっている。おうち時間をホテルのように快適に、というコンセプトらしい。ただならぬ商魂のたくましさを感じる。フードマーケットで昼食を買って毛利庭園の横のベンチで食べていたら、S社の編集さんから関東大震災の資料が送られてくる。面白い地図博士のホームページも教えて貰ったので、ブックマークをしてゆっくり読むことにする。

夜は新宿で友人と会合。だいぶ涼しくなったので、ドコモのバイクシェアを使って移動する。

もう何度目だか分からない自転車ブームがくると言われているが、都心のランチタイムのシェアサイクルはUberの配達員専用自転車となりつつある。酷使された悲しい自転車も多いので、タイヤの空気圧と電池残量を確認してからパスコードを取得する。新宿に行く前に原宿の郷土菓子研究社に寄って、スペイン、インド、アゼルバイジャンのお菓子を買う。原宿は服屋もカフェもおそろしく空いていたが、郷土菓子研究社には客が絶え間なく訪れ、みんな淡々と菓子を買い込んでいた。海外に行く見通しがたてられない今、郷土菓子を買いたいことは必要急なのだ。

新宿三丁目の飲み屋街は明りが消えている店が目立ち、開いていても客席はガラガラだった。どの店も「換気していますよ」とアピールするようにドアを開け放しているし、こちらも「風通しのよさそうなところ」を目指して店探しをする。開放的な雰囲気の居酒屋の前で立ち止まると、即座に明るい店員さんに案内されて、とりあえず入ってみた。しかし通された席は古びた狭く暑いところで、ひどく曇った窓から見える風景は、看板の明りがついたり消えたりして、この世の終わりのようだった。ちょっと飲んで店を変える。友人おすすめの中華料理店に行って、美味しい小籠包を食べながら“ブルシット・ジョブ”と“安心と諦め”と自民党総裁選の話をする。

9月3日 [木]

天気 | 晴れ時々雨

場所 | 六本木(東京都港区)から徒歩で広尾(渋谷区)

六本木と広尾の間にある有栖川公園は、コンクリートの坂道に挟まれた三角形の谷底に、池と小川と多様な樹木を詰め込んだ美しい森だ。その中に都立中央

図書館がある。

感染症対策で3時間の入れ替え制になっていて、ネットから事前予約をしなくてはいけない。予約できるのは1週間に2回までだ。

時間がきたら、従業員用出入口で検温と消毒をして来館者カードを首にぶら下げて入る。オリンピックのマスコットキャラクターの巨大なポスターが飾られた正面玄関は封鎖されていて、館内のカフェや一部施設も閉まっているが、静かで集中できて良い。

館山の牡蠣漁について、在野の研究者が書いた本を読む。

半島の先っぽは、内陸よりも海の外との繋がりが強い。千葉県にある^あ安房^わは漁業で財を成してきた土地だが、戦前は潜水機械を開発して牡蠣漁を急激に発展させ、アメリカに出稼ぎに行っている。そのままアメリカに居着いた人たちは、戦中に収容所に入れられたりもしているらしいが詳細は不明。

帰りの電車で関東大震災と千葉の資料を見る。館山湾の海岸は震災で隆起し、そこをさらに埋め立てて軍基地を作っている。本土決戦の際にアメリカ軍が館山湾から上陸すると想定されていたらしい。

ふと、岡本喜八の『肉弾』で特攻隊が穴を掘って隠れている砂浜は館山の設定なんじゃないかと思った。しかし遠州がどうのこうのと言っていたから静岡なのだろうか。少なくとも撮影地は千葉の海岸ではなさそうだ。

9月4日 [金]

天気 | 曇り時々晴れ

場所 | 幕張(千葉県千葉市)

夜に幕張の温泉に行く。最近、埋立地の人工砂浜に突如として現れたスーパー

銭湯だ。温めた水道水ではなく、地下2,000メートルから太古の海水を掘り出した天然温泉らしい。

幕張は軟弱な地盤にさらに砂礫を積んで埋め立てている、文字通り砂の城だ。東日本大震災の際は液状化して道が割れ、電柱がばらばらに倒れシュルレアリスム絵画のようにになっていた。

そんなところに2,000メートルも穴を掘って湯を汲み上げようというのは、なかなか大胆な発想に思えるのだが、日本人はそもそも活火山のすぐ近くに豪華な宿を建設してゆったり温泉を楽しむ人たちである。

温泉はこの砂浜を最近所有している日本サッカー協会が掘ったものだ。地上の権利を持っている人は、地下も自由に使っていいということになっているらしい(温泉法の規制はある)。海に面した土地を持っていると排他的経済水域がくつついてくると似た発想だ。海面より上に出ている地面、という変化しやすい平面をベースに利権を考えるとというのは、ちょっと奇妙な習性だ。

幕張温泉は下駄箱からタオルレンタル、会計まで全部無人機械で完結するシステム。平日だけ近所の人たちで賑わっていた。露天風呂の入り口には「潮の満ち引きによって海上から見えてしまう場合がございます」と、おおらかなことが書いてあって、客たちは「どういうこと?」と笑いつつ暗い海を見ていた。ごうごうという潮風の音を聞きながら、とろりとした湯を堪能した。

9月5日 [土]

天気 | 曇り時々雨・霧

場所 | 岩手県花巻市から車で釜石市鶴住居町と浄土ヶ浜

新花巻でレンタカーを借りて岩手県釜石市^{うのすまいちょう}鶴住居町に向かった。

東日本大震災の津波でえぐりとられた砂浜が、河口付近に再び帰ってきて、新し

い小さな砂浜を形成したという記事を読んだからだ。砂の中には海浜植物の種子や小さな生き物たちが眠っていて、砂が集まれば生態系が復活する。砂浜は陸と海という異なる環境を繋ぐ境界の役割も果たす。津波被害の大きかった地域はコンクリートの巨大な防潮堤が建設されてしまったが、風や鳥や虫たちが砂や海水を少しずつ運び、コンクリートの上に境界の世界を作るだろうと思っていた。

この旅はS社で不定期連載している小説の下調べのつもりだが、写真作品になるかもしれない。あるいは何にも使わないかもしれない。しかし、とにかく私は再生した砂浜を見たかった。

遠野を過ぎるとカーナビは全く役に立たなくなった。沿岸の街を結ぶ新しい道路が山の中にどんどん出来ているのだ。そういえば、2012年に気仙沼から盛岡に行った時は、もっと狭くておそろしげな山道を通った気がする。

高速道路から降りる瞬間、「ここから過去の津波浸水区間」という看板が出て少しどきとした。水の中に突っ込んでいくような気分になりながら、沿岸に向かう。鵜住居は霧に包まれていた。津波でまっさらになった土地には、ラグビーのスタジアムや慰霊碑、コミュニティセンターがぼつぼつと建ち、小中学校は高台に移転していた。スタジアムでは試合が開催されていて、しんとした町に司会の声が高らかに響いていた。

記事に載っていた写真と同じ場所を探そうとしたが、霧のせいで背景の山の形が見えないし、水門や堤防の形も変わっていて、正確な位置が特定できなかった。とりあえず川沿いを海に向かって歩いていると、川の中州に白い砂が集まって、水鳥たちの休憩所になっているところを見つけた。資料館の航空写真を見ると、津波前からあったものらしいので目的の砂浜ではない。しかし一目で好きになっ

て、写真を撮る。

アスファルトの道路に砂が積もって植物が芽吹いていた。

流された砂浜は人の手によって再び砂が敷き詰められ、松林で子供たちが海浜植物を育てていた。また来ようと思う。

夕方、宮古市に移動して浄土ヶ浜パークホテルに泊まった。浄土ヶ浜は、その名の通り神様の箱庭みたいなところで、人生の休憩所みたいな雰囲気だった。ホテルは海を見下ろす崖に建ち、ガラス張りのライブラリーラウンジがあった。月光に輝く海を見ながら震災資料を読む。

9月6日〔日〕

天気 | 曇り・小雨・霧・晴れ

場所 | 浄土ヶ浜から車で岩手県遠野市

朝は浄土ヶ浜の遊覧船に乗った。ガイドさんのトークと歌とウミネコの歓待が激しい、賑やかなツアーだった。

東日本大震災の時は、遊覧船は津波警報を受けてすぐに沖に逃げたらしい。しかし陸の被害が思いのほか大きく、なかなか帰れなくて、船長と乗組員は海上に42時間も留まって、ウミネコにあげるパンを食べて空腹を凌いだそうだ。この遊覧船は来年一月で終わってしまうらしい。とても残念だ。

遠野に「3.11東日本大震災 遠野市後方支援資料館」なるものがあると知り、花巻に戻るついでに遠野に寄る。遠野は民俗学、妖怪文学に欠かせない存在だが、文字で読みすぎているので行こうと思ったことがなかった。

ゴツゴツした北上山地を突っ切る高速道路を降りると、唐突に霧が晴れて、稲穂がきらきらした明るい盆地に出た。

山の斜面に「ようこそ」 みたいな文字が掘ってあったが、そんなこと書かれなくても山と稲穂と川が「ようこそ！」 と合唱しているような気がした。思ったよりもずっと明るく綺麗な楽園のような場所だった。

田んぼや小川の横をのんびり散策してから資料館に行く。

資料館は消防署の脇に建つプレハブ小屋だが、パネルや資料がぎっしり詰まっていた。遠野市は三陸海岸と内陸の都市を結ぶ一大拠点で、地盤が強く、災害時の後方支援拠点として重要な役割を担っているらしい。復興の要となる道路を作った人々は「かっぱ工事隊」 と名乗っていてちょっと可愛い。力強い誇りと勇気を感じられる資料館だった。書棚の本を読みたかったけど、レンタカーを返す時間が迫っていたので資料館を出る。

外には霧雨と晴れが同時にやってきていて、空に巨大な虹が架かっていた。

清水裕貴 [写真家／小説家]

1984年千葉県生まれ。武蔵野美術大学映像学科卒。土地の過去や伝説をリサーチし、物語を立ち上げ写真と文章で表現する。アメリカ・ニューメキシコ州の白い砂漠に行く物語「ホワイトサンズ」で2011年に1wall グランプリ受賞。後に Nikon サロン、Kanzan gallery など雨乞いをテーマにした作品を発表。2018年から小説の執筆を始め、R-18 文学賞大賞受賞。2019年に単行本『ここは夜の水のほとり』を新潮社から出版。2019年、船橋にアトリエ兼ギャラリー「tidepool429」をオープン。太平洋沿岸とアイルランドの砂浜を巡る物語を tidepool429 と nap gallery で発表。地元鎌ヶ谷の謎の空き地を探る作品を PGI で発表。

清水裕貴 [写真家／小説家]

9

2020
SEPTEMBER

新型コロナウイルス
新規感染者数
(2020年9月1日現在)

国内: 624人
東京都: 170人

- 1日 - 関東大震災から91年
- BTSの最新シングル『Dynamite』がBillboard Hot 100で1位に。韓国アーティストとして初
- 6日 - 北海道胆振東部地震(震度7、M6.7)から2年。応急仮設住宅の入居期限を迎えつつあり、災害復興住宅への移行がはじまる
- 12日 - テニスの全米オープンにて、大阪なおみ選手が2年ぶりに優勝
- 13日 - ベラルーシ・ミンスクで反政権デモ、過去最大の15万人。250人が拘束
- 16日 - 第99代菅義偉内閣発足
- 19日 - タイ・バンコクで参加者5万人を超える反政府デモが開かれる(2014年の軍事クーデター以降過去最大)。プラユット政権の退陣、憲法改正、王室の改革を要求
- 24日 - 香港警察、覆面禁止法違反などの容疑で、民主活動家・黄之鋒氏を逮捕、同日保釈
- 27日 - 御嶽山噴火から6年
- 旧ソ連・アゼルバイジャンとアルメニアで軍事衝突。民間人にも死傷者が出る事態に
- 30日 - 仙台高裁、東京電力福島第一原子力発電所事故で国の責任を認める。全国の集団訴訟で国の責任を認める2審判決は初
- 11年ぶりに9月の台風上陸なし

2020 / 9 / 7 ————— 9 / 13

西村佳哲

リビングワールド 代表



9月7日[月]

天気 | 台風、のち晴れ

場所 | 自宅(徳島県神山町)

台風は北に抜けた。進路は九州の少し西側で、ここからはだいぶ距離があったけど、にもかかわらず強い風で昨晚は眠れなかった。山の嵐は怖い。とくに音がすごくて、雷が空でなく山を震わせて地響きのように轟く。世界の終わりが来たような気持ちになる。けどちゃんと朝が来るので、気持ちを切り替えて起きる。

最近あまりよく眠れないのはなに？ 昨晚は台風のせいだけど、あんなに好きだった睡眠への想いが醒めている。「どうせよく寝れないしなー」って。以前は日中にどんなことがあっても「寝れば大丈夫！」という感じで、全幅の信頼を寄せていたのに。軽い無呼吸症を患っているんだろう。おそらく鼻中隔の手術が必要で、入院を要すると聞き、仕事の都合を考えて先延ばしにしているうちにコロナ禍が深まった。

2020/9/7 — 9/13

「10年つづけよう」と話して2014年に始めた、陸前高田の滞在プログラム「箱根山学校」の第7回が来週末開催される。今日が締め切り日で、43名のお申込みが届いた。

9月8日 [火]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅 (徳島県神山町)

午後からまた夏日。大雨で冷えた地面が、台風一過の陽射しで暖まったのかな。神山町は一流域のまちで、その真ん中を鮎喰川^{あくいがわ}という清流が流れている。川底の石が緑色で、光が挿すと流れ全体が青くきらめいて美しい。こんな色の川は見ることがない。

この場所には6年前に越してきた。町役場では地方創生の立案が始まろうとしていて、ある人から声がかかり、施策づくりの中心メンバーになった。その過程で出会うほぼ全員について「この人を知っている」と思う不思議な体験があった。

その年、本来は本を書く予定があったけど、そっちに投入されるはずだった自分のエネルギーはすべて町の戦略資料に注ぎ込まれた。書かれた施策の実現に向けて設立された地域公社に加わり、集まった仲間とこの4年半、複数のプロジェクトに取り組んで来て、5年目のいまは世代交代を迎えている。6年前に一度棚上げにしたこと。「これからなにをして生きる?」という問いに向かわないといけないのだけど、考えたところで、考えた程度のことにしかならない。

西村佳苗 [リビングワールド 代表]

2020/9/7 — 9/13

9月9日 [水]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅 (徳島県神山町)

歩いて「かま屋」という食堂に向かう。所要15分。同じ公社で働くTさんと、ある集落に転入して長いUさんの3人で、ミーティングを兼ねたランチ。野菜が美味しい。3人ともデザートまでしっかりいただき、語らいもよく進んだ。

相手を変えようという意図のないコミュニケーションは楽しい。語らいの中で、逆に自分自身の変化に気付くこともある。一方、相手を変える意図のあるコミュニケーションは苦しい。残るのは変化でなく、擦り減る感覚だ。摩擦係数が高いのだろう。

停滞した状況では、なんらかの変化を起こす必要がある。事態に少し動きを与えてみる。移り住んだ町にそんな変化を生み出す仕事に5年取り組んで、驚くほど疲れている自分がある。働いて疲れることなんてなかったのに。

“遊び、はいいよな。相手を変えようとか、そういうのが一切ない。全力でかわり合う時間の中で、遊びもどんどん変化するし、めいめいも変わってゆく。そんなふうに働けるといいと心から思う。今日のランチミーティングは楽しかった。短い時間ながら、思わぬところに辿り着いたね! という着地感があった。

9月10日 [木]

天気 | 晴れ、時々小雨

場所 | 自宅 (徳島県神山町)

東京の母から電話。「私もうすぐ死ぬんじゃないか」「変な夢も見て」と、でも嬉しそう。「仔象と旅する夢なんて見ちゃうし」「列車の向かいの席に座っていて、『お腹すいた?』と聞くと『うん』ってうなづくから、ご飯食べさせてあげた」。場面はそれだけだったそう。「そりゃよかったね(笑)」と返す。

電話の少し前は、川沿いの小さな商店でお刺身を買っていた。山あいでは鮮魚が食べられるのは、毎朝誰かが市内の市場から仕入れてくれているから。カンパチとマグロ。

刺身を買う少し前は、焼き菓子とサンドイッチをつくる女の子の店に寄って、パイを買っていた。彼女は同じまちにあるパン工房から、コロナ禍をきっかけに離れて、本人の仕事場を構えた形。お店に入ると彼女のプレイリストの曲がかかっている。こういうの聴きながら働きたかったんだな。

会社や組織を離れて自分で働き始めたひとの姿を見ながら、「こういう生き物だったんだ(笑)」と思うことがある。ノビノビ生きて欲しい。応援したい気持ちがあるし、買い支えてもいるようで、でも実際に支えられているのはこっちの方だ。

9月11日[金]

天気 | 曇り、時々雨

場所 | 自宅(徳島県神山町)

先ほどまで40名のオンライン・ミーティングの進行をしていた。一般公開イベントではなく、このまちに「これからどんな`場所、`が要る?」という非公開のミー

ティングで、長く暮らしてきた人、近年移り住んで来た人。住民、役場職員。まちにいる人、いまは東京や大阪で働いていたり大学に通っている人々が集まり、あーでもないこーでもないとたくさん語り合った。

こんな状況が実現しているまちってそんなにないんじゃないかなと、少し嬉しい気持ちになる。めげることの多い5年間だったけど、こんなことが起こるなんて……と幸せを感じることも沢山あった。

この流れは東日本大震災から始まっている。震災の年の年末、自分は陸前高田の若い経営者らと出会い、地域の状況づくりにかかわった。そのときに考えたことが、神山の取り組みの下書きになっている。地域にとって「仕事」とはなに? 高齢化や人口減が進む中でより深まる人間関係の序列化をどう考えればいいのか?

9月12日[土]

天気 | 曇り、時々雨

場所 | 自宅(徳島県神山町)

高知との県境にある「雲^{くも}早山^{そうやま}」に登る。今日から発足した「神山ハイキングクラブ」という集い。福岡から来た豊嶋秀樹という友人から`ウルトラライト・ハイキング(UL)、という山歩きのスタイルを実地で教わりながら、10名少々と広葉樹の森を歩いた。

ULは、ハイカットのガッチリした登山靴を履き、万が一の事態に備えてそれなりの装備を背中に担いでゆく旧来の山登りと異なり、足元はローカットのスニーカー、荷物を極端に減らして軽くすることで、逆に事故リスクを減らし、もし天候

が崩れても素早くサッと降りてこれるような、とにかく身軽な山歩きのスタイルだ。

豊嶋さんも以前は、重い装備を担いで北アルプスを縦走していたが、あるときULに出会い、一気にそっちへシフトした。身軽な方へ。並行して働き方も、複数のプロジェクトに同時進行で取り組んできたそれから、絞り込んだいくつかの仕事にマイペースで取り組む形へ。

そして生まれた時間の多くを、バックカントリースキー、ランニング、トレーニング、クライミング、サーフィン、さらに手料理の探究に割く生き方にシフトして、見るからに健やかになった。つまり、生きてゆく上での不安を大きく減らしたわけだ。健康に勝る財産はない。

9月13日〔日〕

天気 | 雷雨、のち曇り時々晴れ

場所 | 自宅（徳島県神山町）

山歩きにくたびれて20時には布団に入ったが、真夜中に目がさめた。強い雨が屋根を打っている。窓の外が真っ白になり、周囲の山全体を震わす地鳴りのような雷が何時間もつづいた。同時にどこかで火災が起きたようで、サイレンや防災放送も鳴り響いている。

昼はまちの食堂へ。高松から来た友人や、町内で歯科医院を開業している友人、妻の4人で、またデザートまで美味しくいただいた。女性3人を残して一人で家まで歩いて帰る。イヤホンを忘れたので、若林恵さんたちのポッドキャストをスマホのスピーカーでラジオのように聴きながら。人の密度が低い世界はすごしやすい。

夜は陸前高田のメンバーや、軽井沢の友廣裕一さんつつないで、来週末の「箱根山学校」の打ち合わせ。ご多分にもれずオンライン・イベント。精一杯やるけど。これまで毎年開いていた5泊6日のワークショップのような時間は、もうこのまま持てないのかな。この数日、過去に参加した人たちから、近況報告とお礼のお便りが偶然つづいた。なんの符号だろう？

西村佳哲〔リビングワールド 代表〕

1964年 東京生まれ。働き方研究家。つくる・書く・教える、大きく3つの領域で働く。開発的な仕事の相談を受けることが多い。近年は東京と徳島県神山町で二拠点居住を始め、同町の「まちを将来世代につなぐプロジェクト」に参画。著書に『自分の仕事をつくる』『いま、地方で生きるということ』（ちくま文庫）など。

西村佳哲〔リビングワールド 代表〕

2020/9/7 ― 9/13

2020 / 9 / 14 ——— 9 / 20

遠藤一郎

カップパ師匠



9月14日 [月]

天気 | 晴れ

場所 | 大分

3日ほど妻が家を空けている間に、ケーキとアイスを食べまくってやったらまんまと体調を崩してね。3日間ぐったり眠りこけてたのよ。まあ、胃腸がやられたよ。ウンコもかたくなってやばかった。けど久々にセルフ腸洗浄もやったし。コレなかなか非現実的な感覚が味わえるから好きなんだよね。かといって用もないのコレやりだしたら、なんかアウトな気がするし。だから今回できてどこか嬉しい気分。わりかしずっと雨が降っていてちょうどいい気分だったが、久しぶりに晴れた今日はそれはそれで素晴らしい気分だよ。朝から『未来へ丸』の船舶係留継続の手続きに役所へ行ってきた。未来へ丸は、3.11のあと『未来へ号』をワゴンからバスにして東北と全国を走りまくって、その走ったGPSの軌跡で列島に文字を描くという「RAINBOW JAPANプロジェクト」の第3段階として、陸だけでなく海にはみ出してでっかい文字をつくってやろうという壮大な企てのもと造船してしまった黄色い船。おとしし東京のイベントで一発やらかしてエンジンがブっ飛んで、

遠藤一郎 [カップパ師匠]

2020/9/14 ——— 9/20

今は大分の港に置いてある。船出したってだけでなんとも感動的なたまらない充実感を得た。

まあそれはそれとして、未来へ丸をつくってた2013年くらいから原因不明の体調不良に襲われたこともあり、その頃に内部被曝検査を受けてみたら3.7マイクロシーベルト。ガッツリ内部被曝よ。当時は微生物に助けてもらおうってんで、手作り雑草酵素を作って、スギナを大量に使って常在菌で発酵させたドロドロの液で内部被曝を1.4マイクロシーベルトまで下げた。奇跡的。のちにメタロン周波数測定装置で全身スキャンしたところ、甲状腺がとて悪くなっていたので、あの原因不明の不調はやはり溜まった放射能が原因ってことをつきとめて、AWGで放射能除去周波数を3時間程かけたらみるみるジリジリ反応した。ああ、よかった。いろいろあって充実した人生だな。

だからとにかく久しぶりに晴れたので、家に帰って柿渋染めの手ぬぐいを作った。柿渋はカキタンニンって天然の除菌抗菌作用があるから、コロナで騒いでる人間にはちょうどいいってんで最高のアイテムとなろう。秋のイベントに出そうと思ってる。旅する服屋さんをやっている仲間が温泉染めをやっているんで、柿渋と温泉染めで手ぬぐいを作ることにしたのだ。染めてみると面白いのなんのって、ついでに汚れたシャツなんかも染めちゃったりしたら凄まじくかっこよくできたので、たいそう気に入った。

巷で流行りの天然酵母パンの長老的存在の「楽健寺パン」がたまたま家に届いたので、やられた胃腸を整えるために食べた。さすがにうまい。ととのった。

9月15日 [火]

天気 | 晴れ

場所 | 大分

まだケーキとアイスの食べ過ぎ不調から復調しきっていなかったの、昼からは
こんにやく療法をやった。こんにやくを熱々に茹でてタオルでまいて、肝臓、
丹田、腎臓にのっけて寝るだけのシンプル行為だが、すごすぎる蘇生力。体をど
んどんあたため臓器と血流を活発化させ、まあ、だいたいのことは良くなる。
とりあえ全員知ってたらいいと思う。これほんとに効くし。知らなきゃ人生損レ
ベルよ。とにかくこんにやくは熱いからさ、ナメてかかると大ヤケだよ。
東城百合子の自然療法はいろいろと常軌を逸してて素晴らしい価値観だらけなの
だが、最近はその中でもトップおぶキチガイの砂療法にはまっている。砂に2〜8
時間埋まるという単純療法だが、これが凄まじい。体に溜まってる汚水やらケミ
カル毒やら重金属やら毒ガスやらが信じがたいほど排出される超お得行為。1年
放置した花瓶の水を想像してみても。体も同じよね。夏の間しかできないし、今
夏は3回埋まって毒をだした。砂に埋まると特に女性が埋まった砂からは今まで
蓄積されているシャンプーや化粧品やらの化学物質が汗やガスとして放出されて、
生ぬるく腐ったようなにおいが充満する。それ吸い込むと吐き気する。ただの毒
でっせ。これも人生やっとかにや大損レベル。とにかくいろいろ非常識で面白い
ので、最近仲間や生徒達を全国各地で埋めまくっている。砂にね。実際もれな
く全員が効果絶大だから、マジで。
それはそうとつい最近、生徒の一人から福島 of その後を知るために潜入調査に
行って来たとのメールが来た。この内容がヤバイ。もう9年も経つので今は話題
にもニュースにも出なくなっているけど、もともと消費者には何も知らされてこ
ないけど。そういうわけでとりあえずは『17 都県放射能測定マップ+読み解き集 増
補版』を注文してたのがちょうど届いたのでさっさと目を通したが、これはすご
い情報量だ。時間ができたら読もう、っと。

遠藤一郎 [カッパ朝臣]

2020/9/14 — 9/20

9月16日 [水]

天気 | 曇りと雨

場所 | 尾道

いや〜〜〜〜〜〜。いやいやいや。今日は移動だな〜〜。15時ナウ。5時
から走ってるから、もう10時間くらい走ってるねえ。今のうちに仮眠して深夜割
りと深夜ドライブ特有のおとずれ合戦にそなえる作戦。曇りもよう。青空はそりゃ
もう、そりゃいいけどもね、なんだかんだこんな曇り空がいいんだよねえ〜。は
っきりしないところが。わくわくするねえ。雲の輪郭とか平面とかその向こうとか。
螺旋とか。運転してる時はだいたい空ばっかみてる。道とかあまりみてない。み
るべきだと1ヶ所しかみえなくて事故る。ポンヤリとかかなんとか、みると
もなくみてる。そうするとみるべくしてみえるから事故らない。フロントガラス越
しの景色って5分の4くらいは空だしね。ドライブ史上最高の時間帯は4時〜5
時くらいの暁や曙あたり。ここがもう本当にたまらない。ギンギンにキてるのよ。
朝日が豪雨が霧が鉛雲が熱風が速度が音量が三日月がドライバーが互いの感性
がみるみる重なって互いの存在がみるみる重なって在だけの状態が完全に顕在
してくる。ドライバーにとってのヤツラとヤツラにとってのドライバーは呼応しあ
って反発しあってやらかしあうのよ。これがドライブ史上最高の醍醐味。これが楽
しいせいで夜行性少年になったようなもんで。ずっと前からヤツラって呼んでる。
富士山を毎日みながら登校してる頃からヤツラはいて、車上生活がはじまったら
ヤツラが復活した。その残像を消さずにみたくて連風をあげはじめた。震災後は
とにかく風をあげまくった。東北でも東北でなくてもあっちこっちで。とにかく風
をあげまくった。風をあげりゃいいと思ってた。いろいろいろいろいろいろあり
すぎて。いろいろいろいろあるけど、風を空にあげればいいんだと。あげてあげて
あげて、あの空を知って、がれきの空に無我夢中だった。風をあげまくった。風

をあげまくった。風をあげまくった。

9月17日 [木]

天気 | 晴れ
場所 | 静岡

今日は御殿場の実家っす。バスを停められない。いつもの富士のすそのに適当に停める。その前に、櫻道布団店で「お日様の力」を買った。次に実家に寄るときに絶対に買おうと思ってたんだよ～～。この布団がもう～～～最高でさ。トルマリンの遠赤効果マジやばい。体があったまって気持ちがいい。ぜんぜんちがう。ぬくいなのんって。布団でこんなにちがうもんかね。ってかんじ。やっと気づかされたよ。人生の3分の1は睡眠で言葉に洗脳されてほんとよかったよ。睡眠で大事だなあ～～。

帰ったら父ちゃんが猛然と家の片付け始めてんのよ。2階にたまったおれの荷物。マズイよ。土石流のように埋め尽くされたおれのお宝共に半ギレだよ。たしかに2階から床ぬける恐怖感とほこり。しかたないよ。ズタ袋に夢がつまってんだよ。ぜんぶ燃やす。

9月18日 [金]

天気 | 晴れ
場所 | 東京

いやはや。とりあえず手前の港北パーキングエリアで仮眠しながら深夜割り時間帯を待つ。この時間の主要エリア付近のPAやSAはトラックや車中泊がひしめきあっていてなかなか独特な文明が形成されてて、なかなか楽しいのよ。とくに

遠藤一郎 [カッパ師匠]

2020/9/14 — 9/20

大型車両系はもはやデフォルトの駐車枠からあふれるので、それぞれが近隣との事故らない絶妙な距離感をじつに工夫を凝らして保ちつつひしめきあう。おれたち数センチ単位で運転してるし、この絶妙な距離感がたまらん。それわざとか?! ってヤツもいて楽しい。遊びもある。ほとんど暗黙の了解ってやつで。暗黙のっていう感覚の領域がヤバイ。べつに会話はないし、ルールとマナーはあるが必要に応じて切り崩し調整しあう。それもお互い了解しあってるしね、コミュニケーション無しで。言語と法律も無しで。出発するトラックはカーテンを開けてから出発前の用をたしにいった暗黙に知らせてくる。距離や細かい様子で意思を伝達しあってるのよ。たがいに迷惑をかけるのがきらいで、仮眠が大事なのわかってるから余計な馴れ合いはしない。感性と観察で、個人でありながらゆるやかにのおずと重なり成る文明。すでにある。

いやああああああ～～～～～～。しかしやれやれ。今から仮眠して5時に起きて東京だし。はやく寝りゃいいのに、なかなか寝ない。なんだかんだボンヤリ起きてる。これなんなんだろうね。このマドロミがたまんねんだよな。自由と無視というかなんというか、だから、もう寝ろっつーのに。なんでもいい。なんにもどうでもよくて、寝ない。眠いのにくわくしやがる。そして寝る瞬間の心地よさ。やたら胸に染みしてくる充足感と幸福感。やっぱ、マドロミ、やめられま

9月19日 [土]

天気 | 曇り
場所 | 長野

早朝に生徒達と神田集合して長野。まずは今のところ出土してる中では日本一の石棒。縄文の。スバラシイ、スツッバラシイにつきる。日本一の石棒なのに博

物館ではなく田園のあぜにそそり立っている。物凄いハがギンギンに響きあってとんでもない色即是空。石棒に抱きつく女生徒達。誰かれ構わず笑えるったらありゃしない。石棒も誇らしげじゃないか。楽しい。連休だったのにわれわれ以外は誰もいない。全国の石棒ファンはなにをやっているのか。

未発掘内山遺跡、なぜかやたら楽しいご当地スーパー、ツルヤ。井戸尻考古館の香呂型土器。まったく別の知覚。八島湿原の縄文スーパーアリーナにて夕暮れどきの4分33秒日抱御霊鎮め。みるみる自意識がすっ飛んでいく。自分の感性は鎮まり、そこに在る感性に重なっていく。石棒のハに重なって響きあっていく。古代縄文スーパーアリーナのハに重なって響きあっていく。時空をこえる大歓声があちこちで轟いてるのよ。体の芯の火と囲む渦がクロスして熱い熱い。これにて普通に余裕。戦わない、所有しない、見せびらかさない、その必要も概念すらもまったくない。ハッハッハッハッハッ。

9月20日〔日〕

天気 | 曇り

場所 | 飛騨

朝から寒かった~~~~。まだ9月半ばってのに長野の山ってやつはまったく。蓼科山の山頂は、ありゃなんだ。その昔どっかの男が蓼科山山頂の穴から落ちて地下都市で暮らした後、龍になって浅間山の麓の池から出てきた、らしい。五井野正は晩年に白樺湖と蓼科山周辺に拠点を構え、曰くこれからこの地が上と中と下を往来するメガステーションになるという。去年唐突に死んだらしいけど、ついに肉体を置いて下か上にでも移動したのかもね。GOPプロシジャー飲まなかったのかな。それにしても、あの山頂はたしかにステーションに相応しい。というかまあ、なんというか、露骨にステーションかもね。銀閣寺の向月台プリン、鞍

馬山の六百万年前に降り立った宇宙船プリン、蓼科山の頂上プリン。くぼみ。月。突拍子もないはずなのにね、複数の知覚が、交差してくると、まあ、露骨だし。しかたない。結局はバカバカしくふざけて、ゲラゲラ笑って、空気を目一杯すって~~~~はいて~~~~、ボンヤリしてるのが最高潮なのよ。体が冷えないように寒くないように。怪我をしないように、ゆっくりでいいので。

午後は諏訪湖の天竜川入口の噴水。これは本当にオモチロイ。大好きだね。誰もみてない。いつでも誰もみてない。1時間ごとに10分ブチ上げる。これぞ、まさに、ブチ上げ。諏訪湖に上がる一直線の巨大チンコ。湖を受け皿に、天竜川の根元に上がる諏訪の水龍の巨大勃起。まさに、昇り龍。誰もみてない。おれたちは七輪で餅を焼いて、醤油にくぐらせ海苔をまいて、適当に食って、適当に転がって、一時間に一度の大スペクタクルを堪能した。ここに在り合うことが旨すぎる。結局たまんねえ。アゲアゲよ。

毎朝お茶おじさんがお茶を沸かしている。日替わり。今朝はピワ茶だった。昨日はほうじ茶だった。明日はスギナ茶だろう。

遠藤一郎〔カップパ師匠〕

1979年静岡県生まれ。未来へ号ドライバー、未来美術専門学校講師。未来龍大空鳳、マグマ農場、for you、DJじゃみへんさん、FROM HELL、ドラゴンリリース、ほふく前進、などを進行中。

2020/9/14 — 9/20

遠藤一郎〔カップパ師匠〕

2020 / 9 / 21 ——— 9 / 27

榎本千賀子

写真家／フォトアーキvist



9月21日 [月・祝]

天気 | 曇り

場所 | 東京の自宅 (杉並区) より区内各所を自転車で巡る

鋭い小さな痛みで目覚める。先月から飼い始めた子犬のイクが、腕と言わず足と言わず、手当たり次第に噛んでいる。赤城山麓の野犬が牛糞の上に産み落としたイクは、瓜二つの妹とともに生後2ヶ月で保健所に捕獲されたと聞いた。蝙蝠こうもりの翼を思わせる大きな耳に、ひょろりと細長い手足で跳ね回る黒犬は、現在4ヶ月。「遊べ!」とばかりに甘噛みを繰り返すイクを叱りつつ、夫とふたり急いで着替え、イクを川沿いまで散歩に連れ出す。

朝食を済ませて午前中は夫方の墓の草取りへ。昨日お彼岸の墓参りへ行ったところ、我が家の墓は見事に草に埋もれていた。しかし生憎の雨に加えて、高齢の義母とイクも一緒だったため、その場では手が出せない。そこで今日、改めて夫婦のみで寺へ。生い茂った草をひたすら抜く。覚醒時の言語で夢を捕まえる困難について夫が話すのを面白く聞く。しゃがみっぱなしの作業に、夫は立ちくらみ、私は腰痛。

榎本千賀子 [写真家／フォトアーキvist]

午後は私の実家方の墓へ。新型コロナ感染症が流行し始めて間もない3月、私は長く共に暮らした祖母を亡くした。その祖母が眠る墓。葬儀当日に発熱し、その後も体調不良が続いたため葬儀や法事には参加できなかった。とはいえ、私は幸運にも亡くなる当日の祖母に会っている。それで納得できたのだろう、私は異例なものとなった喪の時間を、それなりに受け入れている。しかし、お彼岸の賑わいを目にして、時と場を共にするという人の基本的な営みを通じて広がる感染症を、私たちの有限な生に折り合わせる困難を再び考えてしまう。私のもうひとりの祖母は、末期がんで入院中だ。病状は安定しているが、彼女は3月から家族・友人の誰とも会えていない。墓の前で母、妹一家と落ち合い、4歳になる姪っ子の手を引いて実家に向かう。

17時頃自宅に戻り、遊びに来た義兄と夕食。義兄には離れて暮らす一人娘がいる。彼女の話で盛り上がるテーブルの下で、イクが人の足を狙っている。

9月22日 [火・祝]

天気 | 晴れのち曇り

場所 | 東京の自宅 (杉並区) から奥会津の自宅 (福島県金山町) へ

6時前からイクが騒ぎ出す。昨晚遅くまで作業していたからか、ひどく眠い。私は布団をかぶって無視を決め込み、朝の散歩は夫に任せる。

8時頃起き出して机に向かってしていると、散歩から帰った夫が再びベッドに転がって寝息を立て始める。しばらくして目覚めた夫は、今見たばかりの夢の内容を語りだす。「千賀子さんなんだけど、千賀子さんじゃないの」夢の私は全くの別人で、家には大勢の見知らぬ撮影隊が上がり込んでいたらしい。目覚める直前、夫は家に上がり込んだ人々に、出ていってくれと泣きながら怒っていたのだそう。遅い朝食を一人でとってから荷造り。今日は夫に奥会津の家まで送ってもらう。車

2020/9/21 ——— 9/27

に荷物を詰め込んで、長距離ドライブの前にイクをもう一度散歩に連れ出す。歩き終えて家に戻ろうとしたその時、見覚えのない女性がイクを触っても良いかと声をかけてきた。どうぞと応えると、彼女は身を屈めて抱きしめるようにイクを撫で、愛おむように「家に連れて帰りたい」とつぶやく。飼い犬を2年前に亡くし、それからは動物を飼っていないらしい。私たちが2年前に亡くした先代の犬「キツミ」のことも、散歩姿を見掛けて覚えていると彼女は言う。友人がイクをアヌビスに似ていると評していたが、冥界の神・アヌビスに似た子犬が、死んだ犬の思い出を呼び寄せている。

昼食前に出発。奥会津の自宅へ向かう。夫のiPhoneに入った音楽をシャッフル再生しながらの走行。リグティがかかる度に、寝ていたイクが驚いて顔を上げる。私の夫・菅谷昌弘は作曲家だ。夫はラジオドラマなどのために自分が作曲した曲がかかると、作曲当時の思い出を聞かせてくれる。

塩原で休憩。箒川沿いの遊歩道でイクを散歩させる。イクは河原に降りる階段を見つけて駆け下りる。昨日までは自力では階段を上り下りできなかったはずだ。イクはそのまま河原を突っ走り、浅瀬に飛び込んで跳ね回る。こういうことが好きな子だったんだね、と夫と話す。

夕飯前に金山着。温泉に寄ってから自宅へ。温泉が効いたのか、すぐに眠くなって寝てしまう。

9月23日 [水]

天気 | 曇り

場所 | 奥会津の自宅（福島県金山町）から新潟の自宅（新潟市中央区）へ

起き出したイクが、畳んであった服を咥えて走り回る。夫に急かされ、すぐに散歩へ。

榎本千賀子 [写真家/フォトアーティスト]

2020/9/21 — 9/27

自宅を借りている大志の隣、中川集落まで歩く。中川にはリキという馴染みのシベリアンハスキーの老犬が居る。そのリキの家まで行ってみることにする。とはいえ犬同士の反応は読めず、当初は遠巻きに見るだけのつもりだった。しかしリキの傍へ来てみると、意外にもイクはリキを怖がらず、リキもイクを嫌がらない。そこでゆっくり2匹を近づけると、イクはころりと横になってお腹を見せ、リキは興奮してよだれを垂らしながらイクの体を嗅ぎ回る。リキの飼い主も出てきて、2匹の対面の様子を一緒に眺める。イクはさんざんはしゃぎ回り、リキはぶんぶん尾を振ってそれに応えている。飼い主は、リキをシャンプーに連れて行くのが大変なのだと言っていた。

リキと別れ、家に戻って朝食。食後、家中の窓を開け放つ。新型コロナウイルス感染症の流行と自分自身の体調によって、今年は年明けから長期にわたってこの家を留守にせざるをえなかった。その後久々に来てみると、家中にカビが発生し、悲惨な状況となっていた。

それから私は、時折この家に泊まって室内の空気を入れ替えることにしている。その後、Zoomでの研究会に参加。研究会の最後、町の防災無線のチャイムが鳴り響いて慌ててマイクをオフにする。昼は道の駅の食堂でお蕎麦。調査への協力を依頼したHさんがちょうど夫婦で食事に来ていて、ご挨拶。案内をお願いしたいところがあるけれど、屋外ならばお話を聞くことは可能ですかと聞くと、Hさんは「この辺の人はコロナなんかかからないよ、お酒で洗い流しちゃうもの」と冗談を言って笑った。

昼食後に夫、イクと別れて、金山の家に駐めてあった私の車でひとり新潟へ。途中、阿賀野川沿いで少し撮影してから、大学に向かう。久しぶりの対面会議では、学生のメンタルヘルスや、対面授業の一部再開などが話題となる。20時過ぎに新潟の自宅へ戻る。

9月24日 [木]

天気 | 曇り時々雨

場所 | 新潟の自宅(新潟市中央区)から五泉市へ

朝一番で溜まった洗濯物を片付ける。奥会津の自宅の洗濯機が壊れてしまい、寝具やタオルなどをすべて新潟に運んで洗っているため、結構な量になる。干した洗濯物がはためくベランダを見ながら仕事。半袖のTシャツ1枚では肌寒い日。東京、新潟、金山町を往復する生活を、私は7月頃より再開した。自分自身でできる感染予防策は、もちろんとっているつもりだ。しかし、自分が感染し誰かにうつす可能性をゼロにはできない。うっすらとした不安をいつもどこかに感じている。

東京の家には高齢の義母が居て夫は長期間家を留守にすることはできず、私の仕事場は新潟と金山町にある。そして夫と私の間には、22歳の年齢差がある。私たちが結婚することを決めたのは、共に暮らせる時間に限りがあることを意識せずにはいられなかったこと、しかし離れて暮らさねばならない時間が長くなる可能性が高かったこと、この2点によるところが大きかった。私たち夫婦にとって結婚とは、制度の裏付けがなければ分かりにくい2人の関係性と、共に過ごす時間の必要性を、社会に向けて示すものでもあった。感染症が流行する以前は、こうした事情は十分理解・尊重してもらえるものだったと思う。しかし、今の状況下でこうした事情は、どのように受け止められるものなのだろうか。

午後から撮影。この春から、阿賀野川沿岸を少しずつ撮影している。私がフィールドにしている金山町と新潟は、川によって結ばれている。現在の川は階段状に作られた水力発電ダムによって分断されているが、かつてこの川の流域は鮭がさかのぼり、人やモノを載せた船が行き来し、筏に組まれた材木が流されることで、連続した世界となっていた。そうした世界の現在を、まずは歩いてみる。今日は

榎本千賀子 [写真家/フォトアーティスト]

2020/9/21 — 9/27

早出川と阿賀野川の合流点へ。しかし、どこに車を駐めようかと迷ううちに、雨がぱらつき、体が揺さぶられるほどの風。また明日以降、何度かここに来なければならぬ。

9月25日 [金]

天気 | 雨のち曇り

場所 | 新潟の自宅(新潟市中央区)

朝から雨。生理痛が辛く、仕事がなかなか手につかない。今日はもう仕方ないと諦め、せめて読書を進めようと、第3部後半をわずかに残したままにしていた石牟礼道子『苦海浄土』を開く。読みはじめてすぐに、この作品が女性水俣病患者の月経に繰り返し触れていたことを思い出す。自分自身の抱える腹痛に導かれ、第3部を一旦読み終えてからこれらの箇所を振り返る。例えば、今日読んだばかりの第3部第7章。訴訟派患者・淵上マサエの死に際して回想される、かつて彼女が胎児性水俣病患者である娘・一二枝について語った次の言葉。

寝たきりの一二枝に初潮がはじまったとき

「どげんしても先には死なれん。なあ、うち殺してから死なんば」

自分も大義そうになって来た体をかすかによじってそう云っていた。

また、公害以前の幸福に満ちた漁師の暮らしを、魅惑的な土地の言葉で語る第1部第3章「ゆき女聞き書き」での、坂上ゆきの嘆き。

うちは熊大の先生方に診てもらおうとったとですよ。それで大学の先生に、う

ちの頭は奇病でシンケイドんのごてなってしまうて、もうわからん。せめて月のもんば止めてはいよと頼んだこともありまして。止めやらんげですね。月のもんを止めたらなお体に悪かちゅうて。うちゃ生理帯も自分で洗うこたできんようになってしまったですよ。ほんに恥ずかしか。

性的な成熟の徴である月経は、それ故にこそ、性成熟を迎えてなお「すそまわり」の始末さえままならない胎児性患者の娘とその母や、海上でも陸上でも漁師の妻に期待される役割を果たせなくなってしまった女性患者の苦痛を顕にする。私は自分自身が身体を通して経験してきたあれこれをつらつらと思い出しながら、彼女たちの苦痛のかたちを定めたものについて考える。

夕方まで雨が続き、結局私は今日一日家に閉じこもっていた。夜は来年度に向けた書類作り。来年には新しい感染症との妥当な折り合いの付け方は見つかったのだろうか。

9月26日〔土〕

天気 | 曇りのち雨

場所 | 新潟の自宅（新潟市中央区）より新潟市西蒲区を経て奥会津の自宅（福島県金山町）へ

お屋前に砂丘館の館長である大倉宏さんと待ち合わせて、西蒲区へ。まずは地元の独立系コンビニで「元気弁当」という名の弁当を買い、溜池である仁箇堤の縁に腰掛けてふたりで腹ごしらえ。今日はこれから新潟大学の原田健一先生と大倉さん、私の3人で、石山与五栄門さんのご遺族に挨拶に向う。石山さんは、旧巻町職員として郷土史の編纂に携わるとともに、消えゆく潟の風景や潟周辺の人々の暮らしを写真に遺してきた方だ。石山さんが遺したネガフィルムは、今年6月より原田先生が代表を務める地域映像アーカイブ研究センターが預かっている。

鎌本千賀子「写真家／フォトアーキビスト」

2020/9/21 — 9/27

素朴な「元気弁当」を頬張りながら、大倉さんがサカウチアミによる鴨猟について話しはじめる。これは、水面から飛び立つ鴨を櫓の上などで待ち伏せし、飛び立ったばかりの鴨がちょうど頭上を通過するときに狙って、Y字型の網を投げかけるという猟だ。石山さんもこの猟に関心を持ち、仁箇堤で猟を撮影したのだという。そんな話をする間にも、3羽の鴨がやって来て、螺旋を描いて下降し、目の前の水面に浮かぶ。たしかにここなら、鴨を捕まえるに丁度良さそうだ。このような投網による鴨猟はかつては全国で行われていたが、今では石川県と種子島に残るのみだと大倉さんは言う。

原田先生と合流し、石山さんのお宅へ。最近ご病気をされたという石山さんの息子さんにも、お話を聞くことができた。その後、これまで石山さんのフィルムを保管・管理していた斎藤文夫さんにもご挨拶。私たちはお預かりした石山さんの写真をデジタル化し、展覧会を開催する計画を立てている。

大倉さん、原田先生と別れて、すぐに金山町へ向けて出発。ぎりぎりまで迷っていたが、明日は仙台に行くことに決めた。仙台写真月間の展示を見ておきたい。金山町の家を中継地にすれば、日帰りも苦ではないだろう。車を走らせていると、阿賀町あたりから雨が激しくなり、土砂降りのなか奥会津の自宅に到着。

9月27日〔日〕

天気 | 曇りのち雨のち晴れ

場所 | 奥会津の自宅（福島県金山町）から SARP（仙台市）へ

昨夜遅くに奥会津の自宅で合流した夫、イクとともに朝寝坊。ともあれ散歩へ。中川のリキのところまで歩く。イクはリキの家への道順を覚えてらしく、自分からずんずん歩いてゆく。顔を合わせるなり尻尾を振って匂いを嗅ぎ合う2匹。もうすっかり馴染みの様子。リキと別れて家に戻り、仙台へ向けて出発。

SARP で開催中の仙台写真月間へ。仙台写真月間は、東北を拠点に活動する写真家たちが中心となって運営する、年に一度の写真の連続展である。私自身も過去2回参加したが、年齢もキャリアも方法も様々な写真家が集まり、自由で継続的な発表の場を守っているということに、私は勇気づけられるような気がしたものであった。

今回のめあては「公開編集室 細倉を記録した寺崎英子の遺したフィルム」展。「公開編集室」を掲げるこの企画は、細倉鉱山の閉山が発表された1986年頃より細倉の町を撮影し続けてきた故・寺崎英子さんの仕事を写真集にまとめることを目指し、会期を通して編集作業を行うというものである。編集作業が進むにつれて会場は毎日変化したそうだが、展示最終日である今日は、完成した編集案が壁を巡り、選から漏れた写真が床に並んでいる。

この展示企画の中心となった写真家の小岩勉さんに、選から漏れて床に並べられている写真がかえって気になると夫が話している。ひとつの選択をしたことで、その選択以前には気付けなかった別の可能性が鮮明に見え始めるということ、写真を編集していて私もよく経験する。創造の不思議はそんなところにあるのかもしれない。

小岩さん、仙台の友人にイクを紹介し、夕暮れの青に沈みはじめた仙台を後にする。夫が運転する夜の高速道路、磐梯河東ICを過ぎたあたりで、視界が一挙に開け、会津若松の町の灯が目に入る。町なかを歩く時よりも、はるかに「都市」を感じさせる光の海。山から会津盆地に降りると、いつもはっとさせられるその「都市」の姿に今日も驚きながら、私は眠気にとらわれてゆく。

榎本千賀子「写真家／フォトアーキビスト」

2020/9/21 — 9/27

榎本千賀子「写真家／フォトアーキビスト」

1981年生まれ、東京出身。一橋大学言語社会研究科博士課程単位取得退学。新潟大学創生学部特任助教。人の暮らしが生み出す様々な「かたち」に関心を持ち自身の制作を行うとともに、地域に残るヴァンキュラー写真を対象としたアーカイブの構築・運営に携わる。2016年より福島県大沼郡金山町の写真アーカイビング事業〈かねやま「村の肖像」プロジェクト〉の企画・運営に参加し、その成果を写真集『山のさざめき 川のとどろき』（金山町教育委員会、2019年）へとまとめる。主な個展に「人為のかたち」(Kanzan gallery、2020年)など。現在、福島県大沼郡金山町、新潟県新潟市、東京都杉並区を拠点に活動している。

2020 / 9 / 28 ——— 10 / 4

山内宏泰

リアス・アーク美術館 副館長／学芸員



9月28日〔月〕

天気 | 快晴

場所 | 宮城県気仙沼市某所

今日明日は休館日。明日は期限が迫っている仕事をやる予定だが、今日は気晴らしに釣りをした。妻は振休で休みだと言うが今朝まで知らなかった。

23日に購入した新しい竿とリールの具合を実釣で試すのが目的で、釣果はあまり期待していなかった。最近坊主続きだったのでどうせ釣れないだろうと思っていたが、予想外にサバが3匹釣れた。

時合が来る直前、どこからかやってきた爺さんに「釣れるか?」と話しかけられた。釣れないと答えた。そして時合が去るとサバの群れと共に爺さんも去っていった。あれはたぶん恵比寿さんだったのじゃないか。

震災復興事業のせいだと地元民は言う。「かさ上げた土砂の流入や未だに終わらない護岸整備、防潮堤建設。そのせいで磯がダメになり、根の魚がいなくなった。それに加えて海水温の上昇など悪条件が重なっている……」、その通りだと思う。

山内宏泰〔リアス・アーク美術館 副館長／学芸員〕

今日はサバをさばいて塩ゆでにした。どれも25cm弱のコサバなので、まぁ、缶詰の代わりにでめしと思う。

9月29日〔火〕

天気 | 晴天

場所 | 宮城県気仙沼市某所

今日は予定通り午前中から仕事場に入ってもろもろの仕事をした。妻は今日も振休だというが、それも聞いていなかった。多少ごねられたが妻も昼前には家を出て仕事をしに行くというので、こちらも予定通りにさせてもらった。

市立病院看護学校の期末試験の採点をしなければならない。10月7日が提出期限で、結構余裕があったはずだったが、その余裕分を9月の議会対応で全てそがれてしまった。それと9月26日にオープンした特別展「伝えたい伊勢湾台風の教訓～巨大化する台風に備えて～」の展示作業や取材対応で、だいたい時間を取られてしまった。

看護学校の試験問題は、半期授業の全てについてレポートを書かせている。ゆえに採点と言ってもレポートの評価なので、けっこう大変。

16時には切り上げ、スーパーで晩のつまみと酒を買った。夕方は筋トレとランニング。だいぶ涼しくなった。コロナ自粛の4月から走り始めたので、ほぼ半年。週一なら続くものだ。コロナ禍で少し健康体になった。

9月30日〔水〕

天気 | 晴れ／曇り

場所 | 宮城県気仙沼市某所

2020/9/28 ——— 10/4

今日は普通に出勤日。朝からあまり体調が良くなかった。寝冷えしたかもしれないが、検温結果に異状はなかった。

伊勢湾台風資料展を見に来た唐桑の老人が「洞爺丸台風の資料は無いのか、それではいかん!」と謎のご立腹で、看視員からのヘルプコール。お話を伺ったところ、「いつかあなたと話したいと思っていた」とのこと。

震災で被災して、それ以来いろいろ忙しくて美術館に来ることができなかったのだとか。「若いころ、サンマ船に乗ってカムチャッカ付近で漁をした。座礁して死にかけた。外務省を通じて帰国した」など面白い話を聞いた。御年83歳と言っただろうか。その後、大変満足された様子でお帰りになったとの報告を受けた。「話したい老人」の話を聞く、それも文化を伝える大切な仕事。

夕方になって急きょ、「明日、振休消化のために休め」との指示。仕方がないので看護学校の試験採点は自宅で行うことにした。明日は家で仕事をする。それじゃ休みにならんけど。

10月1日〔木〕

天気 | 曇り
場所 | 宮城県気仙沼市某所

今日は振休で基本的には家にいた。朝8時に起きてすぐ、朝飯前にサバカレーの仕込みにかった。サバは先日、9月28日に釣ったものを塩ゆでにし、瓶詰にしていたものを使った。カレーについてはだいぶ前に買ってあったレッドタイカレーの缶詰を使った。具材はサバの他に玉ねぎとシイタケを加えた。カレーの缶詰には刻んだタケノコや香草、唐辛子などがそれなりに入っており、けっこう充実したカレーになった。もろもろの調味料、香辛料を加えて完成。なかなかの仕上がりにった。1時間ほど寝かせてからランチとした。

一休みし、屋ころから看護学校文化人類学の試験答案採点を始めた。ほぼ20歳の若者たちの物の考え方にはなかなか面白いものがあり楽しみながら採点したが、やはり時間がかかる。

21時過ぎに帰ってきた妻にカレーを振舞った。3分とかからず完食。カレーは飲み物ではないはずだが……。

明日の晩は久しぶりの気仙沼地元メンバーで飲み会。ちょっと楽しみだ。

10月2日〔金〕

天気 | 晴れ／曇り
場所 | 宮城県気仙沼市某所

今日は予定外の来客対応と電話対応が続き、予定していた仕事がさっぱり進まなかった。しかし今夜は飲み会なので仕事は切り上げた。日記もここで終わり。

10月3日〔土〕

天気 | 晴れ
場所 | 宮城県気仙沼市某所

今日は午前中に高校生の対応をした。地域社会研究という特殊な課題に取り組んでいる生徒で、「自然と共存する文化をつくることで持続可能な町を実現できるか」とのテーマに基づく五つの質問を持って訪ねてきた。自然災害による被災地ならではのテーマと言える。10時から11時40分頃までひたすらお話をした。

以前こちらから提供した話題についての追跡取材のような感じだったが、新しい価値観を持った若者が増えてくれればと思い、知りうる限りの情報を提供した。彼女たちが成長し、気仙沼に明るい未来をもたらしてくれることを祈りたい。

10月4日[日]

天気 | 曇り

場所 | 宮城県気仙沼市某所

今日は10時から12時まで震災伝承関係の打ち合わせ予定が入っていたが、先方の到着が11時で、そのまま話し込んで14時になってしまった。話題は石巻の復興祈念公園などについて。昼食をとる時間が無くなってしまったが、おにぎり一つなので、パクパク食べて終わりにした。

食後はすぐに試験の採点、最後の5名分を終わらせ、雑務を片付けたらもう17時、終業時間になってしまった。

個人的に頼まれた仕事があるため、帰りの打ち合わせを終えてから再び仕事にかかった。結局21時過ぎまでかかった。

明日は午前中、相談事対応で地元の水産加工会社に行く。休みだが仕方がない。午後はまたサバを釣りに行こうかな。

山内宏泰 [リアス・アーク美術館 副館長／学芸員]

1971年、宮城県石巻市生まれ。1994年、宮城教育大学中学校美術教員養成課程卒、同大学院入学（リアス・アーク美術館勤務のため9月中退）。常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」企画担当。美術家としても活動しており、舞台美術家、衣装家として多数の舞台に参加。スローフード気仙沼理事。2012～2018年、人間文化研究機構国立歴史民俗博物館共同研究員。2013年、気仙沼市東日本大震災伝承検討会議委員。2014年、気仙沼市東日本大震災遺構検討会議委員及び遺構施設展示アドバイザー。2017年より気仙沼市復興祈念公園施設検討委員、一般社団法人気仙沼まちづくり支援センター理事。2004年宮城県芸術選奨新人賞受賞（美術・彫刻）。2017年棚橋賞受賞（日本博物館協会）。著書に山内ヒロヤス『砂の城』（近代文芸社、2008年）がある。

山内宏泰 [リアス・アーク美術館 副館長／学芸員]

10

2020
OCTOBER

新型コロナウイルス
新規感染者数
(2020年10月1日現在)

国内: 623人
東京都: 234人

- 1日 - 政府、入国制限措置を全世界対象に緩和。
中長期の在留資格を持つ外国人に新規入国を認める
- 菅義偉首相、日本学術会議の推薦者6人任命拒否。
現行制度で初
- 5日 - 入管による外国人長期収容、国連が国際法違反と指摘
- 7日 - 政府、2021年に緊急避妊薬を医師の処方箋が
なくても薬局で購入できるようにする方針を固める
- 12日 - 台風19号(令和元年東日本台風)から1年、
いまも「みなし仮設」などで暮らす人は9,400人超
- 22日 - 宮城県議会が請願を採択し、東北電力女川原子力
発電所2号機の再稼働に同意。
再稼働した場合、2011年以降被災地で初
- オランダの研究チーム、人の喉に未知の臓器を発見
- 23日 - 新潟県中越地震から16年
- 政府、東京電力福島第一原発の汚染水の
海洋放出の決定を11月以降に延期
- 24日 - 核兵器を全面禁止する核兵器禁止条約を批准した
国・地域が50に達し、2021年1月発効が決定
- 26日 - 臨時国会開会
- 28日 - フランスは全土で10月30日から12月1日まで、
ドイツは部分的に11月2日から12月2日まで、
ロックダウン(都市封鎖)を発表。
ヨーロッパで感染が再拡大
- 30日 - トルコとギリシアのあいだにあるエーゲ海で
M7.0の地震が発生

2020 / 10 / 5 ——— 10 / 11

木村敦子

クリエイティブディレクター／アートディレクター／編集者



10月5日[月]

天気 | 雨のち曇り

場所 | 岩手県盛岡市の事務所

雨の音で目が覚める。だいぶ寒くなってきた。今日は事務所でデスクワーク。PCの前に座ってられる日は貴重なのでどンドン作業。年末に向けて新型コロナウイルス感染症対策助成金案件が増えてきた。

昼ごはんはじゃじゃ麺の赤(辛いやつ)にニンニク多め。ニュースでは、今年で最後となる「ゆるキャラグランプリ」で、陸前高田の「たかたのゆめちゃん」が優勝したとのこと。高田にはずいぶん行ってないなあとぼんやり思う。一本松のあるあのへんはどうなっているのだろうか。砂埃とダンプカーの思い出しかない。更新したい。

10月6日[火]

天気 | 曇りのち晴れ

場所 | 岩手県盛岡市の事務所など

2020/10/5 ——— 10/11

今日は車検。早めに家を出て事務所へ向かう。昨日よりさらに寒いのでタイツを履いてマフラーを出した。午後からは盛岡市公園みどり課の「緑のまちづくり会議」へ出席。Park-PFI整備事業、公園活性化プラン、緑の基本計画などについて。その後、非常勤講師を勤めている専門学校にて、動画撮影の打ち合わせ。夜には娘の誕生日（本当は3日だったのだが）祝いでケーキを買って帰る。なんともう18歳。『6歳のボクが、大人になるまで。』という映画で、主人公の母親が大学生になって自宅を出る息子にむかって言うセリフ「I just thought there would be more」が思い出される。人生って「もっと長いと思っていた」けど、あっという間だ。この先もいろいろあると思うけど、まずはおめでとう。

10月7日 [水]

天気 | 晴れ
場所 | 岩手県盛岡市の事務所など

午前中は、動画収録の会場下見と某社との定例ミーティング。午後は、月末の岩手アートディレクターズクラブ展覧会の会場下見→ラジオのレギュラー番組収録→岩手県産羊毛『アイウール』プロジェクトの打ち合わせの後、事務所に戻ってPC作業。外にばかりいるので、デスクワークがはかどらず。アイウールは、県内のめん羊農家とホームспан作家を繋いで商品制作を行ったり、福祉作業所に細かい作業を委託できないか模索したりして3年目を迎え、今年度はなんとグッドデザイン賞を受賞することができた。岩手県知事もアイウールのネクタイを購入してくださるそうで、関わったみんなが喜んでるのがなにより嬉しい。一緒に動いているライター・水野さんとも祝杯をあげたいところだが、お互いに忙しくてまだ飲みにも行けず。とほほ。夕飯後、毎週楽しみにしてる『刑事コロンボ』(NHK BS)を見てると、なぜか電話

がかかってくる、というジンス(?)が今週も発動。後半のストーリーがよくわからなくなる。まあ、犯人はわかってるけど。

10月8日 [木]

天気 | 曇り
場所 | 岩手県盛岡市の事務所など

岩手県立美術館の「小さなデザイン 駒形克己展」へ、グラフィックデザイン科の学生たちを引率。駒形さんの幼児絵本『ごぶごぶ ごぼごぼ』には子供たちがずいぶんお世話になった。懐かしい。それにしても30年以上前の作品を完璧に保存(シワひとつないフライヤー!)しているのに驚く。学校に戻り、動画撮影の準備。コロナウイルス対策関連の補助金事業で、クリエイターとクライアントのインタビュー動画を撮影するのだが、その制作を学生たちへ依頼した案件。いろいろ難しい点もあるが、学生たちがとても頼もしい。収録後、事務所に戻りメールチェックなど。夜は来年に向けた案件の会議。ぜんぜんデスクワークできず。メールばかりが降り積もっていく。

10月9日 [金]

天気 | 晴れ
場所 | 岩手県盛岡市の事務所など

もう金曜日! アイウールをIBC岩手放送が取材してくださるので、県庁にて打ち合わせ。来週にはニュースの特集枠でオンエアとなる予定だが、テレビは高齢者にもわかりやすく伝わるので、とてもありがたい。めん羊生産者も高齢化しているので、喜んでいただけるのではないかなと思う。

木村敦子 [クリエイティブディレクター/アートディレクター/編集者]

2020/10/5 — 10/11

夕方からは Zoom にて JAGDA (日本グラフィックデザイナー協会) の展覧会委員会の初顔合わせセッション。今年度からの新テーマが「グラフィックデザイナーによる地域活性化」ということで、委員長 福島治さんを中心に、広島、栃木、鳥取、長野といった地方在住デザイナーが各地域での活動を展覧会にまとめていく。大変そうだが今後の展開が楽しみ。福島さんは、ソーシャルデザインを専門とするグラフィックデザイナーで、東日本大震災後は何度も沿岸部に通われ「やさしいハンカチ展」などの被災地支援プロジェクトにずっと取り組まれてきた方。いろいろ勉強させていただこうと思っている。

10月10日 [土]

天気 | 曇り

場所 | 岩手県盛岡市から秋田県横手市

数週間ずっと休み無しなので、思いきって家族キャンプに出かける。犬も連れて完全オフ。まあなんとかなるでしょう (絶対的オプティミストなもので)。この時期はバイクでシャインマスカットを買いに出かけるのが恒例なので、キャンプもその角度で秋田県横手市へ。みんな新型コロナの自粛生活のストレス発散しに来てるのだろうか、キャンプ場は賑わっていた (そういえばみんなマスクをしてない)。夜にテーブルのランタンをつけると、震災の夜を思い出す。娘 (まだ小学3年生) と二人、停電の中で「キャンプみたいだね」と話したなあ。怖がらせないように、嫌な思い出にならないように必死だったなあ、などと。大粒のぶどうと焚き火と赤ワインで気持ちよくなったのち就寝。

木村敦子 [クリエイティブディレクター / アートディレクター / 編集者]

2020/10/5 — 10/11

10月11日 [日]

天気 | 晴れ

場所 | 秋田県横手市から岩手県盛岡市

キャンプ場をチェックアウトし、横手市増田まんが美術館へ。旧増田町出身である矢口高雄先生の画業50周年展をじっくり見る。なんといっても『釣りキチ三平』なのだが、特に80年代からの画面密度と自在なカメラワーク、風景描写のパスなど、上手すぎて唸りっぱなし。白土三平の影響を脱し、オリジナルの表現をみつけたあたりののびのびとした描線がほんとに気持ち良い。いいものを見た。矢口先生、どうぞ長生きしてください。帰路の途中で西和賀町の「スーパーオセン」に立ち寄り、肉と刺身を大量購入。いつ来ても安いので買いすぎてしまっ困ります。帰宅後、洗濯などして夕飯を頂くも、娘がぜんぜん起きてこない。メールチェックなどして就寝。来週も働くぞ。

木村敦子 [クリエイティブディレクター、アートディレクター、編集者]

1968年盛岡市生まれ。仙台市の印刷会社、デザインプロダクションを経てフリーに。屋号「kids」として紙媒体を中心としたデザイン事務所を営む傍ら、2005年、有限責任事業組合まちの編集室メンバーとして地域誌『てくり』創刊、以後継続発行。デザインと編集を軸に、イベント企画、コーディネーター、ものづくりプロデュース、セミナー講師なども行う。JAGDA (日本グラフィックデザイナー協会) 展覧会委員、岩手県文化芸術振興審議委員、盛岡情報ビジネス & デザイン専門学校非常勤講師、岩手 ADC 事務局など。企画運営とアートディレクションなどを担当した「地域における産業循環の取り組み／いわて羊を未来に生かすアイワールプロジェクト」が「取り組み・活動・メソッド」カテゴリにおいて2020年度グッドデザイン賞を受賞。

2020 / 10 / 12 ——— 10 / 18

矢部佳宏

西会津国際芸術村 ディレクター



10月12日 [月]

天気 | 曇り

場所 | 西会津国際芸術村 (福島県・西会津町)

体が重い。深夜3時まで仕事をしていたせい。

東京に住む大切な知人の夫が亡くなったということで、西会津町の共通の知人から問い合わせがたくさん来る。コロナ禍で東京の葬儀に参列するのは、少し気が引けてしまうのだが、先方も家族葬にしたいらしく、香典とお花を送ることにした。ふと、震災後の福島での葬儀参列は、“少し気がひける”ということになった人も多いのかもな、と思う。

仕事場の西会津国際芸術村へ移動。増え続ける案件の数。コロナ禍で社会がリモートに慣れた結果、会議や打ち合わせの数が数倍に増えている。それまで集中して仕事を片付けられる時間が夜中だったのだが、そこに打ち合わせが入るので、より一層忙しくなる。もともと山奥のリモート地で仕事をしてきた私のところには、アフターコロナの社会像に関する相談や、移住・多拠点居住についての

矢部佳宏 [西会津国際芸術村 ディレクター]

相談が増えるようになった。

人手が足りない。スタッフや地域おこし協力隊、インターンの数も増えた。急に20代が多くなり、とても賑やかだ。そういえば、今集まって来る20代からは、西会津町の放射線量について聞かれることがなくなった。確か4、5年前ぐらいまでは、よく聞かれていた気がする。

10月13日 [火]

天気 | 曇り

場所 | 西会津国際芸術村 (福島県・西会津町)

久しぶりに打ち合わせが少なく、デザインの仕事に没頭。このところ、スタッフからの相談や指示、もしくは相談に来る人たちとの打ち合わせばかりだったので、デザインの仕事に癒しを感じる。

今日も草刈りの時間がとれなかった。野生動物が家に近くなる。震災後に急に増えたイノシシの数。それまではいなかった。玄関のすぐ前までくる。掘り返されたあぜ道を見ながら、ため息をつく。

10月14日 [水]

天気 | 曇り

場所 | 西会津国際芸術村 (福島県・西会津町)

「アートの多様性を理解する人が少ない」と訴える高校生がいる。彼はインターネットで授業を受ける高校に通っている。数ヶ月前、アートの多様性を伝えるフリーペーパーを制作したいとメールが届き、それ以来相談にのっている。今日は彼が僕に取材をする日だった。クラウドファンディングでいくばくか有名に

2020/10/12 ——— 10/18

なったらしく、僕に取材をする彼を取材する NHK のクルーと一緒にやってきた。
カメラをずっと向けられていても、彼の質問や会話はいつも通り。すごく緊張した
様子だったけど、高校生であっても、魂で語って来る人間は、周りに誰がいても
が、言いたいことや聞きたいことをきちんと伝えられるんだろな。

僕が高校生の頃は、そこまで明確に言語で伝えることはできなかった気がする。
。正しいとか正しくないとかではなく、矛盾や疑問を感じ、それをはっきりと
表現できることは、とても尊いことだと思う。一方で、それが難しいこと、凄い
ことのようになっているのが、とても歯痒い。

10月15日 [木]

天気 | 晴れ時々曇り

場所 | 西会津国際芸術村 (福島県・西会津町)

集落に一人しか残っていない状況になっても、幸せに暮らせるか。そんなテーマ
で、福祉に関わる方とお話をした。年寄りでも、若くても、生き生きと暮らすに
は、受け身より能動的であることが大事と思う。

今年100歳であの世へいった爺さんのことを考える。93歳から97歳まで一緒に
暮らした。96歳ぐらいから体の動きが鈍くなり、家の中でぐったりと椅子に腰掛
けるか、布団で横になることが増えたが、庭や畑の草むしりはできていた。どん
なに体が衰えても、草ぐらいには負けない。花や野菜の面倒を見ることぐらいは
できる。人間、人の世話になるだけだと、どんどん弱らしい。100歳近い年寄
りが、直接若者の役に立つのは難しいけど、花や野菜が育つことの役には立てる。
集団で生きる命は、何かの役に立てるということが、能動的に生きる根源的なエ
ネルギーを生むのかもしれない。

矢部佳宏 [西会津国際芸術村 デレクター]

2020/10/12 — 10/18

10月16日 [金]

天気 | 晴れ

場所 | NIPPONIA 楢山集落 (福島県・西会津町)

あるメーカーさんが、自社の製品写真を撮るのに、うちの宿を使いたいという。
私で19代目となる集落に点在する2つの建物を、古民家ホテルとしてリノベーショ
ンしてオープンからまる一年が過ぎている。この一年、様々な方々が集落を訪れ
てくれた。360年の集落の歴史の中で、もしかしたら、これだけ多様な地域の
方々が訪れてくださったことはなかったかもしれない。

この集落がなかったら、今頃日本には居なかった。2011年3月11日は、カナダ
在住だったが、たまたま東京に来ていた。それから6ヶ月、悩みに悩んだ。自分
ができることとは。自分にしかできないこととは。集落に住み始めてからもう8
年ほど経とうとしている。

メーカーの皆さんを山の神さまに案内しながら、土地のストーリーをお話して歩
いた。宿の各部屋に込めた意味や、風景を取り込むしかけなど、いつも通り説明
する。

山を歩きながらいつもくやしいのは、そのあたりに生えている野生キノコを売るこ
とができないこと。土手を掘り返すイノシシを仕留めても、食肉として流通するこ
とができないこと。毎日の暮らしの中で、線量を意識することはまだやめられない。

10月17日 [土]

天気 | 曇り

場所 | 西会津国際芸術村 (福島県・西会津町)

町の教育委員に任命されたので、中学校の文化祭を見学させていただいた。と
てもものびのびと、豊かな表情で、楽しそうに表現する中学生の姿がとても印象的
だった。そして、その子供達を引っ張る先生の生き生きとした表情もまた良い。
過疎地の学校では、どんどん人数が減る。わが町の子供は、一学年で多くても
40人いない程度。2クラスにするのがやっとだ。人数が多いから必ずしも良いと
は限らないが、やはり少なくなっていくのはとても寂しい。

この子たちにとって、故郷とは、わが町とは、どう見えているのだろうか。
あと5、6年もすれば、成人。この町は、その時にかれらが自分の人生を紡ぐス
テージとして選ばれるのだろうか。願わくば、かれらに「選ばれる」なんて消極
的なことじゃなくて、かれらが、どんどんこの町に人を引っ張ってくるようになった
ら頼もしいなあ、と淡い夢を抱く。

午後は、「第15回 西会津国際芸術村公募展2020」の表彰式。受賞者を歓迎
する太鼓がムラじゅうに鳴り響く。近所のおばあさんたちも太鼓の音を聞きつけ
て集まって来た。表彰式には、受賞した高校生たちが東京からもはるばる駆けつ
けてくれた。このコロナ禍で、地方に移動するという機会がなかなかなかっただ
ろうから、この町も、公募展も、印象に残るだろう。

西会津町教育長がご挨拶の中で、ヨーロッパでペストが大流行し、社会の構造
が大きく変化せざるをなくなり、その後にルネサンスが起こったお話をされた。
また、ペストでケンブリッジ大学が休校になって田舎に戻ったニュートンが万有
引力を発見した例を取り上げ、ニュートンが後に「この休校期間が、創造的休暇
であった」と語った言葉を引用されていた。

この先の未来で、このコロナ禍が「創造的休暇であった」と言えるかどうかは、
今何をするか次第だ。

10月18日〔日〕

天気 | 晴れ

場所 | 西会津国際芸術村（福島県・西会津町）

朝から客足が絶え間ない。昼食を食べる時間がまとまって取れないほどに、次か
ら次へと、西会津国際芸術村公募展を観覧にお客さんがやって来る。

今年の公募展は、コロナで実施するかどうか迷った。迷いに迷い、結論を出す
まで準備が開始できなかったこともあり、結果、通常より1ヶ月遅れで開催する
こととした。

県内の公募美術展が軒並み中止となったためか、今年度は例年に増してたくさん
のお客さんがいらっしゃる。遠出するよりも近場に行こうという人も多いのだろう
と思う。

公募展に出品される絵画の雰囲気は、世相を表しているように思う。震災直後の
公募展では、何かとても暗く大きな壁にぶち当たったような、ショックを受けたよ
うな作品が多かったと記憶している。そして、このコロナ禍に集まった作品たち
には、社会に対する課題意識や違和感を表現したいというエネルギーを感じた。
思えば、あの時、今の私の娘の年齢、すなわち小学校低学年だった子たちが、
こうやって高校生になって、社会の中で感じていることを表現している。2度目の
大きな衝撃。

アートの力というのは、様々な社会状況、経済状況の中で、たとえ社会や自分を
取り巻く状況に鬱屈とし、監視的に感じられ、閉塞感があったとしても、心の中
から湧き出るエネルギーを以って、自分自身がそこに立っていること、存在してい
ることを表現することでもあり、その表現はとても繊細で弱々しく見えるかもしれ

ないけど、もっとも遅しく、力強い、生きる力そのものだと思う。

たとえこの地が、利便性、経済性、人口、高齢化率……世の中の価値基準の中でどんなに低いポジションに位置付けられたとしても、本当に衰退した地域となるかはどうかは、前向きな心のエネルギーがどれだけ多くそこに集まるかどうかにかかっていると思う。その意味でも、今回の公募展は、このような山奥に芸術の力が集まることの重要性を再認識させられた。

というようなことを、昨日の表彰式で、実行委員会を代表してご挨拶させていただいた。

矢部佳宏 [西会津国際芸術村 ディレクター]

福島県西会津町生まれ。一般社団法人 BOOT 代表理事。マニトバ大学大学院 (カナダ) ランドスケープアーキテクチャー修士首席修了。 (株) 上山良子ランドスケープデザイン研究所、NITA DESIGN GROUP (上海) 等を経て、現職。約 360 年続く山奥の集落にある家を 19 代目として継承しながら、ランドスケープ・アーキテクトとしての知識や経験を軸に、持続可能な地域づくりに挑んでいる。西会津国際芸術村でのアーティストインレジデンスやクリエイティブ人材による地域再構築、自らの住む集落を活用した分散型・集落滞在型古民家ホテル「NIPPONIA 檜山集落」「NextCommonsLab 西会津」ディレクターなど、「故くて新しい未来」をテーマに、新しい暮らし方、新しい社会のカタチを探索・実践している。

矢部佳宏 [西会津国際芸術村 ディレクター]

2020 / 10 / 19 ——— 10 / 25

木田修作

テレビユー福島 報道部 記者



10月19日 [月]

天気 | 濃霧→晴れ→曇り

場所 | いわき市

きょうはいわき市に。東京電力福島第一原発の処理水について、政府は海洋放出の方針を固めた。このニュースを出したのが先週末の16日。全漁連や福島県水産加工業連合会が政府に反対を表明したのが8日で、それから1週間でこの方針を決めたことになる。もう少し丁寧に事が進むと思っていたから、正直、かなり打ちのめされている。週末、何ができるか考えた。結局、私たちには地元の声を伝え続けること。それに尽きる。というか、できることはそれしかない。どうにかこうにか自分を奮い立たせ、アポを取っていわきに向かった。

水産業に関わる人たちを中心に取材する。水産業といっても、漁業者だけではない。魚をとる漁業者の先には、仲買や加工、小売、組合や市場もある。この問題を漁業者だけの問題にしてはいけないのだ。実際に影響を受ける人はもっと多くいるし、漁業者がすべてのカギを握るような伝え方は、最も影響を受けるステークホルダーを追い込みかねない。

2020/10/19 ——— 10/25

午前は放射線検査の現場。60センチメートルはあろうかという立派な真鯛がさばかれ、みじん切りにされて検査に回される。内心もったいないなあと思う。ほとんどが検出限界未満。今年国の基準値を超えたものは出ていない。検査の結果よりも、検査を継続しなくてはならない現実の方に話が集中する。

「努力して流通量増やしてきて、これからもやっていくんですけど、そこに水を差すようなことをされては、関係者の気力も薄らいでしまうと思う」と、担当者は言う。

「これからもやっていくんですけど」という部分に、込み上げてくるものがある。

午後はいわきに住んでいたとき、客として何度もお世話になった鮮魚店へ。ありとあらゆる種類の魚が揃っているように見えるが、福島県産の魚が見当たらない。聞けば「試験操業だから、入ってくる量が少ない。さっき箱買いしたお客さんがいて、もう残ってないよ」と話す。

処理水の放出について聞くと「風評は出ると思う。傷はつくんですけど、手術しなければいけないくらいではなくて、本当にばんそうこうで治るようなくらいの傷にするしかないのかなって感じですね」これもまた、胸が詰まる言葉だった。傷つく方が努力している。傷つける方はどんな努力をしているのだろう。

その店で秋刀魚のみりん干しとポーポー焼きを買った。2歳になる息子は魚好きである。帰宅してみりん干し焼いて食べさせた。つい先ごろまで「おかさな」と言っていた息子だが、「もっと『おかさな』ちょうだい」とねだる。みりんの甘さがツボに入ったか。半分ほどを平らげた。私は残りの半分を食べ、息子の表情を眺めながら海や魚の将来のことを考え、私たちのそんな日常に割って入り込む「トリチウム」なるものの厄介さを、改めて感じている。

木田修作「テレビニュー福島報道部 記者」

2020/10/19 — 10/25

取材で愛用しているロルバーンのノートがもうじき終わる。1〜2か月で更新するのだが、改めて読み返してみる。今回の表紙は濃紺。始まりは飯舘村の帰還困難区域である長泥地区をめぐる取材だった。8月27日。まだ暑かった。福島市の郊外の家だった。飯舘村の住民を取材するために、福島市内を駆け回る。浪江町の人を探して、二本松市を巡ることもあった。そういう取材を日常的にしている。立ち入りが制限される場所はまだ存在し、避難はまだ続いている。

処理水の話は、明らかに先週以降、それぞれの立場の分断を感じるようになった。取材ノートの言葉にもそれがにじみ出ている。あるいは、そのまま書きつけられている。本当は、これが出発点でなくてはならなかった。それぞれが立場を表明した上で「さあ、どうする」という話し合いがあるべきだった。しかし、それがないままに、結論だけが上から決められようとしている。

それぞれの立場がむき出しになったとも言えるし、追い立てられるように議論が始まったとも言えるのかもしれない。いずれにしても国、福島県と、上から順番にすべきことをしなかった結果であることは確かだ。そして時間は十分にあるとは思えない。調整が期待された国や福島県は、この問題についてほとんどそれをしていなかったと思っている。いまからでも始める気はないだろうか。このままでは本当に深刻な分断が起きるし、禍根が残る。それは将来にとって何のプラスにもならない。地域や生業を壊して何が復興だろう。

SNSはより状況が悪化している。私個人も、発信すればするほど返ってくることも多くなってきた。震災から5年経って福島に住み、8年経ってテレビ報道にいる私。久々に、震災や原発事故をめぐるSNSの言葉の世界というものを身をもって感じている。しかし、この期に及んで、何もしないということもあり得ない。私は私なりに良い方向に向かうと思うことをするしかない。でなければ、本当に深刻な事態になってしまうと思う。

10月20日〔火〕

天気 | 晴れ

場所 | 福島県庁（福島市）

10月21日 [水]

天気 | 晴れ

場所 | 釣師浜漁港 (新地町)

日付が変わる前にカメラマンとともに会社を出発し、相馬福島道路と常磐道を使って浜通りの北端、新地町へ向かった。到着するまでに、前を走る車はほとんどなく、止まることもなかった。いつもよりも半分くらいの時間で港の近くまで来たのだが、カーナビと実際の道が少し違っていて、到着するまでに少し難儀した。新地町は津波で大きな被害を受けた街で、新しい道が多い。試験操業の現場から処理水について考える企画のため、漁船に乗って漁を取材させてもらう。網にかかった魚を見て、改めてこの海の豊かさを目の当たりにした。「何でも捕れるんだ、この海は」と、漁師は言った。1つ1つ魚を見せながら「これはホウボウ」「こっちがカナガシラ」「ナメタガレイは高いんだぞ」と、嬉しそうに説明してくれた。「おらいの孫の代まで影響ある。誰が責任とれるかって話だ。言うことは簡単だ。流すのは簡単だ。あとの30年後、50年後の責任誰が負えるんだって。誰もいなくなるでしょ、処理水の問題に携わっている人」船上で漁師はそう叫んだ。祖父の代から漁師を受け継ぎ、自分の息子3人も漁師を継いだ人である。最近船も新調した。大きな投資である。こうして脈々と受け継がれてきた生業が、壊されてしまうかもしれないという危機感をひしひしと感じる。それがどのくらい、いま決める人たちに伝わっているのだろう。漁が終わる頃、ようやく東の空が明るくなりだした。日の出直前はマジックアワーとよく言われるが、本当にその通りの空で、この空を再び見ることはないんだなと思った。それがどんな意味を持つかわからないけれど、この風景を覚えておこうと思った。

木田修作 [テレビニュー福島報道部 記者]

1時間もすれば、街は現実を取り戻していく。長閑な港町の朝だ。防潮堤の向こうでは、ようやく朝が始まろうとしている。こちら側とあちら側、であってはいけない。漁師の言葉、船の上で見えてきたこと、きれいな空。どれも伝えなくてはいけない。

取材を終えて福島に引き返す。「朝食に」とくれたのは豆大福とシュークリーム。漁師は甘党なのだろうか。帰り道は朝のラッシュに巻き込まれて来た時の倍以上の時間がかかった。

10月22日 [木]

天気 | 曇りのち雨

場所 | いつだれキッチンなど (いわき市)

再びいわきへ。午前中はテレビの仕事ではない個人的な取材で、久しぶりにゆっくりと話を聞く。古い話を聞いているため、先方も話しながら記憶を呼び戻しているようで、あっという間に時間になってしまった。また来ることを約束して、次の場所へ向かう。

午後は処理水の問題について、どうしても話を聞きたい人たちのもとへ。ニュースを打ちまくるしかない。元来、ねちっこい性格ではあるが、それだけではない。後悔の念が強い。いざ実際に、処理水を海に放出する可能性が現実化したとき、もっとできたことがあったのではないかと感じてしまった。それがスタートだ。できることは全部やる。何かが変わるかもしれない。そのとき変わらなくても、将来変わるかもしれない。そう思って向かった取材。そのうちの1人が地域活動家・小松理虔さんだった。小松さんも「もっと何かできたんじゃないか」と話した上で、こう語る。

「原発事故が起きて、人が暮らせなくなる地域ができて、仕事が奪われて、こん

2020/10/19 — 10/25

な大変な思いをした。そのときにみんな、復興したら社会が豊かになって、いろんな人たちが笑顔になれると思って、こういう辛さを耐えている部分があると思う。だけど、こういうふうに勝手に地域のことが決められて、当事者の話も耳にしてくれないみたいになったら、辛い思いをしていた人は、本当に辛いだけで終わる」

少しでもいい未来を選ぶために、四苦八苦している。苦しんだ分と得られたものと、釣り合っていないと思うけれど、歴史はそういうものの繰り返しだったかもしれない。苦しみの対価として、喜びがあるわけでもない。それを繰り返していかない限りは、誰かが決めた未来を生きるしかない。それは嫌だ。経済性や合理性や科学だけで人は生きていけない。

とはいえ、先週あたりから相当ハードで、家族にも我慢を強いている。本当に申し訳ない。妻も息子も疲れている。我が家がこんな状況にしているのは誰だと考えてしまう。そのたびに、怒りのような気持ちが湧いてくる。あなたたちがこんな決め方をしなければ、私はもっと早く家に帰れるし、妻や息子と一緒にいられるのに。それは八つ当たりだろうか。記者という職業を選択しているのは私だ。妻が作ってくれた野菜炒めが美味しい。オイスターソースとニンニクは本当に合う。疲れたときはなおさら。

10月23日 [金]

天気 | 天気は覚えていない
場所 | 会社 (福島市)

屋のニュース直前に、処理水の海洋放出「今月の決定断念」の報。福島からこのニュースを全国に向けて書いた。決定自体は東京で起きていた話で、不思議な気持ちである。今週ずっとこのニュースを打ちまくった。イメージだけは艦砲射

撃だけど、東北からなので射程距離は長くない。そんなにたくさん砲手もいない。可能な限り、様々な立場の人に話を聞き、この問題をどう考えていけばいいか、ということを送り続けた。少しは届いたのだろうか。とにかく、いままで進んできた大きなものが、いったん止まった。同時に、先週打ちのめされたときのように、何をすべきか一瞬見失いそうになった。が、やることは同じだ。伝え続ける。息子が保育園のフェスティバル (運動会) で覚えた踊りがどうしても見たくなくて、音楽をかけた。『鬼滅の刃』の主題歌だ。1週間、いや1日単位でできること、覚えることが各段に増えている。「成長」といえばそうなのだけれど、彼が日々身に着けていることはもっと具体的なものである気がする。この息子が自分で未来を決め、生きるような社会は天から降ってくるものではなく、私たちが作るものなんだと。なぜか両手に団扇を持って踊る彼を見て思った。

10月24日 [土]

天気 | 晴れ
場所 | いわきグリーンフィールド (いわき市)

きょうは処理水ではなく高校ラグビーの取材でいわきへ。私自身、高校でこのスポーツに出会ってからずっと愛し続けてきた。多忙は承知で、懇願して担当にさせてもらった。いわきグリーンフィールドはとてもきれいな芝生のラグビー専用グラウンドだ。ここでプレーできる選手たちは幸せだなと思った。大会は準決勝。あと2つ勝てば花園である。私の高校はあまり強くなかったから「花園に行けるかも」と思えるだけでも、なんかいいなと思う。かつて私がそうだったこともあり、自然とフォワードの動きに注目する。目立たないけど、いい仕事をする選手が何人かいた。そういう選手はトライをとる数回前のフェーズで必ずいい動きをしている。決して喝采を浴びるようなプレーではない。でも、そうい

木田修作 [テレビとニューズ報道部記者]

2020/10/19 — 10/25

う選手がいるチームは勝つ。同行した後輩にどこがすごいかを熱っぽく語っていたのだが、ふと見てみると苦笑していた。ごめん。語りすぎた。

同じ日、東北の別の県ではすでに優勝校が決まっていたところもあった。2試合終えて、すっかり日が傾きだした空にはとんぼが飛んでいる。ラグビーは冬の季語である。

10月25日〔日〕

天気 | 晴れ
場所 | 福島市の如春荘

妻と福島県立図書館近くにある古い日本家屋「如春荘」へ。もともと福島大学の厚生施設だったそうで、かつてはここでコンパや合宿をしていたそうである。かなり趣のある建物で、ここで飲み会とは「おとなの週末」もびっくりの贅沢さではないかと思ったり。

理由はロケであった。私たちがずっと関わらせてもらっている南相馬市小高区で展開しているブランド『MIMORONE』の商品撮影のためだ。MIMORONEは、お蚕様から絹糸をとり、それを小高の草木で染めた商品を作っている。すべてが手作業である。シンプルで、やさしい雰囲気にも関わらず、とても強い個性と存在感がある商品たちばかりだ。このたび、南相馬市のふるさと納税の返礼品に選定されたそうで、そのための商品写真の撮影に来た。

冷えた和室の中で、妻とああでもない、こうでもないと言いながら、商品の^{ふくさ}袱紗を動かす。もともと袱紗の使い道を熟知しているわけではないから、そもそこの置き方が正しいかどうかというところから始まる。

福島市に来る前、いわき市にいたときは、毎週こんな調子であちこちの活動に顔を出し、何かやっていたから、どこか懐かしい。できればこういうことをもう少し

増やして続けていきたいと思っている。仕事でもない、生活でもない、その間にある活動や運動は、私たちにとってとても大切なもので、MIMORONE はまさにその大切なものの1つだ。

最後は妻にストールを巻いてモデルになってもらった。妻を撮るのは楽しい。幸せな気持ちになる。それで、シャッターが遅れてしまうのだけれど。遅れたなりに、いい笑顔が撮れた。その一瞬前の、最高の笑顔は記憶にとどめておこう。

木田修作〔テレビユー福島 報道部 記者〕

1985年青森県生まれ。早稲田大学第一文学部卒。2010～2015年までTBS報道局で記者を務め、政治部と社会部に所属。2015年に退社後、2018年まで福島県いわき市に移住。いわきでは妻と小冊子『とまり木』の発行や執筆活動に加え、いわきまちなかアートフェスティバル「玄玄天」で副代表を務める。2017年にノンフィクション『熱源～いわき市民ギャラリーとその時代』で第40回吉野せい賞準賞。2018年から現職。県警担当の後、現在は県政や原発問題を担当。2020年「自主避難者の住宅提供打ち切りをめぐる国の関与を明らかにするスクープ等」で、第8回日隅一雄・情報流通促進賞特別賞。

木田修作〔テレビユー福島 報道部 記者〕

2020/10/19 ― 10/25

2020 / 10 / 26 ——— 11 / 1

北澤 潤

美術家



10月26日[月]

天気 | 晴れときどき曇り 気温 29°C

場所 | 自宅兼スタジオ(インドネシア・ジョグジャカルタ)

久しぶりに日記を書く。以前制作していた日記／作品「DAILY LIFE」は、数年間つづけたあと2018年頃から途絶えている。文章と写真一枚、スケッチやメモ、さらにレシートや拾ったもののまでを、コピー機の上で即興的に配置し一日を一枚にする。それを購読者に月一回くらいのペースで届けていく。一年が365日の「日常」という束／本となる。いま考えても面白いが、環境や体制が変化したことで自然とつくらなくなっていった。ただレシートやメモを記録するアーカイブの術はあのかのきの手法をベースに、更新している。やろうとおもったらまたいつでも始められるように備えている。

「公開される日記」というのは相変わらずややこしい。日記とは私的に書くはずのものなのに、読者を意識せざるをえない。ほどほどに補足しながら、こっちの生活のルポルタージュ的に一週間書いていこうと思う。

北澤潤「美術家」

インドネシアのジョグジャカルタ(以下、いつもどおりの呼び方「ジョグジャ」と書く)にベースを移して、そろそろ2年が経とうとしている。コロナの前までは、日本でのプロジェクトのためしょっちゅう二つの国を行き来していて、あんまり長期間こっちにいなかった。ある意味、コロナのおかげでゆっくりこの街にいたことができています。

ジョグジャの毎日は、あいまいだ。仕事と生活、自分と他人、晴れと雨、速さと遅さ。遠い気がする二つの事象が、くっついたり、ひっくりかえったり、ひとつになったり、する。この日記の「天気」の項目も難しい。晴れていながら大雨になり、また晴れる。雨季に差し掛かる気まぐれな熱帯の空は、天気予報的な括りで語れない。あいまいさの中で生きること。それがここでの生きる術だ。いつ何がおこるかかわからない。一瞬で豪雨。急に予定がひっくりかえる。大工が現場にこない。と思ったらつくって持ってきた! そんな日々なのだ。

久しぶりの公開日記に喜びすぎた。前置きが長い。とにかく今日もあいまいな一日だった。ゆっくり整備している自宅兼スタジオはだいぶ使いやすくなってきた。なんでも自分で、時に友だちと、手を加えるのが当たり前。壊れたらまずどう直すか自分で考えてやってみる。「買う」はだいぶ先の選択肢。先月は屋根の上に登り、制作スペースとなっているガレージの雨漏りを直した。スタジオが整ってから、ここにいる一日は基本的にまず、なにかしらに手を加えてから仕事をするようにしている。今日は先週までの展覧会で使っていたテレビモニターをアンテナに接続。そのアンテナもケーブルも端子も、まず自分で揃える。天井から飛び出たケーブルを室内の壁に這わせて、モニターに接続。あらゆる素材が日本とは違うのでいちいち勝手が違う。端子のそもそものつくりが雑すぎて失敗。昼も夕方も同じ部品屋にバイクで行った。

2020/10/26 ——— 11/1

日本とのオンラインでのミーティングが2件づく。こちらは超オンタイムだ。会社の税理士さんとの話で、今期どれくらい新しいトライアルにお金を使えるか、ざっくりと掴んだ。これまでと似た形態や依頼の仕事が停滞しているからこそ、ちょっと前からやりたかった方向にお金と時間を使いたい。せっかくこっちにいる時間があるから尚更だ。

休憩しながら、またテレビケーブルを触り出す。よく知ったはずの存在が急に知らぬ扱いづらい相手になる。異なる日常に生きる常か。ただこの生活の手触りたちが、制作するときに活きてくる。こっちの友人や制作を一緒にしているみんなは、この「手作りする社会」の玄人たち。そのかれらとちょっと肩を並べられたような気になれる。「このタイプのケーブル、こういう性格だよ」なんて言える日が来るのだ。そう言い聞かせて、この謎な時間を過ごす。生活は制作のレッスンになる。逆も然りだ。

日が暮れて、明日のミーティングのための書類をつくろうとしていると、友だちのエリアが仕事帰りに家にきた。自宅で育てている植物を何種類か分けてくれた。となると予定は変わり、急に土仕事だ。1時間ほどでポットに移し替えた。植物の育ち方も日本とは全然違って面白い。熱帯の水分を探して、根っこが歩き出そうとするのだ。実際に移動する種類の木もある。家の小さな中庭にまた植物が増えていく。

今日、何回マンディ（水浴び）しただろう？ 2回だ。このあと寝る前にもう1回するから、計3回。作業したり、外に出たり、何かを終えたり、はじめたりするときにマンディをする。インドネシア人はとにかくマンディする。あいまいだからこそ合間合間のマンディが必須なのかもしれない。暑いっただけかもしれない。ただ

コロナが猛威をふるっている今現在、マンディの回数は前より間違いなく増えた。

10月27日〔火〕

天気 | 雨／曇り 気温 24℃

場所 | 自宅兼スタジオ（インドネシア・ジョグジャカルタ）

珍しく朝からずっと雨が降っていた。日中全く日が射さないのは珍しい。昨日やってきた新入りの植物たちにとっては、朝の日光を浴びることのできない憂鬱な移住初日だったかもしれない。

雨が降っていても特に傘は持っていない。オンライン配車システムが超普及しているインドネシアでは、自家用車ドライバーが家の前にすぐにやってきて目的地に送り届けてくれる。支払いも全て電子マネーで済むから、車内でデバイスをかざす必要すらない。身支度しながら「Grab」アプリで数分前に頼んでいたワゴン車が到着。すぐに出発。渋滞を避けてくれて、待ち合わせの10分前に、国立ガジャマダ大学に到着。

ガジャマダ大学（Universitas Gadjah Mada、略して UGM）は、インドネシアで初めて設立された州立大学。日本の占領下時代のあと、再度占領しようとしたオランダからの圧力、その最中の1949年に設立された。ジョグジャの街の北部には広大な UGMの敷地が広がる。まだ数回しか来たことがなくて、約束の場所がいまいちわからない。どうやら正門の横の建物だとわかって、ドライバーに下ろしてもらった。大学所有のホテルみたいで「え、ここ？」と思ったら、さらにひとつ北の建物だと Whats App のやりとりを見直して理解した。人類学部の学部長である Pak Bambang と初めて会う。電話やチャットはしていたが、会うのは初。い

ま UGM の人類学部のゲスト講師になる話が進んでいて、その手続きについて話した。

すぐに話は終わったので、ついでに昼食と買い物日本の食品も置いている輸入食品店兼レストラン「R&B Grill」へ。いつもどおりの食品を買おうと思ったら、果物コーナーにこっちで初めて見る梨を発見。まるで日本の梨だ。和梨だ！ おそらく中国からの輸入品だと思うが、日本で食べるあの梨の食感と甘さだったら、これは革命。期待と不安半分で購入。たしか 25,000 ルピアほど。

R&B からまた Grab で車を手配。Grab プロテクト（感染予防をした車）を選ぶ。いつもは後部座席の前、運転席と助手席の後ろに一面ビニールが（やや雑に）張られている車がやってくるけれど、これは違った。運転席の左と後ろに直角のアルミ製フレームが設置され、きれいに運転手席のみプロテクトされている。これなら助手席にも乗れるし、何より仕上がりがきれいだ。

私：これすごいね、自分でつくったの？

ドライバー：そうだよ。Grab から支給されるカバー、すぐだめになるからさ。

私：だよな。

ドライバー：友だちのドライバーたちと集まってつくったんだ。

私：めちゃいいじゃん、アルミフレームだね。既製品みたい。

ドライバー：そうそう。お兄さん日本から？

私：うん。

ドライバー：へー、インドネシア語うまいね！

...

どうも会話を文字に起こすと、インドネシア語のリズミカルなコミュニケーションが伝わらない。その後、パトカーが先導する黒塗りの車が通ったから、「あれなに？」って聞くと、中央政府の車だと教えてくれた。特別なナンバーについても初めて知った。全然話さない時間もあるし、話したければ話す。話さないと変な空気になる、なんてことも別にお互い無い。ドライバーがカーステの音楽に鼻歌交じりの時もある。いや、鼻歌どころか普通に歌っている時だってある。

自宅に戻って、休憩してからコーヒーをいれる。インドネシアはコーヒー好きにはたまらない。毎週違う島や地域の豆を買っているが、まだまだ知らない産地がある。すべて国内産。冷やしておいた梨をカットして食べてみる。まさかの日本で食べる味と同じで感動。日本の梨も中国からの輸入ばかりなのか。

スタジオスペースで、UGM での今後の動きを考えたり、これまで考えてきたことをアウトプットしたりしてみようと、大きなアクリル板を立てかけて、ボードマーカーを走らせる。わりとすぐに見えてくる。

今日もエリアがやってきた。余っている木材と、貸していた雨具を取りに来たとのこと。しばらくコーヒーをのみつつ、いろいろ話す。基本たわいないことを話し、これどうやってつくれるかな、っていう話もする。こっちでの会話は「開放系」だ。仕事のミーティングだとしても同じ。日本でのプロジェクト交渉にありがちな、目標に向かってトピックを聚斂させていき、あえて寄り道したりしつつ、でもしつかりと目的の一步先へと着地したい、といった駆け引きじみた会話は無い。拡散し、開放し、寄り道どころか本当に（まじで）関係ない話をする。そういうコミュニケーションが常だ。どっちがいいかは置いておいて、とにかく「なにをつくれるか」は「どこにいるか」に大きく左右されるということ。

また長くなってしまった。これははたして「日記」なんだろうか。今日のマンディ3回。

10月28日 [水]

天気 | 雨／曇り 気温 24℃

場所 | 自宅兼スタジオ (インドネシア・ジョグジャカルタ)

今日も雨。つい1、2週間ほど前までは、基本的に晴れで時々スコールがあるくらいだったが、この日記を書き始めてから雨がつづいている。雨季に本格的に入ったようだ。昨日考えた今日の予定では、友だちがいるギャラリーやスタジオに行こうと思っていたけど、雨だと基本的に予定を変える。というかそもそも、手帳にぎっしり細かに予定を書き込むタイプのスケジュールリングはあまりない。いつでも予定が変わるから、積み上げても意味がない。良く言えば、変化に強くなる。

今日は一日デスクワーク部屋で作業していた。この家、中に長い廊下があって、いくつかの部屋がそのまわりに配置されている。中なのに路地のような空間で気に入っている。かなり手はかかる古い物件だけど、日本の街だとたぶん1ヶ月分くらいの家賃で1年間借りられる。しかも街の中心に程近い。スケールは広がるのに、ライフコストが随分落とせる。その分、つくりたいことに注げる。これも、良く言えば。

デスクで UGM でのカリキュラムプランを考える。大学に呼ばれての講義は結構やってきたが、ある程度のスパンで授業や演習を構成するのは初めてだ。それもまさかこの街の大学で。しかも芸術学部ではなく人類学部で。わからないものだ。今日おおよそまとめた内容でうまく通ってくれればいいが、どうなるか。

北澤潤 [美術家]

2020/10/26 — 11 \ /

作業中、母と電話。オンラインで輸出関係の書類を印刷し荷物を送れる日本郵便のシステムを試してみる。これがうまくいったらある程度のはスムーズに輸送できることになる。うまくいったら次はインドネシアから送ってみよう話し、こっちから送って欲しいものを聞くと、「パティックは足りてるなあ」と早速考えはじめる母。今年からインドネシア語を習い始めて、LINE のメッセージがたまにインドネシア語で届く。

最近飼い始めた猫のピサンが日中ずっとデスクの上で寝ていた。夜中に差し掛かった今ごろになって超アクティブ。廊下を走り回っている。ピサンもこの空間を気に入ってくれている気がする。と書いていたら、また寝はじめた……！今日はマンディ2回。

10月29日 [木]

天気 | 晴れ／曇り 気温 25℃

場所 | 自宅兼スタジオ (インドネシア・ジョグジャカルタ)

今日はインドネシアの祝日。基本オフっぽく過ごす。カレンダーには日本とインドネシアの祝日が入っている。日本との仕事もあるから、どっちに合わせるか迷う……ことは特になく、ずっと自分自身のカレンダー次第だから大差ない。やるときはやるし、抜くときは抜く。「R&B Grill」で初めて買ってみた冷凍のムール貝を野菜と一緒に蒸して、レモンと醤油に黒胡椒で味つけたパスタをつくった。それからコーヒーをいれて、プロポーザルづくりに集中。大分遅くなってしまったからか、日記書くのを忘れかけた。

10月30日 [金]

天気 | 雨 気温 24°C

場所 | 自宅兼スタジオ (インドネシア・ジョグジャカルタ)

近くの「ワルン」に行く。2日に一回はここに来る。まるで駄菓子屋のような存在感で日用品を売る店があちこちにある。それがワルン。家の一部の道路に面したスペースで開かれていることが多い。スーパーに行かずとも、コンビニに行かずとも、ワルンに来れば意外と大抵のものは手に入る。ついでに家の外の庭で水やりをしていたら、久しぶりに蚊に刺される。この感じ、いよいよ雨季だ。体調管理にさらに気をつけねばならない。

日中はひたすらプロポーザルのつづき。ようやく終わりが見えた。

夕方にはよく行くレストラン、「Mediterrania」へ。レストランの中にあるショップに知り合いのアーティストがいた。ちょうどこれから「ナルトのために祈る」という謎のイベントを開くらしく、そのための食材を買いにきたようだ。先週の展覧会撤収くらいから、友だちがみんな「ナルトが死ぬ」という話をちょくちょくしてくる。あの、漫画の『NARUTO—ナルト—』、である。調べても日本のタイムラインで盛り上がったりはしていない。なぜ「ナルトの死」が、インドネシアでゴシップになっているのか。こっちの人より日本についてよく知らない、ということが稀にある。ナルトの死に関しては全くもって知らなかった。ほんとに死んだのか？

10月31日 [土]

天気 | 曇り／晴れ／雨／晴れ 気温 24°C

場所 | 自宅兼スタジオ (インドネシア・ジョグジャカルタ)

朝昼は曇っていた。出かけようと思った頃にスコール。大雨でしばし様子を見る。小雨になりかけたなと思った頃に外に出た。友だちのいる方面は晴れているみたい。バイクで走っていると確かに晴れ間が見える。着いた頃には、晴れていた。別の場所に向かい始めたら、また雨に打たれた。こんな調子なので、今日の天気の記事は自分の感覚では当たっている。

雨季だと雨の中のバイク移動が多くなるので、雨具が欠かせない。相変わらず傘は持たない。かれこれ4年前、日本を離れインドネシアに行く時に、こづえさんからもらったポンチョはずっと使っている。日本から持ってきたものの中で、こっちのかけ離れた生活に適合し、長く使えているものは意外と少ない。このポンチョは数少ないそのひとつで、しかもこっちのみんなから結構羨ましがられる。そのうち自分でも雨具、ポンチョをつくってみたい。

久しぶりに ART MERDEKA (アート・ムルデカ) のスタジオへ。日本での LOST TERMINAL や、NOWHERE OASIS といった最近のプロジェクトでずっと制作を一緒にしてきたチーム。かれらは香港のアートバーゼルや、ジャカルタでの草間彌生展などの施工をしているプロフェッショナルなアートインストレーター集団だ。結構世界のアートシーンをジョグジャの人たちが支えていたりする。

連休中にもかかわらずほぼ顔見知り全員がいた。メンバーは総勢30人くらいいるだろうから、まだ全員知っているわけではない。LOST TERMINAL のときは、このスタジオが総出で十和田市現代美術館に送る乗り物19台を完成させ、輸送するところまでもっていった。大体はこのスタジオに来るまでもっとローカルな職人さんと一緒に作品の基本形をつくり、それを ART MERDEKA のプロたちがフィニッシュまでもっていく工程だ。

近くに来たついでに寄ったくらいの感覚だが、なんとタイミングがいいことに、みんなで風をつくっていた。いま進めようとしている新しいプロジェクトは、インドネシアの大風を元にしている。コーヒーを飲みながら、たわいない話のなかで、なにをつくるかという会話になっていく。まとまりのない日常会話の延長で作品が生まれる。また、ナルトが死ぬ話をしだす奴にほどほどにツッコミをいれつつ、プロトタイプをつくってみようということに。おおよその素材やサイズ、次のステップまで、いつのまにか決まっている。無理につくるというより、つくることと日常が渾然一体。暮らすようにつくる。

インドネシアでは、時間があるときに子どもも大人も風をつくる。家の目の前に住むおじさんもよく風を抱えて田んぼに行っている。コロナ禍であろうとなかろうと、仕事と生活の境界があいまいだから風は飛ぶ。ただ、ART MERDEKA がいま風をいくつもつくっているのは、かれらへの制作依頼がさほど多くないことを感じさせた。とはいえ、オーストラリアのコミッションワークや、ジャカルタの国立美術館で展示する作品、さらに巨大なインテリアまで、作家たちから依頼がきているらしい。それでも普段よりは忙しくないのだろう。だからこそ、このタイミングで大風をモチーフとした作品をかれらと共につくることに、静かな必然性を感じた。頼まれたからつくるだけでなく、こうした生活のなかの動機、うごくきっかけによってプロジェクトがはじまる。いまは、そんなナチュラルなあり方を取り戻す、回復するチャンスなのかもしれない。

11月1日 [日]

天気 | 晴れ 気温 23°C

場所 | 自宅兼スタジオ (インドネシア・ジョグジャカルタ)

北澤潤 [美術家]

2020/10/26 — 11/

植物の世話をしてからマンディ。数日前に気付いたのだが、インドネシアは今日まで5連休だったらしい。休みに入って3日目くらいに、立ち寄った店のテレビモニターに流れるニュースで知った。こういうことがあると、自分の情報格差に気づかされる。SNSなどで日本の基本的な情報は入ってくる。大して意味のないワイドショーのニュースやトレンドに無知なのは、むしろ都合がいい。逆にインドネシアの、もしくはジョグジャのローカルな情報が自然に得られないのは、不便だ。この間の全国的なデモくらいだとさすがに友人たちとの会話で話題になるけど、普通のニュースはあまり出てこない。テレビからの情報はこっちでは尚更注意が必要だが、ローカルニュースを知るには重宝する。あのケーブルとの格闘は、この情報格差問題を解決するためのごく私的なプロジェクトだったと捉えてみると、早速意味が出てきた気がした。

夕方頃、外の庭の椅子に座っていると、はす向かいの家の人が話しかけてくる。「ジャンプもらっていい?」。日本では沖縄くらいにしかないのだろうか、ジャンプ。南国の果物なのだろう。日本語では確か「レンプ」。前にも、庭にあるジャスミンの花をちょうだいと道ゆく人に言われた。そういえば、道でマンゴーの木と見ると、だいが実ってきているな、今度もらおうかなとか思う。「所有」の感覚のあいまいさ。というか所有という概念があまりなくて、ベースが「共有」。だいが身体化されてきた。

明日は朝イチで入国管理局、イミグレーションのオフィスへ。いつもの申請書を今日のうちに書いておく。コロナ以降、イミグレの対応が目まぐるしく変わっている。最初の数ヶ月は、明日帰国になるかもしれないという見通しのつけられなさとの格闘だった。日本に帰国すれば、当分はこっちに戻れなくなる。いまはこっちにいて、ここでつくれるものを仕込んでいたい。でも明日またイミグレの

対応が変わっているかもしれない。ちゃんと妥当な申請プロセスを踏んだ正式な VISA を取得しているにもかかわらず、だ。「ここにいれるかどうか」を常に問われるのは、海外移住者のあるあるかもしれない。コロナによって尚更、国をまたぐ人たちにとってのその問いは蔓延した。ただ言えるのは、「ここにいれて当たり前」と思って生きる、またはそもそも無意識でいるよりも、きっとたくましくなるということだ。いまも明日どうなるかわからないけど、そういうもんだろ、という気分でいる。即、「ここ」から追い出されるかもしれないのに。

明日イミグレにいったあと、よく行くカフェで仕事をして、そのあとは台湾のプロジェクトに向けたミーティングの予定。どうなるかはわからないけど。

北澤 潤 [美術家]

1988 年東京生まれ。インドネシア・ジョグジャカルタ在住。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。合同会社北澤潤八雲事務所代表。国際交流基金アジアセンター・フェロー（2016～2017 年）。Forbes「30 Under 30 Asia 2016」アート部門選出。さまざまな国や地域でのフィールドワークを通して「ありえるはずの社会」の姿を構想し、多様な人々との立場を越えた協働によるその現実化のプロセスを芸術実践として試みる。近作に、立ち退きを余儀なくされた住民たちと共に「理想の家」のコンテストをひらく《IDEAL HOME CONTEST》(2017 年) や、母国を離れて暮らす人々の記憶から再現された「国」をつくる《NEIGHBOR'S LAND》(2018 年)、異国を走る人力の乗り物を日本に持ち込み、市民に貸し出していくことで失われた路上の光景を描き直す《LOST TERMINAL》(2019 年) などがある。

北澤 潤 [美術家]

- 3日 - アメリカ大統領選挙一般投票開始
- 4日 - イギリスはイングランド全域で11月5日から12月2日まで、イタリアは4州で11月6日から12月3日まで、ロックダウン(都市封鎖)を発表
- 7日 - アメリカ大統領選で当選確実となった民主党のジョー・バイデン氏が勝利演説を行う。カマラ・ハリス氏は、女性として初の、またアフリカ系・アジア系としても初の副大統領に就任することに
- 11日 - 日本医師会会長「第3波ではないか」と指摘し、政府に対策を求める考えを表明
- 14日 - 政府、「災害弱者」支援のため災害対策基本法を2021年に改正する方針を固める。避難計画、市区町村の努力義務に
- 16日 - 宮城県知事、宮城県美術館移転を断念し、現地改修を表明。移転構想に対して芸術関係者や市民団体から反対する声が挙がっていた
- 23日 - 全国知事会、新型コロナ「第3波」警戒宣言!を発表
- 24日 - フランスは1月20日までに3段階に分けてロックダウンの解除を表明
- 25日 - ドイツは部分的ロックダウンを12月20日まで延長を発表

清水チナツ

インディペンデント・キュレーター／PUMPQUAKES



11月2日[月]

天気 | 快晴

場所 | 自宅(オアハカ)、オアハカ空港

メキシコ南部に位置するオアハカでの生活も8ヶ月目に入ろうとしている。3月12日にオアハカ入りして間もなく、パンデミックの中心がアメリカ大陸に移り、いまでも第一波を脱していない。わたしの暮らすオアハカのセントロ地区は、9月に入るまで街に人の姿がなかったが、その後、営業を再開するお店が増え、最近では海外からの観光客の姿もよく見かけるようになった。

今日は「死者の日」で、例年であればパレードやイベントが街中でひらかれ、1年のうちで一番の盛り上がりを見せるそう。しかし、今年はパレードどころか、墓地への訪問も禁止されている。それでも、マリーゴールドや鶏頭で飾り付けた色鮮やかな大きな祭壇は、どの家庭でもつくられた。

数日前、花の摘み取りを手伝い分けてもらったマリーゴールドと鶏頭。友人が連れて行ってくれた家族経営のパン屋さんで焼き上げられた「死者の日のパン」、近所のメルカド(市場)で買い求めたガイコツの砂糖菓子とパベルピカド(切り絵)で

飾り付けをし、街の写真屋さんでプリントした祖父母の写真を並べて、自宅に小さな祭壇をこしらえ、蝋燭を灯した。

メキシコで「死者の日」は、あの世とこの世の間に橋が架かり、死者たちがこちらの世界へやって来る日。日本のお盆と似ているけれど、この日が近づくにつれ、人々は浮き足立ち、わくわくしている感じが伝わってくる。祭壇に飾る写真は、死者の国のパスポートのように働くそうで、死者へ「あなたのことを覚えていますよ、想っていますよ」という報せになる。しかし、写真が飾られなければ、その存在を覚えている者が誰もいなくなったことを意味し、「第二の死」つまりは忘却の淵へ消えていくことになるようだ。

20時、ソウルからアーティストの友人パク・ドヨンを迎えるために空港へ。出口には、友人や家族を迎えるために集まった人々が、文字通り首を長くして通路の奥を見つめていた。出てきた人々はお互いマスク姿で再会を喜び、ハグするかどうか躊躇しながら、それでもやっぱり抱き合っていた。

ソウルからダラス経由で丸3日ほどかけて移動してきたドヨンを歓待すべくタコス屋へ。すると、その隣にあるアーティストコレクティブが運営する版画工房からアーティストたちが出てきて、メスカルを振る舞ってくれた。ドヨンの顔から笑顔がこぼれ、「オアハカの人たちは余裕があるなあ」と一言。

11月3日〔火〕

天気 | 快晴

場所 | 自宅

自宅の一角を家具で仕切り、ドヨン用のスペースをこしらえていたけれど、持参したテントをテラスにひろげ、「ここがいい」とドヨンは言う。乾季になったので雨こそ降らないが、日中は30℃前後、朝夕は10℃前後で寒暖差はなかなか。し

かし、アクティビズムの現場、つまりは路上などでも寝泊まりしてきたドヨンにとっては、現在のオアハカの気候はテント泊に一番適していると言ってうれしそう。自宅のテラスからは古代遺跡モンテ・アルバンが見渡せる。テラスを掃き、蜘蛛の巣がかかっていたので私が手をのばすと、とっさにドヨンが「そのままでもいい。蜘蛛はほかの虫とってくれるから」と言った。わたしが磨き直さないといけないのはこういう感覚だとつくづく思う。

そういえば、日本のニュースで、「コロナで修学旅行が中止になった学生たちが、校庭でテント泊の修学旅行を自分たちで企画し実施した」とあった。災厄は場所も時も選ばずに起こるし、それはこれからもきっと変わらない。そんなとき、こんなふうになやかに動けることは、すばらしいことだと思う。

オアハカでは自動車も洗濯機もない生活なので、なにかと時間がかかる。飲み水も20ℓのボトルを買ってこないといけない。インターネットでの買い物もほぼ不可能なので、基本的にすべての用事は足で。毎日、生活の用事だけで10km近くを歩いている。そしてローカルニュースは、街を歩いてしか得ることができない。歩いた分だけ、情報が入ってくるし、発見がある。パソコンの前にいるより身体を動かすことが必然的に多くなり、握力や健脚こそ、いま一番欲しいものになった。

11月4日〔水〕

天気 | 快晴

場所 | 自宅、アーティストの工房

自宅でリサーチのための本を読んだり、インタビューの準備をしたりして過ごす。チャブリン（バッタの揚げ物）がたくさん手に入ったからと連絡をもらい、アーティストの家へ出かける。オアハカに来てから、近隣の人たちから料理や季節のものをたくさん分けてもらっている。そのどれもが、レストランなどでは食べられない

家庭料理ばかりで、何千年も昔（なかには紀元前1200年頃の古代メキシコ時代）からつくり続けられているものもあったりするから驚く。

そのあと、若いアーティストが新しい版画作品をつくっていると連絡をくれたので、工房に行き見せてもらう。

夜は、アーティストたちとドヨンとで屋台のトラユード（オアハカ風ピザみたいな食べ物）を食べに行く。地元の人に人気のそこは、直径約50cmもあるトルティーヤにラード、黒豆のペースト、チーズがのせられ、パタンとふたつにたたんだものを炭火で焼く。そこだけ明るく電灯が光る通りには、近隣からたくさんの人が集まっていた。バイクで来た人は、シートをテーブルがわりに。わたしたちも車のボンネットをテーブルにして熱々の大きなトラユードを頬張る。するとどこからともなく、アコーディオン弾きの人がやってきて演奏を始める。常設のものはなにもなく、その時間だけそこに現れては消えるものばかり。路上で舞台の一作品を見ているような気持ちになる。なんだろう、この完璧さは。

11月5日 [木]

天気 | 快晴

場所 | オアハカ州立自治ベニートファレス大学

ピザのことで相談があり、オアハカ州立自治ベニートファレス大学を訪れた。パンデミックの影響で校舎は3月からずっと閉じられたまま、現在も授業はオンラインでおこなわれている。敷地の中の雑草は人の姿を隠すほど伸びていて、6月23日に起きた地震（M7.4）で亀裂が入り崩れ落ちた校舎の土壁や、割れたガラス戸などの横を通り過ぎながら、校長先生が「遺跡のようでしょう」と冗談まじりに言う。

郵便局に荷物の受け取りへ。9月末に友人のアーティスト志賀理江子が宮城から

送ってくれたEMSがようやく届いた。長い海外生活の経験がある彼女は、わたしのこちらでの生活を気にかけて、電話をくれたり、食品などを送ってくれたりする。お煎餅やふりかけ、鰹節などの乾物と一緒に、手づくりのワンピースやバックと本が入っていた。身体が弱っているとき、馴染みの味は救いになる。すぐに食べた

い気持ちをおさえ、大事に棚へしまった。

晩ご飯用に近所の日用品店へ卵を買いにいく。ミセラニアと呼ばれるこの種の日用品店はオアハカの街中にあり、その数はコンビニより圧倒的に多い。卵やクッキー、トイレトペーパーから生理用品までなんでも1個から売ってくれる。市場の野菜や果物、お肉などもすべて量り売りで、1ダースや1パックとかの単位に縛られることなく、必要な量を必要な分だけ買うことができる。主食のトルティーヤを売るお店も街中どこにでもあり、価格が一律に決められていて手に入れ易い。

11月6日 [金]

天気 | 快晴

場所 | 自宅、近所のタコス屋

アメリカの大統領選の結果を、みんなが気にしている。通りの壁画のリサーチに出向くと、トランプ政権を批判するものが増えている。映像記録を見直したり執筆作業をしたりして、お昼ご飯は、屋台のタコス屋さんへ。路の段差に腰掛けてタコスを頬張っていると、若いアーティストが通りかかる。昨日までアフリカ系メキシコ人が多く暮らすオアハカ南部のピノテパナシオナルへ壁画を描きに行っていたそうで、「また工房においで」と声をかけてくれた。

わたしの暮らすセントロ地区は約2km四方の街で、通りに出るとかならず誰かに会う。都会でも田舎でもないその中間にあるような街の規模は仙台にも似ている。インターネットショッピングなどがままならず、飲食も屋外でおこなうことが多い

東京からナツツ [インディペンデント・キュレーター／PUMPOUKES]

2020/11/2 — 11/8

この街は、日用品の買い出しや食事をするだけで誰かに会い、ちょっとした会話が始まる。お互いに距離はとっているものの食事の時だけマスクを外すので、顔が見えて、それだけですこしほっとする。

オアハカに着いたばかりの頃、たまに人に会ってもマスクをしていて顔の半分が隠れているし、声もくぐもって聞こえずらく、匂いも伝わってこないの、なんだか水中にいるような気持ちで不安だったことが思い出される。それでも、こうして通りで顔を合わせて挨拶したり、近況を伝え合ううちに関係性は少しずつできてきた。まったく知らない街で暮らし始めたのは東京、仙台につづき3度目だけれど、通りで名前を呼ばれるというのは、たとえかりそめでも「この街の一人になった」と実感される瞬間である。

11月7日〔土〕

天気 | 快晴

場所 | ポチャテ市場

今朝は週末だけひらく市場（メルカド）へ食材を求めに出かける。ジグザグと日陰を探しながら街を北上し、40分ほど歩くと市場に着く。近郊の農家の人たちが週末だけ街に出てきて開く市場だ。赤っぽい土の上に木製の小屋が立ち並び、新鮮な野菜や卵、チーズ、キノコ、珈琲、メスカルなどを販売している。

「このハーブはどんな料理に使うのか」とか「旬の野菜のおすすめの調理法」など、細やかに教えてくれ、市場は暮らしの知恵の受け渡しの場所でもある。この市場まで来る途中にも、ふたつ市場がある。つまりは家から歩いていける範囲に、みんな馴染みの市場をそれぞれに持っているということ。絞めたばかりの鶏を1羽分けてもらい、ニンニクやショウガ、ネギなどを買う。

今夜はドヨンが腕をふるって韓国の鶏肉のスープをつくってくれることになった。

東京からナツツ「インディペンデント・キュレーター／PUMPOUKES」

2020/11/2 ― 11/8

ガスコンロの火が弱いので、テラスに炭焼き台を出し、火を起こす。そこにニンニクをたくさん詰めた鶏一羽を鍋に入れ、水をひたひたに入れて、じっくり火を通していく。段ボールの切れ端で炭に風を送りながら、いろんな話をした。気がつくと陽は落ちて、寒くなってきた。

声をかけていたオアハカのアーティストたちが集まってくれ、みんなでドヨンの熱いスープを食べる。お互いの文化を知るとき、「料理」はひとつの言語になる。目、鼻、舌を使いながらその文化に触れ、会話は自然とその料理を教えてくれた人（家族）や、風土の話になる。スペイン語、サポテコ語、日本語、韓国語、英語などさまざまな言語が行き交い、頭がショートしそうになる。ロックダウン以降、自宅での食事と会話が最大の娯楽になって久しい。

11月8日〔日〕

天気 | 快晴

場所 | 自宅、ボボカテトル通り

午前中、オアハカのアーティストの友人がマウンテンバイクでうちにやってきた。ドヨンに自転車のメンテナンス方法を教えてもらう約束をしていたそう。南向きのテラスの陽は強く、汗びっしょりになりながら、オイルをさし、パーツごとの汚れを取り除く。この場所で手に入る道具で、ドヨンは「方法」をカスタマイズしていく。みなが基礎的な修理の技術や道具の知識を持っているので、話が早い。そういえば、わたしもオアハカでの生活で手をよく使うようになった。

午後は、火山の名前がつく「ボボカテトル」という通りにある伝統料理が得意なお家に招いてもらい、マグマのように熱いモーレ（カカオを使った伝統的なソース）をご馳走になる。

このモーレづくりも、おそろしく手間がかかる。数種類の唐辛子を炭火でトースト

するのだけれど、種も火にかけるので、南蛮燻しの拷問状態になる。そこにラードやニンニク、ハーブ、アーモンド、カカオなどたくさんの材料を加えながら、舟のように大きな鍋を、オールのような木製のヘラでゆっくりゆっくりかき混ぜる。作業の合間に、おばあさんが火の神様へメスカルを捧げたり、味見をしにきたりする。一人では出来ない料理で、みんなで交互に役割を交換しながらつくられる。オアハカでは、伝統料理が材料や道具（石臼や土器）も同じままに現在でもつくられているけれど、それを効率化したり単純化したりしないのは、時間がかかること、みんなの手を介してでしか出来ないことのなかに歓びを見いだしているからだと感じることがよくある。面倒くさがりながら、愉しそうなのだ。

ドヨンが初日に口にした「オアハカの人たちには余裕があるなあ」という言葉が何度も頭に浮かぶ。経済的、物質的には決して豊かとは言いがたいし、パンデミックの影響は計り知れない。しかし、精神的な安定感がここにはあるし、自分たちの手で暮らしを立ち上げる技術をみなが持っている。電気や水道、インターネットなどのインフラが不安定な分、人やコミュニティの関係性こそが危機を下支えする一番大事なインフラストラクチャー（下部構造）になっている。

今日もエンジンの故障で動かなくなった車を、道行く人たちがわらわらと集まり坂の上まで押して上げて、ちりぢりに消えていった。一日があっという間に終わる。暮らすだけで忙しいけれど、なぜか一日の終わりはいつも満たされて、蚊帳のなかで眠りにつく。

この感じは、あの時と同じ。2011年の震災の後、仙台にも確かにこんな日々があった。あの頃の空気が、一時的でなく息づいているのはなぜなのか。それをこの街で考えている。

清水チナツ [インディペンデント・キュレーター／PUMPQUAKES]

1983年福岡県生まれ、仙台市在住。2011年から2018年までせんだいメディアテーク学芸員。2019年に宮城県在住のアーティストたちとPUMPQUAKESを設立。主な企画展に「畠山直哉 まっぶたつの風景」(2016年)、編書に民話探訪者・小野和子『あいたくて ききたくて 旅にでる』(2019年) など。2020年3月より文化庁新進芸術家海外研修制度研修員としてメキシコ・オアハカに滞在中。

2020 / 11 / 9 ——— 11 / 15

三澤真也

ソコカシコ 店主



11月9日 [月]

天気 | 雨

場所 | 奥会津・三島町のゲストハウス

奥会津・三島町。朝起きると雨が降っている。そういえば、朝6時にいつも流れる町内放送のチャイムと雨音が一つに混ざり合っている音が夢うつつに聞こえていたことを思い出す。今日は休みなので、しばらく布団でうだうだしてみる。それでも7時半くらいには起きて、隣の珈琲焙煎小屋の2階にパソコンを持って行き、iTunesから音楽をかけて、実家で使わなくなっていたからもらってきたエアロバイク（ありがちな話だ）に乗りながら、窓から見える少し盛りを過ぎた紅葉の山を眺める。ピークを過ぎたとはいえ、鮮やかな赤と黄色の紅葉が目を惹く。30分くらい漕いでいると、自分と山（山までは500mくらいの距離がある）の真ん中くらいに虹が掛かった。虹は11分すると消えた。虹が11分程度で消えるものだと、41年生きて来たが知らなかった。まあ、虹が1時間も2時間も出ていたら有難くもなんともないものになってしまうだろう。「11分」。虹が現れてから消えるまでの時間。なんとなく腑に落ちる時間だと思う。

三澤真也「ソコカシコ店主」

2020/11/9 ——— 11/15

10時になると、地域おこし協力隊のFくんが訪ねてくる。珈琲焙煎を教える約束をしていたのだ。1回目はやり方を説明しながら僕が焙煎して、2回目は彼に焙煎してもらった。なぜだか自分で焼いた豆より、彼が焼いた豆の方がうまく焼けた。そのあとFくんが焙煎した方の豆で珈琲を淹れて、飲みながら話をした。話題は最近奥会津に移住してきた彼の彼女の話になった。

彼女は東京電力福島第一原子力発電所近くの大熊町出身で、大熊のためになる仕事ができたと前から漠然と思っているという。大熊でどうしたら生活できるかについて二人でよく話しているそうだ。そんな話を聞きながら僕は、どうしてまだまだ前途多難な大熊町へ帰りたいんだろうな？ と思った。震災当初まだ10代だったその彼女は、今でも大熊が大好きだとFくんによく話すみたいだ。そんな彼女の幼少期の記憶。そして、その記憶と震災。その現実を避けて（忘れて）他の場所で生きるよりも、たとえ色々大変だったとしても、その現実と向き合った人生を選ぶ方が、自分が納得できるということなのかな。そんなことを想像して、なんだか勝手に共感していた。

11月10日 [火]

天気 | 曇り

場所 | 会津若松の自宅、奥会津のゲストハウス

奥会津に来て10年目になるけれど、3年くらい前から妻が会津若松で仕事をしていることもあって、車で1時間ほど離れた奥会津と会津若松の二地域居住生活が続いている。今朝は会津若松で目覚めて、少し片付けをしてから朝食を済ませて、昨日自分で焙煎した珈琲豆の試飲も兼ねて珈琲を淹れた。少し雑味を感じて上手いかなかった理由について考える。その後、それを水筒へ入れて車で奥会津へ。道中、会津盆地の田園風景や峠を越える山の中の秋の色彩がとても美

しかった。

奥会津に着くと、ゲストハウスの掃除をして、今日の宿泊客の布団を敷く。午後からは農泊事業の打ち合わせ。昨年度から行政と奥会津・三島町でお店をしている仲間が中心になって、この地域に人を呼び込みことを目的にした観光系の事業だ。今日は東京からこの事業を手伝ってくれている関係者もきて、全国の成功事例の話聞き、今後の進め方について協議した。

夕方からは、同事業の一環で進めている、オンラインや飲食店で活用できるスチームコンベクションオープンを使った食の商品開発試食会。この方法で調理すると殺菌ができるため長期保存が可能になる。今回はこの試食会の料理人として、僕のゲストハウス立ち上げから手伝ってくれている仲間の O くんに愛媛から来てもらった。このために来たというよりは、O くんは会津の方と結婚して、彼女の出産のタイミングに合わせてちょうど会津入りしていたのでお願いしていた。本業は珈琲の焙煎士で僕の珈琲焙煎の先生なのだが、飲食経験も10年近くあって、とてもセンスの良い料理を作ってくれる。

今回は、会津地鶏を中心に地域食材を使ったイノベティブなレシピを事前にオーダーしていて、12品も用意してくれた。印象に残って商品化してみたいなと思ったのは、「干し柿くるみバター」「会津地鶏のリンゴ煮」「会津地鶏のプリン」、それから「栗と椎茸のリゾット」も美味しかったな。その日はそのままそれをつまみにしながら、飲み会になって終了。

11月11日 [水]

天気 | 曇り
場所 | 奥会津・三島町のゲストハウス

今日は奥会津・三島町にて目覚める。朝起きると昨日料理をお願いした焙煎士の

三島町農産物加工センター

2020/11/9 — 11/15

O くんが朝からウチの焙煎機で珈琲を焙煎することになっていたもので、一緒に焙煎小屋へ。地域おこし協力隊の F くんも合流して一緒に見学。小屋の窓から何気なくいつもの山をみると、山の上の方に雪が積もっていて一同驚く。昨日まで「紅葉きれいだなぁ～」と目を奪われていたのだが、そうしているうちに冬は静かに忍び寄る。

O くんに解説してもらいながらの焙煎は、大変面白かった。焙煎機の構造や豆の煎られていく過程を想像できる説明。理解が深まっていく。焙煎が終わると、焼いた豆を試飲するために O くんに珈琲を淹れてもらう。この珈琲の淹れ方も目から鱗だった。前に教えてもらった淹れ方と180度違うような淹れ方をしている。そのことを指摘して「今までの淹れ方と全然違うじゃん!」と僕がいうと「時代は前に進んでいるんですよ」と年下の O くんに言われて撃沈。

その後、昨日に引き続き農泊事業の打ち合わせ。事業自体は今年度終了するため、その後のヴィジョンについて協議したいと思い、場を設けてもらったけれど、事前に僕が用意したイメージ図が少し個人的な事業イメージにより過ぎていたみたいで、なかなか話が進展せずちょっと反省。

午後はなんだか煮詰まって来たので、近くの温泉へ行って、戻って来てから少し休む。夕方暗くなると、近所のおじちゃんがやって来て、「飲むべえ!」と誘われたので、おじちゃんのお宅にお邪魔して夕ご飯をご馳走になる。原木なめこのお吸い物が美味しかった。

11月12日 [木]

天気 | 晴れ
場所 | 奥会津、西会津・野沢地区

奥会津・三島町。シャワーを浴びて、少し片付けをしてから珈琲を淹れる。見よ

う見まねで昨日 Oくんが淹れていた斬新な淹れ方で淹れてみる。試飲しながら「浅煎りの珈琲豆の淹れ方には良いのかもしれない」と思う。

今日は、お昼前から隣町の西会津で催されている「まちめぐり×えんげき×おいしいごはん」のイベント「銀河鉄道の夜」に Oくんと参加してみた。西会津の中心地、野沢地区を歩いて巡りながらも、今はコロナでなかなかできない電車旅をしているかのような演出が其処彼処になされており、最後には美味しいご飯も食べられるという内容だった。

今ウチの法人で受託している事業のひとつに奥会津の食文化を伝える「ガストロノミー」をテーマにした事業があり、自分でも今年度何回か食のイベントを企画していたので、何かしらのヒントや学びがあるかもしれないと思って参加した。イベントは、終始コロナや安全面への配慮があったり、音と風景が混ざり合うような演出が施されていたりと、作り手の感性を感じる繊細で素敵なイベントだった。最後に出てくるご飯も、昔の食堂列車を思わせる仕立てで、ただ美味しいものを食べるだけでなく、その周辺や時間軸の奥行きを感じるストーリーまで伝えることは、参加者に豊かな付加価値をもたらしてくれた。こうした在り方は、これからの食のスタンダードになっていくんじゃないかな、と思った。

イベントが終わってから、このイベントを企画している友達が蔵を改修したお店まで案内してくれて「こしばがコーヒー」さんが、美味しいコロンビアのコーヒーを淹れてくれた。そのあと、西会津の協力隊の友達が今度始める予定のセンスの良い「おみやげや」の場所まで案内してくれた。

昨日、自分の住む地域のヴィジョン共有をする打ち合せの時にも同じ目的のお店を作りたいという話が出たけれど、なかなか具体的に話は進まなかった。それが西会津ではその話が具体的に動き出している。その遅れを感じながらも「結局、人だよなー」と思いながら帰宅。なぜだか少し勇気と元気をもらえた。

11月13日 [金]

天気 | 雨

場所 | 会津若松、奥会津

会津若松にて起床。今日は、昨日とは違うタイプのコーヒーマシーナリーで Oくんのあら技ドリップを試してみる。「うーん、アクが出る。やっぱり今までの淹れ方のほうが良いかもしれない」と思う。珈琲のドリップに関しては、東京の「蕪木^{かぶき}」というお店で珈琲を呑んでから最終的にはネルドリップに行き着きたいと思っていて、ネルドリップも買ってあるのだが、どうしてもせわしない日常に負けて未だにちゃんとトライ出来ないでいる。まあ、なんにせよ、珈琲についてあれこれ考えている時間は日常の中の小さな幸福だ。

昨日の夕食の鍋の残りで朝食を簡単に済ませ、12月からソコカシコ（僕が奥会津で営んでいるゲストハウス & レストラン）で定期的に受け入れるバスツアーの団体ランチに使う紙皿の漆塗り。大きな声では言えないが、某メーカーの使い捨てのデザイン紙皿に漆を何回か重ね塗りすると、趣がある、落としても割れない、スタッキングできて場所を取らない、軽い、といった三拍子では効かないくらい利便性の高いお皿が出来上がる。以前ソコカシコに泊まりに来てくれた大学の先生が竹を原料にした紙皿に漆を塗っていて、だったらいけるんじゃないか？ と思い試作したところ、いけそうだったので今回制作してみている。

作業が終わると奥会津へ。今日は通常なら営業日なのだが、シェフがぎっくり腰をやってしまい動けないということで臨時休業にした。それでも岐阜で18年地域づくりをしている NPO 法人 ORGAN の Kさんが泊まらせてほしいと急遽連絡が来たため、ちょっと色々話したいな、と思ったこともあり受け入れることに。夜、Kさんがチェックインして、そのあと飲みながら色々この地域についての戦略会議。大変面白かった。

11月14日〔土〕

天気 | 晴れ

場所 | 奥会津、三島町と金山町

奥会津・三島町。朝起きて、小屋の窓から外を見ると、裏の畑に猿が！ 最近このあたりに出て来て、かぼちゃを2つ抱えていたなどの目撃情報が流れていたけど、とうとう裏の畑にまで出て来たか。昨日から泊まっていたKさんの朝食を作って、珈琲を淹れる。そのあと朝食を食べながら、昨日の話の続きを1時間程度する。おかげさまで色々今後の事業の優先順位や進め方が整理されて来た。Kさんが10時過ぎに帰ると、ゲストハウスの片付けと掃除をして、昼食を簡単に済ませ、午後からアウトドア系の雑誌に「奥会津最後のマタギ」というタイトルで連載がある隣町の猟師・猪俣さんのところへ。昨年度から、奥会津山文化研究所（山文化研）を立ち上げて、山文化継承を目的にした20～40代のチームを作って、地元の猟師さんなどに山の入り方などを教えてもらっている。今日は、狩猟期間中雪山に入る際には必須アイテムのかんじきづくりを教えてもらう予定だ。現場に着くと明日から狩猟シーズン解禁ということもあり、猪俣さんやお弟子さんの他にもいわきの方からも何人か来ていた。

かんじきづくりは、昔は根曲がり竹を炭焼きの時の熱で温めて竹を柔らかくして丸めたそうだが、今は炭焼き小屋がほとんどなくなってしまったので、大きな鍋にお湯を沸かしてそこで温めて曲げる。今回は時間がなかったので、その行程はあらかじめ猪俣さんたちがやっておいてくれた。鉋で竹を削って丸くした竹の噛み合わせを丁寧に丁度よくしてから針金で止めていく。無心に手を動かす作業がとても楽しい。最近は頭ばかり使っていたなぁ～、と少し反省。16時頃にやっとある程度形になったところで今日は終了。

そのあと温泉に寄って、今夜はOくんがぎっくり腰でダウンしたシェフのピンチ

ヒッターとしてシェフを助めてくれることになっていたので、山文化研のメンバーと一緒にゲストハウスへ戻る。Oくんが友人の持って来たイノシシ肉をオープンで焼いてくれ、美味しい料理を振舞ってくれた。町の人たちも沢山来てくれて、泊まりのお客さんもととても楽しそうだった。宴は続いていたが、23時頃、一足先に就寝。

11月15日〔日〕

天気 | 晴れ

場所 | 奥会津のゲストハウス、会津若松の自宅

奥会津・三島町。今日は朝起きてしばらくすると、Oくんが朝食と自分で焙煎した珈琲を用意してくれた。Oくんや妻、友人とわいわい朝ごはんを食べながら雑談。Oくんは1月まで会津に滞在予定だが、来週パートナーの出産予定日ということもあり、しばらく落ち着くまでは奥会津へは来られなくなる。今までは愛媛からやって来ると1ヶ月くらい滞りながら焙煎指導や出張料理人として力になってくれていたけど、今年は愛媛でお店を始めたり子供が生まれたり、なかなか今までのように自由が効かなくなってきた。それは歳を重ねる中で起こって来る自然の流れで仕方がないことだよな、とは分かりつつ、それでもやっぱり少し寂しいな、とも思う。そんな漠然とした思いを内心抱きながら、昨日提供してくれた料理のレシピを聞いたり、最近僕が考えているこの地域の今後のイメージなどを共有した。

しばらくしてOくんと友人が帰ると、少し掃除をしてから妻と温泉へ。天気が良いこともあって温泉は結構混んでいた。お店に一度戻ってから火の元を確認して会津若松へ。日曜の午後は休むことにしているので、家に帰るとOくんがお裾分けしてくれた昨日の料理の残りを食べながら妻とワインを飲んだ。

気がついたら寝ていて、起きたらもうあたりは暗くなって来ていた。明日朝から

入っている旅行業の研修会の詳細を主催者に確認すると証明写真がいるということで、近くのTSUTAYAにある証明写真の機械まで写真を撮りに行き、コンビニに寄って戻る。奥会津に証明写真の機械なんかないから、会津若松まで戻って正解だった。どうやら明日の研修会は、なんかの資格が取れるのか？ ただの勉強会程度のものだと思っていた。戻ってくると特にお腹も空いていなかったのに、テレビを観ながらお店で使うワインをネットで注文。妻はテレビを観ながら爆笑している。明日は朝から早いので12時前には就寝。

三澤真也 [ソコカシコ 店主]

1979年、長野県諏訪市生まれ。武蔵野美術大学造形表現学部映像学科卒。一般社団法人地域づくりのアトリエ ソコカシコ 代表理事。地域再生クリエイター。珈琲焙煎見習い。福島県奥会津の縄文遺跡の上に建つゲストハウス「ソコカシコ」のオーナー。20代は絵画、映像、パフォーマンスを中心にアート活動を展開。2014年から3年間福島県主催の「森のはこ舟アートプロジェクト」にコーディネーターとして参加し、その最終年度に古民家をアーティストと共にリノベーションし、ゲストハウス「ソコカシコ」を開始。2019年、奥会津の山文化継承や地域再生を目的とした「奥会津山文化研究所」を立ち上げ、現在に至る。

2020 / 11 / 16 — 11 / 22

相澤久美

建築家／編集者／プロデューサー



11月16日 [月]

天気 | 晴れ

場所 | 福島県南相馬市→富岡町

福島に来ている。「みちのく潮風トレイル*」の南端は相馬市の松川浦記念公園で終わっているのだけれど、福島南端までやっぱり伸ばしたい。復興事業として、「南相馬〜いわき」が含まれないことに対する違和感がずっとあった。だから、今回歩きに来た。

昨日は、現在のみちのく潮風トレイルの南端、相馬市の松川浦環境公園から、南相馬市の原ノ町まで約33kmを歩いた。基本舗装路だから、足が疲れる。ゴールの原ノ町駅前のホテルは、前はつぎはぎだらけだったけど、ピカピカになっていた。一緒に歩いたのはハイカーの長谷川さん、高荒さん、レーガン。高荒さんは地元だから、いろんなことを教えてくれる。地元の人と歩くのは、いつも楽しい。

今日は、原ノ町から波江の駅まで32.4km。そのうち、2時間くらい会議のために離脱したので、私は24kmくらいしか歩けなかった。途中、予定していたルー

トとは異なるルートを現地で発見し、行ってみよう！ と進んでみると、藪漕ぎ&迷子。余計な時間と距離と体力を使ってしまったけど、こういう予期せぬ突発的な出来事が好きだ。歩き旅の楽しいところ。でも、一緒に歩いていた仲間には呆れられたり怒られたり。ゴールの浪江駅に着いた時にはまた真っ暗で、そこから電車で富岡の駅に向かった。

浪江駅から富岡駅、この区間はまだ人が歩くことはできない部分を含む。だから、電車で移動する。GPSのログを取りながら、動物や人々の生活導線から自然に形作られた古い町や村を歩けば、地図上には生き物のようにくねくねと折れ曲がる軌跡が浮き上がる。ここだけ、まだ、真っ直ぐな常磐線の直線が地図上に引かれる。

歩いてよかった。歩かないとわからないことが、たくさんある。

＊青森県八戸市から福島県相馬市まで、被災沿岸部4県28市町村をつなぐ長距離自然歩道＝ナショナルロングトレイル。東日本大震災後に環境省が取り組んできたプロジェクトのひとつ。みちのく潮風トレイルは全長1,000kmを超える。自分の足で、一步一步、歩いて進み、東北沿岸の今を歩く速度で、地域の人との出会いを繰り返しながら、地域の歴史、文化、暮らし、生業等体感していく。マスメディアの報道からは伝わらなかったことが、歩く旅を通して伝わっていく、貴重なプロジェクトと思い、ここ数年はこの仕事に注力している。2015年から全線の運営計画を策定する仕事に関わり、現在はこのトレイルを統括するNPO法人を運営している。

11月17日 [火]

天気 | 晴れ

場所 | 福島県富岡町→いわき市→宮城県名取市

富岡駅で7時30分に待ち合わせをして、また南に向かって歩いた。今回の調査は今日が最終日。ここまで、相馬市、南相馬市、浪江町を歩き、双葉町と大熊町を電車で通り、富岡町の途中まで歩いていた。残るは、楢葉町、広野町、い

わき市の3つ。今日はいわき市の北部にある久ノ浜まで。

小さな丘の上に古い集落があり、丘を下るとススキとセイタカアワダチソウの薄い茶色の大地が広がる。その繰り返し。高台にある神社に背後からお邪魔し、鳥居を潜って階段を降りようとすると、巨大な環境省の仮置き場が見えた。神社の主は、守るべき人々の暮らしを眺める代わりに、今は、白い巨大なテントの建物と、そこに出入りするダンプばかりを見る毎日であることが、なんだか申し訳なかった。

3日間よく歩いた。92kmくらい。歩いてよかった。歩かないと感じられないことがたくさんある。でも、私には、まだこのルートを1人で歩くのは辛過ぎる。けど、たくさんの人に歩いてもらいたいと思う。もう今日はくたくた。駅についたら、友人の富樫さんが迎えにきてくれて、スーパー銭湯に連れて行ってくれた。アカスリは生き返る。感謝。

11月18日 [水]

天気 | 晴れ

場所 | 宮城県名取市→青森県八戸市→岩手県久慈市

5時に起きて名取の社宅から名取市役所経由で八戸に向かう。名取市長がトレイル沿線の3市長村長に表敬訪問に行くので、その同行。途中、市長の車に乗り込み、事前レクとみちのく潮風トレイルの今後の取り組みについてあれこれ話す。名取市長は若く澁刺としていて、トレイルのことを真剣に考えてくれていて本当にありがたい。トレイルは、地域の人の協力なくしてはなんともならず、つまり、自治体の協力も不可欠。4県28市町村の良好な連携関係を保つことは、私たちに課せられた重要なミッションのひとつ。

八戸市長の表敬訪問の最中、市長の口からアメリカのパシフィック・クレスト・ト

相馬久美 [建築家/編集者/アロチャーター]

2020/11/16 — 11/22

レイルの話が出て驚いた。視察に連れて行ってもらったと話されていたが、私が関わるよりはるか前から、たくさんの方がこのトレイルには関わってくれているんだよなあ、と改めて実感する。

午後は^{かぶしま}蕪島から種差海岸まで8km程度の快適ハイキングで、前日まで舗装路を歩き続けた足に、八戸のトレイルルートは優しく、痛かった足首は歩いていたら直った。身体が丈夫でよかった。

11月19日 [木]

天気 | 晴れ

場所 | 岩手県久慈市→普代村→宮城県名取市

引き続き表敬訪問と視察の1日。久慈市長と普代村長と会談。首長同士が「トレイル上での自治体の連携が重要である」ことを確認し合う場面に立ち会えるのは本当にありがたい。表敬訪問は1泊2日で強行軍だったけど、「来てよかった」と山田市長。ありがたいことです。自治体職員のみなさんありがとう。地域のみなさんもうありがとう。

仙台に戻ると、仙台・松島圏のDMO（観光地域づくり推進法人）のみなさんが、三浦さんのセリ鍋の美味しい店で待っていてくれた。スタッフの板橋さんと板谷さんが先に店で話をしてくれていた。みちのく潮風トレイルの今後の活用に関して、どう連携できるかざっくばらんに相談。この道を活かしていくには、本当にたくさんの方の協力が必要なのだ。その後、板橋さんと打合せをして、もう1人友人に会い、今ホテル。アカスリ効果がまだ効いている。

相澤久美【建築家／編集者／プロデューサー】

2020/11/16 — 11/22

11月20日 [金]

天気 | 晴れ

場所 | 宮城県名取市→気仙沼市

今日はセンター勤務と移動の日だった。天気の良い日が続く。

朝は、閑上の長沼さんのお宅に「みちのく潮風トレイル 名取センター」の園庭工事の件でお伺いした。センターが閑上にできるとわかった時、最初に相談に行った友人。閑上のことではいつも頼りにしている人。でも、ちょっと久しぶり。本当は、閑上で有名な赤貝の季節に、仕事じゃなくてきたいなあ、とこぼすと、「早く来い」と笑われる。

地域づくりとか言うけれど、よそ者が地域になにかしてあげよう、というやる気だけでは、うまくいかないことが多い。地域の方に助けてもらう、教えてもらう、という姿勢がものすごく大事で、自分たちだけでなんとかしようと頑張り過ぎるのは逆効果のことすらある。地元の人が当然あれこれ詳しく、ネットワークもあり、その地域に愛がある。「愛だよ、愛」、は友人の座右の銘。自分にとってもそうだ。

夕方、明日のイベントのためにハイカーの長谷川さんが東京から来て、気仙沼に車で移動し、明日からの気仙沼大島の親子ツアーの打ち合わせ。大阪王将でテイクアウトして、食べながらホテルの一室で打ち合わせしていたら、途中ウトウト寝てしまった……ので、今まだ元気に深夜2時。仕事が終わらないなあ。気仙沼で九州自然歩道のことを考え資料をつくる。日本の「歩く旅」が、もっともっと文化として浸透して欲しいと願う。

11月21日〔土〕

天気 | 晴れ

場所 | 宮城県気仙沼市→気仙沼大島

想定していないことは起こる。今日は朝から気仙沼大島でJTＢと地域の方々と協働で企画してきた「気仙沼大島・地元の人と歩く親子ハイキングツアー」の初日。コロナ禍のため、朝一番で検温。会場準備していると、JTＢの杉田さんが真顔で近づいてきて、「相澤さん、ちょっといいですか?」と。ツアー工程をつくり、細々した準備をし、当日先頭を歩く予定の担当者の熱が高い。何度測っても37℃を下がらない。全ての役回りを変更、相澤代打。今回は事務局スタッフが多くてよかった。子どもたちの導き役は、ハイカーとして参加してくれていた長谷川さんが完璧に担ってくれた。参加者の親子もみんなフレンドリーな人ばかりで助かった。このトレイルはたくさんの人に支えられているけど、今回の現場もやっぱり関わる多くの人に支えられた。誰か1人が倒れても、依存先がたくさんあるから全部ダメになることはない。トレイルの運営もまさにそうだ。1,025kmの沿線に多くの味方が増えつつある。そのみんなに支え続けてもらえるように、「みんな」を増やすようにしなくちゃいけない。

子どもたちはお父さんやお母さんと頑張って歩いた。鳥甚句の体験もした。この船はどのお魚を取る船? という地元の人クイズには飛びついた。わー、きれい! 面白い、と同時に、「昔、ここには商店街があったんだけど、流されちゃったんだ」という話も聞く。きっと7歳にはよくわからない。まだ、生まれていなかった。でも、語り継いでいくことがこのトレイルの役割のひとつ。もしかしたらの脳裏に、この歩く旅の道の楽しい記憶を残すことができれば、もう少し大きくなって、また歩きにきてくれるかもしれない。その時は、また少し、別の見方ができるかもしれない。記憶のどこかに、今回の話が残るかもしれない。このツアーを

相澤久美／編集者／プロデューサー

2020/11/16 — 11/22

通して、まずはこのトレイルを知ってもらって、歩く楽しさを知ってくれば、まずは成功。

11月22日〔日〕

天気 | 晴れ時々曇り

場所 | 宮城県気仙沼大島→東京

前の晩、スーパーで買っておいだ食材を、長谷川さんに使い方の説明からしてもらったガスバーナーでわーわー言いながら調理し、地元の牡蠣を蒸していただいた。牡蠣漁師の小松さんも顔を出してくれて、親子共々ヘトヘトであつという間に寝てしまった。初めてのテント泊の家族ばかり。外気温4℃。寒いかな〜と心配していたけど、子どもたちは朝6時には元気いっぱいテントサイトを走り回っていた。すごいな〜。

今日は子どもたちを先頭にした。ハイカー長谷川さんのアイデア。歩きながらよくみているなぁと感心する。子どもは先頭で親の目を離れてのびのび。大人は子どもを事務局に任せてのんびり地元の方とお話。子どもに合わせて時間配分をしていたのに元気いっぱいに先頭を走り、大人が置いていかれる始末。

2日間で、小さな島をぐるっと一周歩ききった。お父さんも、お母さんも、子どもたちも、長く歩く旅が好きになってくれたらいい。そしてまた、東北の沿岸をただ歩きにきて欲しい。歩きながら、地域みなさんと自然と交流できたらいい。曲がったままのガードレールや古い土砂が詰まった道端の側溝にそっと気がついたり、古い街並みの小さな丘を降ると目の前に現れる新しい町に気づいたり、潮位表を見ないでいったら通れない砂浜のルートに出くわしたり、畑の大根を抜いてみたいなあと思ってみたり、あわび漁をする漁師さんの船を遠くから眺めたり……毎日異なる風景を歩き、小さな気づきを積み重ねる「歩く旅」の面白

さにハマる人が増えたらいい。今週も、数えきれない人のお世話になって過ごした。東北に恩が増える一方だ。

日記は今日が最後。あんまり日記っぽくならなかった。11月8日からの出張も今日でようやく終わり。これから2週間ぶりに家に帰る新幹線の中。さて、娘は元気だろうか。

相澤久美〔建築家／編集者／プロデューサー〕

1986～1992年まで米国東海岸で過ごす。1996年より一級建築士事務所主宰、建築設計の傍、雑誌・書籍の編集、映画プロデュースを行う。2006年に映像制作プロダクション silent voice を立上げ記録映画『東北記録映画三部作』『幸福は日々の中に。』等をプロデュース。2011年より防災・減災専門の一般メディア『震災リゲインプレス』の発行、被災地の中間支援等を実施。2015年より、環境省の復興事業であるみちのく潮風トレイルの持続的運営のための計画策定に携わり、2017年にNPO法人みちのくトレイルクラブを設立し常務理事に就任、事務局長を兼務。現在みちのく潮風トレイルの維持管理・国内外での利用促進に務める。2020年に日本の歩く旅の文化を醸成するため、トレイルブレイズハイキング研究所をハイカーらと立上げ、理事に就任。

相澤久美〔建築家／編集者／プロデューサー〕

2020 / 11 / 23 — 11 / 29

竹久 侑

水戸芸術館 現代美術センター 主任学芸員



11月23日〔月・祝〕

天気 | 晴れ

場所 | 水戸

連休の最終日、このリレー日記の私の番が巡ってきた。

休みといえば、基本、うちでは子どもたち優先でスケジュールが決まる。今日は11月下旬とは思えないほどの陽気に、いきなり「プール（屋内）に行きたい」と決意表明する息子。けれども、ある事情でプール行きは断念せざるを得なくなり、そのことに号泣する娘と息子。気を取り直させようと、急きょ巨大ローラー滑り台のある隣町の丘の上の公園に出かける。午後も3時を過ぎているというのに盛況であるその公園では、子どもたちも屋外なのにマスク着用。遊具で遊ぶときにかなり近い距離になってしまうことがあるので、たしかにマスク着用が妥当。ローラー滑り台で遊ぶには丘の上り下りが強いられるため、大人にはいい運動になる。帰りがけ、「シャボン玉おじさん」なる方がボランティアで提供しているシャボン玉を、丘の上から空にめがけて飛ばして帰路に就く。隣ではスケートパークの建設が進んでいた。公共事業でスケートパークを建設するとは時代の変化を感じる……。

2020/11/23 — 11/29

夕飯のメニューは子どもも大人もてんでバラバラな希望だったため、焼き飯、オムライス、鍋が混在する食卓となった(笑)。

11月24日[火]

天気 | くもり

場所 | 水戸

3連休を「連休」らしく過ごしたことで、今日はタスク満載の休み明けの一日。まずは、2021年2月20日から始まる担当の企画展「3.11とアーティスト：10年目の想像」に向けて制作される、藤井光さんの新作のため今週末に行うオリエンテーションと翌週末の撮影の準備。現場に入ってもらう同僚たちと打ち合わせを行い、出演する子どもたちとその保護者宛に送る「当日のご案内」の原稿を作成した。午後には、本展の会期中にオンライン授業をしてほしいという依頼のあった京都の高校の先生方と、同僚の教育チームとともにオンライン打ち合わせ。もともと来館しての団体鑑賞が2年前から計画されていたが、コロナの影響で来館は見送り、オンラインに切り替えて授業を行うにあたって、何を実施するのがよいか協議した。ここの高校はこれまで生徒たちが東北の被災地に行くことを毎年続けてきていて、行った生徒たちは全校に向けて発表するほど震災に対して意識の高い学校だという。ただ、今回オンライン授業を受けることになる1年生だけはいにくコロナの影響で東北に行く機会をまだ持てていないとのこと。東日本大震災当時4、5歳だったという彼・彼女らに、そして京都という遠方に住む彼・彼女らに、東日本大震災をめぐる芸術表現についてどのように伝えるのがよいか意見交換する。ここの生徒たちの大半は「つくり手」になることを望んで進学するということで、先生からの依頼はアートが大震災にどのようにかわれるのか、いまいまだ実感できていない生徒たちに向けてそのへんのことを話してほしいと

竹久 信「水戸芸術館 現代美術センター 主任学芸員」

のこと。

オランダのニシコさん(本展出品アーティスト)から、新作の進捗状況についてメールがあった。オランダでのコロナの状況は日本より悪いようだが、それでも感染対策に考慮しつつ計画通り撮影と収録が進んでいるとのこと。2011年からずっと継続している「地震を直すプロジェクト」の第7段階にあたる新展開を本展で発表していただく。新たに撮影された写真の画像データを見て、携わる人の愛情が伝わってきた。公開が楽しみ。

11月25日[水]

天気 | 雨

場所 | 水戸→東京→水戸 特急ひたち

今日は、来年度予定事業である個展の打ち合わせのため、久しぶりに都内へ出張。写真家のA氏と補佐の方にお会いする。10月に顔合わせしてから初めての打ち合わせ。展覧会のコンセプト、ねらい、おおまかな会場構成、水戸で撮り下ろす新作のこと、そのためのワークショップなどについて打ち合わせをしているあいだに、あっという間に2時間半が過ぎていった。キュレーターは企画書を書くことで展覧会のアイデアをまず言語化していくが、そのつぎの第一歩として、個展の実現に向けて「パートナー」となるアーティストや事務所の方々とコンセプトの共有、アイデアの出し合いがある。ギャラリーという空間をどう演出するか、胸が膨らむとともに実務的な面での協議も同じように大事。「家族」というもの、そのいろいろな在り方、ひいては自分の家族について想いを巡らせる機会になればと展覧会の構想は膨らむ。同時に、予算の作成、助成金申請など、コロナ禍で打撃を受けないわけのない実務面をクリアしていかなければならない……晩秋から年末にかけて、まさにそ

2020/11/23 — 11/29

ういう時期。

打ち合わせが終わって特急ひたちに乗ってメールをチェックすると、翌週末の撮影に向けて藤井さんが希望する小道具類の造作リクエストのメールが届いていた。わっ！ あと1週間半しかない！ 明日明後日には打ち合わせしなければ。

11月26日〔木〕

天気 | くもり

場所 | 水戸

翌週末の撮影に必要な造作物について、朝いちばんに藤井さんと展示担当の同僚とオンライン会議。まったく動じず対応してくれる同僚の頼もしさにはいつも救われる。

その後、部門会議を経ての昼休みには、別の同僚たちと週末のゲストに向けたお弁当の物色。ゲストのためのお弁当は、現場の「種類」を考慮しつつ、栄養バランスが良く、胃もたれせず、しかもしっかりとエネルギーになって午後につなげられることをイメージして選ぶ。もちろん自分が食べたいという視点も忘れない(笑)。

午後は、出品作家である小森はるかさん+瀬尾夏美さんと、仙台の若手建築家グループであるダウナーズの面々を交えて初のオンライン顔合わせ。彼女たちが陸前高田にかかわりながらずっと続けてきた風景の変貌についての記述と記録を展示で紹介するために、空間設計の専門家に相談しようということになって迎えた今日の会議。仙台サイドですでにイメージのすり合わせがなされていてラフまでつくってくれていたおかげで、具体的な協議から始められた。こちらのイメージを知らせ、作家側の懸念点について協議し、つぎの打ち合わせまでにさらにもんでいただくことになった。

竹久 信「水戸芸術館 現代美術センター 主任学芸員」

2020/11/23 — 11/29

夜、朝のオンライン会議で撮影小道具のリクエストの詳細について確認した同僚から、強度を考慮した造作物の提案図面があがってきた。私には十分に思える図面を作家に転送し、今日は終わり。

11月27日〔金〕

天気 | くもり(雨)

場所 | 水戸

明日の休みまでに済ませたい仕事が気になって早めに目が覚めた。日曜日に控えている新作映画制作のためのオリエンテーションで、出演者である小学4年生の子どもたちとその親御さんに配布する撮影当日のご案内資料を下書きして、藤井さんにメールする。

午前は目下のToDoリストを時計を気にしながら順番につぶし、昼休みに娘の授業参観へ。コロナ禍で密を避けるために授業参観も超短時間かつ入れ替え制。「おかあさん、きょうきてね」とまっすぐにこちらを見て伝えてきた娘、もちろん間違いなく行くよ。行くと、時間割が変更されて、図工の授業をやっていた。学校の教室で過ごす娘の姿はいつもとはちがってどこかよそ行きで、でも友だちと楽しそうにやっている様子を確認して職場に戻る。

午後は、2月からの展覧会の会期中に行う関連プログラムである防災ワークショップと、次年度事業のための助成金申請について同僚と打ち合わせ。残りのタスクは週明けに。

11月28日〔土〕

天気 | 晴れのち小雨

場所 | 水戸

休日の今日は、娘のピアノのレッスンに付き合いながら茨城県内のキャンプ情報誌を読む。そもそも防災を意識してアウトドアに興味を持ち始めたが、コロナ禍に見舞われ、比較的安心して楽しめるレジャーとして、たちまち世間のキャンプ熱は沸騰。それに後押しされるような、されないような感じで、キャンプデビューを果たしたのが今年の夏。つぎに行ける日を楽しみに、県内のキャンプ情報をチェック。

そのあとに行った皮膚科が激混みで午後まで待つというので、いったん家に帰り、持ってでかけるはずだったお弁当を庭で家族と食べる。お日様があたると暑すぎるほどの日和。その後皮膚科に戻るも、想像以上に時間がかかり、待っている間に空がグレーの雲に覆われてめっきり寒くなった。予定を変更して、外遊びを断念して温水プールへ（月曜日の息子の念願が叶ったかたち）。子どもたちは身体を動かして遊ばないとストレスがたまって、そのストレスが暴発する生き物だなど、のびのびと水に浮かんでいるかれらの様子を見てつくづく思う。今年はコロナで学校も保育園もプールが中止になったので、泳ぎの練習なんてほとんどできていないのに、いつのまにか泳ぎが上達している。縄跳びもそうだったけど、急にできるようになる瞬間というのが、子どもにはあるものだ。

夜、明日のオリエンテーションの流れや配布資料の最終確認でメール。

11月29日【日】

天気 | 晴れ

場所 | 水戸

さて、今日は例のオリエンテーションの日。藤井さんの新作制作のために、29名の出演者とその親御さんを迎え、コロナ対策として午前と午後の2回に分けてオリエンテーションを実施した。初めての顔合わせなので、出演する子どもたち

も緊張していたが、藤井さんは小学生にも伝わる言葉を選んで、難問である「差別」というテーマに作品を通していかに向き合っていくか語りかける。演技練習を含めたワークショップさながらの2時間のオリエンテーションを、子どもたちは見事な集中力で全うした。演技経験なしの彼・彼女らが、本番、どのような様子を見せてくれるか楽しみでならない。そして、何より無事に撮影の日が迎えられ、その後も何事もなく過ごせることを祈ってやまない。

会場の撤収を終えてメールを見ると、展覧会ポスターのラフ案がデザイナーの加藤賢策さんから届いていた。同僚とラフを見ながら意見交換。だいたい意見がでそろったところで返信する内容がおのずと決まった。

ところで、新作が産声をあげる現場にはこれまでもときどき携わってきたが、展覧会をつくるのとはまた異なる緊張と興奮、歓びがあることを今回の現場で改めて実感した。制作の一端を担うことには当然責任が伴うが、責任はスリルへと化学変化する。今日のオリエンテーションに立ち会って放出したアドレナリンを抑制しながら休息をとるのが大事なことはわかっているけど、今日はなかなか寝付けそうにない。

竹久 侑「水戸芸術館 現代美術センター 主任学芸員」

展覧会およびプロジェクトの企画と実践を通して、地域社会におけるアートセンターの役割を探索し、芸術と社会の交わる領域を耕すことを目指す。東日本大震災からの10年目の節目にあわせて、「3.11とアーティスト：10年目の想像」展を企画。その他主な展覧会として、「アートセンターをひらく」(2019～2020年)、デイヴィッド・シュリグリー「ルーズ・ユア・マインド—ようこそダークなせかいへ」(2017～2018年)、「石川直樹 この星の光の地図を写す」(2016～2017年)、「田中功起 共にいることの可能性、その試み」(2016年)、「3.11とアーティスト：進行形の記録」(2012年)、大友良英「アンサンブルズ2010—共振」(2010年)など。水と土の芸術祭2012ディレクター。

2020 / 11 / 30 ——— 12 / 6

中村 茜

precog 代表取締役



11月30日 [月]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅 (東京都)

2021年2月公開予定の「Theater for All (TfA)」というオンライン型の劇場（配信プラットフォーム）の立ち上げ準備中。今日はラーニングプログラムの定例で話したことについて。

配信は、いつでも、どこでも作品に向き合えるので、気軽に、2度3度深掘りしながら見る体験ができるのが魅力の一つ（うちの娘は、好きな動画は何度も何度も見て「好き」を増幅させている）。舞台作品でも何度も配信版を見られることで、どれだけ豊かな視聴体験を生み出せるかに挑戦したい。

かつて、演劇をグラフィックレコーディング（グラレコ）するワークショップを開催した際に、観賞者の脳味噌の中（思考の経過、観賞者自身の興奮と疲れ、シーンの盛り上がりとストーリー展開など）が多様な形で可視化されることで、自分が気づいてなかったことに他の人のグラレコから気づけたりして、感想シェアの対話が非常

に盛り上がった実体験がある。このように互いの考えを知りあい、違う視点に出会えることで自分の視野ももっと広がる。TfAラーニングでは、その鑑賞体験の先に一步を踏み出すアクションへ繋げられるような場を生み出したい。

ちなみに、演劇グラレコについてのレポートはこちら。

<https://note.com/precog/n/na67174b38088>

今日のラーニング定例では、アーティストや学者などが登場して、作品を感じる視点のウォーミングアップとなる解説動画を用意していて、そのタイトルについて議論。

「Question（問い）という言葉には、Quest（冒険する）という言葉が潜んでいるよね、この自ら冒険する感じは、この解説動画のイメージに近いんじゃないか!」というワークショップデザイナーの臼井隆志さんの発言で、グッとタイトル命名の方向性が見えてきた。

12月1日 [火]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅 (東京都)

CINRAさんからリモートワーク宣言のメールが届く。プリコグでもこうした宣言をした方がよいのだろうか、と考える。プリコグは、4月1日から完全リモートワーク。労働規約や勤怠ルール、支給機材や手当などを見直して、リモートワーク体制を整えた今年前半。いまでは奈良、名古屋、北海道、ベルリンなどの在住者もプリコグに参加してくれており、頼もしいチームができて嬉しい。わたしだけでなく、ほかのスタッフも育児真っ最中のスタッフが数人おり、リモートワーク

中村 茜 [precog 代表取締役]

2020/11/30 ——— 12/6

は育児者に優しいことを実感。さらには、都心暮らしを手放し実家に戻ったスタッフや大学生も、リモートのほうが作業しやすく、作業スペースも自分流にアレンジできて良いなどの意見も。

一方で、コロナ禍での急激な社会変化も相まって、リモートワークに慣れないスタッフも出ている。弊社では Google Meet、Zoom、LINE WORKS、Slack、メールが主なコミュニケーションツールだが、それらをジャグリングする脳味噌は、リアルコミュニケーションとは別物なので、オンライン上で発信したり意見交換したり、伝えたい情報を可視化できない人が孤立してしまう。また、新人教育や、社内外の信頼関係の構築、雑談で生まれる笑いか共感が生まれにくいのも事実で、週1などで実際にオフィスに集まるチームも出てきた。チームの顔ぶれ、担当するプロジェクトの性質によっても様々なので、試行錯誤をしながらより良い環境を追求していきたい。そして、変化に応じた社内コミュニケーションのフレキシブルなデザインが大事。

CINRAさんのメッセージで共感するのは、「社員と会社が、オフィスという場ではなくミッションでつながる関係になる」ということ。スタッフ一人一人が自分なりのミッションをもって仕事・活動していることは、その人を成長させるし、その人自身のミッションが、会社のミッションとも重なることで、会社も成長できるということだな、と思う。

中村 茜 [precog 代表取締役]

2020/11/30 — 12/6

12月2日 [水]
天気 | 曇りのち雨
場所 | 自宅 (東京都)

いつものように朝8時頃から自宅のデスクに向かい、オンライン会議が5本。18時に終業し、保育園にお迎え。

12月3日 [木]
天気 | 曇り
場所 | 自宅 (東京都)

「見る」「鑑賞する」「視聴する」「観劇する」という漢字の使い分けについて考える。芸術作品を「見る」とき、晴眼者も視覚的に見えているものだけで作品を捉えているわけではなくて、その場の空気感や音などもさることながら、作品が生まれた背景や社会状況や、アーティストのバックボーンとか、そこから受ける刺激や感情などを含めて感じとる行為が、この4つの言葉に含まれている。そんなことを改めて認識して、字面だけではない言葉の意味を広げていきたいと思った。

ところで以前、チェルフィッチュの人たちと話していたとき、日本だと「俳優」という「演出家」の指示を聞く人というイメージが強く、アーティスティックな創造や表現をする人という認識は一般的にはないのではないかと。という話題になった。一方で、ヨーロッパでは、「俳優」はアーティスティックな創造・表現をする人という認識がその言葉自体に含まれた形で一般的に浸透しているのではないかと。という話をしたことを思い出す。

「Theater for All (TfA)」プロジェクトの立ち上げをしながら、「アクセシビリティ」「ダイバーシティ」「ユニバーサルティ」「バリアフリー」「インクルージョン」などというカタカナ言葉が持つそれぞれの意味や、社会的な認識のされ方についてもチームで考えてきた。これらの言葉は、使う文脈や相手によって、同じ

言葉でも伝わり方にだいぶ差が出ると感じていて、言葉や伝わり方がその都度ブレる感じがある。TfAでは、どう言葉を使い分けていくか丁寧に意識して取り組むことを共有した。

ちなみに、TfAのマガジンをやってますので、覗いてみて下さい。

https://note.com/theatre_for_all

12月4日 [金]

天気 | 晴れ

場所 | 自宅 (東京都)

2018年からジョグジャカルタ、クアラルンプール、ロハスシティで開催してきたアジアを旅する交流事業「Jejak—旅 Tabi Exchange:wandering contemporary performing arts in Asia Contemporary Performance」のオンラインイベント初日。双方向 Q&A「帝国、その後?— 東南アジアと沖縄で共有されるべきこと」に登壇。

今年の大きな悩みの一つは、コロナ禍における国際交流はどのように実践できるか? というもの。そのことを乗り越えるために、どんなに小さなものであれ国際事業を実施したい、という思いがあった。

今回、ジョグジャカルタ、シンガポール、マレーシア、マニラ、台北、那覇、長野、東京などから登壇者と配信作品が集まり開催。リアルでは観劇からトークや交流プログラムまで1日の中で開催すること多いが、オンラインで、観客にも時差がある中では、観客を長時間同じ時間に拘束するのは難しい。作品はYouTubeやPeatixなどのオンデマンドを通じて日本語か英語で観ること

ができ、どう感じたか? というリフレクションや交流は双方向ウェビナー (逐次通訳) という形で、時間やフォーマットを分けて開催した。

一番課題だと感じたのは、お客さんの動線。観劇であれば、チケット買う (ぴあやPeatixに行く) →カレンダーに入れる→劇場に行く→交流する、みたいなことが社会的にも慣例化されているが、オンデマンドだと自分の好きな時にチケットを購入し、鑑賞することになるため、「観る→交流する」という動線のデザインにまだまだ課題を感じる。

トークでは、キュレーターの野村政之さん司会で、1972年の沖縄復帰という歴史的事件を取り扱った沖縄の作品『9人の迷える沖縄人』を、シンガポール在住の劇作家、Alfianと引き合わせた。彼は『Tiger of Malaya』という、終戦間近に公開されたプロパガンダ邦画を題材にした演劇を発表している。この沖縄の在りようは、第二次世界大戦中に日本の支配を受けた国や地域が、戦後から現在まで向き合ってきた状況と共通性があるのではないかと考えたのである。

1963年にマレーシア連邦から独立したシンガポール。Alfianは、彼が描く作品の内容のためか、マレーシアへの入国許可が降りたことがないという。

シンガポールが「独立」する、沖縄が日本へ「返還」される。一体土地は誰のものなのか? という議論が印象的だった。Alfianが、『9人の迷える沖縄人』にたくさん共感するところがあった、と言っていて、狙いが当たった達成感があった。

アーカイブはこちらへ。

<https://www.youtube.com/watch?v=QqSgaPzyWWQ>

12月5日 [土]

天気 | 雨のち曇り

場所 | 自宅(東京都)

引き続き「Jejak—旅 Tabi Exchange」のオンラインイベント。双方向 Q&A「Emancipatory Movements: A Regroup of Solidarities“解放のムーブメント：連帯を結びなおす”」に登壇した。

フィリピンは、1月30日に最初のコロナウイルスの症例が報告され、3月12日にロックダウンが終了。新型コロナウイルス感染症の大流行や政治的抑圧などの状況下で、フィリピンでの文化活動に携わっている団体と議論を行った。フィリピン勢の、この機会に、不当に拘束されたり、行方不明になってしまったりしたアーティストが出ている社会状況について切実な訴えが続いた。そのことがあったのがつい一昨日などで、直近の生々しいニュースが次々に報告された。

12月6日 [日]

天気 | 曇りのち晴れ

場所 | 自宅(東京都)

今日も「Jejak—旅 Tabi Exchange」オンラインイベントにて、双方向 Q&A「Performing Resilience“レジリエンスを上演する”」登壇。

シンガポール、台北、ジョグジャカルタ、那覇のアーティストから、コロナ禍の創作環境や思考の変化について議論。一番印象的だったのは、演劇を上演する際に、戯曲を政府当局に提出し上演許可を受けねばならないシンガポールにおい

て、オンラインの表現空間は治外法権なので、オンライン演劇が、新たなオルタナティブスペースとして機能し始めている、という話。
また、新型コロナウイルス感染症の制御に成功している台北にいる、振付家ウェン・チーでさえ、3ヶ月後以降のスケジュールは決めておらず、クリエーションやお稽古でいろんな人と取り組む時間ができたから、今は作品の種を育てている、と話していたことも印象的だった。
皆さん、コロナ以前の生活に戻るとい前提は持っておらず、「新しい未来」を探っているところも印象的だった。

中村 茜 [precog 代表取締役]

現代演劇、コンテンポラリーダンスのアーティストやカンパニーの国内外の活動のプロデュース、サイトスペシフィックなフェスティバルや、領域横断的な人材育成事業などを手掛ける。チェルフィッチュ・岡田利規、ニブロール・矢内原美邦等の国内外の活動をプロデュース。2009年 NPO 法人ドリフターズ・インターナショナルを設立。舞台制作者オープンネットワーク ON-PAM 発起人・理事。2011 年より日本大学芸術学部非常勤講師。2019 年は日本財団主催の障害・性・世代・言語・国籍などを超えることを目指す「超ダイバーシティ芸術祭」True Colors Festival の運営事務局を担うなど、活動の幅を広げている。

中村 茜 [precog 代表取締役]

2020/11/30 — 12/6

- 2日 - 香港、民主派活動家の黄之鋒氏・周庭氏・林朗彦氏に実刑判決
- ドイツは部分的ロックダウンを1月10日まで再延長することを発表
- 4日 - 大阪地裁、関西電力大飯原発設置許可を違法として取り消し。初の司法判断
- 14日 - 政府、Go Toトラベル12月28日から1月11日まで全国一斉停止へ
- 17日 - 中国、月面調査機が初めて月の土を持ち帰る。アメリカ、ソ連に続き、44年ぶり
- 19日 - イギリス、新型コロナの変異種による感染が拡大しているとして、ロンドンとイングランド南東部に12月20日から厳しい社会規制をかけると発表
- 22日 - 最高裁、袴田事件を東京高裁に差し戻し。再審を認めない決定を取り消し
- 25日 - 新型コロナ変異種の感染者が空港の検疫以外で国内初確認
- 28日 - 新型コロナ、南アフリカで報告された変異種の感染者が国内初確認
- フランスは全土で10月30日から12月1日まで、ドイツは部分的に11月2日から12月2日まで、ロックダウン（都市封鎖）を発表。
- ヨーロッパで感染が再拡大
- 厚労省、コロナ解雇・雇い止めが7万9,522人と発表
- 31日 - 東京都の新型コロナ新規感染者数は1,337人と急増、全国は4,520人で初めて4,000人を超える

安川雄基

合同会社アトリエカフェ 代表社員



12月7日 [月]

天気 | 晴れ→曇り 朝晩寒く、昼は暖かい

場所 | 茨木市→工房→羽曳野市→工房・自宅兼事務所（北加賀屋）

大阪府内を北から南へよく動いた一日になった。大阪はコロナ禍赤信号真っ只中。地元にある太陽の塔も赤く照らされている。不要不急の外出自粛が求められているが、第1波のときほど仕事は止まっていない。

午前、食堂を開業する高校時代の友人から相談があるということで茨木市に向かう。着いてみると女性2人が埃まみれになりながら必死にDIYでお店作りをしており、十分良いお店になりそうだったので、安全面と設備関係のアドバイスと応援をして退散。いよいよ同世代が開業したり、活躍したりする人の話が増えてきた。協働してもらえるよう、頑張らないといけない。

午後からは工房で製作中の家具の塗装をしつつ、15時から羽曳野市で打ち合わせ。社会福祉法人が事業拡大のため新築での拠点拡張を検討しており、320坪の敷地の下見に行ってきた。今年序盤はコロナ禍で仕事が落ち着いた時期も

あったが、次から次へと未知の領域、未知のスケールの仕事が舞い込んできて、2020年はまたひとつ区切りの年かもしれない。

僕は、2008年の大学4年秋、リーマンショックの影響で急に就職内定がなくなり、転がるように運良く建築の世界に踏み込んだ。何ができるかわからないまま2011年震災の年に独立。人に恵まれいろいろと誘っていただき、断ることなどひとつもせずにがむしゃらにやってきた。その駆け出しの頃の、大きな大きなポイントが2012年の岩手県・大槌町生活である。大学の頃にまちづくり・都市計画を専攻していたとはいえ、こんな大変な時に大阪から来た25歳半人前を温かく受け入れてくれた大槌町民及び関係者の方々にはいまだに感謝と申し訳なさがある。復興支援にいったつもりが、一番救われたのは自分かもしれない。強烈な人生経験になった。

息子の誕生とコロナ禍が続き、ここ2年大槌町に行けていないのが寂しい。みなさんお元気でしょうか？

リーマンショック、東日本大震災、コロナ禍、大変な社会の中での挑戦を求められているのかもしれない。なぜだろうか。

12月8日〔火〕

天気 | 晴れ 外の様子をあまり覚えていない

場所 | 自宅兼事務所と工房（北加賀屋）

今日は久しぶりに丸一日ひとりで製作作業をする日。京都でのマンションリフォーム案件が大詰め、家具を製作中。朝から工房でと思っていたが、電話が鳴り、メールが届き、やれ見積だ、工程表だと、午前は自転車で5分の工房に行くこと

すらできずに自宅兼事務所でデスクワーク。昨年あたりからこれが多い。当たり前だが、木工をしながらデスクワークはできない。なんとか複数案件の図面作成を同時に進めることはできても、丸ノコとPCは同時にできないということにちゃんと気づいたのはここ数年。アホみたいな話だが、自分で全部やりたがっていた頃にはあまり気づいていなかったような気がする。

法人としては妻と2人で、まもなく2歳になる息子と暮らす自宅を事務所にし、仕事とプライベートはごちゃごちゃで、そのメリットの方をみながらやってきた。しかし今年に入ってから特に、製作は大工さんに、設計も1人ではなくチームで、ということが増えてきて、賑やかになってきた。もはやスタッフを雇う必要があるのでは？ ということは事務所を自宅と切り離して借りるのか？ そうなると毎晩楽しみにしている息子のお風呂はどうなるのか？ みたいなことを今年は毎日毎日考えていて、あっという間に体制は変わらず12月になった。年々状況は変われど、独立して10年目、ずっとこんな感じで流されるようにやってきた気がする。午後からは電話対応をしつつ、工房で製作を進めた。実質作業時間数時間程度か。でも良い家具ができそう。

12月9日〔水〕

天気 | 晴れ 最近考え事が多いせいか天候の記憶が薄い

場所 | 京都芸術大学

2018年から非常勤講師を務める、京都芸術大学2年生の設計課題合評の日。2〜4講時。発表の間にお昼休憩を挟むと、どうしても発表済みの人とこれから人の緊張感の差が顕著に出てしまうので、早めの昼食をとって12時過ぎから17時頃までぶっ通しの合評。学生34人、1人の持ち時間が短くいつも申し訳なく思うが、少しでも何かに気づき、モチベーションを上げてもらえたらという思い

で必死に頭を回転させ続けて5時間弱。なかなか脳が疲れている。1年生から続けて担当している彼ら彼女らの成長とか、それぞれの興味・得意技の違いとか、見ていだけでも楽しい。教えるのが上手いかどうかはわからないが、子供の頃から憧れていた先生業はやはり向いていると思う。

大学内は次亜塩素酸のミストが至るところで吹かれており、ここ最近のコロナ第3波の中なんとか対面授業が続けられている。今年度は始業が遅れ、6月から9月まではオンライン授業。提出物の管理とか出席率の高さとかチャットによる積極的な質問とか、オンラインの良さも感じたが、やはり対面授業が始まってみると教える側も絶対的に楽しい、やる気がでる。通勤に2時間かかるのだが、それでもみんなの顔を見ながら講義ができるのは嬉しいし、やりがいがある。

早く落ち着いて、マスクなしでしっかり表情を読み取りながら、学生ひとりひとりみんなにとって少しでもためになる話をしたい。とか考えていると妻に働きすぎる癖について指摘され、いや、逆に先生業向いていないか？ とちょっと思った。ずっと続けたい。

12月10日 [木]

天気 | 晴れ

場所 | 京都のマンション現場

終盤に差し掛かっている京都のマンションリフォーム現場に家具の納品1回目。コロナ禍で当初のスケジュールが随分ずれ込んだが、9月に着工してゆっくり進めていた工事がようやく年内に完了。家具の製作がいくつか残っている。今回は設計・工務店・大工のそれぞれ個人で活動する計4人でプロジェクトチームを作り、設計から施工まで一括してみんなで行うことを試みている。安川は監督？ 窓口？ 設計と施工とクライアントの間の人+家具の製作を担当している。

安川雄基 [合同会社アトリエカフエ 代表社員]

2020/12/7 — 12/13

良さも難しさも感じながら、ようやく終盤まできた。もう一踏ん張り。

その頃急遽、母親と妹が大阪の自宅に遊びにきて、妻が対応。夜に合流して、マンション現場のクライアントが現在大阪で営む飲食店にお邪魔した。自宅もお店も京都に引っ越され、どちらもお手伝いさせてもらっている。バリバリ工事進行中に、急遽家族と母と妹と妹の彼氏を連れてワラワラとお店にお邪魔できるような関係性ができていることに喜びを感じつつ、人の少ない大阪中心部で束の間の楽しい時間を過ごした。久しぶりだこういうの。無意識にかなり自粛しているのだと思う。ホッとした。

12月11日 [金]

天気 | 晴れ 少し曇り

場所 | 北加賀屋

今日はじーっくりパソコンの前に座れた。溜まった請求書作成など会計関係、京都マンションの家具製作の準備、京都店舗工事の各業者とのやりとり、なかなか進められず溜まっていたタスクを減らすことができた。最近はこのようにゆっくりした日をなかなか作れなくなって、アタフタした毎日を送っている。仕事があるのはありがたいが、今年序盤のコロナ第1波の中、毎日自宅兼事務所でリモートで仕事を進めながら、家族の顔が見える時間が多いことの良さを覚えてしまったので、もう少し上手くコントロールできないものかと反省しつつ、明日からできるだけスムーズに事が進むよう、少し焦りながらデスクに就く。

夜は、美味しいとの噂を聞いて秋田から取り寄せたきりたんぼ鍋を家族でゆっくりいただいた。岩手・大槌町も本当にびっくりするほどごはんが美味しかった。

何を食べてもおいしいのだ。復興支援に来た人が、地元の人のおもてなしで太って帰るというような場面を何度も目にして、本当に温かい場所だなと感じていたことをまた思い出した。

12月12日〔土〕

天気 | 晴れ 少し曇り

場所 | 中央区→堺→北加賀屋

福祉関係の仕事が多い。一級建築士事務所と協働して進めている茨木市での福祉施設新築プロジェクトの打ち合わせ。基本構想を進める。地域の方や入居予定の方とワークショップをしながら空間をデザインしていくことに期待されて抜擢されたが、コロナ禍の影響でワークショップを実施できず。会わなくてもできるワークショップ的なもの、など考えてみたがなかなか難しい。対象は高齢の方が多いためオンラインも困難で、シートを配布して回収するか？ とかいろいろアイデア出しをしてみたが、この世情で新参者が急に自宅を回って紙を配るのもどうかと思うし、それはワークショップではなくアンケートではないか。現状、粛々とプランを練りつつ、1月には基本構想として資料をまとめる予定。スパンが長い仕事が増えてきた。話をもらってから設計含めて2ヶ月で食堂オープン！ のような仕事が懐かしい。今思うと、そういう仕事で本領発揮してきたのかもしれない。いろんなことに挑戦させてもらえるこの環境は本当にありがたい。

夕方は堺市にある福祉施設に、10月に製作して納品したアトリエの什器のメンテナンスに。使っているといういろいろ改善したい点が出てくるもので、自分で作っているとのちのち相談に乗ったり、自主的にアップデートできるのが良い。クライアントとは長い付き合いになることが多い。そういうスタンスも、福祉業界と相性

が良い理由のひとつかもしれない。

12月13日〔日〕

天気 | 晴れ時々曇り 京都は少し雨が降った

場所 | 京都のマンション現場

終盤を迎えているマンション改修、クライアントとの最終現場打ち合わせ。もちろん細かいところも決まり、あとは製作のみ。あと2週間ほどで竣工。年末まではバタバタしそうだ。ここのクライアントが営むお店のほうも、マンションから自転車で行ける距離のところで今週着工。マンション打ち合わせに続いて、店舗現場打ち合わせと近隣への工事挨拶を行い、いよいよお店を始める感じがでてきた。今の大阪のお店の内装はほとんどを店主自身で造作されており、今回も弊社チームで請けているのは解体工事と設備工事とほんの一部造作工事のみ。自分の場所は自分で作るスタンスは大好きなので、あとはめっちゃめっちゃ応援する。

北加賀屋まで車で1時間半ほど。日曜日を丸一日打ち合わせで終え、少し疲れながらの帰宅。明日は息子の2歳の誕生日なので、代休とまではいかなくともゆっくりしたい。コロナ禍でいろんな人が大変な思いをして、我々も影響は受けているが、自宅で家族と過ごす時間が増え、心と時間にゆとりを欲するようになったのは個人的にすごく良かったと思っている。これを機に、年齢を重ねても長く元気に無理なく続けられる体制を作っていきたい。

安川雄基〔合同会社アトリエカフェ代表社員〕

2020/12/7 — 12/13

安川雄基 [合同会社アトリエカフェ 代表社員]

1987年大阪府吹田市生まれ。近畿大学理工学部社会環境工学科卒業。2年間の建築設計事務所勤務を経て、2011年アトリエカフェ設立。「空間づくりとコトづくり」をテーマに、建築設計・インテリアデザイン・展示構成・施工・家具製作などから、ワークショップ企画・まちづくり事業・コミュニティ施設のコーディネート業務まで、ハードとソフト行き来しながら活動。いろいろな技を持った人たちと協働しながら、小さなものから大きなものまでつくる日々を送っている。2018年より京都芸術大学空間演出デザイン学科非常勤講師。2020年、京都府・亀岡市の農機具小屋をリサーチ・分析した共著『小屋の本 霧のまち亀岡からみる風景』を出版。

安川雄基 [合同会社アトリエカフェ 代表社員]

2020 / 12 / 14 — 12 / 20

西大立目祥子

ライター



12月14日 [月]

天気 | 曇り

場所 | 仙台

夜半から突然、雨音が強くなり、たたきつけるような音に眠れなくなった。やがて雨音は弱く静かになり、寝床の中でもしや雪に変わったのでは、と思った。予報ではこの冬一番の寒波がくるといっていたから。明け方近くになっても眠れなくて、これは寒いからだと思い立ち、押入れから厚めの毛布を出してかけた。そのうちいつのまにか寝落ちした。

朝、カーテンを開けると雪は積もっていなかった。10時、取材の仕事で初対面のSさんのマンションを訪ねる。2年前に亡くなられた奥さんK子さんの話を聞くためだ。K子さんは生涯を通して小説を書き続けた人で、昭和の終わりには芥川賞候補作家にもなった。Sさんによると、東日本大震災の被災者の聞き書きをまとめていて、「やっと終わった。今日の夕飯は私がつくるから」と話した直後、目の前で倒れたのだそう。意識が戻ることはなかった。

2020/12/14 — 12/20

話を聞きながら、やっぱり震災の話というのは、聞く側にも相当なストレスを強い
るもののだと思い至る。黒い水が壁のように……腰までぐんぐん水がきて……
逃げる途中離れ離れになって……話を聞く中、そういう恐ろしい細部が胸に入り
込んできてこちらまで溺れそうになる。私も震災直後からずいぶんと話に向き合っ
た。使命感のようなものにつき動かされていたのだと思う。そして震災から6年が
たったころ体調を崩してしまった。K子さんも無理に無理を重ねて、多くの被災者
のことばを受け止めたのではないのだろうか。そしてそのことばを一人でも多くの
人に届けようと、パソコンに向かっていたのだろう。根を詰めて、浅い呼吸で。同
じ仙台にいながら会えないで終わったけれど、残された小説を読もうかなと思う。

その足で、せんだいメディアテークで開催中の「新現美術協会70年展」を見に
行く。この会は宮城県下では美術関係者なら誰もが知る抽象画の美術家グルー
プだ。この一年、宮城県美術館の現地存続活動をいっしょに行ってきた早坂貞
彦先生は、この会の重鎮である。たまたま先生も会場にいらして、その案内で作
品をみるという幸運にめぐりあわせた。先生の作品は2点。どちらも200号に及
ぶような大作だ。「先生はどっちが好きなんですか?」と聞くと、「それはこっちが
聞きたいよ」といわれ、「右側」と答えると、「うん、なるほどな」とうなづいて
いる。
それにしても、会場をめぐる好きな作品とそうでもない作品がある。どうしてな
んだらう。

12月15日 [火]

天気 | 雪
場所 | 仙台

西大立昌祥子 [ライター]

2020/12/14 — 12/20

毎週月曜の夕方、母が3泊のお泊り付きデイサービスから帰ってくる。月曜は、
母のもとに泊まり、翌火曜は一日いっしょにいる。
街中に借りていた仕事を引き払って、実家の一部屋に仕事場を移したのは母に
認知症の症状が現れたからなのだが、症状が進むにつれて介護の比重が増し、
仕事場でありながら集中して仕事をするような環境ではなくなってきた。私の毎日
は、母のスケジュールに合わせて回っている。
前日は午前1時半過ぎに寝た。ソファに布団を敷いて横になったもののまたして
もなかなか寝つけない。3時、3時半……4時近くになると、ポストがガタガタ
鳴って朝刊が配達される。ああ、朝になってしまったと思うころ、ようやく意識が
とぎれる。

それでも朝7時半には起きた。というのも、前日から植木屋さんが庭木の剪定に
入っているから。カーテンを開けたら、庭木は白く雪をかぶり、1〜2センチメー
トルの積雪。これで仕事になるのだろうか。大丈夫、とやってきたKさんは息子
さんと二人、黙々と枝を切り落とし、まとめてトラックに積み込み、落ち葉をか
き集めている。

10時半に母のお弁当が届く。配達は、いつものとても感じのいい若い人。明る
くてにこやかな笑顔にどれだけ救われることか。30秒にも満たないような二言三
言の会話だけれど、くぐもっていた気持ちに日差しがさしこむようだ。
11時半にはヘルパーのAさんがやってくる。細くて小柄なのに元気で、小雪の中、
「今日も自転車なの」といいながら手指の消毒をすませて入ってくる。Aさんは介
護者の私の体調まで気づかってくれる人で、やっぱり5分、10分の会話に助けら
れている。夕方4時には、また別のヘルパーのOさん。てきぱきと用事を片付け、
具体的な介護のアドバイス。これまた私にとっては大いなる手助け。いつもあり

がとうね。

夕方4時過ぎ、植木屋さん親子が引き上げていった。モミジの木の上の方にあったという鳥の巣をとっておいてくれた。枝と枝の間に、落ちないように実に注意深く架けられた小さな鳥の巣に見入る。この庭から飛び立った小鳥がいたかと思うとなんだかうれしい。自然の美しい造形物を、そっと玄関の下駄箱の上に飾る。

12月16日 [水]

天気 | 曇り時々晴れ

場所 | 仙台

火曜の夜も、心配で母のもとに泊まり。さすがに2晩続けて寝不足なので、ソファに敷いた布団にもぐりこんだたん、寝入ってしまった。
7時半に起きると、また少し雪が積もったようだ。母の寝室をのぞくとまだ眠っている。8時に起こして着替えと洗面につきあい、お茶を入れ簡単なごはんを食べさせる。そうこうするうち、植木屋さん親子が到着。9時前にデイサービスの車がきて、母を送り出す。ゴミ出し。

せん
剪定作業はお昼までに終わるというので、お礼に手渡すコーヒーを買いに出る。近くのショッピングモールに行くと、かなりの人が店が開くのを待っていた。コーヒーを飲みながら、ぼんやりと朝から買い物に出る人の姿を眺める。年寄りが多い。きっと朝5時、6時には起きて、早々と出てくるんだろうな。90歳になる叔母が、一人暮らしをしていると無性に人の姿を見たくなることがあるの、といていたことを思い起こす。誰かと話したり、街の空気を吸ったりすることが人には必要なんだろう。

西大立目祥子 [ライター]

近くの焙煎屋で少しいいコーヒーを買って戻ると、もう植木屋さん親子は引き上げたあとだった。もちろんあとから請求書がきてお金は振り込むのだけれど、気持ちをとくして何か渡すのは楽しい。形骸化していない贈りもの、というのか。毎年、剪定の初日に母に花束を持ってきてくれるし、お歳暮においしいラ・フランスを届けてくれる。一年に一度しか会わないけれど、元気でいてほしいと思う親子だ。

いったん自宅へ戻り、植木屋さんあての荷物と東京の知人へのクリスマスカードを出すために郵便局に行く。その合間に、メールの返信を書き日記を記す。
夜7時半、再び仕事場へ。猫が2匹、晩ごはんを待っているのだ。夕食をつくり食べ、合間に仕事をする。

12月17日 [木]

天気 | 雪

場所 | 仙台

朝、カーテンを開けてびっくり。かなりの積雪で、雪はこんこんと降り続けている。12月にこれだけの積雪は、仙台ではめずらしい。
10時半に宮城県美術館で取材に応じる約束があった。この一年、宮城県美術館の現地存続活動を仕事も生活もそっちのけでやってきていて、長く自分が取材する側だったのに、にわかにされる側になった。11月16日に、県民の反対の声に押されてか、知事は移転案を撤回。このことはお隣の県でも話題になったらしく、岩手から新聞社の人がわざわざ話を聞きにくるという。よりによって、こんな大雪の日。

2020/12/14 — 12/20

記者さんは40歳くらいの静かな感じの男性だった。美術館のカフェで、2時間半もしゃべる。いま、全国の自治体は、人口減少と財源不足の中、だぶつく施設の整理統合を推し進めている。それを後押ししているのが総務省で、自治体が事業を進めやすくするために、地方債を用意している。宮城県が、にわかに県立の美術館の移転集約の方針を出したのも、この地方債をあてにしていることだ。岩手にも、いつ同じことが起きるかわからない。そんな危機感をもった取材だった。今回の宮城県美術館の活動では、地元紙の河北新報社にずいぶんと助けられた。昨年、秋田の秋田魁新報社の記者が、イージス・アショアの設置計画をめぐって防衛省のデータに問題があることを、現場に立ち小さな分度器で計画施設の角度を測るという取材ですば抜いた。そのことを話すと、「その記者さん、我社にもきてもらって話を聞いたんです」という。地方紙こそ、生活の現場から地域の問題を考えていくための砦であると思う。そうエールを送って別れた。

2時に車の定期点検でディーラーに行く。1時間半、待っている間にメールをチェックし、月曜の取材ノートを整理する。貴重な仕事の時間だ。夕方5時半、母がデイサービスから帰ってきた。お茶とおやつを出し、洗濯機を回し、夕飯の支度をして食べさせて寝かせ、明日からまた出かけるデイの荷物を用意すると、もう9時半。へたってもう休みたいと思いながら、引き受けた街歩きのための資料をつくる。飼い猫のチビが、ときどきにゃ〜んと甘えにくる。1時ごろまでかかって終了。ソファに敷いた布団に潜り込むが、またしても眠れず。目を閉じていると、無意識の世界というのか、30年も前にあってそのあと一度も会ったことのない人の姿が浮かんできたりした。

西大立昌祥子〔ライター〕

2020/12/14 ― 12/20

12月18日〔金〕

天気 | 曇りときどき晴れ

場所 | 仙台

母を3日間のデイサービスに送り出す。ここから月曜夕方までが、私の自由になる貴重な時間だ。窓辺にパソコンを広げ、日記を記す。庭に鳥がくる。野良猫が足早にすぎる。雪は気温が低いせいか、溶けない。かれらもかわいそうだなあ。ごはんが見つからないだろう。

2時に、仙台市南部にある市民センターに打ち合わせに行く。江戸時代、仙台藩に初めてサツマイモを導入したという川村幸八なる人物の絵本をつくる企画。乏しい予算でなんとかやりくりしようと担当者が奔走している。打ち合わせは3時間近くにもなった。

夜7時から、「宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク」のミーティング。この一年は、仕事も生活も後回し状態で活動に集中してきた。7月21日に、それまで県に対し集約移転案の撤回を求めている団体が連携しこの会をつくった。毎週金曜の夜にミーティングを重ねてきて今日は19回目。よく休むことなくやってきたものだ。11月中旬までは、集まるメンバーの顔には、もうだめかもしれない、あとはどんな手があるのかという切迫感が浮かんでいたけれど、11月16日に、移転案が撤回されてからミーティングは少し和んで、みんなの表情もやわらかい。「会う人会う人、ありがとうっていわれるよ」「あなたたちいてくれてよかった、と今日も事務局に電話がきた」。披露される話に、世の中捨てたもんじゃないね、という思いが深まる。

この会のメンバーは私の生涯の財産になるだろう。30年ぶりに再会したかつての

同僚、高校生のころに名前を知った絵描きさん、たまに街で出会って立ち話をするくらいの関係だった知人、そしてこれまで知ることのなかった哲学の先生……30代から80代まで、10数人がお互いを尊重しながら、同じ思いでつながり、できるだけのことをやり、突っ走ってきた。

帰り道、同じ方向に歩き出した6人が、コロナの怖さを感じつつふらっと店に入りお疲れさん！ と乾杯。カクテルを一杯ずつ飲んで別れた。

12月19日〔土〕

天気 | くもり

場所 | 仙台

睡眠不足と前日の久しぶりのお酒のせい、疲れておきられない。エンジンがかり始めたのは11時ごろ。お昼過ぎてから、友人たちに、前日東京から届いたパテ屋のパテを届けに行く。

パテ屋のオーナー、林のり子さんとつきあいが始まったのはかれこれ30年近く前。宮城県気仙沼市唐桑町というところで、世界の家庭料理をつくる講座の講師をお願いしたのがきっかけだった。東北を極相林である「ブナ帯」ということばで捉え直して、世界中をこの言葉で串刺しにしてみると、あら不思議、植生が同じところは食文化にも共通のものがあるというのが、林理論。そんな視点を据えて、世界中の料理をつくる講座はおもしろかったし、何より基層文化に想像をめぐらす勉強にもなった。

私にとって林さんは、先生であり、人生の先輩であり、友人であり、そしておいしいパテの製造者でもあるのだ。毎年毎年、年末に送ってもらう、レバーパテ、スモークしたカキとほうれん草のパテ、ひよこ豆のペースト、鰯とジャガイモのパテ

西大立目祥子〔ライター〕

2020/12/14——12/20

は、私にとって年末年始の特別の味である。親しい友人たちにも声がけして、私宛に届いたダンボールを開け、おまけにつけてくれるパンを分け、配達にまわるのは年末の恒例行事。

同じマンションに住む友人OとSに届けたら、上がってお茶を飲んでいってといわれ遠慮なく上がると、お茶というのはお抹茶のことだった。織部色の豆のお菓子、これまで味わったことのないようなコクのある豆の味。おいしい。3人で、介護の話から歳をとって忘れっぽくなってきたことまで、たわいのない話で盛り上がる。

2時からスタートする宮城県美術館主催の講座に申し込んでいたのに、1時間も遅刻して到着。「scape “景”をめぐって」という講座の最終回に潜り込む。まち歩きをし、歴史的建造物の保存活動をする中で、「風景」のとらえ方に興味を抱いてきた。4回目の今日は、写真論。いまいち入り込めないままに終了。会場には美術館の活動をいっしょにやった友人が3人もきていた。昨晚、別れたばかりというのに。なんだか笑ってしまう。家が同じ方向のSに、送るよと声をかけいっしょに帰る。じゃあね、また明日ね。

12月20日〔日〕

天気 | 晴れ

場所 | 仙台

10時に「県美応援団」の集まり。7月に、「宮城県美術館の現地存続を求める現地存続を求める県民ネットワーク」をつくって会員を募集すると、8月のお盆を過ぎるあたりから500人、800人と会員が増え始めた。ただ申し込みをするだけ

でなく、申し込みのハガキやウェブサイトのメッセージ欄に「何でもお手伝いします」とか「人手がないときは連絡ください」などと書き込んでくる人がずいぶんいる。「みんな手伝いたいんだよ、何かやってもらおうよ」と事務局を預かるTが提案し、「県美応援団」を組織することにした。

10月に第1回の集まりを開いたら40人以上が集まってびっくり。自己紹介をしてもらうと、誰もが県美への思いを熱く語る。そこで、発送業務など事務局がこなさきれない作業を手伝ってもらうことにした。

今日は、移転案撤回後初めての集まりで、みんな安堵の表情。和やかに作業は進んだ。12時で終了予定だったのだけれど、なかなか終わらない。「時間延長して、作業終わるまでやろう」と誰かが言い出して1時まで頑張った。こんなふうに、県美の活動では誰もが積極的に事を進めようとする。誰の胸にも、美術館のためならがんばるぞ、という気持ちがみなぎっている。

つくづく愛されている美術館なのだと思う。こういう気持ちをまったく推し量れず、経済性だけで事を進めようとした県当局の何というズレ。

アクシデントがあった。前日いっしょに帰ったSが椅子の上から転倒して、手首を打撲。あとで連絡がきて、右手首骨折と知らされる。

夜、翌日の講話のための準備。3年ほど前から視覚障害者の人たちのまち歩きのガイドをしている。白杖を持ち、ヘルパーさんに助けられての散歩なのだけれど、みんなすごく熱心で前向きで明るくて、私は勝手に描いていた障害者像を打ち碎かれる経験をした。冬は寒いので、座学で仙台を案内している。

今回のテーマは「仙台のおんちゃん、天江富弥」。天江は大正10年に日本で最初の童謡専門誌『おてんとさん』を創刊し、昭和3年に日本で最初のこけしの本『こけし^{ほうこ}遺子の話』を発刊した人物。居酒屋「炉ばた」の主人として炉の前に座って客との会話を楽しみ、終生仙台弁で押し通した。夜中まで準備しながら、こ

んな人が仙台にいたんだなあ、と感慨に打たれる。そうこうするうちまた午前3時近く。眠い。もう限界。

西大立目祥子 [ライター]

宮城県仙台市生まれ。県内を中心に、住民による冊子づくり、地域資源活用による地域づくりにかかわってきた。東日本大震災直後に仙台市市民文化事業団が企画した「RE:プロジェクト」に参加し、2011年から約5年間仙台市内の被災地を取材、エッセイを執筆。2006年、歴史的建造物の保存活動を行う「まち遺産ネット仙台」を立ち上げ。2020年7月、宮城県が示した宮城県美術館の集約移転案に対し「宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク」を設立し、11月に移転撤回を実現した。現在、共同代表。著書に『仙台とおき散歩道』(無明舎出版)、『仙台まち歩き』(河北新報出版センター)など。

2020 / 12 / 21——12 / 27

手塚夏子

ダンサー／振付家



12月21日〔月〕

天気 | 快晴

場所 | ベルリン

ここベルリンでは現在、ロックダウンが施行され、レストランや食品店以外の大体の店が閉店し、人と会う機会も大幅に規制されている。マスクがきらいなヨーロッパの人々も、徐々にマスクをしなければならないシチュエーションが多くなってきている。この街に最初に来た2年半前には、ベルリンの人々のゆるい雰囲気随分助けられた。気軽に声をかけたり微笑みあったり、ドアを誰かのために開けたり、ドアが閉まりそうときに電車に乗ると協力しあってドアを開けておいてくれたり……。そういった空気感が否応なく減っていき、今では他人に対して無関心な雰囲気の方が多くなってしまった。その原因となっているのはやっぱりマスクも大きいかもしれない。なぜなら、マスクをしていると相手の表情が読み取れない。微笑んだとしてもそれが伝わらない。だから諦めて、無関心になってしまふ。とはいえ、最初にロックダウンが始まったときのショックから比べれば、だいぶ状況に慣れてしまった。

手塚夏子〔ダンサー／振付家〕

この日記を書くお話をいただいたとき、2011年3月11日の震災が私に与えた影響の大きさと、そこにどう向き合って良いかわからず、真正面から向き合ってこなかった自分の不甲斐なさや罪悪感が身に迫ってきた。だから、もう一度、自分の深部に潜ってささやかな向き合う時間を持ちたいと思った。

12月22日〔火〕

天気 | 曇り

場所 | ベルリン

ここ数日快晴の日が続いていたけれど、今日はどんよりした天気。昨日はトラムを使ってアレキサンダープラッツのアジアマーケットに行った。夕暮れの空に半月が綺麗に見えた。帰ってきてダイニングでご飯を食べながら見る朧月夜もなかなか良かった。

あの日、震災が起きた夜はものすごい星がきれいに見えたことを思い出す。それから数日後に起きた原発事故のあと、長い間、私は原発事故に対する恐怖に震えていた。と同時に、そういった時期に現地に足を運び、現地の人々に寄り添う支援や活動をしているたくさんの方々に対していつも罪悪感を持ち続けていた。自分や家族のことしか考えていない卑怯者にも思えた。一度そういう気持ちになると、だんだん向き合うことから遠ざかってしまう。遠ざかりつつも、原発の問題についてはいつも考え続けた。そして、玄海原発に近い糸島に住みながら、再稼働を止められない無力感にも苛まれた。それぞれに地域に住む人々の営み、人との関係、企業との関係、慣習、そういったものが絡み合っている。そして私はよそ者であり、私自身の感覚をそのままダイレクトに伝える関係を持つことは困難だと感じていた。ある地域の中での人との関わりを円滑にするには、「何か」に反対することがどれほど困難かを思い知った。

2020/12/21——12/27

また、考えの違いや感じ方の違いを、お互いに受け入れあうことが難しいのは、
今も変わらない。ベルリンの中でさえ、コロナ禍に対する人々の感じ方の違い、
意見の違いはそう簡単に乗り越えることができない。

12月23日 [水]

天気 | 曇り

場所 | ベルリン

昨日は友人宅にお呼ばれて、久しぶりに人と一緒に飲み、食べ、語り合った。
生の人との関わりは人にとって大きな恵みだと実感する。人としゃべることで自分
の内側のぐちゃぐちゃしたことが一度引き出されて、それをもう一回たたみ直すみ
たいな作業ができる。どうでもよいおしゃべりのなかから自分の記憶が引き出さ
れて、人との記憶と擦り合わせて、そこからまた現在を眺めてみるような作業が
生まれる。

明日はクリスマスイブで、明日の午後からスーパーが閉まってしまう。27日まで
ずっとお休みしてしまうので、今日はたくさん買いだめしなければならない。誰と
も会わないクリスマスだけれど、息子と料理作ったりケーキ作ったり、ダラダラし
たりするかな……。

12月24日 [木]

天気 | 曇り

場所 | ベルリン

クリスマスイブの朝、知人とのメールのやり取りから、私が抱えてきた思いのいろ
いろなことが明確になってくる。私が2011年の震災以来、ずっと持ち続けてき

手嶋夏子 [ダンサー／振付家]

2020/12/21 — 12/27

たひとつの感覚であり、今の状況の中でそれがよりくっきりと浮かび上がる。
たとえそれが不快でなくても、たとえそれが理にかなっているように見えても、社
会からの振り付けに従う振る舞いを続けることはとても苦痛だ。たとえば、「その
ような話題は避けるべきだ」とか「その考え方は極端だ」とか「あなたの振る舞
いが他のひとを犠牲にする」などなど、どこから聞こえて来る声を知らない間
に受信している。それを直接誰かに言われずとも、恥ずかしい、あるいは後ろ指
を指される、そういう恐怖感があって、自分の振る舞いのある制限下に置いてし
まう。そして、それが「正しいこと」であるという認識からそれを続ける人々の中
に潜在的な怒りが溜まっていく。それらの溜め込んだ怒りが、互いを、振り付け
に縛りつけ合うという悪循環が生まれる。それが日本の中で私が感じてきたひと
つの違和感。でも、ベルリンにきて、ヨーロッパの人々も同じような悪循環を持っ
ているように感じる。ただ、その方向性が違うだけで。そういったことの中でも、
私が自由を感じるのは、自分の身体をその振り付けから少しだけズラすことがで
きている瞬間だ。もちろん、それは長続きしない。ほんの一瞬のことだ。でもそ
の瞬間を持つこと、その方法を知っていることはとても大切なことだ。

12月25日 [金]

天気 | 曇り

場所 | ベルリン

今年は年明けからずっとコロナの騒ぎでベルリンもロックダウンになったり、解除
されていた時期でも劇場での上演の数はずいぶん少なくなったりしていたけれど、
私はとても幸運なことにベルリンでのダンスの活動を活発に行うことができた。
もっともロックダウンがきびしかった時期の終わり頃から、念願であった引越しの
ために奮闘していて、その間の心細さと無力感は半端なかった。というのも、

ベルリンの人口が多く、探せる物件の数は限られているので競争率がとても高いのだ。当然ドイツ語が流暢な人で、収入が安定している人から決まっていく。だから「自分の番はなかなか回ってこない」というのが感じられて、無力感が増してしまうのだ。けれども、心強い友人のおかげでなんとか部屋を決めることができ、しかも、仕事にも恵まれた。それはとてもありがたいことだ。けれども、決して得意とは言えない英語を使っのコミュニケーションで仕事をこなすのはそれなりに大変で、また作品創作のプレッシャーやコミュニケーションの難しさにも向き合わなければならない日々が多かったので、現在は腹の底から休みを欲する感じがしている。でも「休む」ということがどうやったら真に達成されるのかは、案外難しい問題だ。私の場合、かなり単純に眠る時間が必要だけれど、それと合わせてぼーっとする時間、根詰めて考えない時間が必要だと感じている。だらだらとした時間を過ごしたあとに、急になんらかのモチベーションが湧き上がるという経験は過去にもたくさんしてきた。だから、ここは本気でだらだらしようと思う。

12月26日〔土〕

天気 | 曇り時々雪

場所 | ベルリン

パソコンというのは、SNSなどを眺めていてもそこから複雑な何かが浮かび上がらない。何かを探して見続けていても、結局自分がどうしたかったのかとどんどん分からなくなって、ただの依存症のような状態になってしまう。ここのところ、家でゴロゴロしていたけれど、結局パソコンに縛り付けられていたような気もして、思い切って散歩に出かける。とても寒い。寒くて手がかじかんだりすると、小さいときに寒かった日本での思い出の切れ端のようなものが蘇ってくる。横浜生まれ、横浜育ちだけれど、昔はもっと寒い思いをした瞬間がいっぱいあったような

手塚夏子〔ダンサー／振付家〕

2020/12/21——12/27

気がする。小さかったからそれがすごく大きく感じただけだろうか？ 一度外に出ると、小さなことひとつひとつが複雑な記憶を呼び起こしたりもする。小さな湖の湖畔に行って座りながらぼんやり湖面を見つめていると、心の中を少しでも深く探索できるような気がする。道行く人は、この寒い中、ベンチに座っている私を奇妙に思うのか、時々ちらっとみてはすぐに前を向いて歩いていく。ベルリンの人たちはもっとフレンドリーだったような気がするんだけど、ここでは何かしら目的のことをしたり目的の人と出会ったりするのみで、無目的な雰囲気があるかない。これは場所が原因なのかそれとも状況のせいなのか。しかし、ひとりだけ、自転車をゆっくりこぎながらすごい大きな声で鼻歌を歌って通り過ぎたおじさんがいて、その瞬間とても癒された。また、道を歩いていると黒い帽子に黒い服、靴下も靴も黒くて、アクティビストの人を連想した。よくよくみると、服に刺繍してある模様やなんかが、たしかにアクティビストを連想させるようなものだったので、そうなのかもしれない。そういえば、ベルリンで遭遇した、フォルクスビューネ劇場でアクションをしていた人々は今どうしているのだろう？

今、この状況下で大切なことは、「自分には感じる自由がある」と信じられるということだと思う。ある状況の中で、自分が感じている（と思っている）ことは、その場で「感じるべきこと」とされることが多い。そこから自由でいてもいいと、最後に許可するのは自分でしかない。

12月27日〔日〕

天気 | 曇り

場所 | ベルリン

今日はリレー日記の最終日。またしても散歩に出る。散歩に出ると、少しだけ意識的にゆっくり呼吸をしたり、寒さを味わったりできる。道はガランとしていてほ

とんど店はしまっているが、トルコ系の小さなお店はけっこう開けている。ケバブの店やトルコ料理（テイクアウトのみ）やパン屋さんなどなど。そのパン屋さんでカプチーノを買い、今日も湖に行った。

水際まで降りて、木の根っこに座ってカプチーノを飲む。思いつきでメガネを外してみる。遠くないところで男の人が素っ裸になって湖にずんずん入っていったのには驚いた。1～2分くらい水に浸かっているのなるだけ見ないように気配で感じていた。ベルリンでは裸で泳ぐ人が多いのは知っていたけど、こんなに寒い中に入るとは……まるで寒中水泳みたいだ。気を取り直して湖面を眺める。湖面の波紋がうすばんやり、でもはっきりとその模様が入れ替わり立ち替わり波立っているのがくっきり感じられる。とても静かでなんとなく神聖な気持ちになる。遠くの木々が風で揺れている。自分の背後で枯葉がかさかさ揺れながら地面を這う音がする。自分の感覚を研ぎ澄ませれば、そこにはたくさんの情報があって、そこからいろいろなことが思い出されたり考えさせられたり豊かな時間になる。それがわかっていても、SNSで何かを情報らしきものを探し続けてしまう自分のおろかさを思う。

私はこの日記の冒頭で書いたように自分を深くまで掘り下げることができたのだろうか？ 震災が起きたあの日、停電の中、ものすごく悪い予感で震えた。数日後にテレビで見た津波の大災害の映像は、深い痛みとして私の胸に刻まれている。またその後の日々、私は「放射能」に対して怯えていたと思う。そしてそれを人と共有することはとても難しかった。今は、多くの人が「コロナウイルス」に怯えている。しかし、私はその恐怖をあまり理解できずにいる。恐怖の感覚は本当に個々で違う。横浜生まれ横浜育ちの私が、終の住処と思っていた藤野から断腸の思いで去ったあと、いろいろな地域に住んで自分の知らなかった様々な地域の慣習や、それぞれの地域にとってのトラウマとなった災害、公害や、議論を引き起こす様々な課題を見た。それらは自分の中に大小様々な問いを与え、創作活動

をしながら、ずっと考え続けている。これからも何度も、立ち戻って自分の深部に潜ってみようと思う。

手塚夏子 [ダンサー／振付家]

横浜生まれ。2001年より自身の体を観察する『私の解剖実験シリーズ』始動。同年、私的な実験の小さな成果が「私の解剖実験-2」に結晶。同作品はトヨタコレオグラフィアワードファイナリストとして同年7月に上演。2011年、STスポットと共に民俗芸能調査クラブを立ち上げ、様々なアーティストと共に2016年まで取り組んだ。同年12月～2013年2月に『私の解剖実験-6～虚像からの旅立ち～』を福岡、横浜、神戸で上演。2013年、関東から福岡県へ活動拠点を移行。2016年5月アジアアンサーシアター（韓国／光州）企画 Our Masters「土方巽」にて『15年の実験履歴～名刺がわりに～』韓国語バージョンを上演。2016年から、スリランカの Venuri Perera と韓国の Suh YeongRan とともに、アジアにとって西洋近代化とは何だったのか？ という問いに向き合うため、Floating Bottle Project を開始し。2018年4月からベルリンでのダンス活動を開始。同10月に Kyoto Experiment において Floating Bottle Project「点にダイブする」を上演。

2020 / 12 / 28 ————— 1 / 3

森 司

アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長



12月28日[月]

天気 | 晴れ

場所 | 東京・中野

体温：36.5度。一日の活動を始める前、起きがけの水を飲みながら体温を計る。現場に入る2週間前からと、その後の経過観察のための2週間の計測。11月の現場のために始めた検温が新しい日課となった。お店や文化施設、日頃通うジムにも非接触の検温装置があり、日に幾度も体温測定される。マスクと検温のニューノーマル元年の店じまい。

コロナ禍にあって12月26日から1月4日までの10日間の休暇に突入して3日目。コロナ感染者数が上積みされて発表される日が続く。飲食店の営業時間が22時までと制限される中、2021年1月11日までの事業は調整済みだ。

年末年始のステイホームは例年のことで、自分には特段の違和感はない。電車に乗るような遠距離移動もしない。帰省の往復を唯一の移動とする過ごし方でこの年まで来た。今年は事情が異なる。スタッフの何人かは今年は帰れない／帰らないと口にする。自分の意志ではなく、外からの要請や制限で、行動変容を余儀

森 司 [アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長]

なくされた。とにもかかわらず2020年はコロナ対応の一年だった。

12月14日の5人以上での政治家のステーキ会食騒動以来、数人での食事会も憚られる。忘年会もクリスマス会の予定もない。ラストオーダーの時間を過ぎた残業後の一杯もできない12月だった。しかし、昨日はZoom飲み会を企画してもらい、都内のレンタルキッチンにいた。そこをスタジオに遠隔地の友とつながる楽しい時間を過ごさせてもらった。

そんなこともあり今日は、9時頃に目を覚まし、その後も予定がないことを良いことにグタグタし続ける。スローモーションのような「休みの日10分の1モード」の動きで遅い昼飯の準備をして食べる。気になっていた水回りの掃除に着手した時点で、すっかり夕暮れ。明日からジムも年末年始休暇なので泳ぎ納めに行く。ファーストフードを抱えて持ち帰り、冷蔵庫の缶ビールを片手にNetflixの続きを観る。

こんな感じの「完全 OFF 日記」になるのは目に見えている自分に、日記を担当する編集者から、企画意図も含めて「しっかりー!」とリマインドメールが届いていた。わかっているけど、期待に添えないと思う。何もしない、何も考えないのが「休み」として過ごすことなのだから。

12月29日[火]

天気 | 晴れ

場所 | 東京・中野→茨城・土浦

体温：35.8度。今日は昼過ぎには土浦に戻っていないといけない用事があり、朝から時間に追われながら大掃除の続きをし、新年を迎える準備をする。移動日によくあるバタバタした準備。最寄り駅に向かう途中にあるクリーニング店が

2020/12/28 ————— 2021/1/3

明日閉まる。ハンガーバーが露出していた。土浦に着いて夕方の用事を済ませる。この先はこれといった予定はない。しばらくは、手帳を開くことも時間を気にすることもない。

夕食後、ザッピングしながらテレビを見ていたら、標高4,000mを超える集落に住む「ヒマラヤ部族」の生活に密着する番組に遭遇した。ネパール・ドルポ地方のアジア最後の秘境と呼ばれる「天空に佇む12の村」を巡る150日間の密着取材のドキュメント番組。高度5,000mの地を10時間ほど歩き移動する。12の集落にはそれぞれ特徴があり、厳しい自然の中で生活をする様子が紹介される。電気のない天空の世界は、別世界だった。

我々は「電気」がなければ回らない社会に生きている。原子力発電は、工場への電供給を含めた、経済を回すために必要なモノと説明されてきた。しかし、福島

の地では、原発事故から10年を経た今でも立ち入り禁止区域のまま手つかずの状態だ。地球温暖化という環境問題は、大雨、大雪、といった異常気象といわれる天候不順をもたらしている。考えるべきことは多い。心を痛めることも多い。「天空の風景」が広がる酸素の薄い高地でゆっくりと歩を運ぶかれらは、遠くの目的地に辿り着いていた。地上の我々は、歩いて行く方向を定められないでいるのかもしれない。目的地が定まらない状況が一番やっかいなことだ。

12月30日[水]

天気 | 曇り
場所 | 茨城・土浦

体温：35.0度。60歳になった。「還暦」の2文字が重い。先輩諸氏の還暦のお祝いパーティーに出ては、次は自分だと思ってきた。しかしいざその日になると抗う気持ちが芽生え、不思議なくらい落ちつかない。まだまだこれからと自認し

ていても「還暦」のレッテルを貼られ、いろいろと社会的に念押しされてしまうような感覚だ。ジムの年会費が誕生日を過ぎると2万円ほど安くなるから年明けの更新で、と説明を受けた。高齢者特典が財布に優しいのは嬉しい。

幸いなことに大病することなく過ごしてこられたが、ところどころに現れる体の変調がいちいち気になるようになってきた。若い頃に根拠のない自信だけで走っていた自分が懐かしくも恥ずかしい。誕生日のメッセージに混じって、「還暦」に対するお祝いの言葉も受け取る。内容はその恥ずかしい時代の回顧を含むモノだが、エールとして読ませていただいた。感謝の一言に尽きる。「夜は起きているもの」と思っていた自分も、「夜は寝るもの」とばかりにそそくさと床に入る。ずーっと寝ているのにも体力が必要で、明け方の暗い時間に目を覚ます。そんな平和な悩みしかないことにして今日も一日を終える。

12月31日[木]

天気 | 晴れ
場所 | 茨城・土浦

体温：36.2度。都内のコロナ感染者数は1,337人と発表された。ついに1,000人を超えた。初詣どころじゃないな。ステイホーム続行だ。遅めのランチのような朝ご飯を食べ、ふわっとしていたら夕刻。寒さで空が澄み渡り、富士山がきれいに見えた。ほどなくしてNHK紅白歌合戦の時間。無観客の紅白は恒例の応援合戦もない。久しぶりに楽しんで最後まで見続けた。

「コロナ紅白、白組最後、福山の『家族になろうよ』はないわー。家族像狭すぎやろ!」と速攻のツッコミは、アール・ブリュット展「まなざすかざく」のディレクターをしているアサダワタル氏の書き込み。異性愛を前提としたステレオタイプな家族像の再生産に対する警鐘に脱帽しつつ、そのことについて思いを巡らせてい

たら「ゆく年くる年」が始まっていた。

2020年はコロナに翻弄された。3月に開催を予定していた2019年度末の総括的な事業も軒並み中止、2020年度前半の事業も延期を余儀なくされた。4月はリモート対応を急ぎ、常時使える配信スタジオの準備を行った。秋には、延期した事業が最終的に中止となり、できたこともできなかったことも多々ある。

しかし、そのような具体的な対応より自分にとって大変だったのは、2020年の予定が2021年に先送りになっただけでなく、2020年の事業が終わった前提で準備を始める2021年以降の取り組みも同時に取りかかる状況だった。時間が交錯する状況は新しい年も大きくは変わらないだろう。2021年に開催予定の「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会」が終わるまでは続く。オリンピックというアクセルとコロナというブレーキ。経済を回すために推進されたGo Toトラベルが一時中止となり、医療崩壊を防ぐために、拡散防止処置としてお店の営業時間に制限が掛けられた状態で新年を迎える。香港では周庭が、重罪人が送られる大欖女子懲教所に移送されたと伝えられ、アメリカでは大統領の選挙結果と政権移行に絡むゴタゴタが日本のニュースとなっている。幸せ感とはほど遠い2020年が終わる。

1月1日 [金]

天気 | 晴れ
場所 | 茨城・土浦

体温：36.0度。遅めの起床。遅めの朝ご飯を済ませ、静かに過ごす。初詣の予定もない。何時までに何かをするという予定がない。今日に限らず、一週間が真っ白な手帳の頁を開くことなく過ごしてきた。それも今日を入れてあと3日。休

みの時間も残り少ない。

昨日に続き、夕焼けが美しく、澄んだ空の遠くに富士山が見えた。あえてこの日の出来事として特記するとしたら、Disney+で『アラジンと魔法のランプ』を見たこと。ファンタジーの世界ながら、そこにある世界観は古くない。ありがたいことに、何ごともなく2021年の初日を過ごす。

1月2日 [土]

天気 | 晴れ
場所 | 茨城・土浦

体温：35.2度。一年の計どころか、一日の計を立てることもなくゆっくり起き出し、今日も普通の休みの日のごとく漫然と過ごす。夜になり『逃げるは恥だが役に立つ ガンバレ人類！ 新春スペシャル!!』をガン見する。あまりにも社会課題に対する啓蒙感の強い構成に驚く。2021年を生き延びるには、これくらいのルール、新しいマナーを知ってないといけないう的なセリフ(ぼやき)満載。「塩対応」は初耳ワード。なにかと「神対応」をもとめられる昨今だが、その逆に位置する言葉なのかなと、テレビをみながら検索。確かに「塩対応」はしょっぱい、つまりそっけない態度をとることとある。ひとり突っ込みをしながら、社会のルール改定啓発キャンペンドラマを見終える。

コロナによる行動変容だけではなく、社会そのものの価値観の更新が同時になされつつある。「神対応」と「塩対応」の境目はどこにあるのだろうか。技術云々ではなく、事象に対する向き合い方がさまざまな局面で問われる時代になると思いつつ就寝。

森 司 [アーソウカウンセラー東京 事業推進室 事業調整課長]

2020/12/28 — 2021/1/3

1月3日〔日〕

天気 | 晴れ

場所 | 茨城・土浦→東京・中野

体温：35.1度。午前中は、休暇中らしいのんびりした行動。お昼を済ませ、父や叔母が眠る浅草のお寺に行く準備をし始める段になって、時計の時間が戻ってくる。「あの時間の電車に乗る」という、ちょっと先を意識した行動。「スケジュール」が戻る。午後遅めの新年のお墓参りを終え、軽く食事をした後、自分は東京の部屋に戻る。

荷を置き、コーヒーを煎れつつ、手帳を捲る。数頁捲ると2月、さすがにまだ予定が書き込まれていない。書き込まれた予定を見ながら1月中の流れをイメージする。ついさきほどまで身を置いていた年末年始の時間は霧散し、2021年を働く時間の人となった。年末年始からニュースが伝えていた、コロナ感染拡大による、緊急事態宣言の発出要請にまつわる社会の動きが、急に自分事として意識される。とはいえ、できることと言えば、意識しつつ待つことしかない。2020年はコロナ元年だった。2021年は、コロナとの「出会い直し」から始まることを強く意識した。

2013年の1月26日、せんだいメディアテークで「なんのためのアート」を開催した。そもそも芸術文化にはどのような必要性や意義があるのか、集まった者同士で考え合う4時間半。雪が降る日だった。クロストークに登壇した写真家／著述家の港千尋さんが、「震災前」という言葉を発したことを鮮明に記憶している。東日本大震災から2年しか経っていない、復旧・復興期の感覚の方が強かったからだ。しかし、その言葉はトークセッションのための言葉ではなく、事象に対する認識を表現したものであると考えるのが正しいようだ。

2011年からの10年間に、数多くの自然災害を経験し、常に「震災前」「災害前」

という意識が生まれた。現在もパンデミックの真っ只中にあり、コロナ感染者数増加の流れは収まっていない。仕事にかかわる具体的な対応は、またしばらくは走りながら考えることになる。先行き不透明ななか、文化事業における「新しい様式」を本気で開発できるかが勝負になることは確かだ。

森 司〔アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長〕

1960年愛知県生まれ。2009年より東京アートポイント計画の立ち上げからかわり、ディレクターとしてNPO等と協働したアートプロジェクトの企画運営、人材育成プログラムを手がける。2010年よりTokyo Art Research Labディレクター、2011年よりArt Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業）ディレクター、2015年よりTURNプロジェクトディレクターなどオリンピック・パラリンピックの文化プログラムの展開に向けた東京都の文化事業のディレクターを兼務。2021年からは「クリエイティブ・ウェル・プロジェクト」ディレクターとして、公益財団法人東京都歴史文化財団の文化施設間を横断する新プロジェクトも担当している。

森 司〔アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長〕

2020/12/28 — 2021/1/3

新型コロナウイルス
新規感染者数
(2021年1月1日現在)

国内: 3,106人
東京都: 793人

- 6日 - アメリカ、トランプ氏支持者たちによる
アメリカ連邦議会議事堂襲撃事件が発生
- 香港警察、民主派50人超を国安法違反容疑で逮捕
- 7日 - 政府、首都圏1都3県を対象に1月8日から
2月7日まで緊急事態宣言を発出
- 14日 - 政府、緊急事態宣言に7府県を追加
- 17日 - 阪神・淡路大震災から26年
- 22日 - 国際連合、核兵器禁止条約を発効
(51か国・地域以上が批准)

モリテツヤ

汽水空港 店主



1月4日 [月]

天気 | 晴れ

場所 | 鳥取県湯梨浜町 (自宅&店)

2021/1/4 — 1/10

春はあげばよ。冬は朝風呂。

極寒の鳥取の中でも最も寒いと思われる我が自邸。暖かい場所は布団の中か風呂のみ。目覚めてからお湯を張り、サンシャインの降り注ぐ午前の時間にゆっくりと湯船に浸かる。良い気持ちだ。

世間は今日から仕事が始まるのだろうか。おれはこの数年、年末年始も店を開けている。テレビも10年以上前に手放した。『紅白歌合戦』や『ゆく年くる年』は直接見るものではなく、それを見ているどこかの家族の存在に思いを馳せるものとなった。おせち料理もそうだ。かつて自分も体験した親戚一同が会す時間、正月に味わう料理、そういった文化が異文化になりつつある。自分は今、どういう文化に所属してるのだろうか。湯気の中で考えた。ま、なんだっていいんだ。自分が本当だと思うことだけやればいい。ざばっ。

正午に家を出て、銀行で家賃の振り込みを済ます。ガソリンスタンドへ行き、一

週間分の灯油を買う。7日からまた大寒波がやってくる。雪はどれくらい積もるだろう。もう飽きたなあ、雪。

12時半に汽水空港へ着陸。おれは店の前にある公共駐車スペースの雪かきをする。山陰の冬にしては珍しい晴天。解けた雪は水を含み、キラキラ光る小さな氷一粒一粒の集合体になっている。スコップで掬っては池側へ放り投げる。シャリシャリと音が鳴る。そうか、シャーベットの「シャリシャリ」の由来は見た目ではなく音なんだな。

パートナーのアキナはこの時間、焼き芋を焼く。ガスで焼くタイプの石焼き芋マシーンは火の調整が出来るとはいえ、焼き加減がなかなか難しい。アキナはこの数ヶ月でプロフェッショナルな技術を獲得している。じつくと火を加えることでとっても柔らかくジューシーな焼き芋になる。「粘土のような焼き芋です」とお客さんに言ったら、なんか気持ち悪いと言われた。

13時オープン。14時頃まで誰も来ない。店内で庭文庫から出版された『こゑ』という詩集を読む。作者の石原弦さんは岐阜県で「アジア生活農場グローバル」という共同体を築いていたらしい。様々な国の人々と共に暮らしながら農に携わり、詩作に励む。石原さんの詩は肩肘張ってない感じがする。とても好きだ。

今朝、Twitterに「自分が変わる勇気を持って実践し、人と話し本を読み、全員で賢くなるしかない!」と風呂上がりに呟いた。ケイタタさんが『これは水です』という本に同じようなことが書いてあったよとメンションを飛ばしてくれた。デヴィッド・フォスター・ウォレスという人物が書いた本で、スティーブ・ジョブズを凌いで全米第1位に選ばれたスピーチらしい。そんな賢者と、おれが同じようなこと書いてるらしい。ぐふ!　ぐふふ、おれって!　おれってやっぱりおれだなあ!　おれという男は本当に時々賢者とおんなじことを言う!!　ああ、よかった。おれという人間はおれという人間で。

大阪からパン屋ファミリーが御着陸。今年から鳥取に移転するパン屋さん。去年から時々大阪から来ては店に立ち寄り、移転計画を話してくれていた。今日はいつもの夫婦だけじゃなく、先月生まれたばかりのベビーと、ご両親、ごきょうだいの方々総出で来てくれた。みんな自分の道を自分の心で判断し、自分の足でわっしわっしと愉快に歩いてきたであろう力強さがあった。今年からはすぐに会える距離だ。色々楽しいことがやれたらいいな。かれらは政治に対してもバシッとした意見を持っている。おれも今のままでいいはずがないといつも思っている。色んな話をして、共に賢くなりたい。

閉店後、大量にレンタルしていた『ゴールデンカムイ』を返却しに GEO へ行った。良い漫画だったな〜。元々は大阪のみんぱく(国立民族学博物館)へ行った時にアイヌコーナーで特集されていて気になっていたのだった。早く続きが読みたい。

GEO のそばに最近出来たラーメン屋があり、入ってみた。そのすぐあと、恐らく近所のスナックで働いているのであろうお姉さんが入店。店主と親しげに話をしていて。「うちげの部落は全然もう出れなかったけ」と先日の積雪について話をしていて。店内の雰囲気と鳥取弁がミックスされ、時代が様々に混ざりあったような気持ちがした。ドラマ『北の国から』の中にいるようだった。

帰り道、GEO の隣にあるカラオケからヤンキー風のお姉さんが一服しに外へ出てきた。佇まいに『幽遊白書』感があった。おれとあの人は同じ時代、同じ地域に暮らしている、恐らく同年代の人間同士だ。だけど全く異なる文化圏にいる。その不思議さを思う。そういえば吉高由里子のハイボールの CM は 2010 年代なのに 90 年代感があった。自分が当時に子どもだったから幸福な雰囲気を感じるのか、90 年代そのものがそういう時代だったのか。どうやったら確かめられるだろう。ともかく今、ハイボールが飲みたい。

スーパーへ寄りハイボールを買った。そしてさっき飲んだ。本当は今日、ずっと星

野源のことを考えていたのだが、ハイボール飲んでうゑーいな心の状態ではもう書くことができない。もう書けない。

1月5日〔火〕

天気 | 晴れ

場所 | 鳥取県湯梨浜町(自宅&店)

「夏が来れば思い出す 内山ハゲ 遠い空」と、中学校の同級生・村山くんはよく歌っていた。内山くんはハゲではなかった。布団に包まりながら、脳に蓄積された過去の記憶が意識へ染み出してくるのを眺めていた。今日はまずパクチーの収穫をしなければいけない。すぐ近くの美味しいインドカレー屋「夜長茶廊」と数ヶ月前からパクチーとカレーの交換を始めたのだ。こんなに嬉しい物々交換はない。

畑はまだ一面雪景色だ。獣の足跡しかない。トンネルとマルチをつけたパクチーの畝も雪に覆われている。アキナと二人、雪を掻き出しビニールを剥いだ。ペシャコンコになったパクチーたち。茶色い斑点ができている。一口齧る。うん、苦い。今シーズンのパクチーも終了だ。あばよ。美味しかったよ。ありがとう。

畑から戻り、自宅で板を切りブックスタンドをつくる。モノをつくっている時は大体何か考え事をしている。コロナの感染者数は日毎に増している。春に自粛要請があり、様々な団体、スペースがクラウドファンディングをしていたことを思う。おれは自粛要請と補償がセットでなければいけないと同時に、クラファンと政治への意見もセットであるべきだと思う。ブランディング上手だけが延命する陰で、目立たない店はどんどん潰れた。結局、あの時延命できたスペースも再び窮地に立っている。ジャパニーズが避け続けてきた政治への声の出し方を全員が個々に

モリタツヤ〔気水空巻店主〕

2021/1/4——1/10

獲得する時だ。そして政治とは何かについても全員で学び直すタイミングがきている。嘘、本当はとっくに来ていた。

昼飯を食べながら、日本海新聞の連載記事をTwitterでお知らせする。今回の記事は、おれが農学校でボランティアしながら田畑を学んでいた時の話。当時青年海外協力隊へ行き、その資金で本屋を開業しようと考えていた。ある日、学校のアフリカ人スタッフからこう言われた。「国際協力と言って経済的に富める国の人々が援助へ来るのは結構なことだ。だが、貧しい国、貧しい人からの収奪を基にしたこの経済システムに則って人々が生活する限り、本当には貧困が無くなることはない。もし君が本当に世界を良くしたいと思うなら、先進国と呼ばれる国に暮らす君自身が、君の生活を創造してくれ」と。そして協力隊へ行くのをやめた。国際協力と自分の暮らす国の在り方を問うこともセットであるべきだ。枝葉の事象に対応するだけではなく、経済の根本に立ち返る時代だ。混乱の時代だ。

13時オープン。今日も焼き芋を焼く。今のところあまり売上は良くない。今日の焼き芋の売上を見て、平日は芋の販売をやめるかどうかを決めることにした。お客さんはポツポツと来てくれた。しかし基本的に暇で、棚卸しをしながらの店番。焼き芋は大量に売れ残った。なんだかリアルワールドもインターネットワールドもみんな大変な感じだなあ。歴史の教科書とか童話に出てくる「暗く貧しい時代」の再来っつう感じよ。

1月6日〔水〕

天気 | 晴れ

場所 | 鳥取県湯梨浜町(自宅)

今日は定休日。起きてすぐ餅を食う。「のぎ屋」という同年代の農家夫婦がつくったお餅。美味い。

餅を食ってから、自宅の一室を執筆部屋に改造する為、工事を着工。12畳ある部屋の間に壁をつくり、4畳の小さな部屋をつくる。この日記もそうだし、去年から時々文章の仕事を依頼されるようになった。自宅の夏の暑さ、冬の寒さがとてつもなく、いつも近所のカフェで書いていたが珈琲代も嵩むし、ドトール的な放置プレイをしてくれるカフェも鳥取には少ない。これは自宅をドトールかのように快適にすることでしかモリテツヤは執筆することができないなとずっと思っていた。出版社の人から一冊本を書こうとも言われているが、ずっと書く書く詐欺で乗り切ってる。本当に申し訳ない。ちゃんと毎日書く為の部屋をつくろうと、ようやく重い腰をあげた。

2021年に入ってから、ずっと漠然とした不安感を感じている。これでいいんだっけ、これで大丈夫かな。いつもそわそわしてる。こんな時は手を動かすのが一番。何かをつくっている時、不安は消える。

まずは作業場で廃材ストックを物色。以前解体仕事の現場でもらった60センチメートル角が大量にあった。この釘をキレイにとって、壁の構造材とする。執筆部屋と広間とを繋ぐ扉も必要だ。確か汽水空港の大家さん家に余った襖があったことを思い出し、倉庫から頂く。次は窓。窓のストックもいくつかある。テキトーなモノを明かりの為に壁に打ち付けた。窓の下は板材。これも余ったものがある。

途中、近所のゲストハウス「たみ」へ。昨日売れ残った大量の焼き芋の行商。みんないっぱい買ってくれた。優しい。10年程前に出会ったかれらは当時20代だったのに今や40代手前になったね、と年齢の話になった。「シェアハウス」とか言って若者みたいな気分にいるつもりかもしれないけど、10代から見たら貧乏なおじさんとかおばさんが集まって暮らしてる家だというふうに見られてるかもね

モリテツヤ【汽水空港店主】

2021/1/4 — 1/10

と言って爆笑した。

帰宅し、日が暮れるまで作業を続けた。晩飯を食い終わり、YouTubeでずっとホリケンの動画を観た。最高のおじさんだな、ホリケン。

1月7日 [木]

天気 | 雪

場所 | 鳥取県湯梨浜町 (自宅)

悪夢をみつつ見た。そのうちのひとつは、尊敬する友人が建築現場の足場から落ちてしまうという内容だった。あとのふたつは忘れた。外は吹雪。今日からしばらく鳥取は大雪警報が出ている。店の収入はあまり見込みがないだろう。建築現場に出動するしかなくなるかな。

Twitterを開くとアメリカでトランプ支持者たちが議事堂へ押し入ったというニュースが流れていた。世界中で騒動が起きている。東京は自粛要請がかかっている。案の定、補償の話は今の所出ていない。日本に暮らす大多数はそれでも安倍や菅、自民党を「マトモ」だと認識しているのだろうか。鳥取は静かに雪に閉ざされ、貧困が迫っているような印象だ。

朝昼兼用のベーコンエッグ、ぬか漬け、味噌汁、納豆ご飯を食う。アキナをつくるぬか漬けが最近本当に美味しい。世の中がどうであろうと、ぬか漬けは変わらずある。ホリケンもずっとパラグライダーをする。

昨日の作業の続き。残ったエリアの壁をどのようにつくろうか、家と作業場をいったりきたりしながらイメージをつくる。壁用の板はTさんが以前大量にくれたものを使うことにした。必要な長さに切っては、端材を外の焼却炉にくべる。寒くなったら火にあたり、温まったら作業を再開する。まだ明るいうちに壁が仕上がり、

室内を掃除。お香を焚いてなんとなく良い部屋ができたと思う。大工道具が散らかりすぎたから、それぞれの道具箱にモノを適切に分類した。執筆部屋も出来たし、大工道具も整理できた。作業場もキレイに片付いた。自分の仕事をつくる準備ができた。文章を書いて、謎の民芸品をつくり、田畑と本屋をする。それらの総合的収入によっておれは生きていきたい。

夜、溜まったゴミを猛吹雪の中雄叫びをあげながら走って捨てにいった。息を切らし再び雄叫びをあげながら執筆部屋に逃げ込み、ヘンリー・D・ソローの『森の生活』を読む。今の日本の政治、国全体を覆う暗黒な性質は中心となっている世代の価値観によってつくられているとずっと思っていたけど、最近世代は関係ないのかもしれないと思い始めた。どんな世代にも自分と似たような価値観の人はいる。そしてどの世代でも大多数の人とはあんまり価値観が合わない。実際、ソローは19世紀の人間だが、驚く程考え方がおれだ。世代で人に期待したり失望したりするのはあんまり意味がない。年齢を問わず、自分も他人も価値観というのはいつでも変わり得ると思っていたほうが良い。若者がとか老人がとかじゃない。変わる勇気がある人間か、そうでない人間かってことだ。そんなことをソロー読みながら考えた。

1月8日〔金〕

天気 | 晴れ・極寒

場所 | 鳥取県湯梨浜町(自宅&店)

「もう十分生きたなあ。満足だ」と布団の中で思っていた。自分が生きてきた僅か34年間の歳月に、時代がふたつかみつつ変化してきたように感じる。もう十分に生きた。個人的な幸福はもう十分に得た。だからおれは、自分の命を「今よ

りマシだ」と思える世界の為に注いでいる。おれはそんな独自の信仰を今自分で編んでいる。誰かの為ではなく、なんらかの神の為でもなく、そうしたいと思う欲求がいつからか自分の心の中から湧いてきている。しかし、果たしてどんな世界の状態が「今よりマシ」な状態といえるのか。ここに永続的な学びが求められる。それでおれは様々な詩人、芸術家、哲学者、学者の言葉が記録された本を扱う店を運営している。そうすると、あらゆる場所から賢者が訪れてくれる。かれらと会話し、文字を読み、考える。考えたことを実践する。その繰り返しの中で、おれは人間として良くなっていきたい。世界もマシになったらいいと願う。自分の命や人生をそんなふうに捉えている。この道の上で起こるあらゆることを味わいたい。苦くてたまらない味も苦い顔して味わい、そして死にたい。

12時、汽水空港に着陸。休み前に「焼き芋の売れ行きが悪かったら、販売を土日だけにしよう」とアキナと話していた。売れ行きは悪かったが、なんとなくまだ粘って売ってみたほうが良い気がして、急遽焼いてみることにした。売れてくれよ、焼き芋ちゃん。

今日は、以前わざわざ手紙をくれた大学生がはるばる訪ねてきてくれるらしい。幸い雪はたいして積もらなかったが、鳥取で暮らし始めて最も寒い寒波がやってきた。交通機関は動いているのだろうか。心配だ。お客さんはポツポツと訪ねて来てくれて、焼き芋は通りがかりの現場作業員のようなおっちゃんが大量に買って来て無事に完売した。大学生も無事に着陸した。閉店後、Aさんの家を訪ねる。売れ残った焼き芋でスープをつくってくれた。さつまいもとミルク、シナモンだけでつくったスープはこれまでの人生の中でもトップクラスに美味しいと感じた。「売れ残った芋はこうしてスープにすればいいよ」と良いアイデアをくれた。そうする。スープを飲みながら、おれはこの数ヶ月誰にも言えずに抱え込んでいた心の闇を打ち明けた。

1月9日 [土]

天気 | 快晴

場所 | 鳥取県湯梨浜町 (自宅&店)

朝の4時に目覚めた。人を疎ましく思う気持ちは誰もが抱くもの。その気持ちを自分も持っているということを認められずにいた。昨夜Aさんに打ち明けた直後は「そんなことで悩むなんて良い子ちゃんかよ」と言われ、とてもスッキリした。そう、抱えた気持ちは仕方がないじゃないかと。だけど、今はそれを認めてしまうとあらゆることがなし崩しに倒れていくのではないかと不安になっている。興味がなくとも、好きではなくとも、応援することができなくとも、人として尊重するという姿勢を保てなくなってしまいそうな気がした。そう思っているうちに、再び眠りに落ちた。

目が覚めて、そのことをアキナに伝えた。なんて言われたっけ。忘れたけど、なんかスッキリした。そのまま風呂に入って身体を温めた。

12時、汽水空港着陸。昨日からトイレの水が凍結していて使えない。積もった雪は硬い氷になって町を覆っている。近所のコンビニにトイレを借りて、店に戻るとKさんが来店していた。Oさんと店で待ち合わせしているらしい。遅れてOさんもやってきた。みんなで最近話題の齋藤幸平の話をした。世間ではデヴィッド・グレーバーや齋藤幸平の本がよく売れているらしい。「アナキズム」も色々なメディアでよく見かける。話はコミュニズムや共同体の在り方に移行した。経済の話はいつも近代を遡り、元々人間はどのようにして暮らしてきたのかという人類学の話に繋がる。それでおれは最近『アボリジニの世界』という本を読んでいる。アボリジニも他の狩猟採集民と同じく、富の蓄積をしない。食べ物も喜びも分かち合う。今は競争や富の蓄積、権力の獲得を志向する人間とそうではない

モリタツヤ [汽水空港店主]

2021/1/4 — 1/10

人間とが入り乱れて生活している。この価値観の違いを乗り越えて、現代の田舎の町でどういう共同体を新たにつくることができるのか。分け与えようとする気質の隣で奪い合いと競争が行われた時、どうしたらいいのか。

Oさんは、自分が学んできた孔子の話を例に出す。孔子は秩序を保つ為に「礼」の概念を整えた。しかし「礼」のような掟を破った場合どうなるのか。Oさんは「仁」があると答えた。仁とは思いやりの心で、掟を破ったからといっても見捨てない優しさのことだという。この話には大学生たちも加わり、コロナ禍の東京、これからの仕事の話に至った。

その後もお客さんがポツリポツリと訪れた。去年神奈川から近所に引っ越してきたBさんが、狩猟免許の為にテキストを貸してくれた。最近周辺の人がみんな狩猟免許を取り始めた。今年はおれも免許をとりたい。

帰宅して、アキナが納豆パスタをつくってくれた。美味しい。執筆部屋に籠り『アボリジニの世界』の続きを読む。今は少年が大人になる時のイニシエーションの箇所だ。アボリジニのイニシエーションでは、少年は断食、沈黙、不眠、トランス状態を経て擬似的に死ぬ。そして再び生き返る。その過程は仏教徒のようでもある。生きながら死について学ぶチベット仏教の一節を読んでいるようだ。経済について考える時、現代を生きる人間にとっての信じる対象は金になっていると思う。金を信仰とするのをやめたあと、人間が何を信じ始めるのかにおれは興味がある。様々な部族のイニシエーションや神話が何を表してきたのか。生きることや死ぬこととはどんなことなのか。現代が茶化してきた「霊性」みたいなものに、おれは恐る恐る向き合ってみようとしている。

1月10日〔日〕

天気 | 晴れ

場所 | 鳥取県湯梨浜町 (自宅&店)

台湾と中国に暮らす夢を見た。台湾ではビザが取れず四苦八苦しており、なんかおばさんに怒られた気がする。目覚めて外を見たらまた雪が積もっていた。朝からカレーを食べ、積もった雪の中を歩きたくて徒歩で店まで行く。

トイレの凍った水道は融けた。良かった。今日もKさんとOさんが来店。音楽についての話を熱心に行っていた。スパークしてた。おれは最近のお客さんの少なさに危機感を覚え始め、通販ページにどんどん本をアップする作業を必死にしている、あまり会話に参加できなかった。通りがかりの人が焼き芋を購入してくれた。「のぎ屋」の夫婦も着陸。かれらの生産するお餅の委託販売をやってみようということになった。試しにまずは5袋仕入れた。美味しいお餅。おれは上質なブランディングをしなくたって、当たり前を心で込めて農作物をつくる農家が、当たり前で生きていけるような世の中になって欲しい。かれらのお餅も全然高くない。良い気持ちで働いてつくったものを、庶民が買える値段で販売し、農家もそれで気持ちよく生きていける。そんな当たり前が実現して欲しい。

畑仲間のさとPも着陸。彼女は半年ほど前からターミナル2(汽水空港の畑)のハーブを使ってつくったクッキーやケーキを店で出してくれている。屋号は「イヤパペセ」。甥っ子がお店屋さんごっこをする時に言う「いやぱぱせ(いらっしゃいませ)」からもらってきた屋号。とても良い。この間、よく来てくれるお客さんがイヤパペセのケーキが美味すぎるから店を出したほうが良いと言ってた。本人に伝えると嬉しそうだった。

18時頃、焼き芋屋かと思って中へ入ってくれたご夫婦が着陸。ドリンクも注文してくれた。女性の方が天井に貼ってある過去のイベントフライヤーを眺め、「この

坂口恭平って人は良い字を書きますね。何の人？ まとまらない人？」とぼかんとしていた。「新政府を立ち上げて総理大臣になった人で、建築家で、いのちの電話というのをやってで……」と説明すると興味を示してくれたようで『お金の学校』を買ってくれた。焼き芋をきっかけに店内に入って、本を買ってくれたらいいなと思っていた。芋の売上がそんなにないとしても、仕入先の「ほのぼのハウス農場」にお金を流すことができるし、こうして時々偶然の出会いを起こせる。それで良い。

帰宅後、山下陽光さんがTwitterで呟いていたバンドマン・イノマーの記録映像を観る。ガンで闘病し、亡くなるまでの1年間の記録。生きているうちに好きな人にちゃんと好きな気持ちを伝えていこうと思った。そして誰もが死ぬし、自分も死ぬと実感する映像だった。人と人が出会うというのは、生きてる僅かな時間が偶然重なったってことだ。貴重な重なりだ。

モリテツヤ [汽水空港 店主]

1986年北九州生まれ。インドネシアと千葉で過ごす。2011年に鳥取へ漂着。2015年から汽水空港という本屋を運営しているほか、汽水空港ターミナル2と名付けた畑を「食える公園」として、訪れる人全てに実りを開放している。農耕、建築、執筆、焼き芋の販売、本の売買等、さまざまな活動を通じてどうにか生きている人間。

2021 / 1 / 11 ————— 1 / 17

照屋勇賢

アーティスト



1月11日〔月〕

天気|雪

場所|ベルリン

ベルリンの今朝は、ふたつのメッセージから始まった。東京の川村庸子さんから、「僕の日記が今日からスタート」という合図のメッセージ。そして、沖縄からは高校時代から親しい比嘉裕一からのメッセージ、「起きたら電話ください」。同級生の中村渠真紀の訃報だった。

沖縄の高校時代、同じ芸術課クラスの、音楽コースにいた真紀とは高校卒業以来、疎遠になった。卒業以来、会ったこともなかった。裕一からウェブサイトを教えてもらった。大人になった真紀の、ピアニストとして、音楽の先生として、多岐にわたる活動している姿をそこで初めて知った。

日記のおかげで、真紀に対する思いや記憶を綴るチャンスを得ている。つかみどころの無い気持ちや記憶をなんとか形にする、ちょっとした努力のチャンスを得ているよう。そして必然的に自分の気持ちとも向き合うことに。同級生の「死」へ

照屋勇賢〔アーティスト〕

の恐怖と、20年以上思うことがなかった、真紀への後悔に向き合う場がうまれている。

歳や時間への焦りか、ここ数ヶ月、1日、1日の積み重ねと長い目標や未来のイメージをどう繋げていくのかをずっと考えているが、空振りの連続。1日のタスクが終わらないまま、翌日仕切り直しが続いていると感じているところだった。

遠いところにいるクラスメイトを思う時間を持たない、まるで荒れた海上で不安定な小舟のバランスを支えるだけで精一杯の世界に何10年もいた気がする。ブログの写真の彼女も芸術の世界で頑張っていた。同じ葛藤を持っていたのかな。荒波から解放される術を一瞬でも持っている姿に見えた。

午後、額装屋、Bespoke frames。アメリカ人のKaneは言っていた。コロナ、トランプ、米議事堂乱入事件、スマートフォンのアプリ、環境問題、未来の予想が通用しないすごい時代に僕達はいる。

僕は目先のことが大変で、いろんな出来事をどれだけ実感できているのかわからないと打ち明けた。Kaneは、僕たちは歴史の曲がり角にいる、その現在をしっかりと感じるチャンスだと言う。

視線を広く、遠くに置くことで少し現状が楽になるような気がする。でもまたすぐ、目先の不安な状況が大きく迫って、僕にその影を覆いかぶせる。僕の足を引っ張っているのか、遠いところからの真紀の訃報に接することで、動揺している自分が徐々に見えてきた。今の激動の時期を受け入れたいが、まだしっかり立てていないのかな。不安定だ。ちゃんと着地して、ふわふわを乗り越えてもっと周りを感じてあげたい。

2021/1/11 ————— 1/17

1月12日 [火]

天気 | 曇り

場所 | ベルリン

6時半起き 昨日より1時間遅い。

日本では真紀の告別式、彼女のことを考えながら朝のジョギング始める。昨日の雪解けの通りが水浸しで走りには集中できない。

走ることも日記に近いと思った。走っている1時間の間、いろんなことを考える。いろんなことに気づく。

10代の頃、走ることを自発的に始めて以来、よく走る自分がいる。「走る」ことの意味や目的、付き合い方の変遷に気づく。

「走る＝体を鍛える」から始まり、「精神を鍛える」「体重を落とす」「プロポーショ
ンを直す」、「現実逃避する」「気持ちの整理」「1日に1回の達成感を獲得」「メ
ディテーション」「昨日のおさらいと今日のプラン作り」へ。

Hermès Teamが^{びんがた}紅型の作品に興味があるというメールを送ってくれた。いいチャンスだ。2年前にも同じアプローチがあったが、今回は少し違う感じだ。できれば、最初のミーティング前に紅型をプレゼンしたい。自分にとってもいい資料とプロセスになるはずだ。

沖縄の文化、美的感覚の独自性、歴史的に失われ、抑えられてきた自立性、独自性を相手に共有できるように。押しつけにならないように。

日本のニュースサイトで、メルケルがトランプのTwitter アカウント凍結に、「表現の自由」の侵害だと批判したという報道を見た。トランプという権力者側は、

ただでさえ多くの人達の「表現の自由」を抑制、妨害し、そして人々を扇動する力を持っている。それを批判し、監視することが、国民の「表現の自由」のハートだと信じる。弱い者に対して扇動する発言を行い、権力を乱用する可能性のある権力者側に「表現の自由」は属さない。

昨夜、眠る前の読書がとてもし睡眠を与えてくれた。今晚も試してみよう。

1月13日 [水]

天気 | 晴れ

場所 | ベルリン

6時すぎに起き、急いで朝ラン。

暗闇の走りながら真紀を思う瞬間があった。やはり僕の記憶の彼女は高校時代の制服姿だな。同級生の死がまだちゃんと消化できていない。

8時には、アーツ前橋の住友文彦さん、五十嵐純さんとZoomミーティング。群馬から沖縄の巡回展はコロナの影響で予算の問題があり、会期が2022年から2023年に延びる可能性を話した。2022年になれば、沖縄の日本復帰50周年の年の展覧会になる。

住友さん、五十嵐さんとの会話で、ここ数年、主に第二次世界大戦関連の小規模の資料館を見直さなきゃいけない時期だという話をした。もともと戦争体験者有志によって立ち上げられた各地の平和資料館は、戦争体験者が少なくなり、その体制の変更、更新、または閉鎖が目立つようになっている。戦争の悲惨さ、国の責任、戦争をさせない努力の重要性をハートで継承し、育むため、その時代、風潮に対して伝えやすい形式にした話に再翻訳は必要だと思う。

あるドイツ人学芸員より電話が来た。2022年の沖縄復帰に関係した展覧会で、ベルリンの博物館にある琉球コレクション（1884年）の委託依頼があるという相談を受けた。アーティストの Linda Havensteinも話に加わってもらった。

僕が相談を受けた理由は、「沖縄の日本復帰50周年」のための展覧会準備に沖縄の美術館が含まれていないことへの懸念からだった。

日本側は、沖縄、本土復帰50周年を記念するための準備として協力を依頼している。しかし、展覧会は東京と九州の博物館での記念企画で、沖縄が含まれていない。沖縄を蔑ろにして琉球コレクションを本土だけで展示し、沖縄の復帰を記念するのであれば、それにどういう意図があるのか考えてしまう。

沖縄は過去に政治的に何度も商品化され、ツール代わりに使われてきた。また沖縄の外から沖縄の歴史が語られようとしている。僕とLindaとの話し合いの後、ドイツの学芸員は、故郷である沖縄の見解なしにドイツにある琉球コレクションは貸せないというスタンスを取りたいという気持ちを、僕と確認したいということだった。日本復帰をどう沖縄は評価すべきなのかという、大切な課題が残った。そもそもサンフランシスコ平和条約後、台湾、韓国が独立したように、沖縄が国際法的常識で、戻る場所は、琉球王国、または中国だった可能性もあるという議論もある。

博物館のコレクションの背景を紐解くと、まるでミミズの詰まった缶を開けるかのように、いろんな問題がどんどん出てくる。植民地支配、琉球処分、明治維新、戦後の略奪などたくさん。どのミミズも大切。

1月14日 [木]

天気 | 晴れ

場所 | ベルリン

照屋勇賢 [アーティスト]

2021/1/11 — 1/17

寝坊して、8時すぎに起きた。スタジオ行きが遅れることを承知で、ランニングに出る。

昨夜、トランプの2度目の弾劾裁判が決まった。そのことがどこか気分希望をもたせてくれる。もう一つ、昨夜眠る前に、Paul Lockhartの *Measurement* を少し読んで寝たことを思い出した。

確か数学とアートの関係にも少し触れていたようだ。絵を描いて、どうしても乗り越えられないスランプにぶち当たって初めて、アートの真の「クラブ」へ招待されるという言葉があり、救われた気がした。時間がなくても、5分でも3分でも本を読むことっていいことだと気づき始める。

朝10時頃、日本時間の午後夕方、NHK沖縄で僕の作品について放映される日だった。その時間にジョギングが終わり、ストレッチをしていた。

コザ暴動をテーマにした僕の作品を中心に、ベルリンでの生活と作品、沖縄とベルリンの生活がどう関係するかという内容だったと記憶している。

11時半、スタジオでは、今日終わるはずの作品に取り掛かった。実際は、まだ45パーセントくらいだ。うーん。

米軍が沖縄から撤退するとき、いろんな曲が作られるかもしれないと想像した。アメリカ国内でも。ポップソングや、ヒップホップ、カントリーソングも。それを想定して、「Going Back to Home」というカントリーソングをプロデュースできればと思った。

クレーンで引き上げられる基地のフェンス。たくさんのバルーンでどこかへ飛んでいく基地のフェンス。緑の芝生がどこからもオープンになる。戦前の村に再会し

よう。戦前の村の名前をまた戻してあげよう。

明日からスタジオのアシスタントが2週間の休みを取る。なんか僕もお休みを取る気分。でも、僕の役割で今週中に終わらせたいことがある。日本行きのチケットも買う予定。

1月15日 [金]

天気 | 曇り

場所 | ベルリン

6時半にランニングへ。

できるだけ早くスタジオに行きたくて、もろもろの朝の日課に集中した。でも、昨日の寝る時間はやはり遅かったかな。疲れを引きずったままスタジオ入り。

日本では、新型コロナウイルス感染者が7,100人台。日本へ行くことが心配になる。ドイツは200万人。でも回復者が160万人だ。両国とも同じ割合で調査が行われているわけではない。ベルリンではいたるところで検査ができる。クラブでもPCR検査を提供するサービスを始めた。日本ではどれくらい検査が行きわたっているのだろうか。

今日は、Linda Havensteinの知り合いのFlorianと話をした。ゲームソフト開発のコンサルタントをしている。彼の苦労話はとても参考になった。今は、彼は仕事を始めた頃の時給より4倍の請求書を発行している。そのほうが雇い相手の態度もはっきりして、仕事がしやすい環境になったという。時給が4分の1の頃は、周りからいろんな雑用をお願いされたり、緊張感もなかった。自

分の態度も変わるだろう。いかに自分の仕事に自信を持つことが重要か、勉強になった。

昨日のNHK沖縄「おきなわHOTeye」という番組での僕の放送を受け、土橋編集長からLINEメッセージ。「分断やさまざまな圧力を受ける時代。怖さに負けず一人称で発信する必要性も感じます。行動すれば行動するほどトラブルに巻き込まれる確率も高まります。でもたとえ困難なことにぶち当たっても、それは行動したことの勲章だとも言えると思います」。

とても大切な言葉だ。できるところからでもいいから、日々、意識して行動したい。そして、John Lewisの言葉と同じだと思った。

“My philosophy is very simple: When you see something that is not right, not fair, not just, say something! Do something! Get in trouble! Good trouble! Necessary trouble!”

Do something!
Get in trouble!
Good trouble!
Necessary trouble!

1月16日 [土]

天気 | 雪

場所 | ベルリン

今朝はいつもより楽に起きられたが、緊張して目が覚めたタイミングを利用した。

なんか不健康な起き方だったな。久しぶりに5時台に走った。

今日気づいたことは、外へ出る前、寒そうだ、心細いなという気持ちとは反対に、予想外の爽快感、気持ち良さで朝の空気は出迎えてくれるということ。その喜びをちゃんと書いておこうと思う。

浅く積もった雪の上を走るのってとても楽しい。道路にはほとんど足跡が残っていない。ほとんどの人はまだ眠っているな。とくに早い時間でもないはずだが。土曜日だからかも。

ほかのランナーとシャイなまますれ違うたびにもっとわかりやすい相打ちや、声かけをしなきゃと少し後悔する。もちろん、ほとんどのすれ違う相手もジェスチャーはしない。でも相手も同じ気持ちかもしれないと感じている。黄色人種の僕が与える、相手の行動の変化もあると思う。一瞬の出来事だが、心理的にはとても複雑になってるのだろう。

だから僕がイニシアチブをとる必要がある。アメリカで心掛けていたことだ。言うのは簡単で、なかなか行動に移せない。アクションしてもまだジェスチャーは小さい。ほんの数秒のことで、多少の失敗ややりすぎは問題ないと言い聞かせるのだが、相手に対してとてもシャイになってしまう。とくに早朝の公園では、暗闇の中、1対1ですれ違う。認識しているよ、というサインは相手に伝えるべきだと信じる。心がけよう。

今日は静まり返った通りで、一人だけランナーとすれ違った、女性のランナーは手を上げて挨拶してくれた。女性のランナーからの合図は初めてだ！ その一瞬だけで、残りの5キロがずっと楽に楽しく走れた。頑張って早起きしたギフトをもたらった気がした。

昨夜の Florian の言葉を何度も思い出す。Fake it till you make it.

「どンドン背伸びしろ」に近いかな。とても大切だ。欲しい未来像へ、今はそう

照屋勇賢「アーティスト」

2021/1/11 — 1/17

でないが、偽ってでもそういう状況を自ら創りだせということなんだ。

数日前、Linda から、「エリート社会」の問題を聞かせてもらった。クラス意識、エリート教育は、誰がエリートになれるのか、その道筋が問題ではなく、エリート社会が問題だと気づける環境になっていないことが問題なのだと。「自信」の問題と直結することだ。

今までかなりナイーブな世界観で活動し続けてきたと思う。自分の価値観を頑張って主張することも大切。同時に、欲しい価値観に自分を持ち上げて、追い込みをかける精神への挑戦、周りへの調整も必要。

1月17日〔日〕

天気|晴れ

場所|ベルリン

走り出したのはだいたい6時45分くらい。雪は全く消えたドライな通りになっていた。走る時、何度も、紅型の仕事を始めなきゃと連呼しながら走ったが、今日、紅型にかけた時間はたった1時間だ。

今のメモを書き終えたらまた1時間取っ組み合いたい。いつも、なんでもだが、仕事始めがとても難しい。リサーチを伴う何か新しい仕事の開始は、とても体力を使う。そして何度も墜落する。最初の天敵は睡魔だ。イメージが固まらないまま始めるリサーチの作業になぜか睡魔がつきまとう。とても嫌な気分だ。乗り越えたい。

できるだけイメージをして、築きたい自分のイメージを持って。一步でも前へ。

NYの安田さんも言っていた。セザンヌは、毎日、1ミリ、1ミリでも前進する努力

を務めた。僕もそういうガッツでいきたい。

今朝、暗い公園で真紀を思い出した。一直線の通りで、ピアノ弾きの真紀が見えた。今は、ピアノと一緒に真紀がイメージにある。最後までピアノ弾きの真紀を貫いたのだとわかった。

今日は日曜日、結局、土曜日、日曜日と自宅にいた。苦手だが、紅型の最初の1ミリは踏み始めた。いろんな弱い自分と向き合い、ちゃんと向き合ってる気がする。良い2日間になったと思う。

また YouTube で日本の安倍前総理の国会答弁を見てしまった。その後ぐったり疲れるのは知っているのに。ちなみに菅総理は、国会にも顔を出していないらしい。最近の与党の政治家が、原稿を繰り返し読む姿に愕然とし、憤りを感じる。選挙前に有権者の前で使う言葉と、裏で数人にだけ言う言葉が違うようなら、サギ師罪で国会議員を辞めさせるシステム、プレッシャーが必要だとつくづく思う。

かれらが言う国難とは、(かれら個人の) 国難とか、守るべき国民とは、(お仲間や大企業の経済界) というカッコ部分を言わずに発言しているんだとつくづく思う。あえて発言する対象を制限して、あたかも相手と同じ対象を話すふりをする技術——ご飯論法とはよく命名したと思う。いろんな不誠実なことを命名する努力が、民主政治で僕達が常に行わなければいけないことだと思う。

「王様は裸だ」も好きな言葉だ。ここでも発言する個人の存在がある。僕にはまだまだ苦手なことだけでも、できるだけわかりやすい言葉でいろんなことが可視化できればと思う。

僕の活動もそれができるはずだ。発言する、表現する力に集中して、発射できるように努めたい。色の力、スケールの力、細かい力、アクションの力、表現する力にもっと信頼を維持したい。

日本では、国民と政治家との間の信頼関係は完全に切りはなされた。コロナ時代にもかかわらず、中国国家主席の国賓訪日中止、オリンピック、経済優先の Go To トラベルを実施、PCR 検査を抑制、医療体制拡充を拒み、国民の無関心をさらに露呈させた。

もっと怒らなきゃいけない？ ただでさえ自分の生活を維持することで大変なのに。でも、やられたい放題はほっとけない。同じ信念を持っている仲間達と一緒に行動しなきゃ。

母は、時間のあるときに、辺野古の座り込みの場所へおにぎりを持っていく。僕にも遠いところからでもできることがある。まずはできるところから。

WNYC ラジオプログラムが、明日の Martin Luther King Jr. Day を知らせてくれている。民主化、人権のことで戦ってる、頑張っているアメリカを感じる時、とても恋しく感じる。僕のアメリカでの活動を思うと、まだまだいろんなことが途中のままだと気づく。

照屋勇賢 [アーティスト]

1973 年沖縄生まれ。ベルリン在住。2001 年にニューヨークのスクール・オブ・ビジュアルアーツで MFA 修了。世界各地の展覧会に参加し国内外で高く評価されている。身の周りのものを素材とし、緻密で繊細な技術を用いて、大量消費社会、グローバリズムや環境問題、現代社会が直面する問題をテーマに作品制作を続けている。また、出身地沖縄をめぐる現在の複雑な状況を、鋭い洞察と繊細な造形手法によって視覚化させ、見る者に静かに問いかける。

2020年3月11日、WHOは新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的な流行を示す「パンデミック」を宣言した。東日本大震災から10年目の起点となる日が、偶然にも新型コロナウイルス感染拡大のはじまりと結びついている。その事実を知ったのは、2020年10月に美術家の山口啓介さんの対談を聞きにいったときだった*。タイトルは「二つの、3月11日／震災後とコロナ後の世界」。その意味もわからず、ただ字面に惹かれて参加した。

山口さんは東日本大震災後から日記をつけている。その『震災後ノート』と名付けられた大量の日記には、さまざまなニュースや統計的な数字がびっしりと書きこまれていた。世界中にアンテナを張るような行為から、山口さんは、パンデミック宣言と3月11日の結びつきに気がついたのだという。

日記には、ところどころに色鮮やかな挿絵がある。山口さんは『震災後ノート』を「作品」とは語っていなかったが、創造の源泉になっているのだろう。その表現にふれるなかで、震災後の東北のことを思い返した。

東日本大震災の後に、数多くの記録が生まれた。目の前の出来事と向き合

い、きこえてくる声に耳を傾ける。そこから自ら拠って立つ位置を確認する。その行為としての記録は、渦中を生き抜く術^{すべ}でもあったのだろう。それは時が経つことで表現に昇華されることがあり、記録と表現の境界を問うものともなった。そして、震災の経験は、それ以前の出来事やほかの災禍に目を向けるきっかけとなった。こうした問題意識を引き継ぐ本号は、必然的に震災から10年目とコロナ禍の1年目を重ね合わせるものとなった。

人に出会い、声と向き合い、土地の風景と出会い直す。そうしたつくり方も変化せざるをえなかった。長距離の移動や対面での取材が困難となり、多くがそうであったように、オンラインでの活動が軸となった。

2020年6月に「震災後の経験を未来につなげるメディア」としてウェブサイト『Art Support Tohoku-Tokyo 2011→2021』を立ち上げた。本誌に収録した寄稿と日記は、ここに掲載したものだ。わたしたちの役割は、自らがメディアとなって「きく」ことから、一人ひとりが「話す」ための場をつくることに変化した。

「必ずしも震災のことにふれなくても構わない」。日記を依頼するときは、そう添え伝えていた。震災後の東北にこころを寄せてきた人たちの日常には、この10年の月日が滲み出てくるだろうと思ったからだった。

震災の経験を思い起こす人がいれば、現在の活動を記す人がいる。コロナ禍を震災と重ねる人がいれば、震災以前に話が及ぶ人もいる。しかし、当然のようにそのほとんどには、目の前のタスク、家族やペット、植物や食べ物の話といった身の回りのことから、それぞれが暮らす土地の日常が記されていた。

日記を読むと、その人にしか見えない風景が目の前に立ち上がってくる。自分の経験に照らし合わせることで、会ったことのない人や訪れたことのない場所のことを何とか思い描く。揺れ動く心の機微にふれる。わからないことはきき返すことができない。それでも秘密が隠されているような言葉から、書けないこと、書かないこと存在に気づく。わたしたちは想像することで、他者の経験を分かちもつことができる。ずれながらも、しっかりと。

これから語り出す人がいれば、まだまだ語り足りない人もいる。すでに語ら

れてきた言葉だってある。一人ひとりの生活が多様なように、震災の経験もそれぞれに異なる。そうした当たり前のことを話し合える時期になった。

「これからの10年のはじまりにしたい」。そう言葉を交わした小池アミイゴさんによる表紙のイラストレーションには道が描かれている。「以後」の道のりは、これからも続く。そのなかで「復興」に背中を押されて駆け抜けた道のりを、たまにふりかえるのもいいだろう。

かつて、いまも、これからも、無数の人たちが東北の地で起こった出来事から考え、行動し続けている。「ともに」歩んでいる人たちがいる。本誌がそれを思い起こすきっかけになってほしいと思う。

*対談「二つの、3月11日／震災後とコロナ後の世界」（山口啓介×徐京植）、横浜市民ギャラリー「新・今日の作家展2020 再生の空間」関連イベント、2020年10月3日

東北の風景をきく

FIELD RECORDING vol.05

特集 自分のことを話す

Art Support Tohoku-Tokyo

編集長＝佐藤李青（アーツカウンシル東京）

編集＝川村庸子

嘉原 妙（アーツカウンシル東京）

デザイン＝内田あみか

印刷＝株式会社山田写真製版所

監修＝森 司（アーツカウンシル東京）

発行＝2021年3月11日 第1刷発行

公益財団法人東京都歴史文化財団

アーツカウンシル東京

〒102-0073

東京都千代田区九段北4丁目1-28

九段ファーストプレイス8階

TEL 03-6256-8430

FAX 03-6256-8827

<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

© アーツカウンシル東京

Art Support Tohoku-Tokyo

Art Support Tohoku-Tokyo (ASTT)は、「東京緊急対策2011」の一環として開始した、東京都が公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京と共催し、東日本大震災の被災地域（岩手・宮城・福島県）のコミュニティに対して、現地の団体と協働してアートプログラムを実施する事業です。

都内で展開する「東京アートポイント計画」の手法を用いて、現地のアートNPO等の団体やコーディネーターと連携し、地域の多様な文化環境の復興を支援。被災地域のコミュニティを再興するため、さまざまな分野の人々との交流プロセスを重視したアートプログラムや、その実施を支える仕組みづくりを行っています。

<http://asttr.jp>



文化でつながる。未来とつながる。

TokyoTokyo
FESTIVAL



東京に暮らす自分には「東北＝田舎」のような偏見が少なからずあったはず。しかし、東北を歩くとそんなものが粉々に碎かれる美しさに出会います。その美しさとは、視線が真正面に捉えるもの以上に、視界の隅の方で見るともなく感じる「名もなき何か美しきもの」なのでしょう。雑草が刈り取られた道路脇に残された小さな花のような、何か人の気配を感じる風景。真正面の視線が捉えるのは「目的」であり、東京的に言えば「コンプリートすべき価値」。それに対して東北は「名もなき人々の無償の優しさ」が連なり、それはアートなんてものを超越し、日本の社会のトップランナーとして、2031年3月あたりに向けて歩んでいるのではないかと思うのです。

そう思って自分の足元に目を落とすと、東京も被災地と呼ばれる東北もしっかり地続きであり、ボクはその歩みの鼓動に耳を澄まし、東京で人ひとりが生きるに足る絵を描いているのです。

小池アミイゴ [イラストレーター]

1962年群馬県生まれ。長沢節主催のセツモードセミナーで絵と生き方を学ぶ。1988年より活動をスタート。CDジャケットや書籍、雑誌、広告の仕事など多数。一般社団法人東京イラストレーターズ・ソサエティ (TIS) 理事長。2011年3月11日以降、東北の各地を巡り、個展「東日本」を2012、2014、2015、2017、2019年に開催 (SPACE YUO)。2017年「東日本より熊本へ 3月11日からはじめたこと」(つなぎ美術館)、2019年「東日本」(塩竈市杉村惇美術館)。著書に『うーこのてがみ』(角川書店)、『はるのひ』(總閑書店) などがある。

